SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ

XSCF リファレンスマニュアル　XCP 1110 版

マニュアル番号 : C120-E668-01,
Part No.: E27993-01
2012 年 1 月

Copyright © 2012 オラクル社および / またはその関連会社、および富士通株式会社 All rights reserved.
オラクル社および / またはその関連会社、および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。
本書およびそれに付属する製品および技術は、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。オラクル社および / またはその関連会社、および富士通株式会社およびそのライセンサーの書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものでもありません。本書は、オラクル社および富士通株式会社の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフォント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者からオラクル社および / またはその関連会社、および富士通株式会社へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPL または LGPL が適用されたソースコードの複製は、GPL または LGPL の規約に従い、該当する場合に、お客様からのお申し込みに応じて入手可能です。オラクル社および / またはその関連会社、および富士通株式会社にお問い合わせください。

この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに由来しています。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、オラクル社および / またはその関連会社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

SPARC64 は、Fujitsu Microelectronics, Inc. および富士通株式会社が SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

United States Government Rights - Commercial use. U.S. Government users are subject to the standard government user license agreements of Oracle and/or its affiliates and Fujitsu Limited and the applicable provisions of the FAR and its supplements.

免責条項 : 本書または本書に記述されている製品や技術に関してオラクル社、富士通株式会社および / またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限ります。このような契約で明示的に規定された保証を除き、オラクル社、富士通株式会社および / またはそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、現状のまま提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われないものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、オラクル社、富士通株式会社および / またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のもとの第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

Please
Recycle

Adobe PostScript

目　次

はじめに　vii

ユーザーコマンドとシステム管理コマンド　1

Intro　3

ユーザーコマンド　11

exit　13

man　15

who　17

システム管理コマンド　19

addboard　21

addcodactivation　25

addcodlicense　27

addfru　29

adduser　31

applynetwork　33

cfgdevice　39

clockboard　45

console　47

deleteboard　49

deletecodactivation　53

deletecodlicense　55

deletefru　57

deleteuser 59
disableuser 61
dumpconfig 63
enableuser 69
flashupdate 71
fmadm 75
fmdump 77
fmstat 85
getflashimage 89
ioxadm 93
moveboard 103
nslookup 107
password 109
ping 113
poweroff 115
poweron 119
prtfru 123
rebootxscf 127
replacefru 129
reset 131
resetdateoffset 135
restoreconfig 137
restoredefaults 143
sendbreak 149
setad 151
setaltitude 159
setarchiving 161
setaudit 165
setautologout 171
setcod 173
setdate 177
setdcl 181
setdomainmode 185
setdomparam 191

setdscp 193
setdualpowerfeed 197
setemailreport 199
sethostname 203
sethttps 205
setldap 211
setldapssl 215
setlocale 223
setlocator 225
setloginlockout 227
setlookup 229
setnameserver 231
setnetwork 235
setntp 241
setpacketfilters 245
setpasswordpolicy 251
setpowerupdelay 255
setprivileges 257
setroute 261
setshutdowndelay 267
setsmtp 269
setsnmp 273
setsnmpusm 279
setsnmpvacm 283
setssh 287
setsunmc 293
settelnet 295
settimezone 297
setupfru 303
setupplatform 305
showad 309
showaltitude 313
showarchiving 315
showaudit 319

showautologout 323
showboards 325
showcod 331
showcodactivation 333
showcodactivationhistory 335
showcodlicense 337
showcodusage 339
showconsolepath 345
showdate 347
showdateoffset 349
showdcl 351
showdevices 357
showdomainmode 363
showdomainstatus 367
showdscp 369
showdualpowerfeed 373
showemailreport 375
showenvironment 377
showfru 381
showhardconf 383
showhostname 393
showhttps 395
showldap 397
showldapssl 399
showlocale 403
showlocator 405
showloginlockout 407
showlogs 409
showlookup 421
showmonitorlog 423
shownameserver 425
shownetwork 427
shownotice 433
showntp 435

showpacketfilters 439
showpasswordpolicy 441
showpowerupdelay 443
showresult 445
showroute 447
showshutdowndelay 451
showsmtp 453
showsnmp 455
showsnmpusm 457
showsnmpvacm 459
showssh 461
showstatus 465
showsunmc 467
showtelnet 469
showtimezone 471
showuser 475
snapshot 477
switchscf 487
testsb 489
traceroute 495
unlockmaintenance 497
version 499
viewaudit 503

はじめに

本書は、オラクルまたは富士通の SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの、XSCF ファームウェア用のマニュアルページをまとめたものです。

サーバ名やマニュアル名は、読みやすさのため、省略されていることがあります。たとえば、「M9000 サーバ」と書かれている場合は「SPARC Enterprise M9000 サーバ」、『XSCF リファレンスマニュアル』と書かれている場合は『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF リファレンスマニュアル』を表します。

本書の内容をより一層ご理解いただくために、ご使用のサーバの『製品概要』、および『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド』をお読みになることをお勧めいたします。

本書の公開時点では、XCP1101 がインストールされたサーバを前提に記載しています。この XCP 版数は、すでに最新ではない、またはご使用のサーバにインストールされている版数とは異なる場合があります。ファームウェアの最新情報を入手するために、ご使用になっているファームウェアに対応したプロダクトノートと、最新版のファームウェアに対応したプロダクトノートを参照してください。

ここでは、以下の項目について説明しています。

- 対象読者
- 関連マニュアル
- 表記上の規則
- CLI（コマンドライン ・ インターフェース）の表記について
- マニュアルページの構成
- マニュアルへのフィードバック

対象読者

本書は、コンピュータネットワークおよびOracle Solarisオペレーティングシステム（Oracle Solaris OS）の知識を有するシステム管理者を対象にして書かれています。

関連マニュアル

ご使用のサーバに関連するすべてのマニュアルはオンラインで提供されています。

マニュアル	リンク
Oracle Solaris OSなどのSun Oracle製ソフトウェア関連マニュアル	http://www.oracle.com/documentation
富士通マニュアル	http://jp.fujitsu.com/platform/server/sparcenterprise/manual/
オラクル社のMシリーズサーバマニュアル	http://www.oracle.com/technetwork/documentation/sparc-mseries-servers-252709.html

以下の表は関連するマニュアルです。

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ関連マニュアル
SPARC Enterprise M3000 サーバ 設置計画マニュアル
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ 設置計画マニュアル
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ 設置計画マニュアル
SPARC Enterprise 19 インチラック搭載ガイド
SPARC Enterprise M3000 サーバ はじめにお読みください*
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ はじめにお読みください*
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ はじめにお読みください*
SPARC Enterprise M3000 サーバ 製品概要
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ 製品概要

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ関連マニュアル

SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ 製品概要

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 Servers Important Legal and Safety Information

SPARC Enterprise M3000 Server Safety and Compliance Guide / 安全に使用していただくために

SPARC Enterprise M4000/M5000 Servers Safety and Compliance Guide / 安全に使用していただくために

SPARC Enterprise M8000/M9000 Servers Safety and Compliance Guide / 安全に使用していただくために

External I/O Expansion Unit Safety and Compliance Guide / 安全に使用していただくために

SPARC Enterprise M4000 Server Unpacking Guide / 開梱の手引き *

SPARC Enterprise M5000 Server Unpacking Guide / 開梱の手引き *

SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ 開梱の手引き *

SPARC Enterprise M3000 サーバ インストレーションガイド

SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ インストレーションガイド

SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ インストレーションガイド

SPARC Enterprise M3000 サーバ サービスマニュアル

SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ サービスマニュアル

SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ サービスマニュアル

PCI ボックス インストレーション ・ サービスマニュアル

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF リファレンスマニュアル

SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Dynamic Reconfiguration（DR）ユーザーズガイド

SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand（COD）ユーザーズガイド

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ プロダクトノート †

SPARC Enterprise M3000 サーバ プロダクトノート

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ関連マニュアル
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ プロダクト ノート
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ プロダクト ノート
PCI ボックス プロダクト ノート
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ 用語集

*. このマニュアルは、印刷されています。

†. XCP1100 以降。

表記上の規則

本書では、以下のような字体や記号を、特別な意味を持つものとして使用しています。

字体または記号	意味	記述例
AaBbCc123	ユーザーが入力し、画面上に表示される内容を示します。この字体は、枠内でコマンドの入力例を示す場合に使用されます。	XSCF> **adduser jsmith**
AaBbCc123	コンピュータが出力し、画面上に表示されるコマンドやファイル、ディレクトリの名称を示します。 この字体は、枠内でコマンドの出力例を示す場合に使用されます。	XSCF> **showuser -p** User Name: jsmith Privileges: useradm auditadm
『』	参照するマニュアルのタイトルを示します。	『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、項、ボタンやメニュー名を示します。	「第 2 章 システムの特長」を参照してください。

CLI（コマンドライン・インターフェース）の表記について

コマンドの記載形式は以下のとおりです。

- 値を入力する変数は斜体で記載
- 省略可能な要素は [ ] で囲んで記載
- 省略可能なキーワードの選択肢は、まとめて [ ] で囲み、| で区切り記載

マニュアルページの構成

以下の表は、マニュアルページに含まれる各セクションについて説明しています。マニュアルページの各セクションは、通常、ここに示した順序で表示されますが、必要な見出しだけが表示されます。たとえば、使用例がない場合には使用例のセクションは表示されません。マニュアルページの一覧は `Intro` ページを、マニュアルページの概要については `man`(1) を参照してください。

名前	このセクションでは、コマンド名とその機能について簡潔に説明しています。
形式	このセクションでは、コマンドの構文を示しています。オプションおよび引数はアルファベット順に示され、異なる引数順序が必要な場合を除いて、最初に 1 文字の引数、次に引数の付いたオプションが続きます。 このセクションでは、以下に示す特殊文字が使用されます。 [ ] 角括弧に囲まれたオプションは省略できます。角括弧がない場合は必ず指定してください。 … 「`filename...`」など、前の引数に複数の値を指定できるか、前の引数を複数回指定できます。 | この文字で区切られている引数のうち、一度に 1 つだけを指定できます。

	{ } 中括弧で囲まれたオプションまたは引数、あるいはその両方は、相互に依存するため、括弧内のすべての要素を一組として扱ってください。
説明	このセクションでは、コマンドの機能および動作を説明します。このように、コマンドの実行内容について簡単に説明します。オプションの説明や使用例はここでは示しません。
オプション	このセクションでは、コマンドのオプションの一覧と各オプションの機能の要約を示しています。オプションは、アルファベット順にひとつずつ示されます。オプションに指定できる引数についてはそのオプションの次に説明し、必要に応じてデフォルト値を示します。
オペランド	このセクションでは、コマンドのオペランドの一覧とそのオペランドがコマンドの動作に与える影響について説明します。
詳細説明	このセクションでは、さらに詳細な説明を示しています。
使用例	このセクションでは、コマンドの使用例や使用法を示します。可能な場合は、コマンドラインの入力およびサーバからの応答を含む完全な例を示しています。使用例は、「形式」、「説明」、「オプション」、および「オペランド」の各セクションの内容を解説するものです。
終了ステータス	このセクションでは、コマンドがコール元のプログラムまたはシェルに返す値と、これらの値が返される条件を一覧に示しています。通常、正常に終了した場合は 0 が返され、各種のエラー条件が発生した場合は 0 以外の値が返されます。
関連項目	このセクションでは、ほかのマニュアルページを参照先として示しています。

マニュアルへのフィードバック

本書に関するご意見、ご要望がございましたら、次の URL からお問い合わせください。

- オラクル社のお客さま
  http://www.oracle.com/goto/docfeedback
- 富士通のお客さま
  http://jp.fujitsu.com/platform/server/sparcenterprise/manual/

リファレンス

ユーザーコマンドとシステム管理コマンド

名前

Intro - XSCF ファームウェアで提供されるコマンドを一覧表示します。

説明

Intro ページは、SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの XSCF ファームウェアで提供されるユーザーコマンド（exit(1)、man(1)、および who(1)）とシステム管理コマンド（addboard(8) で始まる他のすべてのコマンド）を一覧にしたものです。XSCF コマンドの中には、Oracle Solaris オペレーティングシステム（Solaris OS）コマンドと同じ名前のものがありますが、使用方法は異なります。詳細については、各コマンドのマニュアルページを参照してください。

XSCF では、以下のコマンドがサポートされています。

exit	XSCF シェルを終了します。
man	XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示します。
who	XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。
addboard	システムボード（XSB）をドメイン構成に組み込み、または割り当てます。
addcodactivation	Capacity on Demand（COD）の CPU Right To Use（RTU）ライセンスキー（COD キー）を COD データベースに追加します。
addcodlicense	Capacity on Demand（COD）Right-To-Use（RTU）ライセンスキーを COD ライセンスデータベースに追加します。
addfru	Field Replaceable Unit（FRU）を増設します。
adduser	XSCF ユーザーアカウントを作成します。
applynetwork	XSCF ネットワークの内容を XSCF に適用します。
cfgdevice	CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットのポートへの接続、切離し、および状態の表示を行います。
clockboard	システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定または表示します。
console	ドメインコンソールに接続します。
deleteboard	システムボード（XSB）をドメイン構成から切り離します。
deletecodactivation	Capacity on Demand（COD）の CPU Right To Use（RTU）ライセンスキー（COD キー）を COD データベースから削除します。
deletecodlicense	Capacity on Demand（COD）Right-To-Use（RTU）ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから削除します。

deletefru	Field Replaceable Unit（FRU）を減設します。
deleteuser	XSCF ユーザーアカウントを削除します。
disableuser	XSCF ユーザーアカウントを無効にします。
dumpconfig	システム構成情報をファイルへ保存します。
enableuser	XSCF ユーザーアカウントを有効にします。
flashupdate	ファームウェアをアップデートします。
fmadm	故障管理に関連するシステム構成パラメーターを表示します。
fmdump	故障管理に関連するログを表示します。
fmstat	故障管理モジュールの統計情報をレポートします。
getflashimage	ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。
ioxadm	PCI ボックスを管理します。また、ホストサーバに搭載されたエネルギーストレージモジュール（ESM）を管理します。
moveboard	現在組み込まれているドメインから別のドメインへ、システムボード（XSB）を移動します。
nslookup	ホスト名を Domain Name Server（DNS）サーバに照会します。
password	XSCF ユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定します。
ping	ICMP の ECHO_REQUEST パケットをネットワーク上のホストまたはネットワーク装置へ送信します。
poweroff	ドメインの電源を切断します。
poweron	ドメインの電源を投入します。
prtfru	システムおよび PCI ボックスに FRUID データを表示します。
rebootxscf	XSCF をリセットします。
replacefru	Field Replaceable Unit（FRU）を交換します。
reset	指定したドメインをリセットします。
resetdateoffset	システム時刻とドメイン時刻との差分をリセットします。
restoreconfig	dumpconfig(8) コマンドで保存したシステム構成情報を復元します。
restoredefaults	本体装置または XSCF ユニットに保存された設定やエラー情報を初期化します。

sendbreak	指定したドメインにブレーク信号を送ります。
setad	Active Directory を構成します。
setaltitude	本体装置の高度またはエアーフィルターの搭載状況を設定します。
setarchiving	ログのアーカイブ機能を設定します。
setaudit	システムの監査機能を管理します。
setautologout	XSCF コマンドシェルのセッションタイムアウト時間を設定します。
setcod	ドメインで使用される Capacity on Demand（COD）リソースを設定します。
setdate	XSCF の時計の日付、時刻を設定します。
setdcl	ドメイン構成情報（DCL）を設定します。
setdomainmode	ドメインモードを設定します。
setdomparam	OpenBoot PROM 環境変数を強制的に書き換えます。
setdscp	ドメイン／サービスプロセッサ間通信プロトコル（DSCP）の IP アドレスを割り当てます。
setdualpowerfeed	二系統受電モードを有効／無効にします。
setemailreport	電子メールレポートの設定データをセットアップします。
sethostname	XSCF ユニットのホスト名およびドメイン名を設定します。
sethttps	XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定します。また、認証関連の設定を行います。
setldap	XSCF を Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）クライアントとして設定します。
setldapssl	LDAP/SSL を構成します。
setlocale	XSCF のデフォルトのロケールを設定します。
setlocator	オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定します。
setloginlockout	ログイン時のロックアウト機能を有効または無効にします。
setlookup	認証とユーザー権限の関する参照先を設定します。
setnameserver	XSCF ネットワークで使用される Domain Name System（DNS）サーバおよびサーチパスを設定します。

setnetwork	XSCF で使用されるネットワークインターフェースを設定します。
setntp	XSCF ネットワークで使用される NTP サーバ、stratum 値、優先サーバ、および XSCF のローカルクロックのクロックアドレスを設定します。
setpacketfilters	XSCF ネットワークで使用される IP パケットフィルタリングルールを設定します。
setpasswordpolicy	システムのパスワードポリシーを管理します。
setpowerupdelay	システムの暖機運転時間および起動までの待ち時間を設定します。
setprivileges	ユーザー権限を割り当てます。
setroute	XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定します。
setshutdowndelay	無停電電源装置（UPS）からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を設定します。
setsmtp	Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）サービスを設定します。
setsnmp	SNMP エージェントを管理します。
setsnmpusm	SNMPv3 エージェントの User-based Security Model（USM）設定します。
setsnmpvacm	SNMPv3 エージェントの View-based Access Control Model（VACM）設定を変更します。
setssh	XSCF ネットワークで使用する Secure Shell（SSH）サービスに関する設定を行います。
setsunmc	Sun Management Center エージェントを起動または停止し、エージェントの設定を変更します。
settelnet	XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止します。
settimezone	XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定します。
setupfru	デバイスのハードウェアに関する設定を行います。
setupplatform	プラットフォーム固有の設定を行います。
showad	Active Directory の構成およびメッセージを表示します。
showaltitude	本体装置の高度およびエアーフィルターの搭載状況を表示します。
showarchiving	ログアーカイブの設定状態を表示します。

showaudit	監査システムの現在の状態を表示します。
showautologout	XSCF コマンドシェルのセッションタイムアウト時間を表示します。
showboards	システムボード（XSB）の情報を表示します。
showcod	ドメインで設定されている Capacity on Demand（COD）に関する情報を表示します。
showcodactivation	Capacity on Demand（COD）データベースに格納されている現在の COD 情報を表示します。
showcodactivationhistory	Capacity on Demand（COD）ログを表示します。
showcodlicense	COD ライセンスデータベースに格納されている現在の Capacity on Demand（COD）Right-To-Use（RTU）ライセンスキーを表示します。
showcodusage	Capacity on Demand（COD）リソースの使用状況を表示します。
showconsolepath	現在接続されているドメインコンソールの情報を表示します。
showdate	XSCF の時計の日付、時刻を表示します。
showdateoffset	システム時刻とドメイン時刻との差分を表示します。
showdcl	現在設定されているドメイン構成情報（DCL）を表示します。
showdevices	システムボード（XSB）のデバイスと、リソースの使用状況を表示します。
showdomainmode	現在設定されているドメインモードを表示します。
showdomainstatus	現在のドメインの状態を表示します。
showdscp	ドメイン - SP 通信プロトコル（DSCP）に割り当てられている IP アドレスを表示します。
showdualpowerfeed	二系統受電モードの現在の状態を表示します。
showemailreport	電子メールレポートの設定データを表示します。
showenvironment	本体装置の排気量、吸気温度と湿度、温度センサー情報、電圧センサー情報、ファン回転情報、消費電力情報を表示します。
showfru	デバイスのハードウェアに関する設定内容を表示します。
showhardconf	本体装置に搭載されている Field Replaceable Unit（FRU）の情報を表示します。

showhostname	XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。
showhttps	XSCF ネットワークに設定されている HTTPS サービスの状態を表示します。
showldap	サービスプロセッサの Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）設定を表示します。
showldapssl	LDAP/SSL の構成およびメッセージを表示します。
showlocale	設定されている XSCF のロケールを表示します。
showlocator	オペレーターパネルの CHECK LED の状態を表示します。
showloginlockout	ユーザーアカウントのロックアウト機能に設定されている内容を表示します。
showlogs	指定したログを表示します。
showlookup	認証とユーザー権限のルックアップに関する設定を表示します。
showmonitorlog	監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。
shownameserver	XSCF ネットワークに設定されている Domain Name System （DNS）サーバおよびサーチパスを表示します。
shownetwork	XSCF に設定されているネットワークインターフェースの情報を表示します。
shownotice	XSCF Control Package（XCP）の著作権および著作権に関するライセンス情報を表示します。
showntp	XSCF ネットワークに設定されている NTP サーバを表示します。
showpacketfilters	XSCF ネットワークインターフェースに設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。
showpasswordpolicy	現在のパスワードポリシーの設定を表示します。
showpowerupdelay	現在設定されているシステムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を表示します。
showresult	直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。
showroute	XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。
showshutdowndelay	無停電電源装置（UPS）からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を表示します。
showsmtp	Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）の設定情報を表示します。

showsnmp	SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示します。
showsnmpusm	SNMP エージェントに関する現在の User-based Security Model（USM）情報を表示します。
showsnmpvacm	SNMP エージェントに関する現在の View-based Control Access（VACM）情報を表示します。
showssh	XSCF ネットワークに設定されている Secure Shell（SSH）サービスの内容を表示します。
showstatus	縮退された Field Replaceable Unit（FRU）を表示します。
showsunmc	セットアップ情報および Sun Management Center エージェントのステータスを表示します。
showtelnet	XSCF ネットワークに設定されている Telnet サービスの状態を表示します。
showtimezone	現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示します。
showuser	ユーザーアカウント情報を表示します。
snapshot	環境、ログ、エラー、および Field Replaceable Unit Identifier（FRUID）に関するデータを収集し、転送します。
switchscf	XSCF ユニットのアクティブ、スタンバイ状態を切り替えます。
testsb	指定した物理システムボード（PSB）に初期診断を行います。
traceroute	指定したホストまたはネットワーク装置までのネットワーク経路を表示します。
unlockmaintenance	XSCF のロック状態を強制的に解除します。
version	ファームウェアの版数を表示します。
viewaudit	監査レコードを表示します。

リファレンス

ユーザーコマンド

名前 exit - XSCF シェルを終了します。

形式 **exit**

説明 exit(1) は、XSCF シェルを終了して閉じるコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

名前 man - XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示します。

形式 **man** *command_name ...*

man -h

説明 man(1) は、指定した XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

comnand_name	マニュアルページを表示するコマンドを指定します。スペースで区切って複数指定できます。

詳細説明

- マニュアルページが長い場合は、1 画面ごとに区切られて表示されます。このときは、キーを使用して、以下のように操作できます。

キー	説明
Enter	次の 1 行を表示します。
スペース	次の 1 ページ分を表示します。
b	半ページ分遡ります。
q	マニュアルページの表示を中断します。

- *command_name* に Intro を指定した場合は、XSCF シェルコマンドの一覧が表示されます。

使用例

使用例 1 addboard(8) コマンドのマニュアルページを表示します。

```
XSCF> man addboard
```

使用例 2 XSCF シェルコマンドの一覧を表示します。

```
XSCF> man Intro
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

who - XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。

形式

who

who -h

説明

who(1) は、XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

- XSCF ユーザーアカウント名
- 使用している端末
- アイドル時間
- ログイン時刻
- リモートホスト名

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

使用例

使用例 1　XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。

```
XSCF> who
USER       TTY      IDLE      FROM           HOST
scf        pts/0    00:00m    Dec 21 13:57   JJJJ.ggg.fujitsu.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

リファレンス

システム管理コマンド

名前 addboard - システムボード（XSB）をドメイン構成に組み込み、または割り当てます。

形式

addboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] [-c configure] -d *domain_id xsb* [*xsb*...]

addboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c assign -d *domain_id xsb* [*xsb*...]

addboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c reserve -d *domain_id xsb* [*xsb*...]

addboard -h

説明

addboard(8) は、ドメイン構成情報（DCL）に基づいて、XSB をドメイン構成に組み込む、または割り当てるコマンドです。

addboard(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

以下のいずれかの組込み手段が指定できます。

configure	指定したドメイン構成に XSB を組み込みます。組み込まれた XSB は、Oracle Solaris オペレーティングシステム（Oracle Solaris OS）からアクセスできるようになります。
assign	指定したドメインに XSB を割り当てます。割り当てられた XSB は、指定したドメインに予約され、他のドメインからは組込み、割当てができなくなります。割り当てられたあとは、再起動するか addboard(8) コマンドを "-c configure" で実行した場合に、ドメインに組み込まれます。
reserve	指定したドメインに XSB の組込みを予約します。動作は assign と同じです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-c assign	XSB をドメイン構成に割り当てます。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたとみなされます。
-c configure	XSB をドメイン構成に組み込みます。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたとみなされます。
-c reserve	ドメイン構成に XSB の組込みを予約します。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたとみなされます。

-d *domain_id*	XSB を組み込む、または割り当てるドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-f	XSB を、強制的にドメインへ組み込みます。

注意 – -f オプションにより強制的にドメインへ XSB を追加した場合、追加したすべてのハードウェアリソースは正常に動作しない可能性があります。そのため、-f オプションは通常の運用では使用しないことをお勧めします。-f オプションを指定した場合は、必ず、追加した XSB やデバイスの状態を確認してください。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n" （no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-v	詳細な情報を表示します。-q オプションと一緒に指定した場合は -v は無効となります。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb 組み込む、または割り当てる XSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

x-y

x	00 から 15 までの整数で指定します。
y	0 から 3 までの整数で指定します。

詳細説明

- ドメインが稼働していない場合でも、addboard(8) コマンドは実行できます。しかし、ドメイン稼働中に "-c configure" を指定して addboard(8) コマンドを実行する場合は、Oracle Solaris サービス管理機能（SMF）の、以下のサービスが動作している必要があります。
  - ドメイン -SP 通信プロトコル（dscp）
  - ドメイン構成サーバ（dcs）
  - キー管理デーモン（sckmd）
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- "-c configure" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、または Oracle Solaris OS が稼働していないときは、エラーとなります。

- "-c configure" を指定した場合は、XSB に対してハードウェア診断が行われてから、ドメインに組み込まれます。そのため、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
- addboard(8) コマンドで XSB を割り当てたり、組み込んだりするには、あらかじめ、setdcl(8) コマンドを使用して、DCL を設定しておく必要があります。
- DCL については setdcl(8)、showdcl(8) コマンドを参照してください。
- 対象のドメインが電源投入処理中、または切断処理中にコマンドが実行された場合は、ビジー状態となります。ドメインの処理が終了したあとで、再度実行してください。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 に対して、XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 を割り当てます。

```
XSCF> addboard -y -c assign -d 0 00-0 01-0 02-0 03-0
```

使用例 2 ドメイン ID 2 に対して、XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 を強制的に組み込みます。

```
XSCF> addboard -f -d 2 00-0 01-0 02-0 03-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deleteboard(8), **moveboard**(8), **replacefru**(8), **setdcl**(8), **setdomainmode**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdomainstatus**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8), **showfru**(8), **testsb**(8)

名前

addcodactivation - Capacity on Demand（COD）の CPU Right To Use（RTU）ライセンスキー（COD キー）を COD データベースに追加します。

形式

addcodactivation *key_signature*

addcodactivation `-h`

説明

`addcodactivation`(8) は、指定された COD キーを、サービスプロセッサ上の COD データベースに追加するコマンドです。

`addcodactivation`(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

COD キーが追加されると、ヘッドルームの数は COD キーが提供された数だけ減ります。ヘッドルーム数はゼロより小さくなることはありません。

注 – このコマンドを実行する前に、COD キーを取得する必要があります。COD キーを取得する場合は、営業担当員にお問い合わせください。COD キーの詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

key_signature COD データベースに追加する COD キーを指定します。

使用例

使用例 1 COD キーを追加します。

```
XSCF> addcodactivation \
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

`0` 正常に終了したことを表します。

`>0` エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前

addcodlicense - Capacity on Demand（COD）Right-To-Use（RTU）ライセンスキーを COD ライセンスデータベースに追加します。

形式

addcodlicense *license-signature*

addcodlicense -h

説明

addcodlicense(8) は、指定された COD RTU ライセンスキーを、サービスプロセッサ上の COD ライセンスデータベースに追加するコマンドです。

addcodlicense(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

COD ライセンスキーが追加されると、ヘッドルームの数はライセンスキーが提供された数だけ減ります。ヘッドルーム数はゼロより小さくなることはありません。

注 – このコマンドを実行する前に、COD ライセンスキーを取得する必要があります。ライセンスキーを取得するには、営業担当員にお問い合わせください。COD RTU ライセンスキーの詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

license-signature　COD ライセンスデータベースに追加する COD RTU ライセンスキーを指定します。

使用例

使用例 1　COD RTU ライセンスキーを追加します。

```
XSCF> addcodlicense \
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　正常に終了したことを表します。

>0　エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前 addfru - Field Replaceable Unit（FRU）を増設します。

形式 **addfru**

addfru `-h`

説明 `addfru`(8) は、FRU を増設するコマンドです。

FRU の増設に必要な FRU の選択、確認、取りつけなどの設定を、メニュー形式で対話的に行うことができます。

`addfru`(8) コマンドでは、以下の FRU を増設できます。

- CPU ／メモリボードユニット（CMU）
- I/O ユニット（IOU）
- ファンユニット（FANU）
- 電源ユニット（PSU）

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

`0` 正常に終了したことを表します。

`>0` エラーが発生したことを表します。

関連項目 **deletefru**(8), **replacefru**(8), **setupfru**(8), **showfru**(8), **showhardconf**(8), **testsb**(8), **unlockmaintenance**(8)

名前 adduser - XSCF ユーザーアカウントを作成します。

形式 **adduser** [-u *UID*] *user*

adduser -h

説明 adduser(8) は、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成するコマンドです。

XSCF ユーザーアカウントは、XSCF の設定、操作、管理、および運用に使用されます。新しく作成したユーザーアカウントには、パスワードが設定されていません。したがって、password(8) コマンドでパスワードを設定するか、Secure Shell（SSH）による公開鍵をユーザー用に設定するまで、ログインに使用できません。作成されたユーザーアカウントはロックされますが、無効になっているわけではありません。指定できるユーザーアカウント数は、1 ユーザーアカウントあたり平均 10 文字とすると、100 ユーザーアカウントまでです。

ユーザーアカウントデータに対して Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）、Active Directory、または LDAP/SSL を使用するように XSCF で設定されている場合、ユーザーアカウント名および（設定している場合は）ユーザー識別子は、XSCF、LDAP、Active Directory または LDAP/SSL で未使用のものでなければなりません。

ユーザーアカウントを作成すると、現在のパスワードポリシーの値が、作成されたユーザーアカウント用のファイルに保存されます。パスワードポリシーの詳細については、setpasswordpolicy(8) コマンドを参照してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-u *UID*	指定された識別子（UID）で新しいユーザーを作成します。*UID* を指定する場合は、100 から 60000 までの整数にする必要があります。-u オプションを省略した場合は、ユーザー識別子は 100 以上の整数で自動的に割り当てられます。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

user	作成する XSCF ユーザーアカウント名を指定します。ユーザーアカウント名は、英小文字、数字、ハイフン（-）、アンダースコア（_）を組み合わせて 31 文字以内で指定します。大文字は使用できません。先頭文字は英小文字で指定してください。利用可能なユーザーアカウント名として jsmith、j_smith、j_smith-0123 などがあります。

使用例

使用例 1　新しいユーザーを作成します。

```
XSCF> adduser -u 359 jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deleteuser(8), **disableuser**(8), **enableuser**(8), **password**(8), **setad**(8), **setldap**(8), **setldapssl**(8), **setpasswordpolicy**(8), **showad**(8), **showldap**(8), **showldapssl**(8), **showpasswordpolicy**(8), **showuser**(8)

名前

applynetwork - XSCF ネットワークの内容を XSCF に適用します。

形式

applynetwork [[-q] -{y|n}] [-M]

applynetwork -h

説明

applynetwork(8) は、設定された XSCF ネットワークの内容を XSCF に適用するコマンドです。

XSCF ネットワークの内容を設定するには、以下の 3 つの手順で行います。

1. 以下のコマンドでネットワークを設定します。
   - sethostname(8) で XSCF ホスト名と DNS ドメイン名を設定します。
   - setnameserver(8) で DNS サーバとサーチパスを設定します。
   - setnetwork(8) で XSCF ネットワークインターフェースの IP アドレスとネットマスクを設定します。
   - setroute(8) で XSCF ネットワークインターフェースのルーティングを設定します。
2. applynetwork(8) コマンドを実行して、設定された内容を XSCF に適用します。
3. rebootxscf(8) コマンドを実行して、適用された内容をもとに XSCF をリセットします。

注 – applynetwork(8) コマンドを実行しないで XSCF をリセットした場合は、設定したネットワークの内容が XSCF に適用されません。また、設定した内容自体が消去されてしまいます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

- 適切なネットワークコマンドを使用して、後述する XSCF ネットワークの内容を設定してください。設定したら、applynetwork(8) コマンドを実行してください。これらの内容が正しく設定されていない場合は、XSCF ネットワークの設定は適用されません。
  - ホスト名（sethostname(8)）
  - DNS ドメイン名（sethostname(8)）
  - XSCF ネットワークインターフェースの IP アドレスおよびネットマスク（setnetwork(8)）
- M8000/M9000 サーバの場合は、sethostname(8) コマンドで、xscf#0、xscf#1 の両方にホスト名を設定してください。
- M3000/M4000/M5000 サーバでは、少なくとも xscf#0-lan#0 または xscf#0-lan#1 のどちらかが up 状態となるよう、setnetwork(8) コマンドで設定してください。両方とも up 状態の場合は、異なるサブネットを設定してください。
- M8000/M9000 サーバで、xscf#0-lan#0、xscf#1-lan#0、xscf#0-lan#1、xscf#1-lan#1 がすべて down 状態の場合はエラーとなります。
- M8000/M9000 サーバで、up 状態のネットワークインターフェースが以下の設定の場合はエラーとなります。setnetwork(8) コマンドで正しく設定してください。
  - xscf#0-lan#0、xscf#1-lan#0、引継ぎ IP アドレス lan#0 のサブネットが異なる場合
  - xscf#0-lan#1、xscf#1-lan#1、引継ぎ IP アドレス lan#1 のサブネットが異なる場合
  - ISN のサブネットが異なる場合
  - xscf#0-lan#0、xscf#0-lan#1、xscf#0-if のサブネットが同じ場合
  - xscf#1-lan#0、xscf#1-lan#1、xscf#1-if のサブネットが同じ場合
- sethostname(8) で設定した DNS ドメイン名と setnameserver(8) コマンドで設定したサーチパスの文字数の合計が 256 文字を超える場合は、エラーとなります。
- setnameserver(8) コマンドで DNS サーバを設定しないで、サーチパスだけを設定した場合は、エラーとなります。
- M8000/M9000 サーバで、XSCF フェイルオーバー中は applynetwork(8) コマンドを実行しないでください。

使用例

使用例 1　XSCF ネットワークの設定を適用します。

M3000/M4000/M5000 サーバの場合

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
 xscf#0 hostname  :hostname-0
 DNS domain name  :example.com
 nameserver       :10.23.4.3
```

```
 interface        :xscf#0-lan#0
 status           :up
 IP address       :10.24.144.214
 netmask          :255.255.255.0
 route            :-n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

 interface        :xscf#0-lan#1
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :
 route            :

Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the network settings.
Please confirm that the settings have been applied by executing
showhostname, shownetwork, showroute and shownameserver after rebooting
the XSCF.
```

M8000/M9000 サーバの場合

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
 xscf#0 hostname  :hostname-0
 xscf#1 hostname  :hostname-1
 DNS domain name  :example.com
 nameserver       :10.23.4.3

 interface        :xscf#0-lan#0
 status           :up
 IP address       :10.24.144.214
 netmask          :255.255.255.0
 route            : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

 interface        :xscf#0-lan#1
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :
 route            :

 interface        :xscf#0-if
 status           :down
 IP address       :10.24.100.1
 netmask          :255.255.255.0

 interface        :lan#0
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :

 interface        :xscf#1-lan#0
 status           :up
 IP address       :10.24.144.215
```

```
 netmask          :255.255.255.0
 route            : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

 interface        :xscf#1-lan#1
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :
 route            :

 interface        :xscf#1-if
 status           :down
 IP address       :10.24.100.2
 netmask          :255.255.255.0

 interface        :lan#1
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :

Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the network settings.
Please confirm that the settings have been applied by executing
showhostname, shownetwork, showroute and shownameserver after rebooting
the XSCF.
```

使用例 2 M3000/M4000/M5000 サーバで XSCF ネットワークの設定を反映します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> applynetwork -y
The following network settings will be applied:
 xscf#0 hostname  :hostname-0
 DNS domain name  :example.com
 nameserver       :10.23.4.3

 interface        :xscf#0-lan#0
 status           :up
 IP address       :10.24.144.214
 netmask          :255.255.255.0
 route            :-n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

 interface        :xscf#0-lan#1
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :
 route            :

Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the network settings.
Please confirm that the settings have been applied by executing
showhostname, shownetwork, showroute and shownameserver after rebooting
the XSCF.
```

使用例 3 XSCF ネットワークの設定を反映します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> applynetwork -q -y
```

使用例 4 DNS サーバとサーチパスを設定したあとに、XSCF ネットワークの設定を反映します。

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
 xscf#0 hostname  :hostname-0
 DNS domain name  :example.com
 nameserver       :10.23.4.3
 nameserver       :10.24.144.3
 nameserver       :10.24.131.7
 search           :example1.com
 search           :example2.com
 search           :example3.com
 search           :example4.com
 search           :example5.com

 interface        :xscf#0-lan#0
 status           :up
 IP address       :10.24.144.214
 netmask          :255.255.255.0
 route            :-n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

 interface        :xscf#0-lan#1
 status           :down
 IP address       :
 netmask          :
 route            :

Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the network settings.
Please confirm that the settings have been applied by executing
showhostname, shownetwork, showroute and shownameserver after rebooting
the XSCF.
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **rebootxscf**(8), **sethostname**(8), **setnameserver**(8), **setnetwork**(8), **setroute**(8)

名前

cfgdevice - CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットのポートへの接続、切離し、および状態の表示を行います。

形式

cfgdevice [[-q] -{y|n}] -c attach -p *port_no*

cfgdevice [[-q] -{y|n}] -c detach -p *port_no*

cfgdevice -l [-M]

cfgdevice -h

説明

cfgdevice(8) は指定したポートに対して、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続したり、切り離したり、現在の状態を表示したりするコマンドです。

cfgdevice(8) コマンドは、M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。

CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続するには、IOU Onboard Device Card_A（IOUA）が搭載されている I/O ユニット上の PCI スロット番号を、ポート番号として指定する必要があります。cfgdevice(8) コマンドを実行すると、システムに内蔵されているドライブ切り替え装置によって、指定されたポートへ CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットが切り替えられます。

現在の状態を表示した場合は、以下の内容が表示されます。

port_no
: IOUA が搭載されていて、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続できるポート番号

  "IOU 番号-PCI スロット番号" で表示されます。

IOU/SAS-status
: IOUA と切り替え装置間の接続状態。"-c attach", "-c detach" によって切り替わります。

  - enable/disable: cfgdevice(8) コマンドでの設定状態
    enable: "-c attach" によって接続された状態
    disable: 接続なし
  - up/down: IOUA と切り替え装置間の論理的な接続状態。
    up: 接続が確立されている状態
    down: 接続されていない状態

SAS-status
: I/O ユニットと本体装置間の接続状態

  - enable/disable: I/O ユニットと本体装置間の接続設定。通常は enable が表示されます。I/O ユニットなしでドメインを起動した場合などに disable となります。
  - up/down: I/O ユニットと本体装置間の論理的な接続状態
    up: 接続が確立されている状態
    down: 接続されていない状態

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c attach	指定したポートに CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続します。
-c detach	指定したポートに接続されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを切り離します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	現在設定されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの状態を表示します。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-p *port_no*	指定したドメイン上で CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続するポート番号を指定します。*port_no* は「*IOU 番号-PCI スロット番号*」の形式で指定できます。-p オプションは省略できません。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- 接続または切離しの場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- すべてのドメインの電源が切断されている場合に "-c attach" を実行すると接続が予約され、"-c detach" を実行すると切離しが予約されます。切断以外の状態の場合は、cfgdevice(8) コマンド実行後すぐに設定されます。

  すべてのドメインの電源が切断されているかを確認する場合は showlogs power コマンドを実行して、System Power Off という値のあることを確認してください。
- CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットが接続された状態で、ドメイン構成を変更したり、CPU ／メモリボードユニット（CMU）や I/O ユニット（IOU）を交換したりしても、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの接続状態は保持されます。
- ドメインの電源を切断したり、再起動したりしても、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの接続状態は保持されます。

- M9000 サーバの場合は、基本筐体、拡張筐体に 1 台ずつ CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットが搭載されます。このとき、各 CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットは同一筐体内でのみ接続できます。また、接続の設定は基本、拡張筐体ごとに行う必要があります。

```
XSCF> cfgdevice -l
Current connection for DVD/DAT:
  Main chassis:      port 0-0
  Expansion chassis: port 8-0
Expander status
Port No. IOU/SAS-status SAS-status
-----------------------------------
 0-0     enable  up     enable  up
 0-2     disable down   enable  up
 0-4     disable down   enable  up
 0-6     disable down   enable  up
 1-0     disable down   enable  up
 1-2     disable down   enable  up
 1-4     disable down   enable  up
 1-6     disable down   enable  up
 2-0     disable down   enable  up
 2-2     disable down   enable  up
 2-4     disable down   enable  up
 2-6     disable down   enable  up
 8-0     enable  up     enable  up
 8-2     disable down   enable  up
 8-4     disable down   enable  up
 8-6     disable down   enable  up
```

使用例

使用例 1 本体装置の電源が切断されているときに、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続予約します。

```
XSCF> cfgdevice -c attach -p 0-0
Are you sure you want to attach the device [y|n] :y
Completed.( Reservation )
```

使用例 2 本体装置の電源が投入されているときに、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続します。

```
XSCF> cfgdevice -c attach -p 0-0
Are you sure you want to attach the device [y|n] :y
Completed.
```

使用例 3 CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 から切り離します。

```
XSCF> cfgdevice -f -c detach -p 0-0
Are you sure you want to detach the device [y|n] :y
Completed.
```

使用例 4 M8000 サーバおよび拡張筐体なし M9000 サーバで、現在設定されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの状態を表示します。

```
XSCF> cfgdevice -l
Current connection for DVD/DAT: port 0-0
Expander status
Port No. IOU/SAS-status SAS-status
-----------------------------------
 0-0     enable  up     enable  up
 0-2     disable down   enable  up
```

使用例 5 拡張筐体つき M9000 サーバで、現在設定されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの状態を表示します。

```
XSCF> cfgdevice -l
Current connection for DVD/DAT:
  Main chassis:      port 0-0
  Expansion chassis: port 8-0
Expander status
Port No. IOU/SAS-status SAS-status
-----------------------------------
 0-0     enable  up     enable  up
 0-2     disable down   enable  up
 0-4     disable down   enable  up
 0-6     disable down   enable  up
 1-0     disable down   enable  up
 1-2     disable down   enable  up
 1-4     disable down   enable  up
 1-6     disable down   enable  up
 2-0     disable down   enable  up
 2-2     disable down   enable  up
 2-4     disable down   enable  up
 2-6     disable down   enable  up
 8-0     enable  up     enable  up
 8-2     disable down   enable  up
 8-4     disable down   enable  up
 8-6     disable down   enable  up
```

使用例 6 本体装置の電源が投入されているときに、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> cfgdevice -y -c attach -p 0-0
Are you sure you want to attach the device [y|n] :y
Completed.
```

使用例 7 本体装置の電源が投入されているときに、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続します。

メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> cfgdevice -q -y -c attach -p 0-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

clockboard - 本体装置起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定または表示します。

形式

clockboard

clockboard -s *CLKU_B-number*

clockboard -h

説明

clockboard(8) は、次回本体装置起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定する、または現在使用されているクロックコントロールユニットと次回本体装置起動時に使用されるクロックコントロールユニットを表示するコマンドです。

clockboard(8) コマンドは M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。

クロックコントロールユニットは 0 または 1 の番号で設定または表示されます。何も指定しないで clockboard(8) コマンドを実行した場合は、現在動作しているクロックコントロールユニット番号、および次回本体装置起動時に使用されるクロックコントロールユニット番号が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *CLKU_B-number*	次回本体装置の電源を投入したときに使用されるクロックコントロールユニット番号を指定します。*CLKU_B-number* には 0 または 1 のどちらかを指定できます。

使用例

使用例 1 現在使用されているクロックコントロールユニットと次回本体装置起動時に使用されるクロックコントロールユニットを表示します。

```
XSCF> clockboard
current CLKU_B number    :0
next CLKU_B number    :1
```

使用例 2 次回本体装置起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定します。

```
XSCF> clockboard -s 1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 | console - ドメインコンソールに接続します。

形式 | **console** [[-q] -{y|n}] -d *domain_id* [-f | -r] [-s *escapeChar*]

console -h

説明 | console(8) は、XSCF シェルコンソールから、指定したドメインのコンソール（ドメインコンソール）に接続するコマンドです。

ドメインコンソールには、書き込み可能コンソールと読み取り専用コンソールがあります。1 つのドメインに対して、書き込み可能コンソールは 1 つだけ、読み取り専用コンソールは複数接続できます。すでに書き込み可能コンソールが接続されている場合に、書き込み可能コンソールに接続しようとするとエラーになります。この場合でも、platadm または domainadm 権限を持つユーザーであれば、強制的に書き込み可能コンソールに接続できます。このとき、現在接続されている書き込み可能コンソールは切断されます。

ドメインコンソールを終了して XSCF シェルコンソールに戻る場合は、Enter キーを押してから、"#" と "." （ピリオド）を入力します。

注 – ドメインからログアウトしないで、ドメインコンソールから XSCF シェルコンソールに戻った場合は、自動的にドメインからログアウトされます。

ユーザー権限 | このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション | 以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	接続するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定できます。
-f	強制的に書き込み可能コンソールに接続します。現在接続されている書き込み可能コンソールは切断されます。platadm または対象ドメインの domainadm 権限を持つユーザーだけが指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-r	読み取り専用コンソールに接続します。
-s *escapeChar*	エスケープ記号を指定します。デフォルトは "#" です。*escapeChar* として、以下の文字を指定できます。*escapeChar* は "" ""（二重引用符）で囲んで指定します。 "#", "@", "^", "&", "?", "*", "=", ".", "|" 指定したエスケープ記号は console(8) コマンドを実行したセッションにだけ有効です。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ドメインコンソールでは、行頭文字で使用される "#" はエスケープ記号とみなされます。エスケープ記号は、コンソールに対して特別な処理をさせる場合に指定します。"#" との組み合わせで指定できる処理の例は、以下のとおりです。

"#" と "?"	ステータスメッセージを出力します。
"#" と "."（ピリオド）	コンソールを切断します。

- 行頭でコンソールに "#" を入力する場合は、"#" を 2 回入力します。
- 現在接続されているドメインコンソールの情報を表示する場合は、showconsolepath(8) コマンドを使用します。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sendbreak(8), **showconsolepath**(8)

名前 deleteboard - システムボード（XSB）をドメイン構成から切り離します。

形式

deleteboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] [-c disconnect] *xsb* [*xsb*...]

deleteboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c unassign *xsb* [*xsb*...]

deleteboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c reserve *xsb* [*xsb*...]

deleteboard -h

説明

deleteboard(8) は、現在組み込まれているドメイン構成から XSB を切り離すコマンドです。

deleteboard(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

以下のいずれかの切離し手段が指定できます。

disconnect	XSB をドメイン構成から切り離して、割当て状態にします。XSB はドメイン構成に割り当てられたままのため、ドメインを再起動するか addboard(8) コマンドを実行することで、再びドメインに組み込むことができます。
unassign	XSB をドメイン構成から完全に切り離して、システムボードプールにします。システムボードプールとなった XSB は、他のドメイン構成に組み込んだり、割り当てたりできるようになります。
reserve	XSB をドメイン構成からすぐに切り離さず、切離しの予約だけを行います。予約されたあとは、指定したドメインの電源が切断されたときに、ドメイン構成から XSB が切り離され、システムボードプールになります。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-c disconnect`	XSB をドメイン構成から切り離して、割当て状態にします。`-c` オプションを省略した場合は、"`-c disconnect`" が指定されたとみなされます。
`-c reserve`	XSB の切離しを予約します。`-c` オプションを省略した場合は、"`-c disconnect`" が指定されたとみなされます。
`-c unassign`	XSB をドメイン構成から完全に切り離して、システムボードプールにします。`-c` オプションを省略した場合は、"`-c disconnect`" が指定されたとみなされます。
`-f`	指定した XSB を、強制的に切り離します。

注意 – `-f` オプションにより強制的にドメインから XSB を切り離す場合、CPU バインドしているプロセスや、デバイスをアクセスしているプロセスに対し、重要な問題が発生する可能性があります。そのため、`-f` オプションは通常の 運用では使用しないことを推奨します。`-f` オプションを指定した場合は、必ずドメインの状態や業務プロセスの状態を確認してください。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-n`	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-v`	詳細なメッセージを表示します。`-q` オプションと一緒に指定した場合は無効となります。
`-y`	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされます。

xsb 切り離す XSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

x-y

x	`00` から `15` までの整数で指定します。
y	`0` から `3` までの整数で指定します。

詳細説明

- ドメインが稼働していない場合でも、`deleteboard(8)` コマンドは実行できます。しかし、ドメイン稼働中に "`-c disconnect`" または "`-c unassign`" を指定して `deleteboard(8)` コマンドを実行する場合は、Oracle Solaris サービス管理機能（SMF）の、以下のサービスが動作している必要があります。

  - ドメイン -SP 通信プロトコル（dscp）
  - ドメイン構成サーバ（dcs）
  - キー管理デーモン（sckmd）
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- "-c disconnect" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、またはすでに XSB がドメイン構成から切り離されているときは、何も実行されません。ドメインの電源が投入処理中や切断処理中の場合はエラーとなります。
- "-c unassign" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、またはすでに XSB がドメイン構成から切り離されているときでも、XSB は割当て状態からシステムボードプールに切り替えられます。XSB がすでにシステムボードプールのときは、何も実行されません。
- "-c reserve" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、またはすでに XSB がドメイン構成から切り離されているときは、ただちに、割当て状態からシステムボードプールへ切り替えられます。XSB がすでにシステムボードプールのときは、何も実行されません。ドメインの電源が投入処理中や切断処理中の場合はエラーとなります。
- XSB を切り離す場合には、XSB 上のハードウェアリソースがオペレーティングシステムから切り離されます。したがって、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
- XSB が割り当てられた状態とは、指定したドメインへの組込みが予約された状態のことです。ドメインを再起動するか addboard(8) コマンドを実行することで組み込まれます。すでに割り当てられている XSB を、他のドメインから、組込み、割当ての対象として指定することはできません。
- システムボードプールとは、どのドメインにも属していない状態のことです。システムボードプールの XSB はどのドメインにも属していないため、自由に、割り当てたり組み込んだりできます。

使用例

使用例 1　XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 をシステムボードプールにします。

```
XSCF> deleteboard -c unassign 00-0 01-0 02-0 03-0
```

使用例 2　XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 の切離しを予約します。

```
XSCF> deleteboard -c reserve 00-0 01-0 02-0 03-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **addboard**(8), **moveboard**(8), **replacefru**(8), **setdcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8), **showdomainstatus**(8), **showfru**(8)

名前 deletecodactivation - Capacity on Demand（COD）の CPU Right To Use（RTU）ライセンスキー（COD キー）を COD データベースから削除します。

形式 **deletecodactivation** [-f] *key-signature*

deletecodactivation -h

説明 deletecodactivation(8) コマンドは、指定された COD キーをサービスプロセッサ上の COD データベースから削除するコマンドです。

deletecodactivation(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

注 – COD キーの詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』を参照してください。

COD 許諾の数と使用中の COD CPU の数がシステムによって確認されます。COD 許諾を削除すると COD 許諾の数が使用中の CPU の数を下回る場合、COD キーは COD データベースから削除されません。この場合、COD キーを削除するには、使用中の COD CPU の数を減らす必要があります。適切な数のドメインの電源を切断するか、Dynamic Reconfiguration（DR）操作によって適切な数のシステムボード（XSB）を切断します。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-f	指定された COD キーを COD データベースから強制的に削除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

key-signature	COD データベースから削除する COD キーを指定します。

使用例 **使用例 1** COD キーを削除します。

```
XSCF> deletecodactivation \
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前

deletecodlicense - Capacity on Demand（COD）Right-To-Use（RTU）ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから削除します。

形式

deletecodlicense [-f] *license-signature*

deletecodlicense -h

説明

deletecodlicense(8) コマンドは、指定された COD RTU ライセンスキーをサービスプロセッサ上の COD ライセンスデータベースから削除するコマンドです。

deletecodlicense(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

COD RTU ライセンスキーの詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』を参照してください。

COD RTU ライセンスの数と使用中の COD CPU の数がシステムによって確認されます。COD RTU ライセンスを削除するとライセンスの数が使用中の CPU の数を下回る場合、ライセンスキーは COD RTU ライセンスデータベースから削除されません。この場合、COD RTU ライセンスキーを削除するには、使用中の COD CPU の数を減らす必要があります。適切な数のドメインの電源を切断するか、Dynamic Reconfiguration（DR）操作によって適切な数のシステムボード（XSB）を切断します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-f　　指定された COD RTU ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから強制的に削除します。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

license-signature　　COD ライセンスデータベースから削除する COD RTU ライセンスキーを指定します。

使用例

使用例 1　COD RTU ライセンスキーを削除します。

```
XSCF> deletecodlicense \
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前 deletefru - Field Replaceable Unit（FRU）を減設します。

形式 **deletefru**

deletefru `-h`

説明 `deletefru`(8) は、FRU を減設するコマンドです。

このコマンドは M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。

FRU の減設に必要な FRU の選択、確認、取外しなどの設定を、メニュー形式で対話的に行うことができます。

`deletefru`(8) コマンドでは、以下の FRU を減設できます。

- CPU ／メモリボードユニット（CMU）
- I/O ユニット（IOU）

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

`0` 正常に終了したことを表します。

`>0` エラーが発生したことを表します。

関連項目 **addfru**(8), **deleteboard**(8), **replacefru**(8), **setupfru**(8), **showdomainstatus**(8), **showfru**(8), **showhardconf**(8), **unlockmaintenance**(8)

名前

deleteuser - XSCF ユーザーアカウントを削除します。

形式

deleteuser *user*

deleteuser -h

説明

deleteuser(8) は、XSCF ユーザーアカウントを削除するコマンドです。

deleteuser(8) コマンドを実行すると、XSCF ユーザーアカウント、およびパスワードや Secure Shell（SSH）用の公開鍵など、ユーザーアカウントに関連づけられているすべてのデータが削除されます。

ユーザーアカウントを削除すると、削除したユーザーアカウントで実行している XSCF シェルや XSCF Web のセッションが同時に終了します。ユーザーアカウントがシステムから削除されるので、そのユーザーアカウントではログインできなくなります。自分のアカウントを削除することはできません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user　　削除する XSCF ユーザーアカウントを指定します。

使用例

使用例 1　ユーザーを削除します。

```
XSCF> deleteuser jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **disableuser**(8), **enableuser**(8)

名前

disableuser - XSCF ユーザーアカウントを無効にします。

形式

disableuser *user*

disableuser -h

説明

disableuser(8) は、次回以降のログインで XSCF ユーザーアカウントを無効にするコマンドです。

現在ログイン中のセッションには影響を与えません。無効にしたユーザーアカウントは、ログインに使用できなくなります。この設定は、Secure Shell（SSH）だけでなくシリアル接続されたコンソールや Telnet 接続にも適用されます。XSCF Web ログインも無効になります。ユーザーアカウントに関連づけられているすべてのデータは XSCF 内に保存されています。データにはパスワードと SSH キーも含まれます。enableuser(8) コマンドを使用すると、無効になっているユーザーアカウントを再び有効にできます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user　　無効にする XSCF ユーザーアカウントを指定します。

使用例

使用例 1　　ユーザーアカウントを無効にします。

```
XSCF> disableuser jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **deleteuser**(8), **enableuser**(8), **showuser**(8)

名前 dumpconfig - システム構成情報をファイルへ保存します。

形式 **dumpconfig** [-v] [-V] [[-q] -{y|n}] [-e [-P *password*]] [-c *comment*] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

dumpconfig -h

説明 dumpconfig(8) は、XSCF からユーザーが指定したファイルへ、システム構成情報を保存するコマンドです。

この情報は restoreconfig(8) コマンドを使用して、ファイルから XSCF へ、あとでダウンロードすることができます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-c` *comment*	保存された複数のシステム構成情報を区別できるように、ファイルにコメントを設定します。コメントは XSCF で読み込まれることはありません。132 文字以内で指定します。
	
	特殊文字は指定できません。使用できる文字は、0 から 9、a から z, A から Z、および "" ""（二重引用符）、スペースです。スペースを使用する場合は、コメント全体を二重引用符で囲んでください。
	
	コメントの例は以下のとおりです。
	
	`-c "This is a valid comment"`
	
	`-c This is an invalid comment`
	二重引用符で囲まずにスペースを使用しているため、この例は正しくありません。
	
	`-c "This! is @invalid"`
	使用できない特殊文字が含まれているため、この例は正しくありません。

`-e`	ファイルを暗号化します。"`-P` *password*" でパスワードを指定できます。"`-P` *password*" を省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。システム構成情報が暗号化されると、パスワードがなければ解読することができなくなります。パスワードを紛失してしまった場合は、システム構成情報は復元できません。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-n`	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
`-P` *password*	暗号化するためのパスワードを設定します。`-e` オプションと一緒に指定します。`-P` オプションを省略した場合は、パスワードを設定するためのプロンプトが表示されます。
`-p` *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。"`-t` *proxy_type*" を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-t` *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。`-p` オプションと一緒に指定します。`http`、`socks4`、`socks5` のいずれかを指定できます。デフォルトは `http` です。

-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。.

url

システム構成情報の保存先となる URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

http://*server*[:*port*]/*path*/*file*
https://*server*[:*port*]/*path*/*file*
ftp://*server*[:*port*]/*path*/*file*
file:///media/usb_msd/*path*/*file*

使用例

使用例 1 FTP サイトにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -V -p 129.145.155.156:8080 -u minilla ftp:/
10.7.79.18/sollgell/proxytest-ftp.cfg
transfer from '/tmp/dumpconfig.EvY1Yf' to 'ftp://10.7.79.18/sollgell/
proxytest-ftp.cfg'
Password:
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
*   Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
* Proxy auth using (nil) with user ''
* Server auth using Basic with user 'minilla'
> PUT ftp://10.7.79.18/iktest/proxytest-ftp.cfg HTTP/1.1
Authorization: Basic bHdhbmc6bHdhbmc=
User-Agent: dumpconfig
Host: 10.7.79.18:21
Pragma: no-cache
Accept: */*
Content-Length: 24720
Expect: 100-continue
< HTTP/1.1 100 Continue
< HTTP/1.1 200 OK
< Server: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Date: Mon, 04 Aug 2008 16:46:11 GMT
< Transfer-encoding: chunked
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
operation completed
XSCF>
```

使用例 2　　http サイトにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -v -p 129.145.155.166:8080 http://10.7.79.18/
sollgell/proxytest.cfg
reading database ... ..............*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...done
removing temporary file ... done
operation completed
XSCF>
```

使用例 3　　https サイトにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -V -p 129.145.155.166:8080 http://10.7.79.18/
sollgell/proxytest-https.cfg
transfer from '/tmp/dumpconfig.ZMCI3d' to 'http://10.7.79.18/iktest/
proxytest-https.cfg'
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
*   Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
> > PUT http://10.7.79.18/iktest/proxytest-https.cfg HTTP/1.1
User-Agent: dumpconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
Content-Length: 24720
Expect: 100-continue
< HTTP/1.1 100 Continue
< HTTP/1.1 204 No Content
< Content-type: text/html
< Date: Mon, 04 Aug 2008 16:42:46 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27 OpenSSL/0.9.7d
< Via: 1.1 proxy-proxy
< Proxy-agent: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
operation completed
XSCF>
```

使用例 4　　USB デバイスにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -v -V file:///media/usb_msd/proxytest.cfg
Making sure mount point is clear
Trying to mount USB device /dev/sda1 as /media/usb_msd
Mounted USB device
file '/media/usb_msd/proxytest.cfg' already exists
Do you want to overwrite this file? [y|n]: y
removing file 'file:///media/usb_msd/proxytest.cfg' ... done
reading database ... ..............*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...transfer from '/tmp/dumpconfig.HE1RZa' to
'file:///media/usb_msd/san-ff1-54.cfg'
done
```

```
removing temporary file ... done
operation completed
Unmounted USB device
XSCF>
```

使用例 5　システム構成情報を暗号化してパスワード保護します。

```
XSCF> dumpconfig -v -e -P kamacuras -p 129.145.155.166:8080 http:/
/10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg
reading database ... ..............*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...done
removing temporary file ... done
operation completed
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

restoreconfig(8)

名前 enableuser - XSCF ユーザーアカウントを有効にします。

形式 **enableuser** *user*

enableuser -h

説明 enableuser(8) は、無効になっている XSCF ユーザーアカウントを有効にするコマンドです。

有効になったユーザーアカウントは、Secure Shell（SSH）を使用して、コンソールでのログインに使用できるようになります。enableuser(8) コマンドを使用すると、disableuser(8) コマンドで無効にしたアカウントを再び有効にできます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされます。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

user　有効にする XSCF ユーザーアカウントを指定します。

使用例 **使用例 1**　ユーザーアカウントを有効にします。

```
XSCF> enableuser jsmith
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0　正常に終了したことを表します。

>0　エラーが発生したことを表します。

関連項目 **adduser**(8), **deleteuser**(8), **disableuser**(8), **showuser**(8)

名前 flashupdate - ファームウェアをアップデートします。

形式

flashupdate -c check -m xcp -s *version*

flashupdate [[-q] -{y|n}] -c update -m xcp -s *version*

flashupdate -c sync

flashupdate -h

説明 flashupdate(8) はファームウェアをアップデートするコマンドです。

以下のファームウェア全体をアップデートします。アップデートする場合には、アップデートが可能かどうかを事前に確認することができます。

- ファームウェア全体（XSCF, Power-On Self-Test（POST）を含む OpenBoot PROM）のアップデート（xcp）

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。.

-c check	指定したファームウェアのアップデートが可能かどうかを確認します。
-c update	指定したファームウェアをアップデートします。M8000/M9000 サーバの場合は、両方の XSCF ユニットのファームウェアがアップデートされます。
-c sync	M8000/M9000 サーバの場合に、XSCF ユニット間のファームウェアの版数を合わせます。XSCF ユニットを交換した場合などに使用します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m xcp	ファームウェア全体を対象にします。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。

-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s *version*	XCP 総合版数を指定します。*version* にはメジャー版数、マイナー版数、マイクロ版数を続けて指定します。 XCP の版数は「xyyz」のように 4 桁で表されます。各番号の意味は以下のとおりです。 *x* メジャーリリース番号 *yy* マイナーリリース番号 *z* マイクロリリース番号
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ファームウェアをアップデートする場合、XSCF ユニットがリセットされます。そのため、XSCF に LAN 接続している場合には、いったん接続が切断されます。
- 故障している Field Replaceable Unit（FRU）がある場合は、ファームウェアはアップデートできません。FRU の故障を解消してからアップデートしてください。

使用例

使用例 1 ファームウェア全体を 1082 版にアップデート可能かどうかを確認します。

```
XSCF> flashupdate -c check -m xcp -s 1082
```

使用例 2 ファームウェア全体を 1080 版から 1082 版にアップデートします。

```
XSCF> flashupdate -c update -m xcp -s 1082
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
XCP update is started (XCP version=1082:last version=1080)
OpenBoot PROM update is started (OpenBoot PROM version=02090000)
OpenBoot PROM update has been completed (OpenBoot PROM version=02090000)
XSCF update is started (XSCFU=0,bank=1,XCP version=1082:last version=1080)
XSCF download is started (XSCFU=0,bank=1,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=00:version=01080001:last version=01080000)
XSCF download has been completed (XSCFU=0,bank=1,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=00:version=01080001:last version=01080000)
     :
     :
XSCF download is started (XSCFU=0,bank=1,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=07:version=01080004:last version=01080000)
XSCF download has been completed (XSCFU=0,bank=1,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=07:version=01080004:last version=01080000)
XSCF update has been completed (XSCFU=0,bank=1,XCP version=1082:last
version=1080)
XCP update is started (XCP version=1082:last version=1080)
OpenBoot PROM update is started (OpenBoot PROM version=02090000)
OpenBoot PROM update has been completed (OpenBoot PROM version=02090000)
```

```
XSCF update is started (XSCFU=0,bank=0,XCP version=1082:last version=1080)
XSCF download is started (XSCFU=0,bank=0,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=00:version=01080001:last version=01080000)
XSCF download has been completed (XSCFU=0,bank=0,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=00:version=01080001:last version=01080000)
     :
     :
XSCF download is started (XSCFU=0,bank=0,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=07:version=01080004:last version=01080000)
XSCF download has been completed (XSCFU=0,bank=0,XCP version=1082:last
version=1080, Firmware Element ID=07:version=01080004:last version=01080000)
XSCF update has been completed (XSCFU=0,bank=0,XCP version=1082:last
version=1080)
XSCF is rebooting to update the reserve bank
```

使用例 3 M8000/M9000 サーバで、XSCF ユニット交換後にファームウェアの版数を合わせます。

```
XSCF> flashupdate -c sync
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

version(8)

名前 fmadm - 故障管理に関連するシステム構成パラメーターを表示します。

形式 **fmadm** [-q] config

fmadm -h

説明 fmadm(8) は、故障管理に関連するシステム構成パラメーターを表示するコマンドです。

fmadm(8) コマンドを使用して、以下のことができます。

- 現在、故障管理に関与している診断エンジンと診断エージェントのセットを表示する
- 故障があると診断されたシステムコンポーネントの一覧を表示する

Fault Manager と呼ばれるモジュールにより、可能なアクティビティは自動化されているため、通常は fmadm(8) コマンドを使用する必要はありません。システム管理者または当社技術員の支援が必要になると、Fault Manager はその旨を示すメッセージを表示します。また、関連する情報記事が記載されている URL を参照するように指示します。このウェブサイトで、fmadm(8) コマンドまたは別の故障管理ユーティリティを使用してより多くの情報を収集するか、追加タスクを実行するよう指示されることがあります。故障管理アクティビティを監視するツールの詳細については、fmdump(8) コマンドを参照してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platop, platadm, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

config	Fault Manager の構成を表示します。具体的には、モジュール名、バージョン、各コンポーネントモジュールの説明などを表示します。Fault Manager のモジュールは各種サービス（自動診断、自己修復、システム上のハードウェアとソフトウェアのメッセージ機能など）を提供します。

使用例

使用例 1　Fault Manager の設定を表示します。

```
XSCF> fmadm config
MODULE          VERSION STATUS  DESCRIPTION
case-close         1.0  active  Case-Close Agent
fmd-self-diagnosis 1.0  active  Fault Manager Self-Diagnosis
sysevent-transport  1.0    active  SysEvent Transport Agent
syslog-msgs        1.0   active Syslog Messaging Agent
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

fmdump(8), **fmstat**(8)

名前 fmdump - 故障管理に関連するログを表示します。

形式 **fmdump**

fmdump [-e] [-f] [-M] [-v] [-V] [-c *class*] [-t *time*] [-T *time*] [-u *uuid*]

fmdump -m [-M] [-t *time*] [-T *time*]

fmdump -h

説明 fmdump(8) は、Fault Manager と呼ばれるモジュールで管理されているログの内容を表示するコマンドです。

Fault Manager は、システムのバックグラウンドで動作します。XSCF によって検出された故障をエラーログに記録し、故障のあるコマンドを無効にするなどの自己修復を行います。

Fault Manager では、以下の 2 つのログが管理されています。これらのログは、システム管理者や当社技術員によって使用されます。

エラーログ　システムによって検出された問題の症状を示すエラーが記録されます。

フォールトログ　それらの症状を解明すると考えられる、問題の故障診断情報が記録されます。fmdump(8) コマンドは、デフォルトでフォールトログの内容を表示します。フォールトログには、Fault Manager またはそのコンポーネントモジュールのいずれかで行われた各診断の結果が記録されます。

フォールトログに記録された各問題は、以下の項目によって識別されます。

- 問題が診断された時刻
- 任意のシステム内で、問題を一意に識別するために使用できる Universal Unique Identifier（UUID）
- 指定されたウェブサイトに掲載されている、関連記事にアクセスするために使用できるメッセージ識別子（MSG-ID）

システム管理者や当社技術員による作業が必要となったり、システムの動作に影響を及ぼしたりするような問題の場合は、Fault Manager から、メッセージが出力されます。

出力されたメッセージには、問題の概要と、指定されたウェブサイト上にある関連情報への参照先が含まれています。

-v オプションおよび-V オプションを使用すると、1 行の概要ではなく、ログに記録されたイベントごとに詳細を表示できます。-M オプションを使用すると、1 画面ずつ表示できます。-c、-t、-T、および-u の各オプションは、指定した *class*、時刻の範囲、または *uuid* に一致するイベントだけを選択して、出力できます。異なるフィルターオプションを複数指定した場合は、それらのオプションの論理和で選択された

イベントだけが表示されます。同じフィルターオプションを複数指定した場合は、それらのオプションの論理積で選択されたイベントがすべて表示されます。

-m オプションを使用すると Fault Manager syslog の内容を表示できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c *class*
: 指定されたクラスに一致するイベントを出力します。*class* には一般的なワイルドカードが使用できます。これは、一般的なファイルのパターンマッチングに似ています。たとえば、xyz.* は xyz.sxc および xyz.pdf と一致します。*class* は、テレメトリーイベントのタイプを示す階層的な分類を表します。

-e
: フォールトログではなく、エラーログからイベントを表示します。

  エラーログには、XSCF の自動診断ソフトウェアで使用される Private テレメトリー情報が含まれています。この情報は、問題やイベントの再現について事後分析を容易にするために記録されます。そのため、エラーログの内容をスクリプトやその他のツールを開発する目的で、解析および使用することはできません。

-f
: コマンド実行後に、ダンプファイルに追加された行だけを表示します。Ctrl+C キーで割り込みが発生するまで出力されます。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m
: Fault Manager の syslog メッセージの内容を表示します。

-M
: テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

-t *time*
: 時刻を指定してイベントを表示する場合の、開始時刻を指定します。*time* には、この項のあとに記載されている形式で指定できます。-T オプションと一緒に使用すると、範囲を指定できます。

-T *time*
: 時刻を指定してイベントを表示する場合の、終了時刻を指定します。*time* には、-t オプションと同じ形式を使用できます。-t オプションと一緒に使用すると、範囲を指定できます。

`-u` *uuid*	故障診断イベントの内容を *uuid* によってフィルタリングします。各診断は、識別のために UUID に関連づけられています。`-u` オプションは、`-v` など、他のオプションと組み合わせることで、特定の診断に関連づけられている詳細情報をすべて表示できます。 `-e` オプションと `-u` オプションを同時に指定すると、関連するエラーイベントを表示できます。
`-v`	詳細なイベント情報を表示します。選択されたイベントに含まれる他の情報を表示するために、イベントの表示が拡大されます。
`-V`	より詳細なイベント情報を表示します。各イベントに関連づけられている値と、名前の対応一覧に含まれる情報をすべて表示するために、イベントの表示が拡大されます。さらに、フォールトログの場合は、診断に関連づけられた、対応するエラーへの相互参照の一覧がイベントの表示に追加されます。

時刻の形式は、以下のとおりです。

時刻の形式	説明
"*mm*/*dd*/*yy hh*:*mm*:*ss*"	月、日、年をスラッシュ（/）で、時（24 時間制）、分、秒をコロン（:）で区切って指定します。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
"*mm*/*dd*/*yy hh*:*mm*"	月、日、年をスラッシュ（/）で、時（24 時間制）、分をコロン（:）で区切って指定します。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
mm/*dd*/*yy*	月、日、年をスラッシュ（/）で区切って指定します。時刻は午前 12 時 00 分 00 秒とみなされます。
"*ddMonyy hh*:*mm*:*ss*"	日、月の名称、年と、時（24 時間制）、分、秒をコロン（:）で区切って指定します。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
"*Mon dd hh*:*mm*:*ss*"	月の名称、日をスペースで、時（24 時間制）、分、秒をコロン（:）で区切って指定します。年は本年とみなされます。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
"*yyyy-mm-dd* [*T hh*:*mm*[:*ss*]]"	年、月、日をハイフン（-）で、時（24 時間制）、分、秒をコロン（:）で指定します。*T* は 10 進数表記の整数値です。秒、または時、分、および秒は、オプションで省略できます。日付と時刻の間はスペースで区切ります。日付と時刻を指定した場合は、全体を引用符で囲みます。

ddMonyy	日、月の名称、年を指定します。時刻は午前 12 時 00 分 00 秒とみなされます。
hh:*mm*:*ss*	時（24 時間制）、分、秒をコロン（:）で区切って指定します。日付は本日とみなされます。
hh:*mm*	時（24 時間制）、分をコロン（:）で区切って指定します。日付は本日とみなされます。
*T*ns | *T*nsec	*T* ナノ秒前。*T* は 10 進数表記の整数値で指定します。
*T*us | *T*usec	*T* マイクロ秒前。*T* は 10 進数表記の整数値で指定します。
*T*ms | *T*msec	*T* ミリ秒前。T は 10 進数表記の整数値で指定します。
*T*s | *T*sec	*T* 秒前。*T* は 10 進数表記の整数値で指定します。
*T*m | *T*min	*T* 分前。*T* は 10 進数表記の整数値で指定します。
*T*h | *T*hour	*T* 時間前。*T* は 10 進数表記の整数値で指定します。
*T*d | *T*day	*T* 日前。*T* は 10 進数表記の整数値で指定します。

.n という形式の小数部を-t オプションの引数に付加して、指定時刻の秒以下の小数を表すことができます。

使用例

使用例 1　フォールトログを表示します。

```
XSCF> fmdump
TIME                 UUID                                 MSG-ID
Aug 12 16:12:13.2811 7868c1cc-23d4-c575-8659-85cdbe61842e FMD-8000-77
Aug 12 16:12:13.2985 7868c1cc-23d4-c575-8659-85cdbe61842e FMD-8000-77
Sep 01 16:06:57.5839 3ceca439-b0b2-4db1-9123-c8ace3f2b371 FMD-8000-77
Sep 01 16:06:57.6278 3ceca439-b0b2-4db1-9123-c8ace3f2b371 FMD-8000-77
Sep 06 09:37:05.0983 6485b42b-6638-4c5d-b652-bec485290788 LINUX-8000-1N
Sep 06 09:38:10.8584 77435994-5b99-4db8-bdcd-985c7d3ae3e4 LINUX-8000-1N
Sep 06 09:57:44.6502 0087d58c-e5b9-415d-91bc-adf7c41dd316 LINUX-8000-1N
Sep 06 12:40:59.2801 97de2cef-8ea1-407a-8a53-c7a67e61987a LINUX-8000-1N
Sep 06 12:41:10.1076 fa7304f9-c9e8-4cd1-9ca5-e35f57d53b2c LINUX-8000-1N
Sep 06 13:01:49.1462 ce550611-4308-4336-8a9a-19676f828515 LINUX-8000-1N
Sep 06 15:42:56.6132 0f4b429f-c048-47cd-9d9f-a2f7b6d4c957 LINUX-8000-1N
Sep 06 16:07:14.4652 7d5fb282-e01b-476a-b7e1-1a0f8de80758 LINUX-8000-1N
Sep 06 16:08:16.3755 41379237-9750-4fd6-bce3-b5131d864d34 LINUX-8000-1N
Sep 29 14:49:27.8452 0455ceaa-e226-424a-9b34-27603ca603f1 FMD-8000-58
Sep 29 15:02:00.3039 fb550ebc-80e9-41c8-8afc-ac680b9eb613 FMD-8000-58
Sep 29 15:09:25.4335 8cec9a83-e2a3-4dc3-a7cd-de01caef5c63 FMD-8000-4M
Sep 29 15:10:09.6151 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed FMD-8000-58
```

使用例 2　フォールトログの詳細な情報を表示します。

```
XSCF> fmdump -v
TIME                 UUID                                 MSG-ID
Nov 30 20:44:55.1283 9f773e33-e46f-466c-be86-fd3fcc449935 FMD-8000-0W
 100%  defect.sunos.fmd.nosub
:
```

使用例 3　最後の UUID に対するエラーログの、すべての情報を表示します。

```
XSCF> fmdump -e -V -u 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed
TIME                           CLASS
Sep 29 2005 15:10:09.565220864 ereport.io.iox.cp.seeprom0.nresp
nvlist version: 0
        detector = (embedded nvlist)
        nvlist version: 0
                scheme = hc
                version = 0
                hc-root = /
                hc-list_sz = 0x1
                hc-list = (array of embedded nvlists)
                (start hc-list[0])
                nvlist version: 0
                        scheme = hc
                        hc-name = iox
                        hc-id = 0
                (end hc-list[0])
        (end detector)
        IOXserial_no = 123456
        class = ereport.io.iox.cp.seeprom0.nresp
        ena = 0x921b650000000001
```

使用例 4　最後の UUID に対するフォールトログの、すべての情報を表示します。

```
XSCF> fmdump  -V -u 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed
TIME                 UUID                                   MSG-ID
Sep 29 15:10:09.6151 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed FMD-8000-58
  TIME                 CLASS                                 ENA
  Sep 29 15:10:09.5652 ereport.io.iox.cp.seeprom0.nresp
0x921b650000000001
nvlist version: 0
        version = 0x0
        class = list.suspect
        uuid = 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed
        code = FMD-8000-58
        diag-time = 1128021009 615016
        de = (embedded nvlist)
        nvlist version: 0
                version = 0x0
                scheme = fmd
                authority = (embedded nvlist)
                nvlist version: 0
                        version = 0x0
```

```
                        product-id = SUNW,SPARC-Enterprise
                        chassis-id = BF0000001V
                        server-id = localhost
                (end authority)
                mod-name = sde
                mod-version = 1.13
        (end de)
        fault-list-sz = 0x1
        fault-list = (array of embedded nvlists)
        (start fault-list[0])
        nvlist version: 0
                version = 0x0
                class = fault.io.iox.cp.seeprom
                certainty = 0x64
                fru = (embedded nvlist)
                nvlist version: 0
                        scheme = hc
                        version = 0x0
                        hc-root =
                        hc-list-sz = 0x1
                        hc-list = (array of embedded nvlists)
                        (start hc-list[0])
                        nvlist version: 0
                                hc-name = iox
                                hc-id = 0
                        (end hc-list[0])
                (end fru)
        (end fault-list[0])
```

使用例 5　Fault Manager syslog メッセージの内容を表示します。

```
XSCF> fmdump  -m -M
MSG-ID: FMD-8000-11, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor
EVENT-TIME: Tue Nov  7 07:01:44 PST 2006
PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: 7860000764, HOSTNAME: san-ff2-20-0
SOURCE: sde, REV: 1.5
EVENT-ID: 2daddee0-2f42-47ee-b5b2-57ae6a41bfc0
DESC: A Solaris Fault Manager component generated a diagnosis for which no
message summary exists. Refer to http://www.sun.com/msg/FMD-8000-11 for
more information.
AUTO-RESPONSE: The diagnosis has been saved in the fault log for
examination by Sun.
IMPACT: The fault log will need to be manually examined using fmdump(1M)
in order to determine if any human response is required.

MSG-ID: FMD-8000-11, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor
EVENT-TIME: Tue Nov  7 07:03:25 PST 2006
PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: 7860000764, HOSTNAME: san-ff2-20-0
SOURCE: sde, REV: 1.5
EVENT-ID: 2b03ab60-96db-439d-a13a-2f420a1b73c7
```

```
DESC: A Solaris Fault Manager component generated a diagnosis for which no
message summary exists. Refer to http://www.sun.com/msg/FMD-8000-11 for
more information.
AUTO-RESPONSE: The diagnosis has been saved in the fault log for
examination by Sun.
IMPACT: The fault log will need to be manually examined using fmdump(1M)
in order to determine if any human response is required.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。ログファイル内のすべてのレコードに対するが調査が正常に終了されています。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

fmadm(8), **fmstat**(8)

名前 fmstat - 故障管理モジュールの統計情報をレポートします。

形式 **fmstat** [-a] [-s] [-z] [-m *module*] [*interval*] [*count*]

fmstat -h

説明 fmstat(8) コマンドは、システム管理者や当社技術員が使用でき、Fault Manager と呼ばれるモジュールに関連づけられている統計情報とモジュールのセットをレポートします。

Fault Manager は、各システムのバックグラウンドで動作します。XSCF によって検出されたテレメトリー情報を取得し、これらの問題を診断して、予測的自己修復アクティビティ（故障のあるコンポーネントの無効化など）を開始します。

fmstat(8) コマンドを使用して、現在故障管理に関与している診断エンジンと診断エージェントに関する統計情報を表示できます。fmadm(8) コマンドおよび故障管理アクティビティを監視するツールの詳細については、fmdump(8) コマンドを参照してください。

-m オプションを指定して fmstat(8) コマンドを実行すると、指定した故障管理モジュールによって保持されている統計情報がレポートされます。モジュールの一覧は、fmadm config を使用して取得できます。

-m オプションを指定せずに fmstat(8) コマンドを実行すると、そのクライアントモジュールごとに、以下の統計情報がレポートされます。

module	fmadm config がレポートした故障管理モジュールの名前
ev_recv	モジュールが取得したテレメトリーイベント数
ev_acpt	診断関連としてモジュールが取得したイベント数
wait	モジュールによる検査を待機していたテレメトリーイベントの平均数
svc_t	モジュールが取得したテレメトリーイベントの平均サービス時間（ミリ秒）
%w	テレメトリーイベントがモジュールによる検査を待機していた時間のパーセンテージ
%b	モジュールがテレメトリーイベントを処理していた時間のパーセンテージ
open	モジュールが現在担当している問題（未解決の問題の調査）の数
solve	このモジュールがロードされたあとに解決した問題の総数
memsz	このモジュールが現在割り当てているダイナミックメモリの容量
bufsz	このモジュールが現在割り当てている固定バッファの容量

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	Fault Manager またはモジュールに関するすべての統計情報を表示します。 -m オプションを一緒に指定しない場合は Fault Manager に関するすべての統計情報が表示され、-m オプションを一緒に指定した場合は指定したモジュールに関するすべての統計情報が表示されます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m *module*	すべての統計情報のレポートではなく、指定された故障管理モジュールに関連づけられている統計情報のレポートを出力します。 モジュールは任意の統計情報を発行して、故障管理ソフトウェア自体のサービスを支援することができます。 -a オプションを一緒に指定しない場合はモジュールに保持されている統計情報だけが表示され、-a オプションを一緒に指定した場合はモジュールに保持されている統計情報とモジュールに関連づけられているすべての統計情報が表示されます。
-s	デフォルトの統計情報のレポートではなく、モジュールに関連づけられている Soft Error Rate Discrimination（SERD）エンジンのレポートを出力します。SERD エンジンは、故障管理ソフトウェアが使用して、任意の時間 *T* の *N* イベントの統計情報しきい値が超過したかどうかを判定するために設計されています。-s オプションと組み合わせて使用できるのは、-m オプションのみです。
-z	指定された故障管理モジュールに関連づけられているレポートから、値がゼロの統計情報を除外します。-z オプションと組み合わせて使用できるのは、-m オプションのみです。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

count	*count* のレポートだけを出力して終了します。
interval	*interval* 秒ごとに新しいレポートを出力します。

count も *interval* も指定しないと、1 つのレポートが出力されたあと、fmstat(8) コマンドは終了します。

interval を指定し、*count* を指定せずに fmstat(8) コマンドを実行すると、Ctrl+C キーによってこのコマンドへの割り込みが発生しない限り、*interval* 秒ごとにレポートが出力され続けます。

使用例

使用例 1　syslog モジュールに関する Fault Manager 統計情報を表示します。

```
XSCF> fmstat -a -m syslog-msgs
 NAME VALUE            DESCRIPTION
 bad_code 0            event code has no dictionary name
 bad_fmri 0            event fmri is missing or invalid
 bad_time 0            event time is not properly encoded
 bad_vers 0            event version is missing or invalid
 fmd.accepted 0        total events accepted by module
 fmd.buflimit 10M      limit on total buffer space
 fmd.buftotal 0        total buffer space used by module
 fmd.caseclosed 0      total cases closed by module
 fmd.caseopen 0        cases currently open by module
 fmd.casesolved 0      total cases solved by module
 fmd.ckptcnt 0         number of checkpoints taken
 fmd.ckptrestore true  restore checkpoints for module
 fmd.ckptsave true     save checkpoints for module
 fmd.ckpttime 0d       total checkpoint time
 fmd.ckptzero false    zeroed checkpoint at startup
 fmd.debugdrop 4       dropped debug messages
 fmd.dequeued 1        total events dequeued by module
 fmd.dispatched 1      total events dispatched to module
 fmd.dlastupdate 1144424838299131us hrtime of last event dequeue
completion
 fmd.dropped 0         total events dropped on queue overflow
 fmd.dtime 0d          total processing time after dequeue
 fmd.loadtime 1144424251692484us hrtime at which module was loaded
 fmd.memlimit 10M      limit on total memory allocated
 fmd.memtotal 97b      total memory allocated by module
 fmd.prdequeued 0      protocol events dequeued by module
 fmd.snaptime 1144424838299148us hrtime of last statistics snapshot
 fmd.thrlimit 8        limit on number of auxiliary threads
 fmd.thrtotal 0        total number of auxiliary threads
 fmd.wcnt 0            count of events waiting on queue
 fmd.wlastupdate 1144424838299131us hrtime of last wait queue update
 fmd.wlentime 30us     total wait length * time product
 fmd.wtime 30us        total wait time on queue
 fmd.xprtlimit 256     limit on number of open transports
 fmd.xprtopen 0        total number of open transports
 fmd.xprtqlimit 256    limit on transport event queue length
 log_err 0             failed to log message to log(7D)
 msg_err 0             failed to log message to sysmsg(7D)
 no_msg 0              message logging suppressed


XSCF> fmstat
module          ev_recv ev_acpt wait  svc_t  %w  %b  open solve  memsz  bufsz
case-close            0       0  0.0    0.0   0   0     0     0      0      0
```

```
fmd-self-diagnosis       1       1  0.0    0.2   0   0     1     0    27b      0
sysevent-transport       0       0  0.0  573.2   0   0     0     0      0      0
syslog-msgs              0       0  0.0    0.0   0   0     0     0    97b      0
```

使用例 2　FMD 自己診断モジュールに関する Fault Manager 統計情報を表示します。

```
XSCF> fmstat -z -m fmd-self-diagnosis
      NAME VALUE            DESCRIPTION
      module 1              error events received from fmd modules
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

fmadm(8), **fmdump**(8)

名前 getflashimage - ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。

形式 **getflashimage** [-v] [[-q] -{y|n}] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

getflashimage -l

getflashimage [[-q] -{y|n}] [-d]

getflashimage -h

説明 getflashimage(8) は flashupdate(8) コマンドで使用するファームウェアイメージファイルをダウンロードするコマンドです。

現在、XSCF ユニット上に旧バージョンのファームウェアイメージファイルがある場合は、新しいバージョンのファームウェアイメージファイルがダウンロードされる前に削除されます。ダウンロードが成功したあとは、イメージファイルが正しいかどうかがチェックされ、MD5 チェックサムが表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。.

-d	XSCF ユニット上にある、旧バージョンのファームウェアイメージファイルをすべて削除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	XSCF ユニット上にある、ファームウェアイメージファイルの一覧を表示します。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。"-t *proxy_type*" を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します（使用例 3 を参照）。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。.

url

ファームウェアイメージをダウンロードする URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

`http://`*server*[:*port*]`/`*path*`/`*file*
`https://`*server*[:*port*]`/`*path*`/`*file*
`ftp://`*server*[:*port*]`/`*path*`/`*file*
`file:///media/usb_msd/`*path*`/`*file*

file は以下のいずれかの値となります。

XCP*vvvv*.tar.gz
IKXCP*vvvv*.tar.gz
FFXCP*vvvv*.tar.gz
DCXCP*vvvv*.tar.gz

また、*vvvv* には 4 文字のバージョン番号が入ります。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

使用例

使用例 1　HTTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage http://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
        Version                 Size  Date
        FFXCP1040.tar.gz   46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
 43MB received
 44MB received
 45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a0
```

使用例 2　FTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
        Version                 Size  Date
        FFXCP1040.tar.gz   46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  43MB received
  44MB received
  45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a1
```

使用例 3　ポート番号 8080 の HTTP プロキシサーバを使用して、イメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -p webproxy.sun.com:8080 \
http://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
        Version                 Size  Date
        FFXCP1040.tar.gz   46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  43MB received
  44MB received
  45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a2
```

使用例 4　ユーザー名とパスワードを使用して、イメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -u jsmith \
http://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
        Version                 Size  Date
        FFXCP1040.tar.gz    46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
Password: [not echoed]
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  43MB received
  44MB received
  45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a3
```

使用例 5　USB メモリスティックからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage file:///media/usb_msd/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
        Version                 Size  Date
        FFXCP1040.tar.gz    46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
Mounted USB device
  0MB received
  1MB received
...
  44MB received
  45MB received
Download successful: 46827 Kbytes in 109 secs (430.094 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a4
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

flashupdate(8)

名前

ioxadm - PCI ボックス、およびエネルギーストレージモジュール（ESM）を持ちホストサーバに接続されたアドインカードを管理します。

形式

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] env [-e] [-l] [-t] [*target* [*sensor*]]

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] lifetime [*target* | -z *target*]

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] list [*target*]

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] locator [on|off] [*target*]

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] poweroff *target*

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] poweron *target*

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] reset *target*

ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] setled [on|off|slow|fast] *target led_type*

ioxadm -h

説明

ioxadm(8) は、PCI ボックス、リンクカード、およびエネルギーストレージモジュール（ESM）を持ちホストサーバに接続されたカードを管理するコマンドです。

M3000 サーバは、PCI ボックスをサポートしていません。

ioxadm(8) コマンドを使用するには、オペランド、およびそのオペランドが必要とするオプションを指定する必要があります。対象のデバイスに指定できるのは、ホストサーバ内蔵の PCI スロットに搭載されているカード、PCI ボックス、または PCI ボックス内部の Field Replaceable Unit（FRU）です。ホストサーバ内のカードは、ホストサーバからのカードまでのパスを示す文字列で識別されます。ホストサーバに搭載されたリンクカードはダウンリンクカードと呼ばれます。PCI ボックスの I/O ボートに搭載されたリンクカードはアップリンクカードと呼ばれます。

詳細な情報については、オプションの *target* の項を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

ユーザー権限	オペランド
platop	env, list
platadm	env, list, locator, poweroff, poweron
fieldeng	すべてのオペランド

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-f	警告を無視して、強制的にコマンドを実行します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

`-p` 出力のヘッダーを非表示にして、解析可能な出力のみ表示します。各フィールドはシングルタブによって区切られます。

`-v` 詳細な情報を表示します。詳細については、個々のオペランドを参照してください。

target 対象のデバイスを指定します。ホストサーバ内蔵の PCI スロットに搭載されたカード、PCI ボックス、または PCI ボックス内部の FRU のいずれかを指定できます。

ホストサーバのスロットに搭載されたカードは、カードへの *host_path* によって識別されます。

host_path はプラットフォームに依存し、カードが搭載されたホストサーバの、スロットへのパスを示します。*host_path* は以下の形式で示されます。

```
IOU#0-PCI#0  IO Board 0, PCI-E  slot0
```

PCI ボックス（*box_id*）は、シリアル番号によって識別されます。

シリアル番号で参照するには、「`iox@`*nnnn*」を使用します。「*nnnn*」は PCI ボックスのシリアル番号の下 4 桁です。

指定する内容によっては、PCI ボックスの 1 つのコンポーネントだけに影響する場合があります。たとえば、個々の I/O ボートと電源ユニットは、それぞれ独立して電源の投入と切断を行うことができます。

PCI ボックス内部の FRU（*fru*）は、以下のように識別されます。

`iox@nnnn/iob0` – 背面左のトレイにある I/O ボート

`iox@nnnn/iob1` – 背面右のトレイにある I/O ボート

`iox@nnnn/iob0/link` – ボート 0 にあるアップリンクカードト

`iox@nnnn/iob1/link` – ボート 1 にあるアップリンクカード

`iox@nnnn/ps0` – 前面左のベイにある電源ユニット

`iox@nnnn/ps1` – 前面右のベイにある電源ユニット

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

env [-e] [-l] [-t] [*target* [*sensor*]]

PCI ボックスまたはリンクカードの環境状態の要約を表示します。

-e	電気に関する状態（電流および電圧の測定値、ファンの回転速度、スイッチの設定）を表示します。
-l	LED の状態を表示します。
-t	温度センサーの測定値を表示します。
target	概要については、オプションの *target* の項を参照してください。env オペランド固有の内容については、下記を参照してください。
sensors	データを表示するセンサーを指定します。指定しない場合は、すべてのセンサーについての情報が表示されます。*target* と一緒に使用します。

PCI ボックス内の FRU またはホストサーバのスロット内のカードを *target* として指定した場合は、env はその FRU についての環境情報のみを表示します。

-e、-l、-t のいずれのオプションも指定しない場合は、すべてのセンサーの情報が表示されます。いずれのセンサーも指定しない場合は、すべてのセンサーの情報が表示されます。*target* を指定しない場合は、すべての PCI ボックスについての情報が表示されます。

target として *box_id* を指定した場合、env は指定された PCI ボックス内部のすべての FRU、および搭載されている、ダウンリンクカードに対するセンサー測定値の一覧を表示します。

env の各オプションは、どのような組み合わせでも使用できます。

以下の情報も、env およびその表示結果に適用されます。

- 結果は表形式で表示されます。各 FRU センサーは 1 列目に表示されます。2 列目はセンサー名で、周囲温度の場合は T_AMBIENT、12V レールの電圧測定値は V_12V_0V のように表示されます。3 列目、4 列目、5 列目はそれぞれセンサー測定値（Value）、センサー分解能（Res）、単位（Units）が表示されます。使用例 1 を参照してください。
- 各 FRU にはさまざまなセンサーが含まれます。*sensor* に複数の値を指定する場合は、値をスペースで区切って指定します。*sensor* に指定できる値は、使用例 1 の Sensor カラムに示されています。Units には、摂氏温度、電圧、アンペア、SWITCH、および RPM が表示されます。
- *sensor* の名前は FRU に依存しており、FRU のタイプによって異なります。場合によっては、個々の FRU 間でも異なることがあります。

（続き）

- -v オプションを指定した場合は、詳細な情報が出力されます。通常の出力に加えて、センサーでサポートされる最大値と最小値（Max, Min）が、上下の警告しきい値（Min Alarm, Max Alarm）とともに出力に含まれます。
- LED インジケータは、これらのフィールドをサポートしていません。
- 「-」を含んでいるフィールドは、サポートされない設定であることを示します。たとえば、温度の下限値に関する警告しきい値は存在しません。

led_type

XSCF で制御できる FRU LED を指定します。setled オペランドと一緒に指定します。以下の表は setled オペランドの off, on, fast, slow の値で制御できる LED の状態を示しています。Y（yes）は制御できる LED、N（no）は制御できない LED を表します。

LED	Name	off	on	fast	slow
ACTIVE	Power/OK	Y	Y	Y	Y
LOCATE	Locate	Y	N	Y	N
SERVICE	Fault/Locate	Y	Y	Y	Y
RDY2RM	Ready to remove	Y	Y	Y	Y
OVERTEMP	Overtemp	*	*	*	*
DCOK	DC Power	N	N	N	N
POWER	AC Power	N	N	N	N
DATA	Data	N	N	N	N
MGMT	Management	N	N	N	N

* OVERTEMP LED と筐体の ACTIVE LED はすべての LED 状態を設定することはできます。しかし、LED の状態はハードウェアによって頻繁に更新されるため、変更された LED 状態は表示されない場合があります。

注 – この他の LED は、ソフトウェアでは制御されません。システムが備えている LED の一覧は、"env -l" オペランドを使用することで表示できます。

`lifetime` [*target* | `-z` *target*]

エネルギーストレージモジュール（ESM）を持つカードの実行時間を消去したり、問い合わせたりします。オプションなしで使用すると、`lifetime` は、ESM を持つカードを一行に一枚ずつ一覧表示し、また、各カードの実行時間（分）と残りの寿命を表示します。実行時間は 4 時間周期で更新されます。

target を指定すると、指定された ESM カードのみを一覧表示します。

`-z` オプションを指定すると、指定された *target* の実行時間をゼロにし、そのカードの fault ステータスを消去します。`-z` オプションは *target* とともに指定する必要があります。使用例 6、使用例 7、使用例 8、および使用例 9 を参照してください。

`list` [*target*]

システムが管理する PCI ボックスを一覧表示します。

target を指定せずに `list` を実行すると、PCI ボックスの一覧が表示されます（1 行に 1 つの PCI ボックスが表示されます）。各行には、その PCI ボックス固有の識別子、およびそのダウンリンクカードのホスト固有の名前が含まれます。使用例 3 を参照してください。

PCI ボックスの引数またはダウンリンクカードのパスを指定してコマンドを実行すると、指定した FRU が含まれる単一の行が表示されます。*host path* を指定した場合は、そのダウンリンクカードの情報だけが表示されます。詳細のオプション [`-v`] を設定した場合は、出力に FRU の詳細情報が含まれます。使用例 4 および使用例 5 を参照してください。

`locator` [`on` | `off`] [*target*]

シャーシ（ロケーター）LED の状態を設定、または問い合わせます。

オプションを指定せずに `locator` を実行すると、指定した FRU に関する LED の、現在の状態が出力されます。

オプションのフィールドを使用する場合、*target* 引数は必須です。

`on`	LED を点灯します。
`off`	LED を消灯します。

シャーシロケーターは白色の LED です。FRU を指定すると、FRU の黄色のサービス LED がシャーシ（ロケーター）LED と一緒に使用されます。

PCI ボックスのシャーシで同時にロケーションインジケータを有効にできる FRU は、1 つだけです。シャーシ（ロケーター）LED をオフにすると、（サービス）FRU LED も点滅しなくなります。使用例 10、使用例 11、および使用例 12 を参照してください。

`poweroff` *target*

指定の FRU を停止し、該当の LED を点灯させて、FRU の取外しが可能になったことを示します。`-f` オプションと一緒に使用してください。`-f` を使用すると、ドメインがクラッシュする場合があることに注意してください。

同一の PCI ボックスにある 2 つの電源ユニット（PSU）を両方とも取り外さないでください。このように 2 つの電源ユニットを停止すると、コマンドラインから PCI ボックスの電源を再投入できなくなります。PCI ボックスの電源を物理的に投入する必要があります。

注 – LED とファンは、2 つの電源ユニットから電力の供給を受けているため、1 つの電源ユニットを停止しても動作する場合があります。

`poweron` *target*

I/O ボートへの全電源供給を復旧します。または、すでに取外し可能になっている電源からの供給を再び有効にします。電源ユニットを新規にインストールして電源スイッチをオンの位置にするか、または電源つきのリンクカードにボートを接続すると、それらの電源は自動的に投入されます。ただし、取外しのためにすでに電源を切断している電源ユニットまたは I/O ボートの場合は、電源スイッチがオンの位置になっている場合に限り、それらの電源を再投入するために、このコマンドを使用できます。

`reset` *target*

PCI ボックス環境を監視するために使用された FRU コンポーネントを再度初期化します。I/O ボートまたはリンクカードを指定すると、リンクカードのブリッジコントローラーはリセットされて再度初期化されます。PCI ボックスを指定すると、PCI ボックスに関連づけられているブリッジコントローラーとともに、PCI ボックスのファンコントローラーとデマルチプレクサがリセットされて再度初期化されます。

`setled` [`on`|`off`|`slow`|`fast`] *target led_type*

LED 状態を設定します。

`off`	消灯します。
`on`	点灯します。
`fast`	点滅を高速にします。
`slow`	点滅を低速にします。

LED タイプの詳細については、*led_type* を参照してください。

使用例

使用例 1　温度、電圧、電流、ファン回転速度センサーの測定値を表示します。

```
XSCF> ioxadm env -te iox@A3B5
Location            Sensor            Value      Res     Units
IOX@A3B5/PS0        T_AMBIENT         28.000      1.000  C
IOX@A3B5/PS0        T_CHIP            28.000      1.000  C
IOX@A3B5/PS0        T_HOTSPOT         31.000      1.000  C
IOX@A3B5/PS0        SWITCH                On          -  SWITCH
```

```
IOX@A3B5/PS0          V_12V_ANODE       11.703      0.059  V
IOX@A3B5/PS0          V_12V_CATHODE     11.703      0.059  V
IOX@A3B5/PS0          V_ISHARE           0.632      0.040  V
IOX@A3B5/PS0          I_DC               2.316      0.289  A
IOX@A3B5/PS0          S_FAN_ACTUAL    3708.791     40.313  RPM
IOX@A3B5/PS0          S_FAN_SET       4500.000    300.000  RPM
IOX@A3B5/PS1          T_AMBIENT         28.000      1.000  C
IOX@A3B5/PS1          T_CHIP            29.000      1.000  C
IOX@A3B5/PS1          T_HOTSPOT         31.000      1.000  C
IOX@A3B5/PS1          SWITCH               On          -   SWITCH
IOX@A3B5/PS1          V_12V_ANODE       11.762      0.059  V
IOX@A3B5/PS1          V_12V_CATHODE     11.762      0.059  V
IOX@A3B5/PS1          V_ISHARE           0.672      0.040  V
IOX@A3B5/PS1          I_DC               5.211      0.289  A
IOX@A3B5/PS1          S_FAN_ACTUAL    4115.854     49.588  RPM
IOX@A3B5/PS1          S_FAN_SET       4500.000    300.000  RPM
IOX@A3B5/IOB0         T_CHIP            32.000      1.000  C
IOX@A3B5/IOB0         T_HOTSPOT         35.000      1.000  C
IOX@A3B5/IOB1         T_CHIP            33.000      1.000  C
IOX@A3B5/IOB1         T_HOTSPOT         36.000      1.000  C
IOX@A3B5/IOB1         V_12_0V           12.052      0.005  V
IOX@A3B5/IOB1         V_12V_MAIN        12.000      0.400  V
IOX@A3B5/IOB1         V_1_0V             1.030      0.001  V
IOX@A3B5/IOB1         V_1_5V             1.496      0.001  V
IOX@A3B5/IOB1         V_3_3V             3.291      0.002  V
IOX@A3B5/IOB1         V_3_3AUX           3.308      0.002  V
IOX@A3B5/IOB1         I_DC               8.600      0.200  A
IOX@A3B5/IOB1/LINK    T_SIGCON0         45.000     40.000  C
IOX@A3B5/IOB1/LINK    T_SIGCON1         45.000     40.000  C
IOU#1-PCI#1           T_SIGCON0         45.000     40.000  C
IOU#1-PCI#1           T_SIGCON1         45.000     40.000  C
```

使用例 2　1 つのリンクに関するすべてのセンサー測定値を表示します。ヘッダーは非表示にします。

```
XSCF> ioxadm -p env iou#1-pci#1
IOU#1-PCI#1  T_SIGCON0 45.000  40.000 C
IOU#1-PCI#1  T_SIGCON1 45.000  40.000 C
IOU#1-PCI#1  DATA      On      -      LED
IOU#1-PCI#1  MGMT      Flash   -      LED
```

使用例 3　すべての PCI ボックスまたはダウンリンクカードのパスを表示します。

```
XSCF> ioxadm list
IOX           Link 0              Link 1
IOX@0033      IOU#1-PCI#4        IOU#1-PCI#1
IOX@12B4      -                   IOU#1-PCI#2
-             IOU#2-PCI#1
```

使用例 3 では、PCI ボックスとホストサーバ内部のダウンリンクカード間の接続を、list コマンドで表示しています。(I/O ボート、アップリンクカード、および電源を備えている) IOX@0033 は、2 枚のダウンリンクカードを介してホストサーバに接続されています。Link 0 は、I/O ボート 0 に接続されているダウンリンクカードを表します。Link 1 は、I/O ボート 1 に接続されているダウンリンクカードを表します。IOX@12B4 は、1 枚のダウンリンクカードを介してホストに接続されています。このカードは、I/O ボート 1 に接続されています。「-」は、PCI ボックスへのホストリンク接続がないことを示します。ベイに I/O ボートとアップリンクカードが搭載されているか、ベイが空き状態になっている可能性があります。I/O ボートが搭載されている場合は、I/O ボートがホストに接続されていないか、ホストダウンリンクカードスロットの電源が投入されていません。

使用例 4 単一の PCI ボックスを表示します。

```
XSCF> ioxadm list iox@12B4
IOX               Link 0           Link 1
IOX@12B4          -                IOU#1-PCI#2
```

使用例 5 ホストパスを使用し、詳細出力モード、ヘッダー非表示で、カードを表示します。

```
XSCF> ioxadm -p -v list IOU#0-PCI#1
IOU#0-PCI#1     F20   -        000004      5111500-01     On
```

使用例 6 ESM を持つカードの実行時間を表示します。

```
XSCF> ioxadm lifetime
NAC                 Total Time On  (% of life)
IOU#0-PCI#1       : 183520          17
IOU#0-PCI#3       : 36660           -
```

使用例 7 ESM を持つカードの実行時間を、詳細出力を使用して表示します。

```
XSCF> ioxadm -v lifetime
NAC            Total Time On   (% of life)   Warning Time   Fault Time
IOU#0-PCI#1    183520           17            1008000       1051200
IOU#0-PCI#3    36660            -             -             -
```

使用例 8 ESM を持つカードの実行時間を消去し、実行時間が消去されたことを表示します。

```
XSCF> ioxadm lifetime -z IOU#0-PCI#1
XSCF> ioxadm lifetime IOU#0-PCI#1
NAC           Total Time On   (% of life)
IOU#0-PCI#1   0                0
```

使用例 9 ESM を持つカードを、実行時間の消去後に、詳細出力を使用して表示しま

す。

```
XSCF> ioxadm -v lifetime IOU#0-PCI#1
NAC           Total Time On    (% of life)  Warning Time  Fault Time
IOU#0-PCI#1   0                 0           1041120       1051200
```

使用例 10 PCI ボックスのロケーター LED のステータスを表示します。

```
XSCF> ioxadm locator iox@12B4
Location            Sensor              Value     Resolution  Units
IOX@12B4            LOCATE               Fast     -           LED
IOX@12B4/PS0        SERVICE              Fast     -           LED
```

故障の検出により FRU サービスインジケータがすでに点灯されている場合は、PCI ボックスのロケーター LED だけが高速に設定されます。

使用例 11 PCI ボックス 12B4 にある電源ユニット 0 の、ロケーター LED の電源を投入します。

```
XSCF> ioxadm locator on iox@12B4/ps0
```

使用例 12 電源ユニット 1 のインジケータを有効にします（電源ユニット 1 は故障を示している）。

```
XSCF> ioxadm locator on iox@x031/ps1
XSCF> ioxadm locator
Location      Sensor     Value Resolution Units
IOX@X031      LOCATE      Fast          - LED
XSCF> ioxadm env -1 iox@x031/ps1 SERVICE
Location      Sensor     Value Resolution Units
IOX@X031/PS1  SERVICE       On          - LED
```

PCI ボックスのシャーシの白色 LED には、電源ボタンがついています。このボタンは、シャーシの白色ロケーター LED の状態を「消灯」または「高速」に切り替えるために使用できます。このボタンを使用してロケーター LED をオフにすると、高速点滅の FRU サービス LED がクリアされます。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 moveboard - 現在組み込まれているドメインから別のドメインへ、システムボード（XSB）を移動します。

形式

moveboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] [-c configure] -d *domain_id xsb* [*xsb...*]

moveboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c assign -d *domain_id xsb* [*xsb...*]

moveboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c reserve -d *domain_id xsb* [*xsb...*]

moveboard -h

説明

moveboard(8) は、現在組み込まれているドメインから XSB を切り離し、ドメイン構成情報（DCL）に基づいて、指定したドメインに割り当てる、または組み込むコマンドです

moveboard(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

以下のいずれかの移動手段が指定できます。

configure	現在組み込まれているドメイン構成から XSB を切り離し、移動先のドメイン構成に XSB を組み込みます。組み込まれた XSB は、Oracle Solaris OS からアクセスできるようになります。
assign	現在組み込まれているドメイン構成から XSB を切り離し、移動先ドメイン構成に XSB を割り当てます。割り当てられた XSB は、指定したドメインに予約され、他のドメインからは組込み、割当てができなくなります。割り当てられたあとは、ドメインを再起動するか、addboard(8) コマンドを-c configure で実行した場合に、ドメイン構成に組み込まれます。
reserve	指定した XSB に対して、移動元のドメイン構成からの切離しと移動先のドメイン構成へ割当てを予約します。移動元ドメインの電源が切断されるか再起動された場合に、XSB が移動先のドメイン構成に割り当てられます。その後、移動先ドメインの電源が投入されるか再起動された場合に、XSB が組み込まれます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

注 – moveboard(8) コマンドを実行する場合は、移動元と移動先のドメインに対する domainadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-c assign`	XSB を現在組み込まれているドメイン構成から切り離し、移動先のドメイン構成に割り当てます。`-c` オプションを省略した場合は、"`-c configure`" が指定されたとみなされます。
`-c configure`	XSB を現在組み込まれているドメイン構成から切り離し、移動先のドメイン構成に組み込みます。`-c` オプションを省略した場合は、"`-c configure`" が指定されたとみなされます。
`-c reserve`	XSB に対して、現在のドメイン構成からの切離しと移動先のドメイン構成へ割当てを予約します。`-c` オプションを省略した場合は、"`-c configure`" が指定されたとみなされます。
`-d` *domain_id*	XSB の移動先となるドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、`0` から `23` までの整数で指定できます。
`-f`	指定した XSB を、強制的に、ドメインから切り離します。

注意 – `-f` オプションにより強制的に移動元ドメインから XSB を削除する場合、CPU バインドしているプロセスや、デバイスをアクセスしているプロセスに対し、重要な問題が発生する可能性があります。そのため、`-f` オプションは通常の 運用では使用しないことを推奨します。`-f` オプションを指定した場合は、必ず移動元ドメインの状態や業務プロセスの状態を確認してください。

注 – 故障している、または故障が検出された XSB は、強制的にドメイン構成に組み込まれることはありません。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-n`	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-v`	詳細なメッセージを表示します。`-q` オプションと一緒に指定した場合は `-v` は無効となります。
`-y`	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb	移動する XSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

x-y

x	`00` から `15` までの整数で指定します。
y	`0` から `3` までの整数で指定します。

詳細説明

- 移動元または移動先ドメインが稼働していない場合でも、moveboard(8) コマンドは実行できます。しかし、移動元ドメインの稼働中に "-c configure" または "-c assign" を指定して moveboard(8) コマンドを実行する場合は、Oracle Solaris サービス管理機能（SMF）の、以下のサービスが動作している必要があります。
  - ドメイン -SP 通信プロトコル（dscp）
  - ドメイン構成サーバ（dcs）
  - キー管理デーモン（sckmd）
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- "-c configure" を指定した場合は、ドメインが以下のどちらかのときだけ処理が行われます。
  - 移動元ドメインと移動先ドメインの Oracle Solaris OS が、共に稼働しているとき
  - 移動元ドメインの電源が切断されているが、移動先ドメインの Oracle Solaris OS が稼働しているとき
- "-c assign" を指定した場合は、ドメインが以下のどちらかの場合にだけ処理が行われます。
  - 移動元ドメインの Oracle Solaris OS が稼働しているとき
  - 移動元ドメインの電源が切断されているとき
- "-c reserve" を指定した場合に、移動元ドメインの電源が切断されている、または Oracle Solaris OS が稼働していないときは、ただちに、XSB が移動元のドメイン構成から切り離され、移動先のドメイン構成に割り当てられます。
- XSB を移動する場合は、内部的に以下の作業が行われるため、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
  - XSB のハードウェアリソースが Oracle Solaris OS から切り離される作業
  - 組込み時に、XSB に対して行われるハードウェア診断作業
- DCL については setdcl(8) 、showdcl(8) コマンドを参照してください。

使用例

使用例 1　XSB#00-0 をドメインから切り離し、ドメイン ID 1 に組み込みます。

```
XSCF> moveboard -d 1 00-0
```

使用例 2　XSB#00-0 を、ドメイン ID 1 へ組込みを予約します。

```
XSCF> moveboard -d 1 -c reserve 00-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 | **addboard**(8), **deleteboard**(8), **setdcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8), **showdomainstatus**(8), **showfru**(8)

名前 nslookup - ホスト名を Domain Name System（DNS）サーバに照会します。

形式

nslookup *hostname*

nslookup -h

説明 nslookup(8) は、指定したホスト名を、DNS サーバに照会するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

Server	DNS サーバ名
Address	DNS サーバの IP アドレス
Name	ホスト名
Address	ホストの IP アドレス

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

hostname	照会するホスト名を指定します。Fully Qualified Domain Name（FQDN）または省略形で指定できます。

使用例

使用例 1 scf0-hostname0 というホスト名の情報を表示します。

```
XSCF> nslookup scf0-hostname0
Server:  server.example.com
Address: xx.xx.xx.xx

Name:    scf0-hostname0.example.com
Address: xx.xx.xx.xx
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 password - XSCF ユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定します。

形式 **password**

password [-e *days* | *date* | NEVER] [-i *inactive*] [-M *maxdays*] [-n *mindays*] [-w *mindays*] [*user*]

password -h

説明 password(8) は、XSCF ユーザーアカウントのパスワードとパスワードの有効期限を設定するコマンドです。

パスワードは 32 文字以内で指定します。以下の文字が使用できます。

- abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
- ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
- 0123456789
- !@#$%^&*[]{}()_-+='~,><'"?;:[SPACE]

1 つ以上のオプションを指定して password(8) コマンドを実行すると、アカウントの有効期限が変更されます。デフォルトの値については、setpasswordpolicy(8) コマンドを参照してください。

オプションを省略して password(8) コマンドを実行すると、パスワードを変更するためのプロンプトが表示されます。

user オペランドを省略して password(8) コマンドを実行すると、現在のユーザーアカウントが対象となります。

注意 – *user* オペランドに他ユーザーを指定してパスワードを変更するときは、システムのパスワードポリシーは自動では反映されません。*user* オペランドは新ユーザーの初期パスワードを作成するときやユーザーアカウントが失効されたり、パスワードを忘れたりした場合に使用してください。他ユーザーのパスワードを変更するときは、必ず、システムのパスワードポリシーに従ったパスワードを指定してください。showpasswordpolicy(8) コマンドを実行すると現在のパスワードポリシーを参照することができます。

ユーザー名が指定されるかどうかにかかわらず、ユーザーアカウントは、ローカルなものでなくてはなりません。もしユーザーアカウントがローカルでなければ、password(8) コマンドはエラーになります。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm　オプションあるいはオペランドがあるなしにかかわらず、このコマンドを実行できます。また、すべてのアカウントのパスワードを変更できます。

以下の場合においてユーザー権限は必要ありません。

- 現在のユーザーアカウントパスワードを変更する場合
- -h オプションを使用する場合

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-e *days*|*date*|Never

days には本日を起点とする XSCF ユーザーアカウントの有効期間の日数を設定します。0 から 10730 までの数値で指定できます。現在の日付に *days* で指定した数値を加えた結果が 2038 年 1 月を超えた場合は、指定した数値は無効となりコマンドは実行されません。

date にはアカウントの有効期限が切れる日付を設定します。2038 年 1 月を超えない日付で指定します。以下のいずれかの形式で指定できます。

mm/dd/yy （10/30/08）
yyyy-mm-dd （2008-10-30）
yy-mm-dd （08-10-30）
dd-Mmm-yy （30-Oct-08）
dd-Mmm-yyyy （30-Oct-2008）
dd Mmm yy （"30 Oct 08"）
dd Mmm yyyy （"30 Oct 2008"）
Mmm dd, yy （"Oct 30, 08"）
Mmm dd, yyyy （"Oct 30, 2008"）

スペースを含む形式を使用する場合は、二重引用符で囲みます。大文字と小文字は区別しません。

Never は、アカウントの有効期限がないことを表します。大文字と小文字は区別されません。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-i *inactive*

パスワードの有効期限が切れてからアカウントがロックされるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは -1 です。値が -1 の場合は、パスワードの有効期限が切れたあともアカウントがロックされないことを表します。-1 から 999999999 までの整数で指定します。

-M *maxdays*	パスワードが有効である最大日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 999999 です。0 から 999999999 までの整数で指定します。
-n *mindays*	パスワードを変更してから、次に変更するまでの間の最小日数を設定します。デフォルトは 0 です。いつでもパスワードを変更できることを表します。0 から 999999999 までの整数で指定します。 この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。
-w *warn*	ユーザーにパスワードの有効期限の警告を発してから実際に有効期限が切れるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 7 です。0 から 999999999 までの整数で指定します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	XSCF ユーザーアカウント名を指定します。

使用例

使用例 1 パスワードの有効期限を 2008 年 2 月 2 日に設定します。

```
XSCF> password -e 2008-02-02
```

使用例 2 パスワードの有効期限が切れてから 10 日後にロックします。

```
XSCF> password -i 10
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpasswordpolicy(8), **showpasswordpolicy**(8)

名前

ping - ICMP の ECHO_REQUEST パケットをネットワーク上のホストまたはネットワーク装置へ送信します。

形式

ping [-c *count*] [-q] *host*

ping -h

説明

ping(8) は、ICMP の ECHO_REQUEST データグラムを用いて、指定したホストまたはネットワーク装置からの ECHO_RESPONSE を引き出すコマンドです。

ping(8) コマンドが正常に実行できれば、XSCF と、指定したホストまたはネットワーク装置間のネットワークは正常であると判断できます。また、結果からネットワーク性能を計測することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- DSCP アドレスに対して実行する場合

  platadm または fieldeng
- "localhost" またはループバックアドレス（127.0.0.0/8）に対して実行する場合

  fieldeng
- インター SCF ネットワーク（ISN）に対して実行する場合

  fieldeng
- 上記以外の場合

  必要な権限はありません

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c *count*	パケットを送信する回数を指定します。指定した回数分パケットを送信し、その応答を受信すると、ping(8) コマンドは終了します。省略した場合は、割り込みが発生するまでパケットを送信し続けます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-q	出力を抑制します。開始時と終了時だけ出力します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

host	パケットを送信するホストまたはネットワーク装置を指定します。ホスト名または IP アドレスで指定できます。

使用例

使用例 1　scf0-hostname0 というホストに、パケットを 3 回送信します。

```
XSCF> ping -c 3 scf0-hostname0
PING scf0-hostname0 (XX.XX.XX.XX): 56 data bytes
64 bytes from XX.XX.XX.XX: icmp_seq=0 ttl=64 time=0.1 ms
64 bytes from XX.XX.XX.XX: icmp_seq=1 ttl=64 time=0.1 ms
64 bytes from XX.XX.XX.XX: icmp_seq=2 ttl=64 time=0.1 ms

--- scf0-hostname0 ping statistics ---
3 packets transmitted, 3 packets received, 0% packet loss
round-trip min/avg/max = 0.1/0.1/0.1 ms
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 poweroff - ドメインの電源を切断します。

形式

poweroff [[-q] -{y|n}] [-f] [-M] -d *domain_id*

poweroff [[-q] -{y|n}] -a [-M]

poweroff -h

説明

poweroff(8) は、ドメインの電源を切断するコマンドです。

指定したドメイン、またはすべてのドメインに対して電源を切断できます。Oracle Solaris OS に対して通常のシャットダウン処理が行われてから、電源が切断されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	電源が投入されている、すべてのドメインの電源を切断します。platadm, fieldeng 権限を持つユーザーだけが指定できます。暖機運転待ち、空調待ち、またはドメインの電源投入中の場合でも、電源を切断します。
-d *domain_id*	電源を切断するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。暖機運転待ち、空調待ち、またはドメインの電源投入中の場合は、電源を切断しません。
-f	指定したドメインに対して、XSCF によって強制的に電源を切断します。-d オプションと一緒に使用します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ドメインの Oracle Solaris OS が動作中の場合、poweroff(8) コマンドでは、Oracle Solaris OS に用意されている shutdown(1M) コマンドの "-i 5" オプションに相当する処理が行われます。
- ドメインの Oracle Solaris OS がブート中の場合は電源を切断できません。ブート完了後に、再度 poweroff(8) コマンドを実行してください。
- ドメインの Oracle Solaris OS がシングルユーザーモードで動作中の場合は、poweroff(8) コマンドを使用して電源を切断できません。ドメイン上で shutdown(1M) コマンドを実行してください。
- poweroff(8) コマンドを実行すると、指定されたドメインごとに、以下の形式で、電源の切断結果が表示されます。

Powering off	電源が正常に切断されたことを表します。
Not powering off	エラーが発生し、電源が切断できなかったことを表します。結果とともに、エラーメッセージが表示されます。

- showdomainstatus(8) コマンドを使用すると、システム上の各ドメインの電源が切断されているかどうかを確認できます。

使用例

使用例 1　すべてのドメインの電源を切断します。

```
XSCF> poweroff -a
DomainIDs to power off:00,01,02,03
Continue? [y|n]:y
00:Powering off
01:Powering off
02:Powering off
03:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 2　ドメイン ID 0 の電源を切断します。

```
XSCF> poweroff -d 0
DomainIDs to power off:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 3 ドメイン ID 0 の電源を強制的に切断します。

```
XSCF> poweroff -f -d 0
DomainIDs to power off:00
The -f option will cause domains to be immediately resets.
Continue? [y|n]:y
00:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 4 ドメイン ID 2 の電源を切断します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweroff -y -d 2
DomainIDs to power off:02
Continue? [y|n]:y
02:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 5 ドメイン ID 2 の電源を切断します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweroff -q -y -d 2
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **poweron**(8), **reset**(8), **showdomainstatus**(8)

名前 poweron - ドメインの電源を投入します。

形式 **poweron** [[-q] -{y|n}] [-M] -d *domain_id*

poweron [[-q] -{y|n}] [-M] -a

poweron -h

説明 poweron(8) は、ドメインの電源を投入するコマンドです。

指定したドメイン、またはすべてのドメインに対して電源を投入できます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。.

-a	セットアップが完了している、すべてのドメインの電源を投入します。platadm または fieldeng 権限を持つユーザーだけが指定できます。「セットアップが完了しているドメイン」とは、setupplatform(8) と setupfru(8) コマンドによって設定が完了しているドメインのことです。
-d *domain_id*	電源を投入するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

- poweron(8) コマンドを実行すると、指定されたドメインごとに、以下の形式で、電源の投入結果が表示されます。

Powering on	電源が正常に投入されたことを表します。
Not Powering on	エラーが発生し、電源が投入できなかったことを表します。結果とともに、エラーメッセージが表示されます。

- showdomainstatus(8) コマンドを使用すると、システム上の各ドメインの電源が投入されているかどうかを確認できます。

使用例

使用例 1 すべてのドメインの電源を投入します。

```
XSCF> poweron -a
DomainIDs to power on:00,01,02,03
Continue? [y|n]:y
00:Powering on
01:Powering on
02:Powering on
03:Powering on

*Note*
 This command only issues the instruction to power-on.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 2 ドメイン ID 0 の電源を投入します。

```
XSCF> poweron -d 0
DomainIDs to power on:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering on

*Note*
 This command only issues the instruction to power-on.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 3 ドメイン ID 0 の電源を投入します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweron -y -d 0
DomainIDs to power on:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering on

*Note*
 This command only issues the instruction to power-on.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
XSCF>
```

使用例 4 ドメイン ID 1 の電源を投入します。メッセージは非表示にして、プロンプト

には自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweron -q -y -d 1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **reset**(8), **showdomainstatus**(8)

名前 prtfru - システムおよび PCI ボックスの FRUID データを表示します。

形式 **prtfru** [-c] [-l] [-M] [-x] [*container*]

prtfru -h

説明 prtfru(8) は、システムおよび PCI ボックスから Field Replaceable Unit Identifier（FRUID）を取得するコマンドです。

出力形式はツリー構造で、FRU のパスが各コンテナにエコーされます。コンテナが見つかると、コンテナのデータも同様にツリー構造で出力されます。

引数を指定しないで prtfru(8) コマンドを実行すると、FRU の階層とすべての FRUID コンテナデータが出力されます。prtfru(8) コマンドを実行すると、画面に出力されます。

注 – ドメインからの FRU 情報は、このコマンドを使用しても取得できません。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-c	コンテナとコンテナデータだけを出力します。このオプションは FRU ツリー階層を出力しません。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	FRU ツリー階層だけを出力します。このオプションはコンテナデータを出力しません。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-x	prtfrureg.dtd のシステム識別子（SYSTEM）をつけて XML 形式で出力します。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

container	データを格納する特定のハードウェアのパス名を指定します。

使用例 **使用例 1** FRU ツリー階層を表示します。

```
XSCF> prtfru -l
/frutree
/frutree/chassis (fru)
/frutree/chassis/iou0
/frutree/chassis/iou0/IOU (fru)
/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3
```

```
/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3/LINK (container)
/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3/LINK/iox983392.IOX.iob1.PCIX.LINK (fru)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps0
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps0/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps1
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps1/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX/LINK
(container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX/LINK/
iou0.IOU.slot3.LINK (fru)
/frutree/chassis/MBU_B (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#0/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#1/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0 (fru)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#1/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0 (fru)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#0/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#1/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#2/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#3/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#4/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#5/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#6/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#7/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1 (fru)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#8/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#9/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#10/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#11/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#12/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#13/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#14/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#15/MEM (container)
/frutree/chassis/XSCFU (container)
/frutree/chassis/OPNL (container)
/frutree/chassis/PSU#0 (fru)
/frutree/chassis/PSU#0/PSU (container)
/frutree/chassis/PSU#2 (fru)
/frutree/chassis/PSU#2/PSU (container)
/frutree/chassis/IOU#0 (fru)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU (container)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU/DDCR#0/DDCR (container)
/frutree/chassis/FANBP_C#0 (fru)
/frutree/chassis/FANBP_C#0/FANBP_C (container)
```

使用例 2　　コンテナの一覧を表示します。

```
XSCF> prtfru -lc
/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3/LINK (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps0/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps1/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX/LINK
(container)
/frutree/chassis/MBU_B (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#0/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#1/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#0/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#1/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#2/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#3/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#4/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#5/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#6/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#7/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#8/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#9/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#10/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#11/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#12/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#13/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#14/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#15/MEM (container)
/frutree/chassis/XSCFU (container)
/frutree/chassis/OPNL (container)
/frutree/chassis/PSU#0/PSU (container)
/frutree/chassis/PSU#2/PSU (container)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU (container)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU/DDCR#0/DDCR (container)
/frutree/chassis/FANBP_C#0/FANBP_C (container)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

ioxadm(8)

名前

rebootxscf - XSCF をリセットします。

形式

rebootxscf [[-q] -{y|n}]

rebootxscf -h

説明

rebootxscf(8) は、XSCF をリセットするためのコマンドです。

以下のコマンドで設定した内容は、rebootxscf(8) コマンドで XSCF をリセットしたあと、XSCF に反映されます。

- applynetwork(8)
- setaltitude(8)
- setdualpowerfeed(8)
- sethttps(8)
- setntp(8)
- setssh(8)
- settelnet(8)

M8000/M9000 サーバの場合は、アクティブとスタンバイ両方の XSCF がリセットされます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- コマンドを実行すると、telnet や ssh 等の XSCF への接続が切断されます。
- 自動的に XSCF をリセットする setdate(8) コマンドの、リセットをキャンセルした場合、rebootxscf(8) コマンドで XSCF をリセットしなおしても、設定した内容は XSCF に反映されません。

- ドメインが稼働中でも rebootxscf(8) コマンドを使用して、XSCF をリセットすることはできます。しかし、XSCF をドメインの上位 NTP サーバに設定している場合は、XSCF とドメイン間で、時刻のズレが生じることがあります。この場合は、XSCF とドメインの時刻が同期されるように、ドメインの時刻を調整してください。

使用例

使用例 1 XSCF をリセットします。

```
XSCF> rebootxscf
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:y
```

使用例 2 XSCF をリセットします。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> rebootxscf -y
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:y
```

使用例 3 XSCF をリセットします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> rebootxscf -q -y
```

使用例 4 XSCF のリセットを途中で中止します。

```
XSCF> rebootxscf
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:n
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **setaltitude**(8), **setdualpowerfeed**(8), **sethttps**(8), **setntp**(8), **setssh**(8), **settelnet**(8)

名前 replacefru - Field Replaceable Unit（FRU）を交換します。

形式 **replacefru**

replacefru `-h`

説明 `replacefru`(8) は、FRU を交換するコマンドです。

FRU の交換に必要な FRU の選択、確認、交換などを、メニュー形式によって、対話的に行うことができます。

`replacefru`(8) コマンドによって、以下の FRU を交換できます。

- CPU／メモリボードユニット（CMU）
- I/O ユニット（IOU）
- ファンユニット（FAN）
- 電源ユニット（PSU）
- XSCF ユニット（XSCFU）
- DC-DC コンバーター（DDC_A）

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

`0` 正常に終了したことを表します。

`>0` エラーが発生したことを表します。

関連項目 **addboard**(8), **addfru**(8), **deleteboard**(8), **deletefru**(8), **setupfru**(8), **showdcl**(8), **showdomainstatus**(8), **showfru**(8), **showhardconf**(8), **testsb**(8), **unlockmaintenance**(8)

名前 reset - 指定したドメインをリセットします。

形式 **reset** [[-q] -{y|n}] -d *domain_id level*

reset -h

説明 **注 –** reset(8) コマンドはシステムを強制的にリセットするため、ディスクなどの故障を引き起こす可能性があります。Oracle Solaris OS がハングアップした場合のリカバリーなどに限定して使用してください。

reset(8) は、指定したドメインをリセットするコマンドです。

リセット方法として、以下の 3 種類が指定できます。

por	ドメインのシステムをリセットします。
panic	ドメインの Oracle Solaris OS にパニックを指示します。電源の切断中やシャットダウン中は無視されます。
xir	ドメインの CPU をリセットします。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	リセットするドメイン ID を 1 つだけ指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

level　リセット方法を指定します。以下のいずれかを指定できます。省略できません。

por	ドメインのシステムをリセットします。
panic	ドメインの Oracle Solaris OS にパニックを指示します。
xir	ドメインの CPU をリセットします。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- showdomainstatus(8) コマンドを使用すると、リセット指示後の、現在のドメインの状態を確認できます。
- 以下の状態で reset(8) コマンドを実行すると、Oracle Solaris OS が起動される前に処理が停止します。
  - オペレーターパネルのモードスイッチが Service モードの場合
  - setdomainmode(8) コマンドで auto boot 機能が無効となっている場合

使用例

使用例 1　ドメイン ID 0 にパニックを発生させます。

```
XSCF> reset -d 0 panic
DomainID to panic:00
Continue? [y|n]:y
00:Panicked

*Note*
 This command only issues the instruction to reset.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 2　ドメイン ID 0 の CPU をリセットします。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> reset -y -d 0 xir
DomainID to reset:00
Continue? [y|n]:y
00:Reset

*Note*
 This command only issues the instruction to reset.
 The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 3　ただちに、ドメイン ID 0 をリセットします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> reset -q -y -d 0 por
```

使用例 4　実行した reset(8) コマンドを途中で中止します。

```
XSCF> reset -d 0 panic
DomainID to panic:00
Continue? [y|n]:n
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **poweron**(8), **setdomainmode**(8), **showdomainstatus**(8)

名前 resetdateoffset - システム時刻とドメイン時刻との差分をリセットします。

形式 **resetdateoffset**

resetdateoffset -h

説明 resetdateoffset(8) は、XSCF の時計で管理されるシステム時刻と、各ドメインの時計で管理されるドメイン時刻との差分をリセットするコマンドです。

XSCF ではシステム時刻とドメイン時刻との差分が保存されています。ドメインに用意されている date(1M) コマンドなどでドメインの時刻を変更すると、システム時刻と変更されたドメイン時刻との差分が XSCF に保存されます。保存された時刻の差分はドメインを再起動したり、XSCF をリセットしたりした場合でも保持されています。

resetdateoffset(8) コマンドは、システム時刻と、すべてのドメイン時刻との差分をリセットします。これにより、再起動後のドメイン時刻は、システム時刻と同じ時刻に設定されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

詳細説明 resetdateoffset(8) コマンドはすべてのドメインの電源が切断された状態で実行してください。すべてのドメインの電源が切断されているかを確認する場合は showlogs power コマンドを実行して、System Power Off という値のあることを確認してください。

使用例 **使用例 1**　XSCF とドメイン間の時刻の差分をリセットします。

```
XSCF> resetdateoffset
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目 **showdateoffset**(8)

名前 | restoreconfig - dumpconfig(8) コマンドで保存したシステム構成情報を復元します。

形式 | **restoreconfig** [-v] [-V] [[-q] -{y|n}] [-P *password*] [-s network={yes|no}] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

restoreconfig -h

説明 | restoreconfig(8) は、dumpconfig(8) コマンドで保存したシステム構成情報を XSCF へ復元するコマンドです。

このコマンドでは、システム構成情報の整合性を確認し、ネットワーク情報を探しだし、システム構成情報ファイルのバージョンおよびシステムクラスが一致しているかどうかを検証します。

ユーザー権限 | このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。システムにあらかじめ用意されている default と admin アカウントでも実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション | 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-P *password*	暗号化されたファイルを復号するためのパスワードを指定します。-P オプションを省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。"-t *proxy_type*" を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。使用例 3 を参照してください。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s network={yes|no}	ネットワーク構成の復元について設定します。 network=yes とした場合は、ネットワーク構成データは復元されます。 network=no とした場合は、ネットワーク構成データは復元されません。 -s オプションを省略した場合は、対象システムのシリアル番号と構成情報のシリアル番号が比較され、番号が一致した場合にネットワーク構成が復元されます。

-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。.

url

システム構成情報が保存されている URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

```
http://server[:port]/path/file
https://server[:port]/path/file
ftp://server[:port]/path/file
file:///media/usb_msd/path/file
```

詳細説明

システム構成情報の先頭に、テキスト形式で、基本的な識別情報が含まれています。テキストビューワーを使用して、以下のような情報を確認できます。

- システム構成情報が保存されたときのシステム
- 保存された日付
- 暗号化されているかどうか

restoreconfig(8) コマンドを実行する前には、すべてのドメインの電源を切断する必要があります。

restoreconfig(8) コマンドでは、システム構成情報がダウンロードされ、情報が正しいかどうか認証されます。認証が終わると、XSCF がリセットされ、データが復元されます。その後、システムによって XSCP ユニットが停止されます。M8000/M9000 サーバでは、アクティブおよびスタンバイの、両方の XSCF ユニットが停止されます。この時点で、XSCF ユニットが停止されたかどうかを確認してください。その後、入力電源を切断して、少なくとも 30 秒経過してから、入力電源を投入します。

システム構成情報は、同じサーバモデルに対してのみ、復元させることができます。M5000 サーバ上で dumpconfig(8) コマンドによって作成されたシステム構成情報は、他の M5000 サーバ上に復元させることはできます。しかし、M3000 サーバや M8000 サーバには復元させることはできません。

使用例

使用例 1　FTP を使用して、システム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -V -u manilla 129.145.155.156:8080 ftp:/
10.7.79.18/sollgell/proxytest-ftp.cfg
transfer from '/tmp/dumpconfig.EvY1Yf' to 'ftp://10.7.79.18/sollgell/
proxytest-ftp.cfg'
Password:
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
*   Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
* Proxy auth using (nil) with user ''
* Server auth using Basic with user 'minilla'
> GET ftp://10.7.79.18/sollgell/proxytest-ftp.cfg HTTP/1.1
Authorization: Basic bHdhbmc6bHdhbmc=
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18:21
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Server: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Date: Thu, 07 Aug 2008 18:01:00 GMT
< Proxy-agent: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Via: 1.1 proxy-proxy
< Transfer-encoding: chunked
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
Configuration backup created on Mon Aug  4 12:58:19 2008
 from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version '19830000'
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

使用例 2　http を使用して、システム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -V -p 129.145.155.166:8080 http://10.7.79.18/
sollgell/proxytest.cfg
transfer from '/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin' to
'http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg'
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
*   Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
GET http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg HTTP/1.1
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Content-length: 24603
< Content-type: text/plain
< Date: Thu, 07 Aug 2008 17:07:43 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27 OpenSSL/0.9.7d
```

```
< Last-modified: Mon, 04 Aug 2008 20:01:51 GMT
< Etag: "4fa2a-601b-4897602f"
< Accept-ranges: bytes
< Via: 1.1 proxy-proxy
< Proxy-agent: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
Configuration backup created on Mon Aug  4 12:58:19 2008
 from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version '19830000'
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

使用例 3　https を使用して、システム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -v -V https://10.7.79.18/sollgell/
proxytest.cfg
obtaining lock ... done
initiating file transfer from 'https://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg'
... transfer from
'/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin' to 'https://10.7.79.18/
sollgell/proxytest.cfg'
* About to connect() to 10.7.79.18 port 443
*   Trying 10.7.79.18... * connected
* Connected to 10.7.79.18 (10.7.79.18) port 443
* error setting certificate verify locations, continuing anyway:
*   CAfile: /home/ares/cross/fje/pwrqcc3/target_root/usr/share/ssl/certs/
ca-bundle.crt
 CApath: none
* SSL connection using EDH-RSA-DES-CBC3-SHA
* Server certificate:
*        subject:
/C=US/ST=California/L=SanDiego/O=toho/OU=QT/CN=10.7.79.18/
emailAddress=minilla.zilla@toho.com
*        start date: 2008-07-22 18:32:49 GMT
*        expire date: 2009-07-22 18:32:49 GMT
*        common name: 10.7.79.18 (matched)
*        issuer:
/C=US/ST=California/L=SanDiego/O=toho/OU=QT/CN=Lwang/
emailAddress=minilla.zilla@toho.com
* SSL certificate verify result: error number 1 (20), continuing anyway.
> GET /sollgell/proxytest.cfg HTTP/1.1
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Date: Tue, 12 Aug 2008 22:02:12 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27 OpenSSL/0.9.7d
< Last-Modified: Mon, 04 Aug 2008 20:01:51 GMT
< ETag: "4fa2a-601b-4897602f"
< Accept-Ranges: bytes
```

```
< Content-Length: 24603
< Content-Type: text/plain
* Connection #0 to host 10.7.79.18 left intact
* Closing connection #0
done
file decoding done.
Configuration backup created on Mon Aug  4 12:58:19 2008
 from system ‘M3000’ with serial number ‘IKS08220xx’, version ‘19830000’
validating backup configuration data
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

使用例 4　USB を使用して、システム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -V file:///media/usb_msd/proxytest.cfg
transfer from ’/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin’ to ’file:///media/
usb_msd/proxytest.cfg’
Configuration backup created on Mon Aug  4 14:38:27 2008
 from system ’M3000’ with serial number ’IKS08220xx’, version ’19830000’
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

使用例 5　暗号化されたシステム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -v -V -P encryption http://10.7.79.18/sollgell/
proxytest.cfg
obtaining lock ... done
initiating file transfer from ’http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg’
... transfer from ’/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin’ to
’http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg’
* About to connect() to 10.7.79.18 port 80
*   Trying 10.7.79.18... * connected
* Connected to 10.7.79.18 (10.7.79.18) port 80
GET /sollgell/proxytest.cfg HTTP/1.1
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Date: Wed, 13 Aug 2008 23:29:42 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27
OpenSSL/0.9.7d
< Last-Modified: Wed, 13 Aug 2008 23:25:16 GMT
< ETag: "4fa55-501b-48a36d5c"
< Accept-Ranges: bytes
< Content-Length: 20507
< Content-Type: text/plain
```

```
* Connection #0 to host 10.7.79.18 left intact
* Closing connection #0
done
file decoding done.
Configuration backup created on Wed Aug 13 16:21:01 2008
 from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version
'19830000'
validating backup configuration data
File decryption completed
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation
is completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 | restoredefaults - 本体装置または XSCF ユニットを工場出荷時の状態に戻します。

形式 | **restoredefaults** -c *range*

restoredefaults -h

説明 | restoredefaults(8) は、本体装置または XSCF ユニットを工場出荷時の状態に戻すコマンドです。

restoredefaults(8) コマンドは XSCF をシリアル接続した状態で使用してください。

-c オプションと一緒に使用し、*range* には本体装置の設定や情報を戻す factory か、XSCF ユニットだけの設定や情報を戻す xscfu の、どちらかを指定します。

ユーザー権限 | このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション | 以下のオプションがサポートされています。

-c *range*
: 状態を戻す対象を指定します。*range* には以下のどちらかを指定できます。

  factory
  : 本体装置（オペレーターパネルと XSCF ユニット）を工場出荷時の状態に戻します。ユーザーによって設定された情報と XSCF ユニット自身のエラー情報が消去されます。M8000/M9000 サーバのスタンバイ XSCF では指定できません。

  xscfu
  : XSCF ユニットを工場出荷時の状態に戻します。M8000/M9000 サーバのアクティブ XSCF に対して指定した場合は、アクティブおよびスタンバイ XSCF の両方が戻されます。スタンバイ XSCF に対して指定した場合は、スタンバイ XSCF だけが戻されます。どちらの場合もユーザーによって設定された情報と XSCF ユニット自身のエラー情報が消去されます。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明 |

- restoredefaults(8) コマンドを実行したあと、対象の XSCF ユニットは停止します。XSCF ユニットを再起動させるため、本体装置の入力電源を切断して再投入してください。

- restoredefaults(8) コマンドはすべてのドメインの電源が切断された状態で実行してください。すべてのドメインの電源が切断されているかを確認する場合は showlogs power コマンドを実行して、System Power Off という値のあることを確認してください。
- XSCF ユニットを他の本体装置へ移設する場合は "-c xscfu" を指定してください。XSCF ユニットは工場出荷時の状態に復元され、本体装置の電源が切断されます。その後、XSCF ユニットを他の本体装置に移設することができます。
- "-c xscfu" を指定した場合は、オペレーターパネルの情報は残っています。したがって、本体装置の入力電源を切断し再投入すると、オペレーターパネルに保存されている情報が読み込まれ、XSCF ユニットは前回の状態に復元されます。この段階では、XSCF ユニットには本体装置の情報が含まれているため、他の本体装置に移設しないでください。

使用例

使用例 1　XSCF ユニットを工場出荷時の状態に戻します。

```
XSCF> restoredefaults -c xscfu

WARNING:
 If this system does not have OPNL, this command will set all the user
 settable XSCF configuration parameters to their default value as they
 were set when the system was shipped out.
 Furthemore, this command will delete all logs on both XSCFUs.
 Check the man page of this command before you run it.

Continue?[yes/no](default no):yes
You must check the following points.

 1. Have the ability to powercycle the system.
 2. Have access to the serial console and hold the serial console of the
    XSCFU to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCFU when it completes.
You will need to powercycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?
Continue?[yes/no](default no):yes
The initialization of XSCFU will be started.
 XSCFU : all data clear
 OPNL  : not clear
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCFU will be
initialized.
Continue?[yes/no](default no):yes
The NVRAM setting of XSCFU#0 was completed.
XSCF shutdown request was completed.

    <snip>....XSCF reboot..<snip>

***** WARNING *****
XSCF initialization terminate for XSCF data clear.
execute "setdefaults xscf" (AUTO)
```

```
setdefaults : XSCF clear : start
setdefaults : XSCF clear : DBS start
setdefaults : XSCF clear : wait 20s for DBS initialization
setdefaults : XSCF clear : common database clear complete
setdefaults : XSCF clear : /bin/rm /var/log/lastlog >/dev/null 2>&1
setdefaults : XSCF clear : /bin/rm /var/log/boot.log >/dev/null 2>&1
...
setdefaults : XSCF clear : /bin/rm /hcpcommon/tmp/panel_up_to_date_fail >/
dev/null 2>&1
setdefaults : XSCF clear : log data clear complete
setdefaults : XSCF clear : NVRAM(PAGE#0) clear complete
...
setdefaults : XSCF clear : NVRAM(PAGE#7) clear complete
setdefaults : XSCF clear : NVRAM reset complete
...
setdefaults : XSCF clear : unmount filesystem start
dbs[282]: NOTICE: received signal: 15
setdefaults : XSCF clear : unmount /hcp0/linux
...
setdefaults : XSCF clear : unmount /hcpcommon/firmtmp  --  complete
setdefaults : XSCF clear : unmount filesystem complete
setdefaults : XSCF clear : end
setdefaults : complete

Please turn off the breaker after XSCF halt.

The system is going down NOW !!
Please stand by while rebooting the system.
Restarting system.
XSCF uboot  01950000  (Apr  15 2007 - 11:08:18)


XSCF uboot  01950000  (Apr  15 2007 - 11:08:18)

SCF board boot factor = a040
 DDR Real size: 512 MB
 DDR: 480 MB


XSCF BOOT STOP (recover by NFB-OFF/ON)
```

使用例 2　　本体装置を工場出荷時の状態に戻します。

```
XSCF> restoredefaults -c factory

WARNING:
 If this system does not have OPNL, this command will set all the user
 settable XSCF configuration parameters to their default value as they
 were set when the system was shipped out.
 Furthemore, this command will delete all logs on both XSCFUs.
 Check the man page of this command before you run it.

Continue?[yes/no](default no):yes
```

```
You must check the following points.

 1. Have the ability to powercycle the system.
 2. Have access to the serial console and hold the serial console of the
    XSCFU to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCFU when it completes.
You will need to powercycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?
Continue?[yes/no](default no):yes
The initialization of XSCFU will be started.
 XSCFU : all data clear
 OPNL  : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCFU will be
initialized.
Continue?[yes/no](default no):yes
The NVRAM setting of XSCFU#0 was completed.
XSCF shutdown request was completed.

    <snip>....XSCF reboot..<snip>

***** WARNING *****
XSCF initialization terminate for XSCF/OPNL data clear.
execute "setdefaults factory" (AUTO)

setdefaults : FACTORY mode clear : start
setdefaults : FACTORY mode clear : DBS start
setdefaults : FACTORY mode clear : wait 20s for DBS initialization
initialize OPNL SEEPROM 1/6  --  complete
...
initialize OPNL SEEPROM 6/6  --  complete
setdefaults : FACTORY mode clear : OPNL reset complete
setdefaults : FACTORY mode clear : restore SYSTEM-ID data complete
setdefaults : FACTORY mode clear : /bin/rm /var/log/lastlog >/dev/null
2>&1
setdefaults : FACTORY mode clear : /bin/rm /var/log/boot.log >/dev/null
2>&1
...
setdefaults : FACTORY mode clear : /bin/rm /hcpcommon/tmp/
panel_up_to_date_fail >/dev...
setdefaults : FACTORY mode clear : log data clear complete
setdefaults : FACTORY mode clear : NVRAM(PAGE#0) clear complete
...
setdefaults : FACTORY mode clear : NVRAM(PAGE#7) clear complete
setdefaults : FACTORY mode clear : NVRAM reset complete
...
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount filesystem start
dbs[283]: NOTICE: received signal: 15
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount /hcp0/linux
...
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount /hcpcommon/firmtmp  --  complete
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount filesystem complete
Please stand by while rebooting the system.
```

```
Restarting system.
XSCF uboot  01950000  (Apr  15 2007 - 11:08:18)


XSCF uboot  01950000  (Apr  15 2007 - 11:08:18)

SCF board boot factor = 4040
 DDR Real size: 512 MB
 DDR: 480 MB


XSCF BOOT STOP (recover by NFB-OFF/ON)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 sendbreak - 指定したドメインにブレーク信号を送ります。

形式 **sendbreak** -d *domain_id*

sendbreak [[-q] -{y|n}] -d *domain_id*

sendbreak -h

説明 sendbreak(8) は、指定したドメインにブレーク信号を送るコマンドです。

ドメインコンソールから、ドメイン上の Oracle Solaris OS に対してブレーク信号を送ると、Oracle Solaris OS から OpenBoot PROM へ制御が移行され、OpenBoot PROM 用のプロンプト "ok" が表示されます。

注 – オペレーターパネルのモードスイッチが "Locked" にセットされている場合、secure モードを "on" に設定するとブレーク信号は送信されません。詳細については、setdomainmode(8) コマンドを参照してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	ブレーク信号を送るドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-Y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **console**(8), **showconsolepath**(8)

名前 setad - Active Directory を構成します。

形式

setad `enable|disable`

setad `loadcert` [[-q] -{y|n}] [-i *n*] [-u *username*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *URI*

setad `loadcert` [[-q] -{y|n}] [-i *n*] `console`

setad `rmcert` [[-q] -{y|n}] [-i *n*]

setad `group administrator -i` *n* `name` [*groupname*]

setad `group operator -i` *n* `name` [*groupname*]

setad `group custom -i` *n* `name` [*groupname*]

setad `group custom -i` *n* `roles` [*privileges*]

setad `userdomain -i` *n* [*domainname*]

setad `defaultrole` [*privileges*]

setad `timeout` *seconds*

setad `server` [-i *n*] [*ipaddr* [: *port*]]

setad `logdetail none | high | medium | low | trace`

setad `log` [[-q] -{y|n}] `clear`

setad `dnslocatormode | expsearchmode | strictcertmode enable|disable`

setad `dnslocatorquery -i` *n* [*service*]

setad `default` [[-q] -{y|n}]

setad `-h`

説明 `setad`(8) は、Active Directory を構成するコマンドです。Active Directory を有効にする、または無効にするには、このコマンドを `enable` または `disable` のオペランドとともに実行します。Active Directory のモード (dnslocatormode など) を有効にする、または無効にするには、そのモードを `enable` または `disable` とともに指定します。

プロパティを消去する、または設定解除するには、`setad`(8) コマンドを、オペランドに何も値を設定しないで実行します。たとえば、`setad group custom -i 1 name` は、カスタムグループ 1 から name プロパティを消去します。プロパティが設定されていない場合は、値なしで表示されます。

注 – Active Directory または LDAP/SSL ユーザーは、ユーザー公開鍵を XSCF へアップロードしないでください。すでにユーザー公開鍵がアップロードされている場合は、以下のコマンドでユーザー公開鍵を削除してください。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -a -u proxyuser
```

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *n*	インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。
-n	プロンプトに対して自動的に "n" （no）と応答します。
-p	転送に使用されるプロキシサーバを設定します。-t *ptoxy_type* オプションで修正しない場合の、デフォルトの転送タイプは http です。プロキシの値は *サーバ名* : *ポート番号*の形式で指定してください。使用例 8 を参照してください。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t	プロキシタイプを設定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、または socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u	認証が必要なリモート ftp または http サーバにログインする場合の、ユーザー名を設定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。使用例 9 を参照してください。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド | 以下のオペランドがサポートされています。

`enable|disable` — 他のオペランドなしで使用すると、Active Directory 機能を有効または無効にします。

`loadcert` — `loadcert console` は、コンソールに認証情報の入力プロンプトを表示します。ファイルからコピーした認証情報を貼り付けるには、このコマンドを使用します。`CTRL-D` で入力を終了します。

`loadcert` *URL* は、Active Directory サーバ用の認証ファイルをロードします。以下の URI フォーマットがサポートされています。

`http://`*server*`[:`*port*`]/`*path*`/`*file*
`https://`*server*`[:`*port*`]/`*path*`/`*file*
`ftp://`*server*`[:`*port*`]/`*path*`/`*file*
`file:///media/usb_msd/`*path*`/`*file*

`rmcert` — Active Directory サーバ用の認証ファイルを削除します。認証の削除を行うためには、`strictcertmode` は必ず無効のステータスになっている必要があります。

`group administrator` — グループ名を、最大 5 つの指定された管理者グループに対して割り当てます。管理者グループは、`platadm`、`useradm`、`auditadm` 権限を持ち、変更することはできません。

`group operator` — グループ名を、最大 5 つの指定されたオペレーターグループに対して割り当てます。オペレーターグループは、`platop`、`auditop` 権限を持ち、変更することはできません。

`group custom` — グループ名および権限を、最大 5 つのグループに対して割り当てます。

`userdomain` — ユーザードメインを設定します。ユーザードメインは XSCF で `setad userdomain` コマンドを使用するか、ログインプロンプトで*ユーザー名* **@** *ドメイン名*の形式で指定できます。

- 「`login:` **ima.admin@dc01.example.com**」のようにログインプロンプトでユーザードメインを設定した場合は、ユーザードメインは今回のログイン内だけで使用されます。`showad userdomain` コマンドで表示される、事前に設定されたユーザードメインは無視されます。
- 「`login:` **ima.admin**」のようにログインプロンプトでユーザードメインが設定されない場合は、XSCF はユーザーを認証するために、事前に設定されているユーザードメインを、順番に確認します。

`defaultrole` デフォルトの権限を設定します。`defaultrole` が構成されている場合、ユーザーは、認証後に `defaultrole` によって指定された権限を持ち、ユーザーグループメンバーシップはチェックされません。`defaultrole` が構成されていない場合、ユーザーの権限は、グループメンバーシップに基づき Active Directory から得られる情報によって決定されます。

`timeout` トランザクションのタイムアウト時間を、秒単位で設定します。*seconds* には 1 から 20 までの数値を指定できます。デフォルトは 4 です。設定したタイムアウト時間が構成上短すぎる場合は、ログイン作業、またはユーザー権限を設定するための検索に失敗することがあります。

`server` プライマリ、および最大 5 つの代替 Active Directory サーバを設定します。ホストネームを使用するには、DNS が必ず有効になっている必要があります。IP アドレスをポート番号とともに指定することができます。指定を行わない場合、デフォルトのポートが使用されます。

`logdetail` Active Directory の認証および認可の診断メッセージのロギングを、指定した詳細レベルで有効にします。このログは故障対応時に使用され、XSCF リセット時に消去されます。以下のいずれかのレベルを指定できます。

- `none` 診断メッセージを記録しません。通常のシステム動作中は、この設定を使用します。
- `high` 重大性が高い診断メッセージだけ記録します。
- `medium` 重大性が高い、および重大性が中程度の診断メッセージだけ記録します。
- `low` 重大性が高い、重大性が中程度、および情報を含む診断メッセージを記録します。
- `trace` 重大性が高い、重大性が中程度、情報を含む、およびトレースレベルの診断メッセージを記録します。

`log` [*options*] `clear` Active Directory の認証および認可の診断メッセージのログファイルを消去します。

`dnslocatormode` DNS ロケーターモードを有効または無効にします。このモードは、デフォルトでは無効になっています。有効にすると、XSCF が DNS サーバに対し、ユーザー認証に使用する Active Directory を知るためのクエリーを行います。

expsearchmode	拡張検索モードを有効または無効にします。デフォルトの Active Directory 機能は、厳密な安全性確保のため、意図的に制限されています。検索基準は、特定の顧客環境に対応するために、拡張することが可能です。拡張検索モードはデフォルトでは無効になっており、このことは、UserPrincipalName（UPN）が Fully Qualified Domain Name のサフィックスを持つと見込まれていることを意味します。拡張検索モードが有効にされると、より具体性の高い UPN 検索がただちに引き続き行われない場合、追加の検索が試行されます。
strictcertmode	strictcertmode を有効または無効にします。このモードは、デフォルトでは無効になっており、チャネルは安全ですが、認証については限定的な妥当性確認が行われています。strictcertmode を有効にする場合、サーバの証明書は、サーバ認証が提示されたときに認証署名の妥当性確認が行えるよう、サーバにあらかじめアップロード済みとなっている必要があります。データは、strictcertmode が無効になっていても、常に保護されます。strictcertmode は、プライマリサーバ、および代替サーバに対しても同様に、適用されます。
dnslocatorquery	DNS ロケータークエリーを構成します。DNS および DNS ロケーターモードは、DNS ロケータークエリーが動作するためには、必ず有効になっている必要があります。DNS ロケーターサービスクエリーは、named DNS サービスを識別します。後述する「使用例」で、重要な情報を確認してください。
default	Active Directory 設定をリセットし、工場出荷時設定に戻します。

使用例

使用例 1 Active Directory プライマリサーバを、デフォルト以外のポートを指定して、構成します。

```
XSCF> setad server 10.1.12.250:4040
```

使用例 2 管理者グループ 3 の名前を設定します。

```
XSCF> setad group administrator -i 3 name CN=spSuperAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 3 カスタムグループ 2 の名前を設定します。

```
XSCF> setad group custom -i 2 name CN=spLimitedAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 4 カスタムグループ 2 の権限を設定します。

```
XSCF> setad group custom -i 2 roles auditadm,platop
```

使用例 5　代替サーバ 4 の認証情報をコンソールからロードします。

```
XSCF> setad loadcert -i 4 console
Warning: About to load certificate for Alternate Server 4:
Continue? [y|n]: y
Please enter the certificate:

-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIETjCCAzagAwIBAgIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFADB8MQswCQYDVQQGEwJVUzET
MBEGA1UECBMKQ2FsaWZvcm5pYTESMBAGA1UEBxMJU2FuIERpZWdvMRkwFwYDVQQK
ExBTdW4gTWljcm9zeXN0ZW1zMRUwEwYDVQQLEwxTeXN0ZW0gR3JvdXAxEjAQBgNV
...
-----END CERTIFICATE-----
CTRL-D
XSCF>
```

使用例 6　ユーザードメイン 2 を構成します。<USERNAME> はテンプレートであり、以下に示すとおり正確に入力する必要があります。認証中に、<USER-NAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。userdomain は UPN、または Distinguished Name（DN）のいずれかの形式で指定します。

```
XSCF> setad userdomain -i 2 \
'<USERNAME>@yoshi.example.aCompany.com'
```

使用例 7　指定した URI を使用して、Active Directory 用のサーバ認証をロードします。

```
XSCF> setad loadcert http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 8　ポート番号 8080 の http プロキシサーバを使用して、Active Directory 用のサーバ認証をロードします。

```
XSCF> setad loadcert -p webproxy.aCompany.com:8080 \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 9　ユーザー名とパスワードを使用して、Active Directory 用のサーバ認証をロードします。

```
XSCF>setad loadcert -u yoshi \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 10　代替サーバ 3 用の認証を削除します。

```
XSCF> setad rmcert -i 3
```

使用例 11　重大性が高い診断メッセージのロギングを設定します。

```
XSCF> setad logdetail high
```

使用例 12　プロンプトには自動的に "y" と応答し、診断メッセージをログファイルから消去します。

```
XSCF> setad log -y clear
```

使用例 13 strictcertmode を有効にします。

```
XSCF> setad strictcertmode enable
```

使用例 14 DNS ロケータークエリーを構成します。*service* は、実行される DNS クエリーを示します。portID は一般にレコードの一部ですが、<PORT:*portnumber*> のフォーマットを使用することによって、これをオーバーライドすることができます。また、認証中のドメインに固有の named サービスを、<DOMAIN> 置換マーカーを使用して指定することができます。

```
XSCF> setad dnslocatorquery -i 2 \
'_ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>'
```

使用例 15 デフォルトの権限を構成します。privileges は、`setad group custom roles` コマンドで使用されるものと同じです。

```
XSCF> setad defaultrole platadm platop
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showad(8)

名前 setaltitude - 本体装置の高度またはエアーフィルターの搭載状況を設定します。

形式 **setaltitude** -s *key=value*

setaltitude -h

説明 setaltitude(8) は、本体装置の高度またはエアーフィルターの搭載状況を設定するコマンドです。

エアーフィルターの搭載状況は、M4000/M5000 サーバにだけ指定できます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-s *key=value*　*key* には設定する項目を指定します。以下の項目を指定できます。

altitude	本体装置の高度を設定します。
filter	エアーフィルターの搭載状況を設定します。M4000/M5000 サーバだけ指定できます。

key に altitude を指定した場合、*value* には本体装置の高度をメートル（m）で指定します。0 以上の整数で 100 m 単位で指定できます。100 m 単位未満は切り上げられます。デフォルト値は 0 m です。

key に filter を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

installed	エアーフィルターが搭載されています。
uninstalled	エアーフィルターが搭載されていません。

詳細説明

- 本体装置の高度を設定すると、吸気温度の異常を早めに検出することができます。本体装置の高度がわからない場合は高めに設定してください。なお、本体装置の高度が設定されていない場合も、CPU 温度の異常などで温度異常を検出することができるため、システムに致命的なダメージを与えることはありません。
- 設定した内容を反映させるには、rebootxscf(8) コマンドを使用して、XSCF をリセットする必要があります。
- 高度の設定では負の数はサポートされていません。高度が海抜より低い場合は、altitude=0 を指定してください。
- 本体装置の高度またはエアーフィルターの搭載状況のどちらかを設定すると、現在の設定内容が一覧表示されます。エアーフィルターの設定内容は installed に設定したときだけ表示されます。

■ showaltitude(8) コマンドを実行すると、現在の設定内容が表示されます。

使用例

使用例 1 本体装置の高度を 1000 m に設定します。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=1000
1000m
```

使用例 2 本体装置の高度を 200 m に設定します。指定した値は 100 m 単位以下は切り上げられます。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=157
200m
```

使用例 3 エアーフィルターが搭載された M4000/M5000 サーバで本体装置の高度を 1000 m に設定します。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=1000
1000m
Filter is installed.
```

使用例 4 M4000/M5000 サーバでエアーフィルターを搭載されていないとします。

```
XSCF> setaltitude -s filter=uninstalled
1000m
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showaltitude**(8)

名前 | setarchiving - ログのアーカイブ機能を設定します。

形式 | **setarchiving** [-k *host-key*] [-l *audit-limit*,*non-audit-limit*] [-p *password*|-r] [-t *user@host*:*directory*] [-v] [-y|-n]

setarchiving enable | disable

setarchiving -h

説明 | setarchiving(8) は、ログのアーカイブ機能を設定するコマンドです。

サービスプロセッサ上の固定記憶領域は限られています。ログによっては、古いログの上書きまたは削除が必要になるほど肥大化する場合があります。ログのアーカイブ機能を使用すると、ログデータを自動的にリモートホストにアーカイブするようにサービスプロセッサを設定できます。

注 – アーカイブホストにアーカイブされたログは、ログ情報の消失を防ぐために、定期的にローテーションしてください。Oracle Solaris OS が稼働しているシステムでログのローテーションを設定する場合は、logadm(1M) コマンドを使用してください。

注 – ログのアーカイブ機能を有効にする前に、アーカイブホストを正しく設定する必要があります。指定したアーカイブホストが存在しない場合など、設定が正しくないときにアーカイブを有効にしようとすると、エラーが表示されます。また、アーカイブが有効になっているときに、不正な設定変更をしようとすると同様にエラーとなります。

注 – setarchiving(8) コマンドは最低でも 1 つのオプションまたはオペランドを指定する必要があります。

ユーザー権限 | このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション | 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-k` *host-key*

XSCF がホストの ID を確認するために使用する公開キーを設定します。*host-key* には以下のいずれかを指定できます。

`none`
: アーカイブホストの認証に公開ホストキーを使用しません。アーカイブホストの公開ホストキーがすでに設定されている場合は、そのキーが削除されます。

`download`
: SSH プロトコルによってアーカイブホストから公開ホストキーをダウンロードします。-t オプションを一緒に指定して setarchiving(8) コマンドを実行すると、-t オプションで指定したホストからキーがダウンロードされます。-t オプションを一緒に指定しない場合は、現在のアーカイブホストからキーがダウンロードされます。ダウンロード後、公開ホストキーの md5 フィンガープリントが表示され、続行するホストの ID の確認が求められます。キーを受け入れると、そのキーは保存され、キーを拒否すると、setarchiving(8) コマンドは設定を変更せずに終了します。

public-key
: 指定した公開キーは保存され、サーバ認証に使用されます。host-key 引数は、キータイプで始まる、アーカイブホストの完全な公開ホストキーでなければなりません。

注 – *public-key* は引用符で囲む必要があります。

`-l` *audit-limit,non-audit-limit* ログのアーカイブの容量制限をメガバイトで設定します。このオプションの引数には 2 つの値があり、カンマ（,）で区切って指定します。

audit-limit の値には、監査ログに関するアーカイブの容量制限を指定します。`0`（ゼロ）、`unlimited`、または `500` から `50000` までの整数で指定できます。`-l` オプションを指定しない場合は、監査ログに関するアーカイブの容量制限は無制限となります。

non-audit-limit の値には、その他のすべてのログに関する、アーカイブの容量制限を指定します。`500` から `50000` までの整数で指定できます。`-l` オプションを指定しない場合は、*non-audit-limit* はシステムに依存した値となります。`showarchiving`(8) コマンドを使用して現在の値を確認してください。

どちらかの引数に無効な値を指定した場合は、エラーとなります。

`-n` プロンプトに対して自動的に "`n`"（no）と応答します。

`-p` *password* SSH ログインに使用されるパスワードを設定します。`-p` オプションは、スクリプト処理を容易にするために提供されています。パスワードを対話的に変更するためには、`-r` オプションを使用します。

`-r` SSH ログインに使用されるパスワードを読み取ります。`setarchiving`(8) コマンドを実行すると、プロンプトが表示され、新しいパスワードが読み取られますが、画面にはエコーされません。

`-t` *user@host:directory* アーカイブの対象を設定します。*user* には、アーカイブホストへの SSH ログイン用のユーザー名を指定します。*host* には、アーカイブホストのホスト名または IP アドレスを指定します。*directory* には、アーカイブの保存先となるアーカイブホスト上のディレクトリを指定します。*directory* は "~" で始めてはいけません。

`-v` 詳細な情報を出力します。`-k download` オプションと一緒に指定すると、ダウンロードされた公開キーがその md5 フィンガープリントとともに表示されます。

`-y` プロンプトに対して自動的に "`y`"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

enable	ログのアーカイブ機能を有効にします。一緒に指定できるオプションはありません。
disable	ログのアーカイブ機能を無効にします。一緒に指定できるオプションはありません。

使用例

使用例 1 アーカイブの対象とパスワードを設定します。

```
XSCF> setarchiving -t jsmith@somehost.company.com:/home/jsmith/
logs -r
Enter ssh password for jsmith@somehost.company.com:[]
```

使用例 2 公開ホストキーを設定します。

```
XSCF> setarchiving -k download
Downloading public host key from somehost.company.com....
Fingerprint: c3:75:f9:97:7d:dc:1e:1e:62:06:c1:6f:87:bc:e8:0d
Accept this public key (yes|no): yes
```

使用例 3 アーカイブの容量制限を設定します。

```
XSCF> setarchiving -l 10000,10000
```

使用例 4 アーカイブ機能を有効にします。

```
XSCF> setarchiving enable
Testing the archiving configuration...
Logs will be archived to somehost.company.com.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。設定がアップデートされたことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showarchiving(8)

名前 setaudit - システムの監査機能を管理します。

形式 **setaudit** enable|disable|archive|delete

setaudit [-p count|suspend] [-m *mailaddr*] [-a *users*=enable|disable|default] [-c *classes*= {enable|disable}]... [-e *events*=enable|disable]... [-g {enable|disable}] [-t *percents*]

setaudit -h

説明 setaudit(8) は、システムリソースの使用に関するデータの収集を管理するコマンドです。

監査データには、セキュリティに関連するシステムイベントのレコードが含まれています。このデータは、システムで実行されたアクションに対する、責任の割り当てに使用できます。監査では、指定のイベントが発生したときにレコードが生成されます。監査レコードを生成するイベントは以下のとおりです。

- システムの起動とシャットダウン
- ログインとログアウト
- 認証のアクション
- 管理のアクション

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、auditadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a *users*=enable|disable|default　指定されたユーザーの監査レコード生成ポリシーを設定します。*users* は、有効なユーザー名のカンマ区切りリストです。

enable または disable にすると、ユーザーの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。この設定によって、指定された各ユーザーのグローバルポリシーは無効になります。ユーザーのグローバルポリシーを設定するには、-g オプションを使用してください。

default に設定すると、ユーザーのポリシーはグローバルポリシーに従うように設定されます。ユーザーのグローバル監査レコードポリシーを確認する場合は、"showaudit -g" を使用してください。

-c *classes*=enable|disable

指定された監査クラスの監査レコード生成ポリシーを変更します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前によって指定できます。ACS_ プレフィックスは省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 16 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

all
    すべてのクラス
ACS_SYSTEM(1)
    システムに関連するイベント
ACS_WRITE(2)
    状態を変更できるコマンド
ACS_READ(4)
    現在の状態を読み出すコマンド
ACS_LOGIN(8)
    ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT(16)
    監査に関連するイベント
ACS_DOMAIN(32)
    ドメイン管理に関連するイベント
ACS_USER(64)
    ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM(128)
    プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES(256)
    モードに関連するイベント

このオプションは複数指定できます。複数指定すると、リストの順序で-e オプションと一緒に処理されます。使用例 1 を参照してください。

enable または disable にすると、指定されたクラスの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。-e オプションを使用すると、個別のイベントに対するこれらの設定を無効にできます。クラスおよびイベントの監査レコード生成ポリシーは、すべてのユーザーに適用されます。個々のユーザーごとに固有のクラスおよびイベントのポリシーを指定することはできません。

-e *events*=enable|disable	指定された監査イベントの監査レコード生成ポリシーを変更します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前によって指定できます。AEV_ プレフィックスは省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 0 と表現できます。 有効なイベントの一覧については、showaudit -e all を参照してください。 このオプションは複数指定できます。複数指定すると、リストの順序で-c オプションと一緒に処理されます。使用例 3 を参照してください。 enable または disable にすると、指定されたイベントの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。これらの設定によって、イベントに対するクラスの設定は無効になります。クラスの設定は、-c オプションによって設定されます。 クラスおよびイベントの監査レコード生成ポリシーは、すべてのユーザーに適用されます。個々のユーザーごとに固有のクラスおよびイベントのポリシーを指定することはできません。
-g enable|disable	ユーザーのグローバル監査レコード生成ポリシーを設定します。 disable に設定した場合は、すべてのユーザーアカウントに帰属できる監査レコードが生成されません。これらの設定は、-a オプションによって個々のユーザーごとに無効になる場合があります。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m *mailaddr*

ローカルの監査領域の使用量がしきい値に達した場合に送信される電子メールのメールアドレスを設定します（-t オプションを参照）。電子メールアドレスは、有効な形式の電子メールアドレス（*user@company.com*）である必要があります。*mailaddr* に none を指定すると、電子メール通知を無効にします。

-p suspend|count

監査トレールが全容量に達した場合に従うポリシーを設定します。有効な値は以下のとおりです。

suspend
: 空き領域が確保されてレコードの書き込みが可能になるまで、またはポリシーが count に変更されるまで、監査レコードに書き込もうとするプロセスはすべて一時停止します。

count
: 新たな監査レコードは削除されます。また、削除されるレコードの数がカウントされます。

-t *percents*

ローカルの領域の使用量に関して警告を発行するしきい値を設定します。*percents* は、使用済みの領域のパーセンテージを示すカンマ区切りリストです。このリストには最大 4 つの値を設定できます。たとえば、50、75、80、90 という値を設定すると、監査レコードに使用できる領域の消費率がそれぞれ 50%、75%、80%、90% に達したときに警告が発行されます。デフォルトは 80% です。

警告は、コンソールにメッセージとして発行されます。また、オプションで、電子メールを使用して管理者に警告を発行することもできます。"-m *mailaddr*" を参照してください。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`archive` 現在の監査トレールをアーカイブするようにログのアーカイブ機構に通知します。

`delete` 古いほうの監査ログのパーティションから監査トレールのデータを削除し、現在のパーティションにします。`delete` は、ローカルの監査トレールが全容量に達した場合に、新たな監査レコード用に領域を空けるために使用できます。パーティション内のスペースは、ログのアーカイブ時に、必要に応じて自動的にクリアされます。操作が必要とされるのは、監査ポリシーまたはネットワークの問題が監査ログのアーカイブの妨げとなる場合のみです。

注 – `setaudit delete` を 2 回実行すると、新しいほうの監査ログのパーティションからデータを削除し、監査トレールのデータを何も残しません。

監査ログの管理の詳細については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーション ガイド』を参照してください。

`disable` 監査トレールへの監査レコードの書き込みをオフにします。その後、現在の監査トレールをアーカイブするようにログのアーカイブ機構に通知します。

`enable` 監査トレールへの監査レコードの書き込みを有効にします。

使用例

使用例 1 名前によりクラスを変更します。ログインおよび監査に関連する監査クラスを無効にして、リードに関連する監査クラスを有効にします。

```
XSCF> setaudit -c LOGIN,AUDIT=disable -c ACS_READ=enable
```

使用例 2 番号によりクラスを変更します。クラス 8（ログイン）および 16（監査）を無効にして、1（システム）を有効にします。

```
XSCF> setaudit -c 8,16=disable -c 1=enable
```

使用例 3 クラスを変更してイベントを有効にします。イベント 64（ユーザー）だけを無効にして、クラス 1（システム）を有効にします。

```
XSCF> setaudit -c 1=enable -e 64=disable
```

使用例 4 監査を有効にします。監査トレールのためのレコードの書き込みを有効にします。

```
XSCF> setaudit enable
```

使用例 5 警告を有効にします。容量が 50% および 75% に達した場合に警告を送りま

す。

```
XSCF> setaudit -t 50,75
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showaudit(8)

名前 setautologout - XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定します。

形式

setautologout -s *timeout*

setautologout -h

説明 setautologout(8) は、XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定するコマンドです。

デフォルトのタイムアウト時間は 10 分です。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *timeout*	XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を指定します。*timeout* にはタイムアウトする時間を分単位で指定します。1 から 255 までの整数で指定できます。

詳細説明 設定されたセッションタイムアウト時間は、次回のログイン以降で有効になります。

使用例

使用例 1 XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を 30 分に設定します。

```
XSCF> setautologout -s 30
30min
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **showautologout**(8)

名前 setcod - ドメインで使用される Capacity on Demand（COD）リソースを設定します。

形式

setcod

setcod [-v]

setcod [[-q] -{y|n}] [-v] *headroom*

setcod [-v] -d *domain_id* [*proc-permits*]

setcod -h

説明

setcod(8) は、ドメインで使用される COD リソースを設定するコマンドです。

setcod(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

ドメイン上の COD ボードを利用するためには、CPU Right To Use（RTU）ライセンスキー（COD キー）をインストールする必要があります。また、setcod(8) コマンドではヘッドルームを有効にしたり、ドメインに対して COD 許諾を予約したりできます。

domain_id を指定しない場合は、コマンドプロンプトに現在の値が角括弧（[ ]）で囲まれて表示されます。オペランドの値を指定しない場合、現在の値が保持されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	ドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-v	詳細な情報を表示します。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

headroom 有効にするヘッドルーム（必要に応じて使用するプロセッサ）の数を指定します。最大値は 4 です。

proc-permits ドメイン用に予約される COD 許諾の数を指定します。各 CPU に対して 1 つの COD 許諾が必要です。

詳細説明

- オプションを何も指定しないで setcod(8) コマンドを実行すると、COD 情報に関するプロンプトが表示されます。

  使用する COD ヘッドルームの数、およびドメイン用に予約する COD 許諾の数を指定するように求められます。COD 情報を入力するように求められるプロンプトには、許容される最大値が丸括弧の中に、デフォルトの値が角括弧（[ ]）の中に表示されます。

- setcod(8) コマンドは、COD ヘッドルームを有効にします。ドメイン用に予約する COD 許諾の数を指定する場合には、-d *domain_id* オプションを使用します。

使用例

使用例 1 COD CPU ヘッドルームの数、およびドメイン用に予約する COD 許諾の数を設定します。

```
XSCF> setcod

PROC Permits installed: 0
PROC Headroom Quantity (0 to disable, 4 MAX) [0]: 1
WARNING:Using headroom requires you to install hardware activation key(s)
within 30 days.  Do you agree? [y|n]: y
PROC Permits reserved for domain 0 (1 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 1 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 2 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 3 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 4 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 5 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 6 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 7 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 8 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 9 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 10 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 11 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 12 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 13 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 14 (0 MAX) [0]:
PROC Permits reserved for domain 15 (0 MAX) [0]:
```

このコマンドが完了すると、以下のようなメッセージが XSCF コンソールに表示されます。

```
Aug 28 17:28:30 FF1-1-0 codd[PID]: COD PROC Headroom changed to 3
```

使用例 2　　COD ヘッドルーム CPU を 0 に設定します。

```
XSCF> setcod 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前 setdate - XSCF の時計の日付、時刻を設定します。

形式

setdate [[-q] -{y|n}] [-u] -s *date*

setdate -h

説明

setdate(8) は、XSCF の時計の日付、時刻を設定するコマンドです。

日付、時刻を設定する場合に地方時で指定したときは、協定世界時（UTC）に変換されてから設定されます。

コマンド実行後は、XSCF が自動的にリセットされます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s *date*	日付、時刻を設定します。*date* は、以下のどちらかの形式で指定できます。 *yyyy.MM.DD-hh:mm:ss* " 年 . 月 . 日 - 時（24 時制）: 分 : 秒 " *MMDDhhmmyyyy.ss* " 月日時（24 時制）分年 . 秒 "
-u	時刻を UTC で指定します。省略した場合は地方時となります。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- M8000/M9000 サーバの場合、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。
- setdate(8) コマンドで時刻を設定すると、ドメインとの時刻の差分に影響を与え、ドメイン起動時に時刻のズレが発生する場合があります。時刻を設定したあとは、showdateoffset(8) コマンドを使用して、XSCF とドメイン間の時刻の差分を確認してください。差分が大きくなった場合は、resetdateoffset(8) コマンドで時刻の差分をリセットしてください。

- XSCF に対して NTP サーバが設定されている場合は、時刻が設定されません。XSCF に NTP サーバが設定されているかどうかは、showntp(8) コマンドで確認できます。
- setdate(8) コマンドはすべてのドメインの電源が切断された状態で実行してください。すべてのドメインの電源が切断されているかを確認する場合は showlogs power コマンドを実行して、System Power Off という値のあることを確認してください。
- showdate(8) コマンドを使用すると、現在設定されている XSCF の日付、時刻が確認できます。

使用例

使用例 1 現在の時刻を地方時（JST）で「2006 年 1 月 27 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。

```
XSCF> setdate -s 012716592006.00
Fri Jan 27 16:59:00 JST 2006
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
XSCF>
（以降、リセット処理が継続されます。）
```

使用例 2 現在の時刻を UTC で「2006 年 1 月 27 日 7 時 59 分 00 秒」に設定します。

```
XSCF> setdate -u -s 012707592006.00
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
XSCF>
（以降、リセット処理が継続されます。）
```

使用例 3 現在の時刻を地方時（JST）で「2006 年 1 月 27 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdate -y -s 012716592006.00
Fri Jan 27 16:59:00 JST 2006
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
XSCF>
（以降、リセット処理が継続されます。）
```

使用例 4 現在の時刻を地方時（JST）で「2006 年 1 月 27 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdate -q -y -s 012716592006.00
XSCF>
（以降、リセット処理が継続されます。）
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setntp(8), **settimezone**(8), **showdate**(8), **shownt**p(8), **showtimezone**(8)

名前 setdcl - ドメイン構成情報（DCL）を設定します。

形式

setdcl -d *domain_id* -s policy=*value*

setdcl -d *domain_id* -s *option=value lsb* [*lsb*...]

setdcl -d *domain_id* -a *lsb=xsb* [*lsb=xsb*...]

setdcl -d *domain_id* -r *lsb* [*lsb*...]

setdcl -h

説明

setdcl(8) は、DCL を設定するコマンドです。

DCL とは、ドメインやドメインを構成する論理システムボード（LSB）に設定できるハードウェアリソース情報です。

LSB とは、ドメインの Oracle Solaris OS で認識されるボードの単位です。ドメインごとに最大 16 枚まで登録でき、00 から 15 までの整数で表されます。

システムボード（XSB）とは、物理システムボード（PSB）を分割してシステム上で使用できる単位に構成しなおしたボートのことです。XSB は PSB 番号と PSB を分割したときの分割番号を組み合わせて *x-y*（*x* は 00 から 15 までの整数、*y* は 0 から 3 までの整数）で表されます。

setdcl(8) コマンドは、XSB を、ドメイン上の Oracle Solaris OS で認識できる LSB に対応させたり、LSB に対応させた XSB 上のハードウェアリソースを、ドメイン上の Oracle Solaris OS で使用させたりするための設定を行います。

setdcl(8) コマンドでは、DCL 内の、以下の情報を設定できます。

ドメインに対する設定 :

- ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲（policy）
  M3000 サーバでは policy だけ設定できます。

LSB に対する設定 :

- LSB に対応させる XSB 番号（lsb, xsb）
  LSB に対応させる XSB 番号を指定します。
- LSB に搭載されているメモリの使用（no-mem）
  LSB に搭載されているメモリを、ドメイン上のオペレーティングシステムで使用させるかどうか設定できます。
- LSB に搭載されている入出力デバイスの使用（no-io）
  LSB に搭載されている PCI カードなどの入出力デバイスを、ドメイン上のオペレーティングシステムで使用させるかどうか設定できます。
- LSB をフローティングボードとするための優先度（float）

指定した LSB を優先してフローティングボードとするかどうかを設定できます。フローティングボードとは、ドメイン構成を変更する場合など、オペレーティングシステムへの影響を最小限に抑えながら、Dynamic Reconfiguration（DR）を実施するためのボードです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a *lsb=xsb*

ドメインの LSB 番号に対応させる XSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。M3000 サーバでは指定できません。

lsb=xsb

lsb LSB 番号を指定します。00 から 15 までの整数で指定できます。

xsb XSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。

x-y

x: 00 から 15 までの整数で指定します。

y: 0 から 3 までの整数で指定します。

lsb と *xsb* をイコール（=）で区切った形式で指定できます。「=」との間にスペースを含めてはなりません。*lsb=xsb* はスペースで区切って複数指定できます。

同じ LSB 番号 と XSB 番号 を重複して指定した場合はエラーとなります。また、指定した *lsb* に XSB 番号が設定されている場合もエラーとなります。

指定した *xsb* が別の LSB に設定されている場合は、既存の設定が消去され、指定した *lsb* に上書きされます。

-d *domain_id*

設定するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-r

指定したドメインの LSB 番号に対応する XSB 番号を消去します。M3000 サーバでは指定できません。

`-s` *option=value*

LSB へ対応させた XSB のハードウェアリソースに関して設定します。*option* には設定する項目、*value* には *option* に対する値を指定します。*option* と *value* をイコール（=）で区切った形式で 1 つだけ指定します。「=」との間にスペースを含めてはなりません。

option には、以下のいずれかを指定できます。M3000 サーバでは `policy` だけ指定できます。

`policy`	ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲
`no-mem`	メモリをドメインで使用するかどうか
`no-io`	入出力デバイスをドメインで使用するか
`float`	優先してフローティングボードにするか

option に `policy` を指定した場合、*value* には以下のいずれかを指定できます。

`fru`	診断で異常が発生した場合、対象の Field Replaceable Unit（FRU）を縮退します。
`xsb`	診断で異常が発生した場合、対象の XSB を縮退します。
`system`	診断で異常が発生した場合、対象のドメインを停止します。

option に `no-mem` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`true`	メモリをドメインで使用させません。
`false`	メモリをドメインで使用させます（デフォルト）。

option に `no-io` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`true`	入出力デバイスをドメインで使用させません。
`false`	入出力デバイスをドメインで使用させます（デフォルト）。

option に `float` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`true`	フローティングボードになりやすくします。
`false`	フローティングボードになりやすくしません（デフォルト）。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

lsb 設定する LSB 番号を指定します。*lsb* は 00 から 15 までの整数で指定できます。スペースで区切って複数指定できます。*lsb* はドメイン内で一意の値を指定してください。同じ *lsb* を指定した場合はエラーとなります。M3000 サーバでは指定できません。

詳細説明

- 指定したLSBに対応させたXSBがすでにドメイン構成に組み込まれている場合は、LSB に設定されている内容は変更できません。deleteboard(8) コマンドでドメイン構成から割当てを解除し、moveboard(8) コマンドで他のドメイン構成へ組みなおしてから変更してください。
- 指定したドメインが稼働している場合、policy の値は変更できません。指定したドメインの電源を切断してから変更してください。
- showdcl(8) コマンドを使用すると、現在設定されている DCL の情報が確認できます。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 の LSB#00 に XSB#00-0 を、LSB#01 に XSB#00-1 を設定します。

```
XSCF> setdcl -d 0 -a 00=00-0 01=00-1
```

使用例 2 ドメイン ID 0 の LSB #00, #01 に no-mem=true を設定します。

```
XSCF> setdcl -d 0 -s no-mem=true 00 01
```

使用例 3 ドメイン ID 0 に configuration-policy=system を設定します。

```
XSCF> setdcl -d 0 -s policy=system
```

使用例 4 ドメイン ID 0 の LSB#00, #01 に対応している XSB を消去します。

```
XSCF> setdcl -d 0 -r 00 01
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **moveboard**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8), **showfru**(8)

名前 setdomainmode - ドメインの動作モードを設定します。

形式 **setdomainmode** [[-q] -{y|n}] -d *domain_id* -m *function=mode*

setdomainmode -h

説明 setdomainmode(8) は、ドメインの動作モードを設定するコマンドです。

ドメインの動作モードには、以下の種類があります。

Diagnostic Level	OpenBoot PROM の診断レベル。デフォルトは標準です。
Secure Mode	host watchdog 監視および Break 信号受信抑止機能の有効、無効。デフォルトは host watchdog 監視有効、Break 信号受信抑止有効です。
Autoboot	ドメイン起動時のオートブートの有効、無効。デフォルトは有効です。
CPU Mode	ドメインに搭載されている CPU 動作モードの設定方法。CPU 動作モードの設定方法には、ドメイン起動時に自動的に判別させる方法（auto）と、手動で互換モードに設定する方法（compatible）があります。デフォルトは、ドメイン起動時に自動的に判別させます。M3000 サーバでは設定できません。 CPU 動作モードには以下の 2 種類があります。 SPARC64 VII 拡張モード SPARC64 VII+ および SPARC64 VII プロセッサで拡張された機能を使用して動作します。このモードは SPARC64 VII+ または SPARC64 VII プロセッサだけで構成されたドメインで、CPU 動作モードを自動的に判別させる場合にだけ設定されます。 SPARC64 VI 互換モード 搭載されているすべての CPU が SPARC64 VI プロセッサと同等の機能で動作します。ドメインがどのような CPU 構成でも設定できます。

ドメインの動作モードのいずれかを設定すると、現在の設定内容が一覧表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- OpenBoot PROM 診断レベル

fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。

- host watchdog 監視および Break 信号受信抑止、オートブート機能、CPU 動作モード

platadm	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*

設定するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m *function=mode*

動作モードとその値を設定します。*function* には動作モードを指定します。以下のいずれかを指定できます。

diag	OpenBoot PROM の診断レベルを設定します。
secure	host watchdog 監視、Break 信号受信抑止機能を設定します。
autoboot	オートブート機能を設定します。
cpumode	CPU 動作モードを設定します。M3000 サーバでは指定した場合はエラーとなります。

function に diag を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。

注 – ドメインの状態が Powered Off 以外の場合は、エラーとなります。

none	診断を行いません。
min	診断レベルを「標準」に設定します。
max	診断レベルを「最大」に設定します。

function に secure を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。設定した内容は、ドメインの電源を投入または再起動すると反映されます。

on	host watchdog 監視、Break 信号受信抑止を有効にします。
off	host watchdog 監視、Break 信号受信抑止を無効にします。

function に autoboot を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。設定した内容は、ドメインの電源を投入または再起動すると反映されます。

on	オートブート機能を有効にします。
off	オートブート機能を無効にします。

function に cpumode を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。

注 – ドメインの状態が Powered Off 以外の場合は、エラーとなります。

auto
: ドメイン起動時に CPU 動作モードを自動的に判別します。ドメインに搭載されている CPU 構成によって、以下のいずれかの CPU 動作モードが設定されます。
  - SPARC64 VII+ またはSPARC64 VIIプロセッサだけで構成されている場合 :
    SPARC64 VII 拡張モード
  - SPARC64 VII+ または SPARC64 VII プロセッサと、SPARC64 VI プロセッサが混在している場合 :
    SPARC64 VI 互換モード
  - SPARC64 VI プロセッサだけで構成されている場合 :
    SPARC64 VI 互換モード

compatible
: 搭載されている CPU に関係なく、CPU 動作モードを SPARC64 VI 互換モードに設定します。

-n
: プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。

-q
: プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-y
: プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ドメインに設定されている CPU 動作モードにより、Dynamic Reconfiguration（DR）操作で追加可能なシステムボード（XSB）が決まります。以下のとおりです。

ドメインの CPU 構成	CPU Mode の値	現在の CPU 動作モード	DR 操作で追加可能なシステムボードの CPU 構成
SPARC64 VII+/VII	auto	SPARC64 VII 拡張モード	SPARC64 VII+/ SPARC64 VII
	compatible	SPARC64 VI 互換モード	すべての CPU 構成
SPARC64 VII+/VII と SPARC64 VI	auto または compatible	SPARC64 VI 互換モード	すべての CPU 構成
SPARC64 VI	auto または compatible	SPARC64 VI 互換モード	すべての CPU 構成

CPU 動作モードと DR 操作に関する詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Dynamic Reconfiguration（DR）ユーザーズガイド』を参照してください。

- 上記以外の XSB をドメインに追加する場合は、ドメインの電源切断 / 投入、または再起動を伴うドメインの再構築を行う必要があります。
- CPU 動作モードを自動的に判別している場合に、以下のような状態が発生すると、ドメイン再起動時に CPU 動作モードが、SPARC64 VI 互換モードから SPARC64 VII 拡張モードに変わります。SPARC64 VII 拡張モードになると SPARC64 VI プロセッサが搭載された XSB を DR 操作で追加できなくなります。
  - SPARC64 VII+ または SPARC64 VII プロセッサと、VI プロセッサが混在しているときに、SPARC64 VI プロセッサの故障による再起動後、SPARC64 VI プロセッサがドメイン上になくなってしまった場合

  ドメインに SPARC64 VI プロセッサが搭載されている、または搭載する予定の場合は、CPU 動作モードを SPARC64 VI 互換モードに設定してください。
- 現在、ドメインに設定されている CPU 動作モードを確認する場合は、Oracle Solaris OS 上で prtdiag(1M) コマンドを実行します。prtdiag(1M) コマンドについては、Oracle Solaris OS のマニュアルページを参照してください。
- オペレーターパネルのモードスイッチが「Service」の場合は、setdomainmode(8) コマンドで設定された内容にかかわらず、ドメインの動作モードは以下のように設定されます。
  - OpenBoot PROM 診断レベル（Diagnostic Level）, CPU 動作モード（CPU Mode）: setdomainmode(8) コマンドの設定どおり
  - host watchdog 監視および Break 信号受信抑止（Secure Mode）, オートブート機能（Autoboot）: 無効
- OpenBoot PROM 環境変数"auto-boot?"が false に設定されている場合は、オートブート機能は無効となります。
- OpenBoot PROM の診断レベルは addboard(8) コマンドと moveboard(8) コマンドの diag level に適用されます。
- showdomainmode(8) コマンドを使用すると、現在設定されているドメインの動作モードの内容が確認できます。setdomainmode(8) コマンド実行後に showdomainmode(8) コマンドを実行すると、setdomainmode(8) コマンドで設定された内容が表示されます。

使用例

使用例 1　ドメイン ID 0 の OpenBoot PROM の診断レベルを none に設定します。

```
XSCF> setdomainmode -d 0 -m diag=none
Diagnostic Level    :min      -> none
Secure Mode         :on       -> -
Autoboot            :on       -> -
CPU Mode            :auto     -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level    :none
```

```
Secure Mode       :on (host watchdog: available  Break-signal:non-receive)
Autoboot            :on (autoboot:on)
CPU Mode            :auto
```

使用例 2 ドメイン ID 0 のオートブート機能を有効にします。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdomainmode -y -d 0 -m autoboot=on
Diagnostic Level    :none     -> -
Secure Mode         :on       -> -
Autoboot            :off      -> on
CPU Mode            :auto     -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level    :none
Secure Mode       :on (host watchdog: available  Break-signal:non-receive)
Autoboot            :on (autoboot:on)
CPU Mode            :auto
```

使用例 3 setdomainmode(8) コマンドでの設定を途中で中止します。

```
XSCF> setdomainmode -d 0 -m diag=none
Diagnostic Level    :min      -> none
Secure Mode         :on       -> -
Autoboot            :on       -> -
CPU Mode            :auto     -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:n
```

使用例 4 ドメイン ID 0 のオートブート機能を有効にします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdomainmode -q -y -d 0 -m autoboot=on
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdomainmode(8), **showdomainstatus**(8)

名前 setdomparam - OpenBoot PROM 環境変数を強制的に書き換えます。

形式

setdomparam [[-q] -{y|n}] -d *domain_id* use-nvramrc

setdomparam [[-q] -{y|n}] -d *domain_id* security-mode

setdomparam [[-q] -{y|n}] -d *domain_id* set-defaults

setdomparam -h

説明 setdomparam(8) は、指定したドメインの OpenBoot PROM 環境変数を書き換えるコマンドです。

以下の OpenBoot PROM 環境変数が設定できます。

use-nvramrc?	ドメインの起動または再起動時に NVRAM の内容を実行するかどうか
security-mode?	ファームウェアのセキュリティレベルの設定
set-defaults	OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に戻すかどうか

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	OpenBoot PROM 環境変数を書き換えるドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。 **注 –** 電源が投入されているドメインは指定できません。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`use-nvramrc` 環境変数 `use-nvramrc?` を `false` に設定します。

`security-mode` 環境変数 `security-mode?` を `none` に設定します。

`set-defaults` OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に戻します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 の OpenBoot PROM 環境変数 `use-nvramrc?` を `false` に設定します。

```
XSCF> setdomparam -d 0 use-nvramrc
DomainIDs of domains that will be affected:00
OpenBoot PROM variable use-nvram will be set to false.
Continue? [y|n]:y
```

使用例 2 ドメイン ID 0 の OpenBoot PROM 環境変数 `security-mode?` を `none` に設定します。

```
XSCF> setdomparam -d 0 security-mode
DomainIDs of domains that will be affected:00
OpenBoot PROM variable security-mode will be set to none.
Continue? [y|n]:y
```

使用例 3 ドメイン ID 0 の OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に初期化します。

```
XSCF> setdomparam -d 0 set-defaults
DomainIDs of domains that will be affected:00
All OpenBoot PROM variable will be reset to original default values.
Continue? [y|n]:y
```

使用例 4 ドメイン ID 1 の OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に初期化します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdomparam -q -y -d 1 set-defaults
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

`0` 正常に終了したことを表します。

`>0` エラーが発生したことを表します。

名前 setdscp - ドメイン／サービスプロセッサ間通信プロトコル（DSCP）の IP アドレスを割り当てます。

形式

setdscp [-v]

setdscp [-f] [-v] [[-q] -{y|n}] -i *address* -m *netmask*

setdscp [-f] [-v] [[-q] -{y|n}] -s -i *address*

setdscp [-f] [-v] [[-q] -{y|n}] -d *domain_id* -i *address*

setdscp -h

説明

setdscp(8) は、IP アドレスを DSCP リンクに割り当てるコマンドです。

setdscp(8) コマンドは、初期設定にのみ使用することを目的としています。このコマンドを実行するときは、ドメインの電源を投入しないでください。

注 – setdscp(8) コマンドを使用して DSCP の IP アドレスを変更したあと、指定した IP アドレスを使用するためには、サービスプロセッサをリセットする必要があります。

すべての DSCP リンクで使用するためのネットワークアドレスは、-i *address* オプションと -m *netmask* オプションを使用して指定できます。この動作モードでは、サービスプロセッサおよびドメイン固有の各 DSCP リンクで使用される IP アドレスは、ネットワークアドレスによって示されるアドレス範囲の中から自動的に選択されます。設定されたネットマスクは、ネットワーククラスをもとにしたデフォルトネットマスクのサブネットでなければなりません。

個々のドメイン固有 DSCP リンクの IP アドレスを、その他すべての DSCP アドレス設定値とは別に設定するには、-d *domain_id* オプションと -i *address* オプションを使用します。

サービスプロセッサの IP アドレスを、その他すべての DSCP アドレス設定値とは別に設定するには、-s オプションと -i *address* オプションを使用します。

DSCP を以前に設定していた場合は、現在の設定が表示されます。表示された設定が適切な場合は、Enter キーを押すことでそのまま使用できます。

事前に設定されたネットワークアドレスの範囲外にある値をサービスプロセッサまたはドメインのアドレスとして設定した場合や、設定したアドレスが別のドメインやサービスプロセッサにすでに割り当てられているアドレスと競合する場合は、エラーが発生します。これらのエラーは、-f オプションを使用して無効にできます。

注 – 矛盾した IP アドレスで -f オプションを使用すると、間違った構成となる場合があります。このような場合は、DSCP に関する矛盾を適切に解決してください。

setdscp(8) コマンドを何も指定しないで実行すると対話モードとなり、DSCP の IP アドレスを順番に入力するためのプロンプトが表示されます。非対話モードではすべてのドメインの IP アドレスを -i および -m オプションを使用して設定します。必

要な設定が終わったら、設定した内容を確認し、DSCP 構成のデータベースにコミットするかどうかを決めることができます。

注 – 対話モードで setdscp(8) コマンドを実行した場合は、-q オプションの使用にかかわらず、-y または -n オプションが使用できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	対象のドメイン ID を指定します。*domain_id* には、システム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。-i *address* オプションと一緒に指定します。
-f	範囲外やアドレス競合によるエラーを無視し、新しい設定値を強制的にコミットします。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *address*	IP アドレスを IPv4 のドットつき 10 進表記で指定します。 ■ -m *netmask* と一緒に指定する場合、システム内の DSCP リンクすべてのネットワークアドレスを指定します。 ■ -d *domain_id* と一緒に指定する場合、DSCP で使用される個々のドメイン固有 IP アドレスを指定します。 ■ -s オプションと一緒に指定する場合、システム内の DSCP リンクすべてのサービスプロセッサ側で使用される IP アドレスを指定します。
-m *netmask*	システム内の DSCP リンクすべてのネットマスクアドレスを指定します。-i *address* オプションと一緒に指定します。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-s	システム内の DSCP リンクすべてのサービスプロセッサ側を指定します。-i *address* オプションと一緒に指定します。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

使用例

注 – 以下の使用例に示す IP アドレスは、サンプルです。DSCP の IP アドレスを指定する場合は、ローカルエリアネットワーク（LAN）上で使用されていない IP アドレスを指定してください。DSCP の IP アドレスの詳細については『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。

使用例 1　すべてのドメインに対して DSCP アドレスを割り当てます。

```
XSCF> setdscp -y -i 10.1.1.0 -m 255.255.255.0
Commit these changes to the database? [y|n] : y
```

使用例 2　ドメイン ID 1 へ代替 IP アドレスを割り当てます。

```
XSCF> setdscp -d 1 -i 10.1.1.26
Commit these changes to the database? [y|n] : y
```

使用例 3　-q と-y オプションを使用してネットマスクアドレスを指定します。

```
XSCF> setdscp -q -y -i 10.1.1.0 -m 255.255.255.0
```

使用例 4　対話モードを使用して DSCP アドレスを設定します。

対話モードの各プロンプトによって表示されるデフォルト値は、以前の設定と一致しています。このため、DSCP 設定を対話的に確認および変更することができます。この使用例では、ネットワークアドレスの一部分のみを入力し、その後は Enter キーを押して以降の設定値をすべて受け入れています。

```
XSCF>  setdscp
DSCP network  [0.0.0.0        ] > 10.1.1.0

DSCP netmask  [255.0.0.0      ] > 255.255.255.0

XSCF address  [10.1.1.1       ] > [Enter]
Domain #00 address  [10.1.1.2       ] > [Enter]
Domain #01 address  [10.1.1.3       ] > [Enter]
Domain #02 address  [10.1.1.4       ] > [Enter]
Domain #03 address  [10.1.1.5       ] > [Enter]
Domain #04 address  [10.1.1.6       ] > [Enter]
Domain #05 address  [10.1.1.7       ] > [Enter]
Domain #06 address  [10.1.1.8       ] > [Enter]
Domain #07 address  [10.1.1.9       ] > [Enter]
Domain #08 address  [10.1.1.10      ] > [Enter]
Domain #09 address  [10.1.1.11      ] > [Enter]
Domain #10 address  [10.1.1.12      ] > [Enter]
Domain #11 address  [10.1.1.13      ] > [Enter]
Domain #12 address  [10.1.1.14      ] > [Enter]
Domain #13 address  [10.1.1.15      ] > [Enter]
Domain #14 address  [10.1.1.16      ] > [Enter]
Domain #15 address  [10.1.1.17      ] > [Enter]
Domain #16 address  [10.1.1.18      ] > [Enter]
Domain #17 address  [10.1.1.19      ] > [Enter]
Domain #18 address  [10.1.1.20      ] > [Enter]
Domain #19 address  [10.1.1.21      ] > [Enter]
Domain #20 address  [10.1.1.22      ] > [Enter]
Domain #21 address  [10.1.1.23      ] > [Enter]
```

```
Domain #22 address  [10.1.1.24      ] > [Enter]
Domain #23 address  [10.1.1.25      ] > [Enter]
Commit these changes to the database [y|n]? y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdscp(8)

名前 setdualpowerfeed - 二系統受電モードを設定します。

形式 **setdualpowerfeed** -s *key*

setdualpowerfeed -h

説明 setdualpowerfeed(8) は、本体装置の二系統受電モードを有効／無効にするコマンドです。

注 – 二系統受電の有効／無効は M3000/M4000/M5000 サーバだけで設定できます。ただし、100V 電源が供給されている M4000/M5000 サーバでは、二系統受電モードを使用できません。M8000/M9000 サーバでは、オプションの二系統受電用の電源筐体を接続すると、自動的に二系統受電モードが設定されます。二系統受電の設置の詳細については、ご使用のサーバの『インストレーションガイド』を参照してください。

二系統受電モードを有効にする場合は、rebootxscf(8) コマンドを実行するか、入力電源の切断、再投入が必要です。

二系統受電モードを無効にする場合は、入力電源の切断、再投入が必要です。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-s *key*　本体装置の二系統受電モードを設定します。*key* には以下のどちらかを指定できます。

enable	二系統受電モードを有効にします。
disable	二系統受電モードを無効にします。

詳細説明 showdualpowerfeed(8) コマンドを使用すると、現在の二系統受電モードの状態を確認できます。

使用例 **使用例 1**　本体装置の二系統受電モードを無効にします。再起動前にメッセージが表示されます。

```
XSCF> setdualpowerfeed -s disable
enable -> disable
NOTE: Dual power feed will be disabled the next time the platform is powered
on.
```

使用例 2　本体装置の二系統受電モードを有効にします。再起動前にメッセージが表示

されます。

```
XSCF> setdualpowerfeed -s enable
disable -> enable
NOTE: Dual power feed will be enabled the next time the platform is powered
on.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showdualpowerfeed**(8)

名前 setemailreport - 電子メールレポートの設定データをセットアップします。

形式 **setemailreport** [-v] [-t]

setemailreport [-s *variable*= *value*]...

setemailreport -h

説明 setemailreport(8) は、リモート保守用に電子メールレポート機能の設定データをセットアップするコマンドです。

一度データを設定すると、必要に応じて、Fault Management デーモン（fmd）からメールが送信されるようになります。

オプションを何も指定せずに setemailreport(8) コマンドを実行すると、電子メールレポートを有効にするかどうかを指定するように求められます。電子メールレポートを有効にする場合、電子メールアドレスのリストを入力するように求められます。

オプションの意味は以下のとおりです。

-a	受信者の追加
-d	受信者の削除
-r	受信者の置換（デフォルト）

-s オプションを使用すると、電子メールレポートを非対話的にセットアップできます。

setsmtp(8) コマンドを使用してメールサーバとポートを設定したあとは、setemailreport -t コマンドでテストメールを送信できるようになります。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-s *variable=value*　電子メールレポートを設定します。

variable の有効な値は以下のとおりです。
- enable
- recipient

enable で有効となる値は以下のとおりです。
- yes
- no

recipient で有効となる値は以下のとおりです。
- 任意の有効な企業電子メールアカウント

-t　テスト電子メールを送信します。

-v　詳細なメッセージを表示します。

使用例

使用例 1　対話モードで電子メールレポートを有効にします。

```
XSCF> setemailreport
Enable Email Reporting? [no]:yes
Email Recipient Address [useradm@company.com]:
Do you want to send a test mail now (Yes/No): no
```

使用例 2　対話モードで電子メールレポート受信者を追加します。

```
XSCF> setemailreport
Enable Email Reporting? [yes]:[RETURN]
Email Recipient Address[useradmin@company.com]: -a adm2@company.com
```

使用例 3　対話モードで電子メールレポート受信者を削除します。

```
XSCF> setemailreport
Enable Email Reporting? [yes]:[RETURN]
Email Recipient Address[adm2@company.com]: -d adm2@company.com
```

使用例 4　電子メールレポートを非対話モードで有効にします。

```
XSCF> setemailreport -s enable=yes -s
recipient="useradm@company.com, adm2@company.com"
```

使用例 5　テスト電子メールを送信します。

```
XSCF> setemailreport -t
....Sending test email to useradm@company.com
[Email contents shown below]
```

```
  Host Name: jupiter
  Send Timestamp: 04-20-2006 16:31:45 PST
  Mail Server: 10.4.1.1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsmtp(8), **showemailreport**(8)

名前

sethostname - XSCF ユニットのホスト名および DNS ドメイン名を設定します。

形式

sethostname *xscfu hostname*

sethostname -d *domainname*

sethostname -h

説明

sethostname(8) は、XSCF ユニットのホスト名および DNS ドメイン名を設定するコマンドです。

M8000/M9000 サーバの場合、DNS ドメイン名は XSCF ユニット共通となります。ホスト名は XSCF ユニットごとに指定できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domainname*
: XSCF ユニットに設定する DNS ドメイン名を指定します。*domainname* はラベル要素を "." （ピリオド）で区切った形式で、*hostname* と合わせた文字数が 254 文字以内になるように指定します。254 文字を超えるとエラーとなります。ラベル要素には英数字または "-" が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください。"localdomain" を指定するとエラーとなります。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

hostname
: XSCF ユニットに設定するホスト名を指定します。
Fully Qualified Domain Name（FQDN）ではなく省略された形式で、64 文字以内で指定します。64 文字を超えるとエラーとなります。英数字または "-" が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください。"localhost" を指定するとエラーとなります。

xscfu
: 設定する XSCF ユニット名を指定します。システム構成によって以下のように指定できます。省略した場合はエラーとなります。

xscf#0	XSCF ユニット 0
xscf#1	XSCF ユニット 1 （M8000/M9000 サーバの場合）

詳細説明

- 以下の場合には、applynetwork(8) コマンド実行時にエラーとなります。

- ホスト名とドメイン名が設定されていない場合
- M8000/M9000 サーバで、xscf#0 と xscf#1 の両方にホスト名が設定されていない場合
- sethostname(8) で設定する DNS ドメイン名と setnameserver(8) コマンドで設定するサーチパスの合計文字数が 256 文字を超えている場合

- 設定したホスト名および DNS ドメイン名を XSCF に反映させるには、applynetwork(8) コマンドを実行します。そのあと、rebootxscf(8) コマンドで XSCF をリセットし、設定内容を確定します。
- shownetwork(8) コマンドを使用すると、現在設定されている XSCF ユニットのホスト名および DNS ドメイン名が確認できます。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 に scf0-hostname というホスト名を設定します。

```
XSCF> sethostname xscf#0 scf0-hostname
```

使用例 2 XSCF ユニットに example.com という DNS ドメイン名を設定します。

```
XSCF> sethostname -d example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **setnameserver**(8), **showhostname**(8)

名前

sethttps - XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定します。また、認証関連の設定を行います。

形式

sethttps [[-q] -{y|n}] -c enable

sethttps -c disable

sethttps -c gencsr *country state | province locality organization organizationalunit common e-mail*

sethttps [[-q] -{y|n}] -c genserverkey

sethttps -c *importca*

sethttps [[-q] -{y|n}] -c selfsign *country state | province locality organization organizationalunit common e-mail*

sethttps -h

説明

sethttps(8) は、XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定するコマンドです。また、HTTPS サービスで使用される認証関連の設定を行います。

認証に関連する項目として、以下の内容を設定できます。

- 自己認証局の構築
- 自己署名されたウェブサーバ証明書の作成
- ウェブサーバの秘密鍵の生成
- 外部認証局に対するウェブサーバ証明書要求（CSR）の生成
- 外部認証局で署名されたウェブサーバ証明書のインポート

XSCF では HTTP はサポートされません。HTTPS サービスだけサポートされます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {enable|disable} HTTPS サービスの開始または停止を指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。

enable	HTTPS サービスを開始します。
disable	HTTPS サービスを停止します。

-c gencsr CSR を生成します。

-c genserverkey ウェブサーバの秘密鍵を生成します。

`-c importca`	認証局で署名されたウェブサーバ証明書を XSCF へインポートします。
`-c selfsign`	自己認証局を構築します。また、自己署名されたウェブサーバ証明書を作成します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-n`	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-y`	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

common	作成者名やサーバのホスト名など、共通名を 64 文字以内で指定します。"`-c selfsign`" を指定した場合は、空白文字だけの値を指定することできません。
country	JP、US など、国名を 2 文字のコードで指定します。"`-c selfsign`" を指定した場合は、空白文字だけの値を指定することできません。
e-mail	E-mail アドレスを 64 文字以内で指定します。
locality	都市名などを 64 文字以内で指定します。
organization	会社名などを 64 文字以内で指定します。"`-c selfsign`" を指定した場合は、空白文字だけの値を指定することできません。
organizationalunit	部、課など、所属を 64 文字以内で指定します。
state|*province*	州名や県名などを 64 文字以内で指定します。"`-c selfsign`" を指定した場合は、空白文字だけの値を指定することできません。

オペランドの書式ルール :

- "`-c selfsign`" または "`-c gencsr`" では、オペランドの指定順序が決まっています。形式を参照してください。
- 空白文字を指定する場合は、" " のように、空白文字を一重引用符（'）または二重引用符（"）で囲んで指定します。ただし、空白文字だけの値を指定できないオペランドもあります。詳細は各オペランドの説明を参照してください。
- CSR を作成する場合、すべてのオペランドに空白文字を指定することはできません。
- オペランドを省略する場合は、"" のように、一重引用符（'）または二重引用符（"）で連続して 2 つ指定します。このとき、既存で設定されている内容でウェブサーバ証明書が生成されます。

- 値に記号や空白文字を含める場合は、"Kawasaki city" のように、値全体を一重引用符（'）または二重引用符（"）で囲んで指定します。
- 値にバックスラッシュ（円記号）（¥）、ダラーマーク（$）を含める場合は、"¥¥" または "¥$" のように、直前にバックスラッシュ（円記号）（¥）をつけて指定します。

詳細説明

- HTTPS サーバを有効にする場合や自己認証局、ウェブサーバ証明書、またはウェブサーバの秘密鍵がすでに存在する場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- CSR は上書き作成されます。
- XSCF ユニットが二重化構成の場合、スタンバイ側の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF に異常が発生しているときはエラーとなります。
- 外部認証局を利用する場合、以下のようなときはエラーとなります。
  - "-c genserverkey"を実行しないで"-c gencsr"または"-c enable"を実行したとき
    "-c genserverkey" を実行してウェブサーバの秘密鍵を作成してください。
  - "-c importca" を実行しないで "-c enable" を実行したとき
    "-c importca" を実行してウェブサーバ証明書をインポートしてください。
  - "-c importca" でインポートするウェブサーバ証明書と "-c genserverkey" で作成したウェブサーバの秘密鍵が一致しないとき
    ウェブサーバ証明書が正しいかどうか確認してください。
- sethttps(8) コマンドで生成されるファイルのサイズは、自己認証局の構築、自己署名されたウェブサーバ証明書の作成、および CSR の生成時に入力したオペランドの文字数によって大きくなります。生成されたファイルが大きすぎる場合は、sethttps(8) コマンドはエラーとなります。エラーとなった場合は、ファイル要件を満たすようにオペランドの数または文字数を少なくして、sethttps(8) コマンドを再度実行してください。
- HTTPS サービスの停止は、sethttps(8) コマンドを実行直後に反映されます。このとき、開いている HTTPS セッションがある場合は切断されます。

  その他の設定は、rebootxscf(8) コマンドで XSCF をリセットすると反映されます。
- showhttps(8) コマンドを使用すると、HTTPS サービスに関して現在設定されている内容が確認できます。

使用例

使用例 1　HTTPS サービスを開始します。

```
XSCF> sethttps -c enable
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the https settings.
```

使用例 2　HTTPS サービスを停止します。

```
XSCF> sethttps -c disable
```

使用例 3　以下の内容で CSR を生成します。*country*: JP, *state*|*province*: Kanagawa, *locality*: Kawasaki, *organization*: Example, *organizationalunit*: development, *common*: scf-host, *e-mail*: abc@example.com

```
XSCF> sethttps -c gencsr JP Kanagawa Kawasaki Example development
\ scf-host abc@example.com
```

使用例 4　以下の内容で自己認証局を構築し、自己署名されたウェブサーバ証明書を生成します。*country*: JP, *state*|*province*: Kanagawa, *locality*: Kawasaki, *organization*: Example, *organizationalunit*: development, *common*: scf-host, *e-mail*: abc@example.com

```
XSCF> sethttps -c selfsign JP Kanagawa Kawasaki Example development
scf-host abc@example.com
CA key and CA cert already exist. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 5　ウェブサーバの秘密鍵を生成します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey
Server key already exists. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 6　ウェブサーバの秘密鍵を生成します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey -y
Server key already exists. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 7　ウェブサーバの秘密鍵を生成します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey -q -y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 8　ウェブサーバ証明書をインポートします。終了は Enter キーを押してから、"Ctrl" と "D" を実行します。

```
XSCF> sethttps -c importca
Please import a certificate:
-----BEGIN CERTIFICATE-----
```

```
MIIDdTCCAt6gAwIBAgIBATANBgkqhkiG9w0BAQQFADCBgTELMAkGA1UEBhMCamox
DjAMBgNVBAgTBXN0YXRlMREwDwYDVQQHEwhsb2NhbGl0eTEVMBMGA1UEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLEwZvcmdhbmkxDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQG
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDAeFw0wNjA1MzAwNTI5MTVaFw0xNjA1MjcwNTI5
MTVaMG4xCzAJBgNVBAYTAmpqMQ4wDAYDVQQIEwVzdGF0ZTEVMBMGA1UEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLEwZvcmdhbmkxDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQG
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDCBnzANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOBjQAwgYkCgYEA
nkPntf+TjYtyKlNYFbO/YavFpUzkYTLHdt0Fbz/tZmGd3e6Jn34A2W9EC7D9hjLs
j+kAP41Al6wFwGO7KP3H4iImX0Uysjl9Hyk4jLBU51sw8JqvT2utTjltV5mFPKL6
5A51Yuhf8OGrR+bYGli6H1a6RPmlMSD7Z0AGDxR0eY0CAwEAAaOCAQ0wggEJMAkG
A1UdEwQCMAAwLAYJYIZIAYb4QgENBB8WHU9wZW5TU0wgR2VuZXJhdGVkIENlcnRp
ZmljYXRlMB0GA1UdDgQWBBQHIlCmI7QyZa8zpt1Hl6EfLR+EwDCBrgYDVR0jBIGm
MIGjgBTnQYs6jzD7wdDhk7wsFeJGVaUTtaGBh6SBhDCBgTELMAkGA1UEBhMCamox
DjAMBgNVBAgTBXN0YXRlMREwDwYDVQQHEwhsb2NhbGl0eTEVMBMGA1UEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLEwZvcmdhbmkxDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQG
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbIIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQCqBFbo88Hi
yvOUyW8E8ll1AbuA04IrnjHI4cjHq9NuSX1w8mJsXKTVMx3WZCJpJDC+f/WoRMKw
R+OpXAVQvb2tjIn3kO99dq+begECo4mwknW1t7QI7A1BkcW2/MkOolIRa6iP1Zwg
JoPmwAbrGyAvGUtdzUoyIH0jl7dRQrVIRA==
-----END CERTIFICATE-----
[Enter]
[Ctrl]and[D]
```

使用例 9　*organizationunit* に "¥development" を指定して CSR を作成します。

```
XSCF> sethttps -c gencsr JP Kanagawa Kawasaki Example \
"¥¥development" scf-host abc@example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showhttps**(8)

名前

setldap - XSCF を Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）クライアントとして設定します。

形式

setldap {-b *bind*} {-B *baseDN*} {-c *certchain*} {-p} {-s *servers*} {-t *uesr*} -T *timeout*

setldap -h

説明

setldap(8) は、XSCF を LDAP クライアントとして設定するコマンドです。

注 – LDAP クライアントは UNIX Crypt または MD5 である CRYPT 形式のパスワードだけをサポートしています。したがって、LDAP サーバもこの形式のパスワードをサポートする必要があります。詳細については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。XSCF と LDAP では、同じユーザーアカウント名は使用できません。同様に、同じユーザー ID（UID）も使用できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-B *baseDN*
: 検索ベースの識別名を指定します。指定できる最大文字数は 128 文字です。

-b *bind*
: LDAP サーバへ接続するときに使用するバインド ID を設定します。指定できる最大文字数は 128 文字です。

-c *certchain*
: LDAP サーバの証明書チェーンをインポートしてくるリモートファイルを指定します。この証明書チェーンは PEM 形式である必要があります。リモートファイルは、標準の scp 構文（[user@]host:file.）を使用して指定され、scp を使用してインポートされます。コピーでユーザーパスワードが必要な場合は、入力するように求められます。-c オプションを使用すると、LDAP への接続時に、Transport Layer Security（TLS）の使用が暗黙的に有効になります。この動作は、*certchain* を none に指定して無効にできます。証明書チェーンはサイズが 64K 以下であることと、有効であることが必要です。そうでない場合は、拒否されます。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-p
: LDAP サーバへ接続するときに使用するパスワードを設定します。パスワードを入力するように求められます。

-s *servers*　プライマリ LDAP サーバとセカンダリ LDAP サーバ、およびポートを設定します。*servers* は、*server:port* 形式で指定します。カンマ（,）で区切って複数指定できます。*port* は数字で、*server* は名前またはドットつき 10 進表記の IP アドレス、のいずれかで指定します。たとえば、10.8.31.14.636,company:636 のようになります。リスト内の最初のサーバがプライマリとなります。サーバ名は DNS サーバによって、名前解決可能である必要があります。

-t *user*　設定されたすべての LDAP サーバへの接続をテストします。設定した各サーバから、指定したユーザーのパスワードデータの取得を試み、すべてのケースについての、成功または失敗を出力します。

-T *timeout*　LDAP 検索で結果を出力するまでのタイムアウト時間を設定します。

使用例

使用例 1　LDAP サーバへ接続するときに使用するバインド名を設定します。

```
XSCF> setldap -b user -p
Password: <Enter password>
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: Not set
LDAP Search Timeout:     0
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            None
CERTS:                   None
```

使用例 2　検索ベースの識別名を指定します。

```
XSCF> setldap -B  ou=people,dc=company,dc=com
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     0
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            None
CERTS:                   None
```

使用例 3　LDAP 検索のタイムアウトを設定します。

```
XSCF> setldap -T 60
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     60
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            None
CERTS:                   None
```

使用例 4　LDAP サーバを設定します。

```
XSCF> setldap -s ldap://company.com,ldaps://company2.com
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     60
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            ldap://company.com:389 ldaps://company2.com:636
CERTS:                   None
```

使用例 5　証明書チェーンをインポートします。

```
XSCF> setldap -c user@remote.machine:/path/to/cacert.pem
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     60
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            ldap://company.com:389 ldaps://company2.com:636
CERTS:                   cacert.pem
```

使用例 6　指定したユーザーで、LDAP 接続をテストします。

```
XSCF> setldap -t jsmith
company.com:389 PASSED
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setlookup(8), **showldap**(8)

名前 setldapssl - LDAP/SSL を構成します。

形式

setldapssl `enable|disable`

setldapssl `loadcert` [[`-q`] `-{y|n}`] [`-i` *n*] [`-u` *username*] [`-p` *proxy* [`-t` *proxy_type*]] *URI*

setldapssl `loadcert` [[`-q`] `-{y|n}`] [`-i` *n*] `console`

setldapssl `rmcert` [[`-q`] `-{y|n}`] [`-i` *n*]

setldapssl `group administrator -i` *n* `name` [*groupname*]

setldapssl `group operator-i` *n* `name` [*groupname*]

setldapssl `group custom -i` *n* `name` [*groupname*]

setldapssl `group custom -i` *n* `roles` [*privileges*]

setldapssl `userdomain -i` *n* [*domainname*]

setldapssl `defaultrole` [*privileges*]

setldapssl `timeout` *seconds*

setldapssl `server` [`-i` *n*] [*ipaddr* [: *port*]]

setldapssl `logdetail none | high | medium | low | trace`

setldapssl `log` [[`-q`] `-{y|n}`] `clear`

setldapssl `strictcertmode | usermapmode enable|disable`

setldapssl `usermap attributeInfo | binddn | bindpw | searchbase` [*value*]

setldapssl `default` [[`-q`] `-{y|n}`]

setldapssl `-h`

説明 `setldapssl`(8) は、LDAP/SSL を構成するコマンドです。LDAP/SSL を有効にする、または無効にするには、このコマンドを `enable` または `disable` のオペランドとともに実行します。LDAP/SSL の strictcertmode または usermapmode を有効にする、または無効にするには、そのモードを `enable` または `disable` とともに指定します。

プロパティを消去する、または設定解除するには、`setldapssl`(8) コマンドを、オペランドに何も値を設定せずに発行します。たとえば、`setldapssl group custom -i 1 name` は、カスタムグループ 1 から name プロパティを消去し、`setldapssl usermap searchbase` は、オプションのユーザーマッピング設定から searchbase プロパティを消去します。プロパティが設定されていない場合は、値なしで表示されます。

注 – Active Directory または LDAP/SSL ユーザーは、ユーザー公開鍵を XSCF へアップロードしないでください。すでにユーザー公開鍵がアップロードされている場合は、以下のコマンドでユーザー公開鍵を削除してください。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -a -u proxyuser
```

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *n*	インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。
-n	プロンプトに対して自動的に "n" （no）と応答します。
-p	転送に使用されるプロキシサーバを設定します。-t *ptoxy_type* オプションで修正しない場合の、デフォルトの転送タイプは http です。プロキシの値は *サーバ名* : *ポート番号*の形式で指定してください。使用例 8 を参照してください。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t	プロキシタイプを設定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、または socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u	認証が必要なリモート ftp または http サーバにログインする場合の、ユーザー名を設定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。使用例 9 を参照してください。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

`enable|disable`	他のオペランドなしで使用すると、LDAP/SSL を有効または無効にします。
`loadcert`	`loadcert console` は、コンソールに認証情報の入力プロンプトを表示します。ファイルからコピーした認証情報を貼り付けるには、このコマンドを使用します。`CTRL-D` で入力を終了します。 `loadcert` *URL* は、LDAP/SSL サーバ用の認証ファイルをロードします。以下の URI フォーマットがサポートされています。 `http://`*server*`[:`*port*`]/`*path*`/`*file* `https://`*server*`[:`*port*`]/`*path*`/`*file* `ftp://`*server*`[:`*port*`]/`*path*`/`*file* `file:///media/usb_msd/`*path*`/`*file*
`rmcert`	LDAP/SSL 用の認証ファイルを削除します。認証の削除を行うためには、`strictcertmode` は必ず無効のステータスになっている必要があります。
`group administrator`	グループ名を、最大 5 つの指定された管理者グループに対して割り当てます。管理者グループは、`platadm`、`useradm`、`auditadm` 権限を持ち、変更することはできません。
`group operator`	グループ名を、最大 5 つの指定されたオペレーターグループに対して割り当てます。オペレーターグループは、`platop`、`auditop` 権限を持ち、変更することはできません。
`group custom`	グループ名および権限を、最大 5 つのグループに対して割り当てます。
`userdomain`	ユーザードメインを構成します。後述する「使用例 6」で、重要な情報を参照してください。
`defaultrole`	デフォルトの権限を設定します。`defaultrole` が構成されている場合、ユーザーは、認証後に `defaultrole` によって指定された権限を持ち、ユーザーグループメンバーシップはチェックされません。`defaultrole` が構成されていない場合、ユーザーの権限は、グループメンバーシップに基づき LDAP/SSL サーバから得られる情報によって決定されます。
`timeout`	トランザクションのタイムアウト時間を、秒単位で設定します。*seconds* には 1 から 20 までの数値を指定できます。デフォルトは 4 です。設定したタイムアウト時間が構成上短すぎる場合は、ログイン作業、またはユーザー権限を設定するための検索に失敗することがあります。

`server` プライマリ、および最大 5 つの代替 LDAP/SSL サーバを設定します。ホストネームを使用するには、DNS が必ず有効になっている必要があります。IP アドレスをポート番号とともに指定することができます。指定を行わない場合、デフォルトのポートが使用されます。

`logdetail` LDAP/SSL の認証および認可の診断メッセージのロギングを、指定した詳細レベルで有効にします。このログは故障対応時に使用され、XSCF リセット時に消去されます。以下のいずれかのレベルを指定できます。

- `none` 診断メッセージを記録しません。通常のシステム動作中は、この設定を使用します。
- `high` 重大性が高い診断メッセージだけ記録します。
- `medium` 重大性が高い、および重大性が中程度の診断メッセージだけ記録します。
- `low` 重大性が高い、重大性が中程度、および情報を含む診断メッセージを記録します。
- `trace` 重大性が高い、重大性が中程度、情報を含む、およびトレースレベルの診断メッセージを記録します。

`log` [*options*] `clear` LDAP/SSL の認証および認可の診断メッセージのログファイルを消去します。

`strictcertmode` `strictcertmode` を有効または無効にします。このモードは、デフォルトでは無効になっており、チャネルは安全ですが、認証については限定的な妥当性確認が行われています。`strictcertmode` を有効にする場合、サーバの証明書は、サーバ認証が提示されたときに認証署名の妥当性確認が行えるよう、サーバにあらかじめアップロード済みとなっている必要があります。データは、`strictcertmode` が無効になっていても、常に保護されます。`strictcertmode` は、プライマリサーバ、および代替サーバに対しても同様に、適用されます。

`usermapmode` usermap の使用を有効または無効にします。有効にすると、識別名ではなく、`usermap` オペランドで指定したユーザー属性が、ユーザー認証時に使用されます。

`usermap` usermap のパラメーターを設定します。usermapmode が有効のときだけ設定します。以下のいずれかの値を指定できます。

`attributeInfo`

設定された属性情報をユーザーの検証に使用します。

`binddn`

設定された Distributed Name を LDAP/SSL サーバのバインドに使用します。

`bindpw`

設定されたパスワードをLDAP/SSLサーバのバインドに使用します。

`searchbase`

search base を設定します。

詳細については使用例を参照してください。

`default` LDAP/SSL 設定をリセットし、工場出荷時の設定に戻します。

使用例

使用例 1 デフォルト以外のポートを指定して、LDAP/SSL プライマリサーバを設定します。

```
XSCF> setldapssl server 10.1.12.250:4040
```

使用例 2 管理者グループ 3 の名前を設定します。

```
XSCF> setldapssl group administrator -i 3 name CN=spSuperAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 3 カスタムグループ 2 の名前を設定します。

```
XSCF> setldapssl group custom -i 2 name CN=spLimitedAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 4 カスタムグループ 2 の権限を設定します。

```
XSCF> setldapssl group custom -i 2 role auditadm,platop
```

使用例 5　代替サーバ 4 の認証情報をコンソールからロードします。

```
XSCF> setldapssl loadcert -i 4 console
Warning: About to load certificate for Alternate Server 4:
. Continue? [y|n]: y
Please enter the certificate:

-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIETjCCAzagAwIBAgIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFADB8MQswCQYDVQQGEwJVUzET
MBEGA1UECBMKQ2FsaWZvcm5pYTESMBAGA1UEBxMJU2FuIERpZWdvMRkwFwYDVQQK
ExBTdW4gTWljcm9zeXN0ZW1zMRUwEwYDVQQLEwxTeXN0ZW0gR3JvdXAxEjAQBgNV
...
-----END CERTIFICATE-----
CTRL-D
XSCF>
```

使用例 6　ユーザードメイン 2 を構成します。<USERNAME> はテンプレートであり、以下に示すとおり正確に入力する必要があります。認証中に、<USER-NAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。userdomain には、Distinguished Name（DN）だけ使用できます。

```
XSCF> setldapssl userdomain -i 2 \
'UID=<USERNAME>,OU=people,DC=aCompany,DC=com'
```

使用例 7　属性情報のユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap attributeInfo \
'(&(objectclass=person)(uid=<USERNAME>))'
```

使用例 8　Distributed Name とバインドするユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap binddn CN=SuperAdmin,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 9　パスワードとバインドするユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap bindpw b.e9s#n
```

使用例 10　search base のユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap searchbase OU=yoshi,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 11　指定した URI を使用して、LDAP/SSL 用のサーバ認証をロードします。

```
XSCF> setldapssl loadcert http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 12　ポート番号 8080 の http プロキシサーバを使用して、LDAP/SSL 用のサーバ認証をロードします。

```
XSCF> setldapssl loadcert -p webproxy.aCompany.com:8080 \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 13　ユーザー名とパスワードを使用して、LDAP/SSL 用のサーバ認証をロードし

ます。

```
XSCF>setldapssl loadcert -u yoshi \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 14 重大性が高い診断メッセージのロギングを設定します。

```
XSCF> setldapssl logdetail high
```

使用例 15 プロンプトには自動的に "y" と応答し、診断メッセージをログファイルから消去します。

```
XSCF> setldapssl log -y clear
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showldapssl(8)

名前 setlocale - XSCF のデフォルトのロケールを設定します。

形式 **setlocale** -s *locale*

setlocale -h

説明 setlocale(8) は、XSCF のデフォルトのロケールを設定するコマンドです。

設定できるロケールは英語または日本語です。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *locale*	XSCF のデフォルトのロケールを指定します。*locale* には以下のどちらかが指定できます。 C　ロケールを英語に設定します。 ja_JP.UTF-8　ロケールを日本語に設定します。

詳細説明

- 設定されたロケールは、次回のログイン以降で有効になります。
- showlocale(8) コマンドを使用すると、現在設定されているロケールが確認できます。

使用例

使用例 1　XSCF のデフォルトのロケールを英語に設定します。

```
XSCF> setlocale -s C
C
```

使用例 2　XSCF のデフォルトのロケールを日本語に設定します。

```
XSCF> setlocale -s ja_JP.UTF-8
ja_JP.UTF-8
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **showlocale**(8)

名前 setlocator - オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定します。

形式 **setlocator** *value*

setlocator -h

説明 setlocator(8) は、オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定するためのコマンドです。

以下の状態が設定できます。

点滅開始	CHECK LED を点滅させます。
点滅解除	CHECK LED の点滅を解除します

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

value	CHECK LED の状態を指定します。以下のどちらかを指定できます。	
	blink	CHECK LED を点滅させます。
	reset	CHECK LED の点滅を解除します。

詳細説明 showlocator(8) コマンドを使用すると、CHECK LED の状態を確認できます。

使用例 **使用例 1** CHECK LED を点滅させます。

```
XSCF> setlocator blink
```

使用例 2 CHECK LED の点滅を解除します。

```
XSCF> setlocator reset
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **showlocator**(8)

名前 setloginlockout - ログイン時のロックアウト機能を有効または無効にします。

形式

setloginlockout -s *time*

setloginlockout -h

説明 setloginlockout(8) は、ログインを 3 回続けて失敗したあとに、そのアカウントでログインできないようにする時間を、分で設定するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-s *time*　ユーザーアカウントのロックアウト時間を分単位で指定します。0 から 1440 （24 時間）の範囲で指定できます。デフォルトは 0 分で、ロックアウト機能は無効になっています。

詳細説明

- ログイン時のロックアウト機能を設定した場合、ユーザーは 3 回続けてログインを試みることができます。ログインプロンプトにユーザーアカウント名を入力し、Enter キーを押すことでログインが成立します。このとき、パスワードなしで入力したり、ログインがタイムアウトになったりした場合もログインとみなされます。3 回続けてログインに失敗すると、以降、設定された時間、ログインできなくなります。ロックアウト中でも、ログインプロンプトにユーザーアカウント名とパスワードを入力することはできますが、正しいパスワードを入力しても、ログインは受け付けられません。ロックアウト中にログインに失敗しても、ロックアウト時間が延長されることはありません。
- setloginlockout -s 0 はユーザーアカウントのロックアウト機能を無効にします。ロックアウト機能が無効になると、無限に、ログインおよび失敗を繰り返すことができます。
- ユーザーアカウントのロックアウト機能が無効になってから再び有効になった場合、ロックアウトされたユーザーは、無効後再び有効になるまでの間、ログインを試みることができます。しかし、ロックアウト機能が再び有効になるまでの間にログインを試みなかった場合は、変化はなく、ロックアウトの無効と再有効が起こらなかった場合と同じように、ロックアウトされたままとなります。

使用例

使用例 1　ロックアウトのタイムアウト時間を 90 分に設定します。

```
XSCF> setloginlockout -s 90
90 minutes
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showloginlockout(8)

名前 setlookup - 認証とユーザー権限に関する参照先を設定します。

形式

setlookup -a {local|ldap}

setlookup -p {local|ldap}

setlookup -h

説明 setlookup(8) は、認証とユーザー権限のデータが、Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）から参照されるかどうかを設定するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	認証の参照先を指定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p	ユーザー権限の参照先を指定します。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

ldap	参照先に LDAP を含めます。-a オプションまたは-p オプションと一緒に指定します。認証およびユーザー権限は最初に XSCF 内が参照され、見つからなかった場合は LDAP 内が参照されます。setlookup -a ldap または setlookup -p ldap を実行する前に、LDAP サーバが正しく設定されていることを確認してください。
local	参照先を XSCF とします。-a オプションまたは-p オプションと一緒に指定します。認証およびユーザー権限は XSCF 内だけ参照されます。

使用例 **使用例 1** ユーザー権限の参照先を LDAP に設定します。

```
XSCF> setlookup -p ldap
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setldap**(8), **showlookup**(8)

名前

setnameserver - XSCF ネットワークで使用される Domain Name System （DNS）サーバおよびサーチパスを設定します。

形式

setnameserver [-c add] *address...*

setnameserver -c del *address...*

setnameserver -c del -a

setnameserver -c addsearch *domainname...*

setnameserver -c delsearch *domainname...*

setnameserver -c delsearch -a

setnameserver -h

説明

setnameserver(8) は、XSCF ネットワークで使用される DNS サーバおよびサーチパスを設定するコマンドです。

XSCF では最大 3 つの DNS サーバを登録できます。サーチパスは最大 5 つまで登録できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	現在登録されている DNS サーバまたはサーチパスをすべて削除します。DNS サーバを削除する場合は "-c del" と、サーチパスを削除する場合は "-c delsearch" と一緒に使用します。
-c add	指定した IP アドレスのホストを DNS サーバに登録します。*address* と一緒に使用します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。DNS サーバを登録する場合は、既存の設定が削除され、指定した *address* が追加されます。
-c addsearch	指定したドメイン名をサーチパスに登録します。*domainname* と一緒に使用します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。サーチパスを登録する場合は、既存の設定が削除され、指定した *domainname* が追加されます。

`-c del`	指定した DNS サーバを削除します。`-c` オプションを省略した場合は "`-c add`" が指定されたとみなされます。複数の DNS サーバを削除する場合は、設定した順番に削除されます。使用例 3 を参照してください。
`-c delsearch`	指定したサーチパスを削除します。`-c` オプションを省略した場合は "`-c add`" が指定されたとみなされます。複数のサーチパスを削除する場合は、設定した順番に削除されます。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address	登録または削除する DNS サーバの IP アドレスを指定します。4 組の整数値の間に "." (ピリオド) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。スペースで区切って、最大 3 つまで指定できます。 *xxx.xxx.xxx.xxx* *xxx* 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。 ループバックアドレス (127.0.0.0/8)、ネットワークアドレス、またはブロードキャストアドレスを指定することはできません。
domainname	登録または削除するサーチパスのドメイン名を指定します。ドメイン名は RFC 1034 に準拠した形式で指定できます。ラベル要素には英字 (a から z, A から Z)、数字 (0 から 9)、または特殊文字を使用できます。使用できる特殊文字は "-" (ハイフン) と "." (ピリオド) です。先頭は英字、最後尾は英字または数字を使用してください。"." (ピリオド) は区切りとして使用します。ドメイン名はスペースで区切って、最大 5 つまで指定できます。指定できる文字の総数は 255 文字です。

詳細説明

- DNS サーバが複数登録されている場合は、登録された順番で名前解決が行われます。
- 登録されたサーチパスは、`nslookup`(8) コマンドを使用してホスト名を DNS サーバに照会するときなどに利用されます。`nslookup`(8) コマンドで指定するホスト名の後ろにサーチパスで登録されたドメイン名がつけられて、FQDN 形式で DNS サーバに照会されます。
- サーチパスが複数登録されている場合は、登録された順番にドメイン名がつけられて、DNS サーバに照会されます。
- DNS サーチパスを指定する場合は、必ず、DNS サーバを一緒に設定してください。

- sethostname(8) コマンドで設定する DNS ドメイン名と setnameserver(8) コマンドで設定するサーチパスは、合わせて 256 文字以内で指定してください。
- 設定した DNS サーバおよびサーチパスを XSCF に反映させるには、applynetwork(8) コマンドを実行します。applynetwork(8) コマンドで XSCF に反映したら、rebootxscf(8) コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。
- shownameserver(8) コマンドを使用すると、現在登録されている DNS サーバおよびサーチパスが確認できます。

使用例

使用例 1 IP アドレス 192.168.1.2, 10.18.108.10, 10.24.1.2 のホストを DNS サーバとして登録します。指定された順番に名前解決が行われます。

```
XSCF> setnameserver 192.168.1.2 10.18.108.10 10.24.1.2
```

使用例 2 IP アドレス 10.18.108.10 のホストを DNS サーバから削除します。

```
XSCF> setnameserver -c del 10.18.108.10
```

使用例 3 IP アドレス 10.24.1.2 のうち、先頭から 2 つの DNS サーバを削除します。この例は DNS サーバが複数登録された場合に使用します。

```
XSCF> shownameserver
nameserver 10.24.1.2
nameserver 10.24.1.2
nameserver 10.24.1.2
XSCF> setnameserver -c del 10.24.1.2 10.24.1.2
XSCF> shownameserver
nameserver 10.24.1.2
```

使用例 4 登録されているすべての DNS サーバを削除します。

```
XSCF> setnameserver -c del -a
```

使用例 5 ドメイン名 search1.com、search2.com、search3.com、search4.com、search5.com をサーチパスに登録します。

```
XSCF> setnameserver -c addsearch search1.com search2.com
search3.com search4.com search5.com
```

使用例 6 ドメイン名 search5.com をサーチパスから削除します。

```
XSCF> setnameserver -c delsearch search5.com
```

使用例 7 登録されているすべてのドメイン名をサーチパスから削除します。

```
XSCF> setnameserver -c delsearch -a
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **sethostname**(8), **shownameserver**(8)

名前

setnetwork - XSCF で使用されるネットワークインターフェースを設定または削除します。

形式

setnetwork [-m *addr*] *interface address*

setnetwork -c {up | down} *interface*

setnetwork [[-q] -{y|n}] -r *interface*

setnetwork -h

説明

setnetwork(8) は、XSCF で使用するネットワークインターフェースを設定または削除するコマンドです。

指定したネットワークインターフェースに対して、以下の内容を設定または削除できます。

- ネットワークインターフェースの有効または無効
- IP アドレス
- ネットマスク

IP アドレスやネットマスクを設定した場合は、設定と同時に、指定したネットワークインターフェースが有効となります。

ネットワークインターフェースを削除した場合は、削除と同時に、指定したネットワークインターフェースが無効となります。また、対象のネットワークインターフェースにルーティング情報が設定されている場合は、一緒に削除されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション　以下のオプションがサポートされています。

`-c {up|down}`　設定したネットワークインターフェースを有効にするかどうかを指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。

`up`	ネットワークインターフェースを有効にします。
`down`	ネットワークインターフェースを無効にします。

`-h`　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-m` *addr*　ネットマスクを指定します。*addr* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

`-m` オプションを省略した場合は、*address* オペランドで指定するアドレスによって、以下のネットマスク値が設定されます。

- 指定するアドレスがクラス A の場合（例 :20.1.1.1）
  ネットマスク値 255.0.0.0 が設定されます。
- 指定するアドレスがクラス B の場合（例 :136.18.1.1）
  ネットマスク値 255.255.0.0 が設定されます。
- 指定するアドレスがクラス C の場合（例 :200.18.108.1）
  ネットマスク値 255.255.255.0 が設定されます。

`-n`　プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。

`-q`　プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-r`　ネットワークインターフェースの、IP アドレスおよびネットマスクを削除します。

`-y`　プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

IP アドレスを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、ブロードキャストアドレス、またはクラス D、E アドレス（224.0.0.0 から 255.255.255.255）を指定することはできません。

interface

設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1

省略形 :

`lan#0`	XSCF-LAN#0
`lan#1`	XSCF-LAN#1

- M8000/M9000 サーバの場合

`-c` または `-r` オプションと、インター SCF ネットワーク（ISN）を一緒に指定するとエラーとなります。

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1
`xscf#0-if`	ISN

XSCF ユニット 1:

`xscf#1-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#1-lan#1`	XSCF-LAN#1
`xscf#1-if`	ISN

引継ぎ IP アドレス :

`lan#0`	XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレス
`lan#1`	XSCF-LAN#1 の引継ぎ IP アドレス

詳細説明

- 引継ぎ IP アドレスとは、M8000/M9000 サーバの場合に、XSCF が切り替えられていることを意識せずに使用できる IP アドレスのことです。アクティブな XSCF ユニットの各 LAN ポートを `lan#0`、`lan#1` に設定しておくことによって、`lan#0`、`lan#1` という名称でアクセスできるようになります。
- M3000/M4000/M5000 サーバの場合は、`lan#0` は `xscf#0-lan#0`、`lan#1` は `xscf#0-lan#1` で固定となります。

- ネットワークインターフェースを設定後、そのネットワークインターフェースを無効にして applynetwork(8) コマンドを実行すると、設定した IP アドレスやネットマスクの情報は XSCF へ保存されます。ネットワークインターフェースを有効にしたときに、設定した IP アドレスとネットマスクが使用されます。
- 以下の場合、setnetwork(8) コマンドはエラーとなります。
  - すでに設定されている IP アドレスと同じ IP アドレスを指定した場合
  - DSCP アドレスと同じサブネットを指定した場合
  - ISN と他のネットワークインターフェースに対して同じサブネットを指定した場合
  - -c または-r オプションと、ISN を一緒に指定した場合
  - -m *addr* で指定されたネットマスクが、以下のどちらにもあてはまらない場合

    最上位ビットだけが 1

    最上位ビットからの 1 の繰り返し
- M3000/M4000/M5000 サーバで、以下の場合は、applynetwork(8) コマンド実行時にエラーとなります。
  - xscf#0-lan#0 と xscf#0-lan#1 が down 状態の場合
  - xscf#0-lan#0 と xscf#0-lan#1 が up 状態の場合に、同じサブネットが設定されているとき
- M8000/M9000 サーバで、xscf#0-lan#0、xscf#1-lan#0、xscf#0-lan#1、xscf#1-lan#1 がすべて down 状態の場合は、applynetwork(8) コマンド実行時にエラーとなります。
- M8000/M9000 サーバで、up 状態のネットワークインターフェースが以下の設定の場合は、applynetwork(8) コマンド実行時にエラーとなります。
  - xscf#0-lan#0、xscf#1-lan#0、引継ぎ IP アドレス lan#0 のサブネットが異なる場合
  - xscf#0-lan#1、xscf#1-lan#1、引継ぎ IP アドレス lan#1 のサブネットが異なる場合
  - ISN のサブネットが異なる場合
  - xscf#0-lan#0、xscf#0-lan#1 のサブネットが同じ場合
  - xscf#1-lan#0、xscf#1-lan#1 のサブネットが同じ場合
- ISN 以外のインターフェースに対する IP アドレス、ネットマスクを指定した場合、ISN が未設定のときは、以下のデフォルト値が設定されます。
  - xscf#0-if:
    IP アドレス : 192.168.1.1　ネットマスク : 255.255.255.0
  - xscf#1-if:
    IP アドレス : 192.168.1.2　ネットマスク : 255.255.255.0
- shownetwork(8) コマンドを使用すると、XSCF に現在設定されているネットワークインターフェースの内容が確認できます。

- 設定したネットワークインターフェースの内容を反映させるには、applynetwork(8) コマンドを実行します。applynetwork(8) コマンドで XSCF に反映したら、rebootxscf(8) コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に IP アドレス 192.168.10.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork xscf#0-lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.10.10
```

使用例 2 M3000/M4000/M5000 サーバの、XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に IP アドレス 192.168.10.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.10.10
```

使用例 3 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 を無効にします。

```
XSCF> setnetwork xscf#0-lan#1 -c down
```

使用例 4 XSCFU ユニット 0 の ISN に、IP アドレス 192.168.10.128 を設定します。ネットマスクはデフォルト（255.255.255.0）となります。

```
XSCF> setnetwork xscf#0-if 192.168.10.128
```

使用例 5 XSCF ユニット 1 の XSCF-LAN#0 に IP アドレス 192.168.11.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork xscf#1-lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.11.10
```

使用例 6 XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレスに IP アドレス 192.168.1.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.1.10
```

使用例 7 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定された IP アドレス、ネットマスクを削除します。

```
XSCF> setnetwork -r xscf#0-lan#0
You specified '-r' interface remove option.
So, we delete routing information that interface corresponds.
Continue? [y|n] :y
If you choose 'y'es, you must execute 'applynetwork' command for
application.
Or you choose 'y'es, but you don't want to apply, you execute 'rebootxscf'
for reboot.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **rebootxscf**(8), **shownetwork**(8)

名前 setntp - XSCF ネットワークで使用される NTP サーバ、stratum 値、優先サーバ、および XSCF のローカルクロックのクロックアドレスを設定します。

形式

setntp [-c add] *address* ...

setntp -c del *address* ...

setntp -c del -a

setntp -c stratum -i *stratum_no*

setntp -m *type*= *value*

setntp -h

説明 setntp(8) は、XSCF に対する NTP 情報を設定するコマンドです。

setntp(8) コマンドでは、以下の NTP 情報が設定できます。

- XSCF ネットワークで使用される NTP サーバ

  最大 3 つの NTP サーバを登録できます。4 つ以上登録しようとした場合はエラーとなります。
- XSCF に設定される stratum 値
- 優先サーバを指定するかどうか
- XSCF のローカルクロックのクロックアドレス

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	現在登録されている NTP サーバをすべて削除します。"-c del" と一緒に使用します。
-c add	指定したアドレスまたはホスト名を NTP サーバに追加します。*address* と一緒に指定します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。NTP サーバを登録する場合は既存の設定が削除され、指定した *address* で上書きされます。
-c del	指定したアドレスまたはホスト名を NTP サーバから削除します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。複数の NTP サーバを削除する場合は、設定した順番に削除されます。使用例 4 を参照してください。
-c stratum	XSCF を NTP サーバとした場合の、stratum 値を設定します。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *stratum_no* stratum 値を指定します。"`-c stratum`" と一緒に指定します。`1` から `15` までの整数で指定できます。stratum 値を設定しない場合は、`5` となります。

`-m` *type=value* 優先サーバまたは XSCF のローカルクロックを設定します。*type* には以下のどちらかを指定できます。

`prefer`	同期する時点で、最初に登録されている NTP サーバを最優先にするかどうかを設定します。
`localaddr`	XSCF のローカルクロックを設定します。

type に `prefer` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`on`	最初に登録されている NTP サーバが最優先されます。以降は stratum 値の小さい NTP サーバから順番に優先されます。デフォルトは `on` です。
`off`	登録されている順番に関係なく、stratum 値の小さい NTP サーバから順番に優先されます。

type に `localaddr` を指定した場合、*value* にはローカルクロックのクロックアドレス 127.127.1.*x* の、最下位バイトを指定します。`0` から `3` までの数値で指定できます。デフォルトは `0` で、このときのローカルクロックのクロックアドレスは 127.127.1.0 となります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

追加または削除する NTP サーバの、IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスやホスト名は、スペースで区切って、最大 3 つまで指定できます。ホスト名は RFC 1034 に準拠した形式で指定できます。ホスト名を指定した場合は、名前解決ができるように設定しておく必要があります。

IP アドレスを指定する場合は、4 組の整数値の間に "." （ピリオド）をつけて指定します。以下の形式で指定できます。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx　0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、またはブロードキャストアドレスを指定することはできません。

"-c add" を指定して *address* を省略した場合はエラーとなります。

詳細説明

- M8000/M9000 サーバの場合、スタンバイ側の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF に異常が発生しているときはエラーとなります。
- 設定した内容を反映させるには、rebootxscf(8) コマンドを使用して、XSCF をリセットする必要があります。
- XSCF がリセットされると、XSCF の時刻が NTP サーバの時刻に同期されます。
- XSCF に NTP サーバを設定すると、XSCF 内で保持されている時刻差分によって、ドメインの時刻が変更される場合があります。resetdateoffset(8) コマンドを実行して、時刻の差分をリセットしてください。
- showntp(8) コマンドを使用すると、setntp(8) コマンドで現在設定されている、NTP 情報が確認できます。

使用例

使用例 1　3 つの NTP サーバ 192.168.1.2、10.18.108.10、10.24.1.2 を登録します。

```
XSCF> setntp 192.168.1.2 10.18.108.10 10.24.1.2
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 2　設定されている NTP サーバ 10.18.108.10 を削除します。

```
XSCF> setntp -c del 10.18.108.10
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 3　2 つの NTP サーバ ntp1.examples.com、ntp2.example.com を登録します。

```
XSCF> setntp ntp1.example.com ntp2.example.com
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 4　NTP サーバ 192.168.1.2 のうち、先頭のサーバを削除します。この例は NTP サーバが複数登録されている場合に使用します。

```
XSCF> shownntp -a
server 192.168.1.2
server 10.18.108.10
server 192.168.1.2
XSCF> setntp -c del 192.168.1.2
XSCF> shownntp -a
server 10.18.108.10
server 192.168.1.2
```

使用例 5　stratum 値を 7 に設定します。

```
XSCF> setntp -c stratum -i 7
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 6　NTP サーバの優先サーバの指定を解除します。

```
XSCF> setntp -m prefer=off
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 7　XSCF のローカルクロックのクロックアドレスを設定します。

```
XSCF> setntp -m localaddr=3
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **setnameserver**(8), **shownntp**(8)

名前

setpacketfilters - XSCF ネットワークで使用される IP パケットフィルタリングルールを設定します。

形式

setpacketfilters [[-q] -{y|n}] -c {add | del} [-i *interface*] [-s *address* [*/mask*]] -j *target*

setpacketfilters [[-q] -{y|n}] -c clear

setpacketfilters -h

説明

setpacketfilters(8) は、XSCF ネットワークで使用される IP パケットフィルタリングルールを設定するコマンドです。

IP パケットフィルタリングルールを設定することで、XSCF ネットワークへの不正アクセスを防止します。setpacketfilters(8) コマンドは実行するとすぐに設定が反映されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-c {add|del|clear}`

IP パケットフィルタリングルールに対する操作を指定します。以下のいずれかを指定できます。省略できません。

`add`	IP パケットフィルタリングルールを追加します。
`del`	IP パケットフィルタリングルールを削除します。
`clear`	設定されている IP パケットフィルタリングルールをすべて削除します。

`-h`

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *interface*

IP パケットフィルタリングルールを設定する、XSCF ネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1

省略形 :

`lan#0`	XSCF-LAN#0
`lan#1`	XSCF-LAN#1

- M8000/M9000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1

XSCF ユニット 1:

`xscf#1-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#1-lan#1`	XSCF-LAN#1

`-i` オプションを省略した場合は、以下のデフォルト値となります。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

  `xscf#0-lan#0、xscf#0-lan#1`

- M8000/M9000 サーバの場合

  `xscf#0-lan#0、xscf#0-lan#1、xscf#1-lan#0、xscf#1-lan#1`

-j *target*	受信した IP パケットがフィルタリングルールと一致した場合の動作を指定します。以下のどちらかを指定できます。 ACCEPT　IP パケットの通過を許可します。 DROP　IP パケットを破棄します。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s *address*[/*mask*]	IP パケットの送信元を指定します。IP アドレス、またはネットマスク（/*mask*）を付加したネットワーク IP アドレスのどちらかで指定できます。 IP アドレスおよびネットワーク IP アドレスは、4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。 -s オプションを省略した場合は、指定したネットワークインターフェース経由で受信したすべての IP パケットに対して、フィルタリングルールが適用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- IP パケットフィルタリングルールは、先に設定されたルールから優先されます。
- フィルタリングで制限をかける前に、必ず、許可する送信元を設定してください。最初に、許可する送信元を設定してから、破棄する IP パケットを設定します。設定する順番を逆にした場合は、すべての IP パケットが破棄され通信がぎなくなります。
- IP パケットフィルタリングルールを設定することにより、XSCF のネットワーク機能が使用できなくなることがあります。
- -i *interface* と -s *address*[/*mask*] の両方を省略した場合は、XSCF-LAN で受信されるすべての IP パケットに対してルールが適用されます。
- -s *address*[/*mask*] で指定したネットマスク値が、以下のどちらにもあてはまらない場合は、エラーとなります。
  - 最上位ビットだけが 1
  - 最上位ビットからの 1 の繰り返し
- すでに設定されている IP パケットフィルタリングルールと重複したルールは設定できません。
- IP パケットフィルタリングルールは最大 16 個まで設定できます。

- XSCF のリセットを促すメッセージが出力された場合は、rebootxscf(8) コマンドを使用して XSCF をリセットしてください。
- showpacketfilters(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークに現在設定されている IP パケットフィルタリングルールが表示されます。

使用例

使用例 1 IP アドレス 10.10.10.10 から送信された IP パケットを破棄します。

```
XSCF> setpacketfilters -c add -s 10.10.10.10 -j DROP
-s 10.10.10.10/255.255.255.255 -j DROP
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
XSCF>
```

使用例 2 M3000/M4000/M5000 サーバで、xscf#0-lan#0 への通信は、192.168.100.0/255.255.255.0 のネットワークから送信された IP パケットのみ許可します。

```
XSCF> setpacketfilters -c add -s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i
xscf#0-lan#0 -j ACCEPT
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i xscf#0-lan#0 -j ACCEPT
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
XSCF> setpacketfilters -c add -i xscf#0-lan#0 -j DROP
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i xscf#0-lan#0 -j ACCEPT
-i xscf#0-lan#0 -j DROP
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
XSCF>
```

使用例 3 IP アドレス 10.10.10.10 に設定された、IP パケットの破棄設定を削除します。

```
XSCF> showpacketfilters -a
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i xscf#0-lan#0 -j DROP
-s 10.10.10.10/255.255.255.255 -j DROP
XSCF>
XSCF> setpacketfilters -c del -s 10.10.10.10 -j DROP
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i xscf#0-lan#0 -j DROP
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
XSCF>
```

使用例 4 設定されている IP パケットフィルタリングルールをすべて削除します。

```
XSCF> setpacketfilters -c clear
(none)
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpacketfilters(8)

名前 setpasswordpolicy - システムのパスワードポリシーを管理します。

形式 **setpasswordpolicy** [-d *dcredit*] [-e *expiry*] [-i *inactive*] [-k *difok*] [-l *lcredit*] [-M *maxdays*] [-m *minlen*] [-n *mindays*] [-o *ocredit*] [-r *remember*] [-u *ucredit*] [-w *warn*] [-y *retry*]

setpasswordpolicy -h

説明 setpasswordpolicy(8) は、システムのパスワードポリシーを変更するコマンドです。

これらのポリシーは、サービスプロセッサ上の XSCF によって行われます。新しく設定されたパスワードポリシーは、setpasswordpolicy(8) コマンド実行後に追加されたユーザーアカウントに対して適用されます。

ユーザーを作成するとき、adduser(8) コマンドによって、*expiry*、*inactive*、*maxdays*、*mindays*、および *warn* のパラメーターが新しいアカウントのパスワード設定として使用されます。password(8) コマンドを使用して、既存アカウントのパスワード有効期限設定を変更することができます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-d *dcredit* パスワードに含まれる数字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる数字 1 文字ごとに、*dcredit* の値まで 1 ずつ減ります。有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は 1 です。使用例 2 を参照してください。

-e *expiry* 新しいアカウントの有効期限が切れて無効になるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 0 です。ゼロは、アカウントの有効期限が切れないことを意味します。有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-i *inactive* パスワードの有効期限が切れてからアカウントがロックされるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は -1 です。値が -1 の場合は、パスワードの有効期限が切れたあともアカウントがロックされないことを意味します。有効な値は、-1 から 999999999 までの整数です。

-k *difok*

新しいパスワードの中に、新しい文字（古いパスワードに含まれていなかった文字）が何文字以上含まれている必要があるかを設定します。初期設定値は 3 です。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

-l *lcredit*

パスワードに含まれる小文字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる小文字 1 文字ごとに、*lcredit* の値まで 1 ずつ減ります。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は 1 です。使用例 2 を参照してください。

-M *maxdays*

パスワードが有効である最大日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 999999 です。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

-m *minlen*

パスワードの字数枠が 1 つも適用されていない場合に、最小許容パスワード長を設定します。-d、-u、-l、-o オプションによって字数枠が指定された場合、必須パスワード長は、指定された文字タイプが使用されると減ります。

注 – パスワードは、字数枠に関係なく、6 文字以上で構成されなければなりません。

有効な値は、6 から 999999999 までの整数です。使用例 2 を参照してください。

-n *mindays*

パスワードを変更してから次に変更するまでの間の最小日数を設定します。このフィールドの初期値 0 は、いつでもパスワードを変更できることを示します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

-o *ocredit*

パスワードに含まれる英数字以外の文字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる英数字以外の文字 1 文字ごとに、*ocredit* の値まで 1 ずつ減ります。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は 1 です。使用例 2 を参照してください。

-r *remember*

パスワード履歴に記憶させるパスワードの数を設定します。

有効な最大値は 10 です。初期設定値は 3 です。

`-u` *ucredit*　パスワードに含まれる大文字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる大文字 1 文字ごとに、*ucredit* の値まで 1 ずつ減ります。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は `1` です。使用例 2 を参照してください。

`-w` *warn*　ユーザーにパスワードの有効期限の警告を発してから実際に有効期限が切れるまでのデフォルトの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 7 です。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

`-y` *retry*　`password` コマンドを使用してユーザーアカウント用のパスワードを変更する場合のパスワードの再試行を許可する回数を設定します。初期値は `3` 回です。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

使用例

使用例 1　記憶させるパスワードの最小サイズと数を設定します。

```
XSCF> setpasswordpolicy -m 12 -r 5
```

使用例 2　最小パスワード長と、文字種ごとの最大字数枠を設定します。

```
XSCF> setpasswordpolicy -m 10 -d 1 -u 0 -l 1 -o 1
```

このコマンドを実行すると、新しいパスワードの最小パスワード長は 10 文字になります。数字（または英数字以外の文字）を 1 文字以上含んでいる場合は、9 文字のパスワードが受け入れられます。数字 1 文字と、英数字以外の文字 1 文字を含んでいる場合は、8 文字のパスワードが受け入れられます。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

`0`	正常に終了したことを表します。
`>0`	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **password**(8), **showpasswordpolicy**(8)

名前

setpowerupdelay - 本体装置の暖機運転時間および起動までの待ち時間を設定します。

形式

setpowerupdelay -c warmup -s *time*

setpowerupdelay -c wait -s *time*

setpowerupdelay -h

説明

setpowerupdelay(8) は、本体装置の暖機運転時間および起動までの待ち時間を設定するコマンドです。

起動までの待ち時間は、コンピュータルーム内の空調が適温になってから本体装置を起動する、などの制御に利用できます。本体装置の電源がすでに投入され稼働している場合、設定した内容は次回の本体装置起動時に有効となります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c warmup	暖機運転時間を設定します。
-c wait	本体装置起動までの待ち時間を設定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *time*	暖機運転または起動までの待ち時間を分単位で指定します。*time* は 0 から 255 までの整数で指定できます。

詳細説明

- showpowerupdelay(8) コマンドを使用すると、本体装置が稼働中がどうかにかかわらず、setpowerupdelay(8) コマンドで現在設定されている、暖機運転時間および起動までの待ち時間が確認できます。
- オペレーターパネルから電源が投入された場合、暖機運転時間や起動までの待ち時間に設定した値は無視されます。これらの時間を設定して起動時に監視する場合は、poweron(8) コマンドを使用してください。

使用例

使用例 1 暖機運転時間を 10 分に設定します。

```
XSCF> setpowerupdelay -c warmup -s 10
```

使用例 2 起動までの待ち時間を 20 分に設定します。

```
XSCF> setpowerupdelay -c wait -s 20
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpowerupdelay(8)

名前 setprivileges - ユーザー権限を割り当てます。

形式 **setprivileges** *user* [*privileges*] [*domainprivilege* @ *domains*]

setprivileges -h

説明 setprivileges(8) は、XSCF ユーザーアカウントにユーザー権限を割り当てるコマンドです。

setprivileges(8) コマンドで変更できるのは、XSCF のユーザー権限データだけです。スペースで区切って複数のユーザー権限を指定できます。1 つのユーザー権限に対して、最大 100 ユーザーアカウントを割り当てることができます。1 ユーザーアカウントには、複数のユーザー権限を設定できます。ユーザー権限の一覧は、「オペランド」を参照してください。

domainop 権限、domainmgr 権限、domainadm 権限は、特定のドメインに対して割り当てなければなりません。他のユーザー権限には、この機能はありません。詳細については、「オペランド」および使用例 1 を参照してください。

ユーザー権限を指定しない場合、setprivileges(8) コマンドは指定したユーザーの XSCF 上の権限データをすべて削除します。その後、Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）へのユーザー権限の参照が有効になっている場合は、ユーザーの権限データが LDAP 内で参照されるようになります。

none を指定した場合は、LDAP 内の権限データの内容にかかわらず、指定したユーザーには権限が与えられません。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

domainprivilege@domains

特定の 1 つまたは複数のドメインに対し、domainadm 権限、domainmgr 権限、または domainop 権限を指定します。

以下は、*domainprivilege* に対する有効値です。それぞれ必ず *@domains* と一緒に指定します。

domainadm	権限を与えられたドメインに割り当てられている、ハードウェアに関するすべての操作（割当て、割当て解除、電源供給など）を実行できます。権限を与えられたドメインに割り当てられている、ハードウェアの状態をすべて表示できます。権限を与えられたドメインに関する、すべての操作を実行できます。権限を与えられたドメインの、すべての状態を表示できます。
domainmgr	権限を与えられたドメインの再起動、電源の投入や切断を実行できます。権限を与えられたドメインに割り当てられている、すべてのハードウェアの状態をすべて表示できます。権限を与えられたドメインのすべての状態を表示できます。
domainop	この権限を持つドメインに割り当てられているすべてのハードウェアの状態をすべて表示できます。この権限を持つすべてのドメインの状態をすべて表示できます。
domains	*domainprivilege* に対する適切な値に、@ 記号と *domains* 記述子をつけて、1 つまたは複数のドメインを指定します。 ドメインを指定するには、@ 記号の後ろにドメイン ID をつけて使用します。 例 : domainadm@3 ドメインを範囲で指定する場合は、範囲に含まれるドメインの始めと終わりを "-" で区切って指定します。 例 : domainadm@3-4 1 つのドメインやドメイン範囲を複数指定する場合は、カンマ（,）で区切ります。ドメインの指定が重複した場合はエラーとなります。 例 : domainadm@1-2,4

privileges

ユーザー権限の有効な値は以下のとおりです。

auditadm	監査を設定できます。監査トレールを削除できます。
auditop	すべての監査状態と監査トレールを表示できます。
fieldeng	保守作業者および当社技術員用に限定されているすべての操作を実行できます。
none	ユーザーに LDAP 内で権限が設定されている場合でも、ユーザー権限を必要とするサービスプロセッサに関する操作を一切実行できません。この権限を使用すると、サービスプロセッサおよびドメイン上でそのような操作にアクセスすることを管理者が制限できます。
platadm	useradm 権限と auditadm 権限で実行できる内容を除いた、すべての XSCF の設定を実行できます。ドメインにハードウェアを割り当てたり、ドメインからハードウェアの割当てを解除したりできます。ドメインと XSCF の電源供給に関する操作を実行できます。XSCF ユニットのフェイルオーバーに関する操作を実行できます。プラットフォームのすべての状態を表示できます。
platop	プラットフォームのすべての状態を表示できますが、変更はできません。
useradm	ユーザーアカウントの作成、削除、無効化、有効化ができます。ユーザーのパスワードとパスワードポリシーを変更できます。ユーザー権限を変更できます。

user

有効なユーザー名を指定します。

使用例

使用例 1 指定したユーザー（JSmith）についてユーザー権限を設定します。

```
XSCF> setprivileges jsmith platadm domainadm@1-4,6,9
```

使用例 2 指定したユーザーのすべての権限を削除します。

```
XSCF> setprivileges jsmith none
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setpasswordpolicy**(8), **showuser**(8)

名前 setroute - XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定します。

形式 **setroute** -c {add | del} -n *address* [-m *address*] [-g *address*] *interface*

setroute -h

説明 setroute(8) は、XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定するコマンドです。

ルーティング情報は、ネットワークインターフェースごとに最大 8 個まで登録できます。8 個を超えた場合はエラーとなります。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-c {add|del} ルーティング情報に対する機能を指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。

add	ルーティング情報を追加します。
del	ルーティング情報を削除します。

-g *address* ルーティングで使用されるゲートウェイアドレスを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、またはブロードキャストアドレスは指定できません。

ある特定のインターフェースに対するデフォルトルートを指定する場合、指定されたゲートウェイはそのインターフェースと同じネットワークの一部でなければなりません。たとえば、xscf#0-lan#0 が、IP アドレス 192.168.10.154、ネットマスク 255.255.255.0 の場合、指定されたゲートウェイもネットワーク 192.168.10.0/24 内である必要があります。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m *address*　ルーティング情報の宛先となるネットマスクを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

-m オプションを省略した場合、または宛先となる IP アドレスが 0.0.0.0 以外のときにネットマスクに 0.0.0.0 を指定した場合は、-n オプションで指定するアドレスによって、以下のネットマスクが設定されます。

- 指定するアドレスがクラス A の場合
  アドレスのホスト部（下位 24 ビット）が 0 の場合
  （例 :20.0.0.0）
  ネットマスク値 255.0.0.0 が設定されます。
  アドレスのホスト部（下位 24 ビット）が 0 以外の場合
  （例 :20.18.108.10）
  ネットマスク値 255.255.255.255 が設定されます。
- 指定するアドレスがクラス B の場合
  アドレスのホスト部（下位 16 ビット）が 0 の場合
  （例 :136.18.0.0）
  ネットマスク値 255.255.0.0 が設定されます。
  アドレスのホスト部（下位 16 ビット）が 0 以外の場合
  （例 :136.18.108.10）
  ネットマスク値 255.255.255.255 が設定されます。
- 指定するアドレスがクラス C の場合
  アドレスのホスト部（下位 8 ビット）が 0 の場合
  （例 :200.18.108.0）
  ネットマスク値 255.255.255.0 が設定されます。
  アドレスのホスト部（下位 8 ビット）が 0 以外の場合
  （例 :200.18.108.10）
  ネットマスク値 255.255.255.255 が設定されます。

-n オプションで 0.0.0.0 を指定した場合は、-m オプションに 0.0.0.0 を指定するか -m オプションを省略してください。

`-n` *address*　ルーティング情報の宛先となる IP アドレスを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

address に 0.0.0.0 を指定した場合は、デフォルトのルーティングが設定されます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface　設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1

省略形 :

`lan#0`	XSCF-LAN#0
`lan#1`	XSCF-LAN#1

- M8000/M9000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1

XSCF ユニット 1:

`xscf#1-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#1-lan#1`	XSCF-LAN#1

詳細説明

- 以下の場合、`setroute`(8) コマンドはエラーとなります。
  - 8 個を超えてルーティングを設定しようとした場合
  - `-m` *addr* で指定されたネットマスクが、以下のいずれにもあてはまらない場合
    - 最上位ビットだけが 1
    - 最上位ビットからの 1 の繰り返し
    - すべてのビットが 0
  - ISN に対してルーティングを設定した場合
  - ISN と同じサブネットを設定した場合
  - DSCP と同じサブネットを設定した場合
  - M8000/M9000 サーバで、引継ぎ IP アドレスにルーティングを設定した場合
- `setroute`(8) コマンドで追加したルーティング情報のみ削除できます。

- 設定したルーティング情報を XSCF に反映させるには、applynetwork(8) コマンドを実行します。applynetwork(8) コマンドで XSCF に反映したら、rebootxscf(8) コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。
- showroute(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークに現在設定されているルーティング情報が表示されます。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に対して、宛先に 192.168.1.0、ネットマスク 255.255.255.0 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xscf#0-lan#0
```

使用例 2 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、ゲートウェイ 192.168.1.1 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -g 192.168.1.1 xscf#0-lan#1
```

使用例 3 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、ネットマスクをデフォルト（255.255.255.0）としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 xscf#0-lan#1
```

使用例 4 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、ネットマスクをデフォルト（255.255.255.0）としたルーティングを削除します。

```
XSCF> setroute -c del -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xscf#0-lan#1
```

使用例 5 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.4 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.4 xscf#0-lan#1
```

使用例 6 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.4 としたルーティングを削除します。

```
XSCF> setroute -c del -n 192.168.1.4 xscf#0-lan#1
```

使用例 7 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、デフォルトのゲートウェイを 192.168.10.1 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 0.0.0.0 -g 192.168.10.1 xscf#0-lan#1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **applynetwork**(8), **showroute**(8)

名前

setshutdowndelay - 無停電電源装置（UPS）からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を設定します。

形式

setshutdowndelay -s *time*

setshutdowndelay -h

説明

setshutdowndelay(8) は、UPS が接続されたシステムで停電が発生した場合の、システムシャットダウン開始までの待ち時間を設定するコマンドです。

指定した時間までシャットダウンの開始を遅らせることができます。時間内に UPS から復電が通知された場合はシャットダウンされません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *time*	シャットダウン開始までの待ち時間を秒単位で指定します。*time* は 0 から 9999 までの整数で指定できます。デフォルトは 10 秒です。

詳細説明

showshutdowndelay(8) コマンドを使用すると、現在設定されている待ち時間が表示されます。

使用例

使用例 1　シャットダウン開始までの待ち時間を 600 秒に設定します。

```
XSCF> setshutdowndelay -s 600
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showshutdowndelay(8)

名前 setsmtp - Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）サービスを設定します。

形式 **setsmtp** [-v]

setsmtp [-s *variable*= *value*]...

setsmtp -h

説明 setsmtp(8) は、SMTP サービスを設定するコマンドです。

オプションを指定しないで使用した場合、使用する SMTP 電子メールサーバ名、発信電子メールで使用するポート名と Reply-To アドレスを入力するよう求められます。ここで指定する電子メールアドレスが有効なものであることを確認してください。-s オプションを指定すると、SMTP 設定値を非対話的にセットアップできます。

setsmtp(8) コマンドを使用して電子メールサーバとポートを設定したあとは、setemailreport(8) コマンドで電子メールレポートを設定してテストメールを送信できるようになります。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-s` *variable=value* SMTP を設定します。

variable の有効な入力は次のとおりです。

```
mailserver
port
auth
user
password
replyaddress
```

`mailserver` には IP アドレスまたはサーバ名を指定します。サーバ名を指定した場合は、名前解決ができるように設定する必要があります。

`port` には返信用のポートアドレスを指定します。

`auth` には認証方法を指定します。有効な値は以下のとおりです。

`none`、`pop`、`smtp-auth`

`user` および `password` には SMTP メールサーバに対する認証情報となるユーザー名およびパスワードを指定します。

`replyaddress` には返信アドレスを指定します。返信アドレスは、RFC 5322 の 3.4.1 章に準拠した形式で指定できます。

`-v` 詳細な情報を表示します。

詳細説明

`mailserver` の *value* にホスト名を指定する場合は、DNS サーバによって名前解決ができるようにしてください。

使用例

使用例 1 非対話型モードで、認証情報を指定せずに、メールサーバをセットアップします。

```
XSCF> setsmtp -s mailserver=10.4.1.1 -s auth=none
```

使用例 2 非対話型モードで、認証情報をセットアップします。

```
XSCF> setsmtp -s auth=pop -s user=jsmith -s password=******
```

使用例 3 対話モードで、SMTP 認証情報をセットアップします。

```
XSCF> setsmtp
Mail Server [10.4.1.1]:
Port [25]:
```

```
Authentication Mechanism [none]: smtp-auth
 User Name []: jsmith
 Password []: ******
Reply Address [useradm@company.com]:
```

使用例 4　無効な認証方法を使用して、メールサーバをセットアップします。

```
XSCF> setsmtp
Mail Server [10.4.1.1]:
Port [25]:
Authentication Mechanism [none]: ?
Invalid value '?'. Valid authentication mechanism are: none pop smtp-auth
Authentication Mechanism [none]:
Reply Address [useradm@company.com]:
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setemailreport(8), **setnameserver**(8), **showsmtp**(8)

名前 setsnmp - SNMP エージェントを管理します。

形式

setsnmp `enable` [*mib_name*]

setsnmp `disable` [*mib_name*]

setsnmp `addtraphost -t` type `-s` *community-string* [`-p` *trap-port*] *traphost*

setsnmp `remtraphost -t` type *traphost*

setsnmp `addv3traphost -u` *username* `-r` *authentication-protocol* {`-n` *engine_id* | `-i`} [`-a` *authentication-password*] [`-e` *encryption-password*] [`-p` *trap-port*] *traphost*

setsnmp `remv3traphost -u` *username* *traphost*

setsnmp `enablev1v2c` *read-only-community-string*

setsnmp `disablev1v2c`

setsnmp [`-l` *system-location*] [`-c` *system-contact*] [`-d` *system-description*] [`-p` *agent-port*]

setsnmp `default`

setsnmp `-h`

説明 `setsnmp`(8) は、SNMP エージェントの設定値を定義するだけでなく、SNMP エージェントを有効または無効にするコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-c` *system-contact*	エージェントのシステムの連絡先を指定します。
`-d` *system-description*	エージェントのシステムの説明を指定します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-l` *system-location*	エージェントのシステムの場所を指定します。
`-p` *agent-port*	エージェントのリスニングポートを指定します。デフォルトは `161` です。
`-s` *community-string*	SNMP v1 エージェントと v2 エージェントへのアクセスを制御するパスワードに似た働きをします。インターセプト可能なプレーンテキスト文字列です。パスワード暗号化と非可視性には、`addv3traphost` を使用します。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

`addtraphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、選択されたタイプのトラップの送信を有効にします。*trap-port* を指定しない場合、デフォルトは `162` です。コミュニティーストリングは必須です。

`addtraphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-p` *trap-port*
トラップポートの ID を指定します。デフォルト値は `162` です。

`-s` *community-string*
SNMP v1 エージェントと v2 エージェントへのアクセスを制御するパスワードに似た働きをします。インターセプト可能なプレーンテキスト文字列です。パスワード暗号化と非可視性には、`addv3traphost` を使用します。

`-t` *type*
トラップのタイプを指定します。有効なトラップのタイプは以下のとおりです。

- `v1` = エージェントは SNMPv1 トラップを送信します。
- `v2` = エージェントは SNMPv2 トラップを送信します。
- `inform` = エージェントは情報通知を送信します。

`addtraphost` には以下のオペランドがあります。

traphost トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

`addv3traphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、SNMPv3 トラップの送信または通知を有効にします。認証プロトコルを選択する必要があります。有効なプロトコルは以下のとおりです。

`MD5` = 認証に MD5 アルゴリズムを使用します。

`SHA` = 認証に Secure Hash Algorithm（SHA）を使用します。

すべての通信で使用される暗号化プロトコルは Data Encryption Standard（DES）です。パスワードオプションを使用しない場合、パスワードを入力するように求められます。パスワードは読み取られますが、画面にエコーされません。`addv3traphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-a` *authentication-password*
: 認証パスワードを設定します。8 文字以上である必要があります。

`-e` *encryption-password*
: 暗号化パスワードを設定します。

`-i`
: 受信側のホストに肯定応答を要求します。

`-n` *engine_id*
: トラップを送信するローカルエージェントの ID を設定します。ローカル SNMP エージェントのエンジン ID を指定できますが、これを指定しない場合でも、受信側のホストから期待されるエンジン ID と一致している必要があります。「0x」で始まり、偶数の 16 進文字で構成されている必要があります。そうでない場合、エラーになります。

`-p` *trap-port*
: トラップポートの ID を指定します。デフォルト値は `162` です。

`-r` *authentication-protocol*
: 認証プロトコルを設定します。

`-u` *username*
: ユーザー名を指定します。

traphost
: トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

`default` SNMP エージェントを停止し、SNMP を工場出荷時の設定に戻します。このオペランドを使用したあとは、SNMP エージェントを再起動する前に、SNMP を再構成する必要があります。

`setsnmp default` を使用すると、Sun MC が稼働しているサーバでは、Sun MC のための SNMP エージェントも停止されます。Sun MC の構成には影響しませんが、Sun MC のための SNMP エージェントを再び有効にするために、`-s` オプションをつけて `setsunmc`(8) コマンドを実行します。"`setsunmc -s` <*sunmc-server*>" の *sunmc-server* は以前設定したサーバホスト名です。そのあと、`setsnmp enable` を実行してから、`setsunmc enable` を実行します。詳細については、`setsunmc`(8) コマンドを参照してください。

`disable` 単独で使用される場合、SNMP エージェントを停止します。

オプションの *mib_name* の値 `ALL` と一緒に使用される場合、SNMP エージェントを停止します。

オプションの *mib_name* の `ALL` 以外の値と一緒に使用される場合、対象 MIB モジュールのサポートを削除します。別の MIB モジュールのサポートが維持されている場合、SNMP エージェントは有効のままです。両方の MIB モジュールのサポートが削除されると、SNMP エージェントは無効になり、停止します。*mib_name* は一度に 1 つだけ指定できます。

mib_name
無効にする MIB モジュールの名前です。有効な MIB モジュールは以下のとおりです。

- `SP_MIB` = XSCF 拡張 MIB
- `FM_MIB` = Fault Management MIB
- `ALL` = この一覧内のすべての MIB モジュール

`disablev1v2c` SNMPv1 または SNMPv2c を使用した SNMP エージェントの通信を無効にします。これらのバージョンを使用した SNMP 通信は安全ではありません。

`enable` 単独で使用される場合、すべての MIB モジュールをサポートする SNMP エージェントを有効にします。

オプションの *mib_name* の値 `ALL` と一緒に使用される場合、すべての MIB モジュールをサポートする SNMP エージェントをアクティブにします。

オプションの *mib_name* の `ALL` 以外の値と一緒に使用される場合、対象 MIB モジュールのサポートを追加し、必要に応じて SNMP エージェントを有効にします。*mib_name* は一度に 1 つだけ指定できます。

mib_name
有効にする MIB モジュールの名前です。指定できる MIB モジュールは以下のとおりです。

- `SP_MIB` = XSCF 拡張 MIB
- `FM_MIB` = Fault Management MIB
- `ALL` = この一覧内のすべての MIB モジュール

`enablev1v2c` SNMPv1 または SNMPv2c を使用した SNMP エージェントの通信を有効にします。これらのバージョンを使用した SNMP 通信は安全ではありません。したがって、エージェントはデフォルトで SNMPv3 を実行します。このエージェントは読み取り専用です。唯一要求されるコミュニティーストリングは読み取り専用です。

`remtraphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、選択されたタイプのトラップの送信を無効にします。`remtraphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-t` *type*
トラップのタイプを指定します。有効なトラップのタイプは以下のとおりです。

- `v1` = エージェントは SNMPv1 トラップを送信します。
- `v2` = エージェントは SNMPv2 トラップを送信します。
- `inform` = エージェントは情報通知を送信します。

traphost
トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

`remv3traphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、SNMPv3 トラップの送信を無効にします。`remv3traphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-u` *username*
ユーザー名を指定します。

traphost
トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

使用例

使用例 1　システム情報を設定します。

```
XSCF> setsnmp -l sandiego -c username@company.com -d ff1
```

使用例 2　パスワードオプションを使用して SNMPv3 トラップホストを設定します。

```
XSCF> setsnmp addv3traphost -u jsmith -n 0x### -r SHA -a xxxxxxxx
-e yyyyyyyy fiche
```

使用例 3　パスワードオプションを使用しないで SNMPv3 トラップホストを設定します。

```
XSCF> setsnmp addv3traphost -u bob -i -r SHA fiche
Authentication Password:
Encryption Password:
```

使用例 4　SNMP エージェントを有効にします。

```
XSCF> setsnmp enable SP_MIB
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnmp(8)

名前 setsnmpusm - SNMPv3 エージェントの User-based Security Model（USM）設定します。

形式

setsnmpusm `create -a` *authentication_protocol* [`-p` *authentication_password*] [`-e` *encyrption_password*] *user*

setsnmpusm `delete` *user*

setsnmpusm `clone -u` *clone_user* *user*

setsnmpusm `passwd` [`-c {auth|encrypt}`] [`-o` *old_password*] [`-n` *new_password*] *user*

setsnmpusm `-h`

説明 `setsnmpusm`(8) は、SNMP エージェントの USM を設定するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

`clone` 指定したユーザーが、指定した *clone_user* と同じ設定で、以降の SNMP 通信でエージェントに認識されるようにします。

- `-u` *clone_user* クローンを作成するユーザー名を指定します。
- *user* *clone_user* のクローンを作成するための別のユーザー名を指定します。

`create` 指定した設定で、以降の SNMP 通信でエージェントに認識されるユーザーを作成します。`-a` オプションまたは `-p` オプションを指定しないで使用する場合、パスワードを求めるプロンプトが表示され、パスワードが読み取られますが、画面にはエコーされません。すべての SNMP 通信で使用される暗号化プロトコルは Data Encryption Standard（DES）です。`setsnmpusm`(8) コマンドでは、SNMP 通信用の認証プロトコルを使用します。MD5 アルゴリズムまたは Secure Hash Algorithm（SHA）のどちらかを指定できます。

user
ユーザー名を指定します。

`-a` *authentication_protocol*
認証プロトコルを指定します。`MD5` または `SHA` のどちらかを指定できます。

`-e` *encryption_password*
暗号化パスワードを指定します。`8` 文字以上で指定します。

`-p` *authentication_password*
認証パスワードを指定します。`8` 文字以上で指定します。

`delete` 指定したユーザーを以降の SNMP 通信でエージェントに認識されないようにします。

user ユーザー名を指定します。

`passwd` 指定したユーザーのパスワードを変更します。変更できるパスワードは、認証パスワードまたは暗号化パスワードのどちらかです。`-c` オプションを指定していない場合は、両方になります。`-c` オプションを指定していない場合、認証パスワードと暗号化パスワードが一致している必要があります。そうでない場合はエラーとなります。オプションを指定しない場合、パスワードを求めるプロンプトが表示されます。パスワードは読み取られますが、画面には表示されません。

`-c auth|encrypt`
変更するパスワードを指定します。認証パスワードの場合は `auth`、暗号化パスワードの場合は `encrypt` を指定します。

`-n` *new_password*
新しいパスワードを指定します。`8` 文字以上で指定します。

`-o` *old_password*
古いパスワードを指定します。

user
ユーザー名を指定します。

使用例

使用例 1　パスワードを指定してユーザーを追加します。

```
XSCF> setsnmpusm create -a SHA -p xxxxxxxx -e yyyyyyyy jsmith
```

使用例 2　パスワードを指定しないでユーザーを追加します。

```
XSCF> setsnmpusm create -a SHA bob
Authetication Password:
Encryption Password:
```

使用例 3　ユーザーのクローンを作成します。

```
XSCF> setsnmpusm clone -u sue joe
Authentication Password:
Encryption Password:
```

使用例 4　ユーザーを削除します。

```
XSCF> setsnmpusm delete joe
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnmpusm(8)

名前 setsnmpvacm - SNMPv3 エージェントの View-based Access Control Model（VACM）設定を変更します。

形式

setsnmpvacm `creategroup -u` *username groupname*

setsnmpvacm `deletegroup -u` *username groupname*

setsnmpvacm `createview -s` *OID_subtree* [`-e`] [`-m` *OID_Mask*] *viewname*

setsnmpvacm `deleteview -s` *OID_subtree viewname*

setsnmpvacm `createaccess -r` *read_viewname groupname*

setsnmpvacm `deleteaccess` *groupname*

setsnmpvacm `-h`

説明 `setsnmpvacm`(8) は、SNMP エージェントの VACM を設定するコマンドです。

このコマンドを使用するには、SNMP の基礎知識が必要です。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

`createaccess` 指定したグループの MIB ビューへのアクセスを設定します。

- `-r` *read_viewname* — SNMP エージェントビューを指定します。
- *groupname* — 有効なグループ名を指定します。

`creategroup` 指定したユーザーのグループのビューアクセスをセットアップします。

- `-u` *username* — 有効なユーザー名を指定します。
- *groupname* — 有効なグループ名を指定します。

`createview` SNMP エージェントに関するエクスポート済み MIB 情報のビューをセットアップします。このエージェントのビューアクセスは、読み取り専用に制限されています。ビューは MIB OID サブツリーによって識別され、OID マスクを使用してそのサブツリーの特定部分に制限することができます。

`-e`	除外するビューを指定します。デフォルトは、含めるビューです。
`-m` *OID_Mask*	有効な OID サブツリーマスクを指定します。デフォルトでは、マスクは `ff`（サブツリー全体）です。
`-s` *OID_subtree*	MIB OID サブツリーを指定します。MIB ツリー全体において、値は `.1` で始まります。
viewname	有効なビュー名を指定します。

`deleteaccess` アクセスエントリーを削除します。

groupname	有効なグループ名を指定します。

`deletegroup` グループを削除します。

`-u` *username*	有効なユーザー名を指定します。
groupname	有効なグループ名を指定します。

`deleteview` ビューを削除します。

`-s` *OID_subtree*	MIB OID サブツリーを指定します。MIB ツリー全体において、値は `.1` で始まります。
viewname	有効なビュー名を指定します。

使用例

使用例 1 ビューアクセスのグループを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm creategroup -u jsmith admin
```

使用例 2 MIB 全体のビューを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createview -s .1 all_view
```

使用例 3 サブツリーを除外したビューを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createview -e -s .1.3.6.1.2.1.1 -m fe excl_view
```

使用例 4 MIB ビューへのアクセスを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createaccess -r all admin
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnmpvacm(8)

名前

setssh - XSCF ネットワークで使用する Secure Shell（SSH）サービスに関する設定を行います。

形式

setssh [[-q] -{y|n}] -c enable

setssh -c disable

setssh [[-q] -{y|n}] -m dscp= *mode*

setssh -c addpubkey [-u *user_name*]

setssh -c delpubkey {-a | -s *line* } [-u *user_name*]

setssh [[-q] -{y|n}] -c genhostkey [-b *bits*]

setssh -h

説明

setssh(8) は、XSCF ネットワークで使用する SSH サービスに関する設定を行うコマンドです。

XSCF では SSH2 だけサポートされます。以下の内容を設定できます。

- SSH サービスの開始または停止
- ドメインから SSH サービスへのアクセス制御

  ドメインー SP 通信プロトコル（DSCP）を経由して、ドメインから SSH サービスへのアクセスを許可するかどうかを設定します。
- SSH サービスに必要なホスト鍵の生成

  1024 ビットまたは 2048 ビットのどちらかを指定できます。DSA ホスト鍵のサイズは 1024 ビットで固定です。
- ユーザー公開鍵の登録

  ユーザー公開鍵はユーザーアカウントごとに登録できます。また、1 ユーザーアカウントに対して、複数のユーザー公開鍵を登録できます。1 ユーザーアカウントあたり、改行を含んだ最大 1023 文字数分まで、ユーザー公開鍵を登録することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- SSH サービスの開始または停止、ドメインから SSH サービスへのアクセス制御、ホスト鍵の生成 :
  platadm
- 他のユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の登録または削除 :
  useradm
- 現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の登録または削除 :
  useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-a`	登録されているすべてのユーザー公開鍵を削除します。"`-c delpubkey`" と一緒に指定します。
`-b` *bits*	作成する RSA ホスト鍵のサイズを指定します。*bits* には 1024 または 2048 を指定できます。省略した場合は 1024 ビットとみなされます。XCP 1110 以降でサポートされます。
`-c addpubkey`	ユーザー公開鍵を登録します。
`-c delpubkey`	ユーザー公開鍵を削除します。
`-c genhostkey`	ホスト鍵を生成します。
`-c {enable|disable}`	SSH サービスの開始または停止を指定します。以下のどちらかを指定できます。 `enable` SSH サービスを開始します。 `disable` SSH サービスを停止します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-m dscp=`*mode*	DSCP を経由して、ドメインから SSH サービスへのアクセスを許可するかどうかを指定します。以下のどちらかを指定できます。デフォルトは `accept` に設定されています。 `accept` SSH サービスへのアクセスを許可します。 `deny` SSH サービスへのアクセスを禁止します。
`-n`	プロンプトに対して自動的に "`n`"（no）と応答します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-s` *line*	削除するユーザー公開鍵の番号を指定します。*line* には、`showssh -c pubkey` コマンドを実行したときに表示される番号を指定します。"`-c delpubkey`" と一緒に指定します。
`-u` *user_name*	ユーザー公開鍵を登録、削除するユーザーアカウント名を指定します。"`-c addpubkey`" または "`-c delpubkey`" と一緒に指定します。`-u` オプションを省略した場合は、現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵が対象となります。
`-y`	プロンプトに対して自動的に "`y`"（yes）と応答します。

詳細説明

- Active Directory または LDAP/SSL ユーザーは、ユーザー公開鍵を登録できません。ユーザー公開鍵による認証ではなく、パスワード認証を使用して XSCF に SSH に接続し、ログインしてください。
- 2048 ビットの RSA ホスト鍵は、XCP 1110 以降でサポートされます。

  2048 ビットの RSA ホスト鍵が登録された XSCF ユニットを XCP 1110 より古いファームウェアが動作する XSCF ユニットに交換した場合、ホスト鍵が対応しないことを示す警告が出力され、SSH 接続時に、1024 ビットのホスト鍵が再生成されます。この警告は、XCP 1110 以降へのファームウェアアップデートが完了すると出力されなくなり、SSH 接続時に、2048 ビットの RSA ホスト鍵が復元されます。
- ホスト鍵を生成する場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- すでにホスト鍵が存在する場合にホスト鍵を生成すると、更新するかどうかのプロンプトが表示されます。更新する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- setssh(8) コマンドで一度に登録できるユーザー公開鍵は、1 つです。
- setssh(8) コマンド実行時のユーザー公開鍵の入力は、Enter キーを押してから "Ctrl" と "D"（EOF）を押して終了します。
- XSCF ユニットが二重化構成の場合は、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。
- ホスト鍵を生成と SSH サービスの停止は、setssh(8) コマンド実行直後に反映されます。サービス停止時に、開いている SSH セッションがある場合は切断されます。

  その他の設定は、rebootxscf(8) コマンドで XSCF をリセットすると反映されます。
- showssh(8) コマンドを使用すると、SSH サービスで現在設定されている内容が確認できます。

使用例

使用例 1　SSH サービスを開始します。

```
XSCF> setssh -c enable
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

使用例 2　SSH サービスを開始します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -y -c enable
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

使用例 3　SSH サービスを開始します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自

動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -q -y -c enable
```

使用例 4 SSH サービスを停止します。

```
XSCF> setssh -c disable
```

使用例 5 ホスト鍵を生成します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey
Host key create. Continue? [y|n] :y
```

使用例 6 2048 ビットの RSA ホスト鍵を生成します。DSA ホスト鍵は 1024 ビットで生成されます。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -b 2048
Host key create. Continue? [y|n] :y
```

使用例 7 すでにホスト鍵が存在する場合に、ホスト鍵を生成します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -y
Host key already exists. The key will be updated. Continue? [y|n] :y
```

使用例 8 ホスト鍵を生成します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -q -y
```

使用例 9 ユーザー公開鍵を登録します。公開鍵の入力は、Enter キーを押してから、"Ctrl" と "D" キーを押して終了します。

```
XSCF> setssh -c addpubkey
Please input a public key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
[Enter]
[Ctrl]and[D]
```

使用例 10 ユーザー名を指定してユーザー公開鍵を登録します。公開鍵の入力は、Enter キーを押してから、"Ctrl" と "D" キーを押して終了します。

```
XSCF> setssh -c addpubkey -u efgh
Please input a public key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
```

```
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
[Enter]
[Ctrl]and[D]
```

使用例 11　公開鍵番号を指定して、ユーザー公開鍵を削除します。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -s 1
 1  ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
```

使用例 12　すべてのユーザー公開鍵を削除します。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -a
```

使用例 13　DSCP を経由したドメインから SSH サービスへのアクセスを禁止します。

```
XSCF> setssh -m dscp=deny
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showssh**(8)

名前 setsunmc - Sun Management Center エージェントを起動または停止し、エージェントの設定を変更します。

形式 **setsunmc** [`enable|disable`]

setsunmc [`-s` *server*] [`-z` *seed*] [`-p` *agent_port*] [`-c` *community_string*] [`-t` *trap_port*] [`-e` *event_port*] [`-a` *SNMP_agent_port*] [`-d` *dmn_agent_port*]

setsunmc `-h`

説明 オプションを 1 つ以上指定して記述すると、「オプション」の項で説明した内容に従って、`setsunmc`(8) コマンドは Sun Management Center エージェントの設定を変更します。

オペランド `enable` を指定して実行すると、`setsunmc`(8) コマンドは Sun Management Center エージェントをアクティブにします。このアクティブ化には、Sun Management Center エージェントが起動すること、エージェントの起動が以降の再起動時にスタートアップデーモンに通知されることが含まれます。オペランド disable を指定して実行すると、エージェントが停止され、エージェントの起動が以降の再起動時に無効になることがスタートアップデーモンに通知されます。

オペランドは、オプションと一緒に使用することはできません。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

オプションは、オペランドと一緒に使用することはできません。

`-a` *SNMP_agent_port* SNMP エージェントのリスニングポートを指定します。デフォルト値は `161` です。この値は、SNMP エージェントのポートを変更する場合のみ変更してください。

`-c` *community_string* SMNP で設定された、SNMPv1 のトラップホストに使用されるコミュニティーストリングを指定します。デフォルト値は `public` です。

`-d` *dmn_agent_port* ドメイン上で動作中の Sun Management Center エージェントのポートを指定します。デフォルト値は `1161` です。このドメインエージェントポートは、構成オブジェクトの生成中に使用されます。Sun Management Center ドメインエージェントは通常、構成オブジェクトドメインの生成を確実なものにするために同じポートを使います。

`-e` *event_port* イベントの送信先となる、Sun Management Center サーバ上のポートを指定します。デフォルト値は `163` です。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p *agent_port*	Sun Management Center エージェントがリッスンするポートの番号を指定します。デフォルト値は 1161 です。
-s *server*	エージェントの通信相手となる Sun Management Center サーバを指定します。サーバは、ホスト名と IP アドレスのどちらを使用して指定してもかまいません。このサーバは、エージェントを有効にする前に設定する必要があります。
-t *trap_port*	トラップの送信先となる、Sun Management Center サーバ上のポートを指定します。デフォルト値は 162 です。
-z *seed*	セキュリティキーを生成するためのシードを指定します。このキーは、Sun Management Center のサーバとエージェント間で通信に使用されます。この値は、サーバセットアップで使用したシードと同じものにする必要があります。シードは、エージェントを有効にする前に設定する必要があります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。オペランドは、オプションと一緒に使用することはできません。

enable	オペランド enable を指定して実行すると、setsunmc(8) コマンドは Sun Management Center エージェントをアクティブにします。これは、Sun Management Center エージェントが起動し、エージェントの起動が以降の再起動時にスタートアップデーモンに通知されることを意味します。
disable	オペランド disable を指定して実行すると、setsunmc(8) コマンドはエージェントを停止し、エージェントの起動が以降の再起動時に無効になることをスタートアップデーモンに通知します。

使用例

使用例 1 引数を指定してセットアップします。

```
XSCF> setsunmc -s balon -z maplesyr -c double_secret
```

使用例 2 エージェントを起動します。

```
XSCF> setsunmc enable
```

終了ステータス

終了値は返されません。

関連項目

showsunmc(8)

名前

settelnet - XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止します。

形式

settelnet -c {enable | disable}

settelnet -h

説明

settelnet(8) は、XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {enable|disable}　Telnet サービスを開始または停止するかどうかを指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。

enable	Telnet サービスを開始します。
disable	Telnet サービスを停止します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

注意 – Telnet サービスを停止する場合は、必ず、rebootxscf(8) コマンドを実行して XSCF をリセットしてください。XSCF をリセットしないと、次回 Telnet サービスを開始するときに問題が発生することがあります。

- M8000/M9000 サーバの場合は、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。
- Telnet サービスの停止は、settelnet(8) コマンド実行直後に反映されます。このとき、開いている Telnet セッションがある場合は切断されます。
- showtelnet(8) コマンドを使用すると、Telnet サービスで現在設定されている内容が確認できます。

使用例

使用例 1　Telnet サービスを開始します。

```
XSCF> settelnet -c enable
```

使用例 2　Telnet サービスを停止します。

```
XSCF> settelnet -c disable
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the telnet settings.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showtelnet**(8)

名前 settimezone - XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定します。

形式

settimezone -c settz -s *timezone*

settimezone -c settz -a [-M]

settimezone -c adddst -b *std* -o *offset* -d *dst* [-p *offset*] -f *date* [*/time*] -t *date* [*/time*]

settimezone -c deldst -b *std* -o *offset*

settimezone -h

説明 settimezone(8) は、XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定するコマンドです。

標準で用意されているタイムゾーンは POSIX 規格に準拠しています。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	設定可能なタイムゾーンを一覧表示します。
-c settz	POSIX 規格に準拠したタイムゾーンを設定します。タイムゾーンは settimezone(8) コマンド実行直後に反映されます。
-c adddst	手動でタイムゾーンとサマータイムを設定します。 -b、-o、-d、-p、-f、-t オプションで指定したタイムゾーン情報に基づいてサマータイムが設定されます。手動でサマータイムを設定した場合、"-c settz" で設定されたタイムゾーン情報は無視されます。settimezone(8) コマンド実行後 XSCF へログインしなおすと、設定内容が反映されます。
-c deldst	手動で設定したタイムゾーンとサマータイムを削除します。手動で設定されたサマータイムが削除されると、XSCF は "-c settz" で設定されたタイムゾーンで動作するようになります。 settimezone(8) コマンド実行後 XSCF へログインしなおすと、設定内容が反映されます。
-b *std*	タイムゾーンの略称を指定します。*std* はアルファベット 3 文字以上で指定します。RFC2822 に準拠した形式で指定できます。"-c adddst" または "-c deldst" と一緒に指定します。
-d *dst*	サマータイムゾーン名を指定します。*dst* はアルファベット 3 文字以上で指定します。RFC2822 に準拠した形式で指定できます。"-c adddst" と一緒に指定します。

-f *date* [*/time*]　サマータイムの開始時間を指定します。-t オプションの *date* と同じ形式で指定します。*date* は以下のいずれかの形式で指定できます。

M*m.w.d*

M*m*: サマータイムを開始する月を指定します。*m* は 1 から 12 までの数値で指定できます。
w: サマータイムを開始する週を指定します。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で指定できます。
d: サマータイムを開始する曜日を指定します。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で指定できます。

J*n*

J*n*: サマータイムを開始する日にちを指定します。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。365 を指定した場合は、うるう年であっても 12 月 31 日となります。

n

n: サマータイムを開始する日にちを指定します。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time には時刻を指定します。以下の形式で指定できます。

hh:mm:ss　" 時間 : 分 : 秒の形式 " で指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* は 0 から 59、*ss* は 0 から 60 です。省略した場合は、02:00:00 となります。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-M　テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

-o *offset*

タイムゾーンとグリニッジ標準時（GMT）とのオフセットを指定します。"-c adddst" または "-c deldst" と一緒に指定します。*offset* は以下の形式で指定できます。

GMT{+ | -}*hh*[:*mm*[:*ss*]]

GMT	グリニッジ標準時
{+ | -}	標準時を GMT よりプラスの時刻に設定する場合は - を指定します。（グリニッジより東側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはマイナス値になります。）標準時を GMT よりマイナスの時刻に設定する場合は + を指定します。（グリニッジより西側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはプラス値になります。）
hh[:*mm*[:*ss*]]	オフセット時間を指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* と *ss* は 0 から 59 です。

-p *offset*

サマータイムとグリニッジ標準時（GMT）とのオフセットを指定します。"-c adddst" と一緒に指定します。省略した場合は、-o オプションで指定したオフセット時間の 1 時間前となります。*offset* は以下の形式で指定できます。

GMT{+ | -}*hh*[:*mm*[:*ss*]]

GMT	グリニッジ標準時
{+ | -}	標準時を GMT よりプラスの時刻に設定する場合は - を指定します。（グリニッジより東側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはマイナス値になります。）標準時を GMT よりマイナスの時刻に設定する場合は + を指定します。（グリニッジより西側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはプラス値になります。）
hh[:*mm*[:*ss*]]	オフセット時間を指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* と *ss* は 0 から 59 です。

-s *timezone*

タイムゾーンを指定します。"-c settz" と一緒に指定します。*timezone* には -a オプションで表示されるタイムゾーンのいずれかを指定できます。

-t *date* [*/time*]　サマータイムの終了時間を指定します。-f オプションの *date* と同じ形式で指定します。*date* は以下のいずれかの形式で指定できます。

M*m.w.d*

M*m*: サマータイムを終了する月を指定します。*m* は 1 から 12 までの数値で指定できます。
w: サマータイムを終了する週を指定します。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で指定できます。
d: サマータイムを終了する曜日を指定します。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で指定できます。

J*n*

J*n*: サマータイムを終了する日にちを指定します。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。365 を指定した場合は、うるう年であっても 12 月 31 日となります。

n

n: サマータイムを終了する日にちを指定します。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time には時刻を指定します。以下の形式で指定できます。

hh:mm:ss　" 時間 : 分 : 秒の形式 " で指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* は 0 から 59、*ss* は 0 から 60 です。省略した場合は、02:00:00 となります。

詳細説明

- タイムゾーン、サマータイムに有効年数を指定することはできません。年ごとにサマータイムが変更される場合は、settimezone(8) コマンドで指定しなおす必要があります。
- サマータイムを設定している場合は、タイムゾーンの影響は受けません。
- "-c adddst" でサマータイムを設定する場合、以下のいずれかの場合はエラーとなります。
  - J*n* または *n* 形式で、開始と終了の期間が 14 日未満の場合
  - M*m.w.d* 形式で、開始と終了が同一の月で、かつ期間が 2 週間未満の場合
  - "-o *offset*" に "-p *offset*" より小さいオフセットを指定した場合
  - "-o *offset*" と "-p *offset*" オフセットの差が 24 時間より大きい場合
- settimezone(8) コマンドで設定された標準時にオフセット時間を加算すると GMT になります。

- showtimezone(8) コマンドを使用すると、現在設定されているタイムゾーンが確認できます。
- "-c adddst"、"-c deldst" オプションで変更されたサマータイム情報を反映するには XSCF をいったんログアウトして、再びログインしてください。

使用例

使用例 1 タイムゾーンを 「Asia/Tokyo」に設定します。

```
XSCF> settimezone -c settz -s Asia/Tokyo
Asia/Tokyo
```

使用例 2 設定可能なタイムゾーンを一覧表示します。

```
XSCF> settimezone -c settz -a
Africa/Abidjan
Africa/Accra
Africa/Addis_Ababa
Africa/Algiers
Africa/Asmara
Africa/Asmera
Africa/Bamako
Africa/Bangui
 .
 .
```

使用例 3 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 3 月最終日曜日 2:00（JST）から 10 月最終日曜日 2:00（JDT）までとして、サマータイム情報を設定します。

```
XSCF> settimezone -c adddst -b JST -o GMT-9 -d JDT -f M3.5.0 -t
M10.5.0
JST-9JDT,M3.5.0,M10.5.0
```

使用例 4 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムの GMT からのオフセットを +10 時間、期間を 4 月第 1 日曜日 0:00（JST）から 9 月第 1 日曜日 0:00（JDT）までとして、サマータイム情報を設定します。

```
XSCF> settimezone -c adddst -b JST -o GMT-9 -d JDT -p GMT-10 -f
M4.1.0/00:00:00 -t M9.1.0/00:00:00
JST-9JDT-10,M4.1.0/00:00:00,M9.1.0/00:00:00
```

使用例 5 現在設定されているサマータイム情報を削除します。

```
XSCF> settimezone -c deldst -b JST -o GMT-9
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdate(8), **showdate**(8), **showtimezone**(8)

名前 setupfru - デバイスのハードウェアに関する設定を行います。

形式 **setupfru** [-m {y | n}] [-x {1 | 4}] *device location*

setupfru -h

説明 setupfru(8) は、指定したデバイスのハードウェアに関する設定を行うコマンドです。

setupfru(8) コマンドは、M3000 サーバではサポートされていません。

デバイスとして物理システムボード（PSB）を指定できます。

PSB を増設したあとシステムで使用できるようにするため、PSB に対して、以下の内容が設定できます。

XSB 形式	増設した PSB をシステムで使用するためには、PSB 上のハードウェアリソースを論理的に分割して、システムボード（XSB）を構成する必要があります。XSB には PSB を分割しないで構成単位とする Uni-XSB と、4 分割したものを構成単位とする Quad-XSB の 2 種類があります。PSB を Uni-XSB として構成するか、Quad-XSB として構成するかを指定します。
メモリミラーモード	ミラーモードとは、PSB に搭載されたメモリを 2 分割し、データをミラーリングしたモードです。メモリを 2 分割するためメモリサイズは 1/2 になりますが、データの信頼性が高まります。メモリをミラーモードに設定するかどうかを指定します。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m {y|n}	*device* に sb を指定した場合、XSB に搭載されたメモリをミラーモードに設定するかどうかを指定します。ミラーモードに設定する場合は y、設定しない場合は n を指定します。-m オプションを省略した場合は、前の設定が引き継がれます。
-x {1|4}	*device* に sb を指定した場合、PSB を、Uni-XSB と Quad-XSB のどちらで構成するかを指定します。Uni-XSB で構成する場合は 1、Quad-XSB で構成する場合には 4 を指定します。-x オプションを省略した場合は、前の設定が引き継がれます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

device　設定するデバイスを指定します。以下のデバイスだけ指定できます。

sb	物理システムボード（PSB）

location　デバイスの搭載されている位置を指定します。*device* に sb を指定した場合、*location* には PSB 番号を指定します。0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明

- M8000/M9000 サーバの場合、Quad-XSB 構成のときはメモリミラーモードを設定できません。
- すでに搭載されている PSB を設定しなおす場合は、対象の PSB から構成されたすべての XSB が、ドメイン構成から切り離され、システムボードプールになっている必要があります。XSB をドメイン構成から切り離す方法については、deleteboard(8) コマンドを参照してください。
- システムによって、PSB の構成は以下のように異なります。
  - M8000/M9000 サーバの場合は、CPU ／メモリボードユニットと I/O ユニットの組み合わせ
  - M4000/M5000 サーバの場合は、マザーボードユニット上の CPU モジュールとメモリモジュールをそれぞれ論理的に 2 分割したものと、I/O モジュールの組み合わせ
- M8000/M9000 サーバでは、2 つの CPU が搭載された CPU ／メモリボードユニットを Quad-XSB に設定できます。この場合、CPU またはメモリの含まれていない XSB には、システムから "configuration error" が出力されます。
- showfru(8) コマンドを使用すると、PSB に現在設定されてれいる内容が表示されます。

使用例

使用例 1　PSB#00 を Quad-XSB に設定します。（メモリミラーモードの設定は省略されているため、前の設定から変更されません。）

```
XSCF> setupfru -x 4 sb 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **moveboard**(8), **setdcl**(8), **showboards**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8), **showfru**(8)

名前 setupplatform - プラットフォーム固有の設定を行います。

形式

setupplatform [-v]

setupplatform [-v] -p *part* [-p *part*]

setupplatform -h

説明

setupplatform(8) は、プラットフォーム固有の設定を行うコマンドです。

このコマンドに従って、管理者はサービスプロセッサのインストールを行います。

デフォルトで、setupplatform(8) コマンドは、利用可能な設定を 1 つずつ確認します。個別の設定は、-p オプションを使用して選択できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- XSCF ユーザーアカウントの作成
  useradm
- ネットワーク／高度／タイムゾーンの設定
  platadm

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-p *part*　行いたい設定を指定します。*part* には、以下のいずれかを指定できます。

altitude	本体装置の高度を設定します。
network	XSCF ネットワーク、DSCP、DNS、NTP、SSH、HTTPS および SMTP の設定を行います。
timezone	XSCF のタイムゾーンを設定します。タイムゾーンは一覧から選択します。
user	platadm 権限、platop 権限、および useradm 権限を持つ、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成します。XSCF と LDAP では、同じユーザーアカウント名は使用できません。同様に、同じユーザー ID（UID）も使用できません。

-v　詳細な情報を表示します。

詳細説明

- SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000 サーバ上で使用できるインターフェースは、xscf#0-lan#0、xscf#0-lan#1、lan#0、lan#1 です。SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ上で使用できるインターフェースは同じですが、さらに xscf#0-if、xscf#1-lan#0、xscf#1-lan#1、xscf#1-if を含みます。
- ユーザーアカウント設定では、新しいユーザーアカウントを、ユーザーが定義したパスワードで作成できます。
- ネットワーク設定では、以下の項目を任意で設定できます。
  - XSCF ネットワークの設定
  - ドメイン / サービスプロセッサ間通信プロトコル（DSCP）
  - DNS サーバ
  - NTP サーバ
  - SSH
  - HTTPS サーバ
  - 電子メールレポート

使用例

使用例 1　新しいユーザーアカウントを作成します。

```
XSCF> setupplatform -p user
Do you want to set up an account? [y|n]: y
Username: myadminuser
User id in range 100 to 65533 or leave blank to let the system
choose one:
         Username: myadminuser
         User id:
Are these settings correct? [y|n]: y
XSCF> adduser myadminuser
XSCF> setprivileges myadminuser useradm platadm platop
XSCF> password myadminuser
New XSCF password: [not echoed]
Retype new XSCF password: [not echoed]
```

使用例 2　XSCF ネットワークを構成します。

```
XSCF> setupplatform
Do you want to set up an account? [y|n]: n
Do you want to set up the XSCF network interfaces? [y|n]: y
Do you want to configure xscf#0-lan#0? [y|n]: y
xscf#0-lan#0 ip address? []: 192.168.1.4
xscf#0-lan#0 netmask? [255.255.255.0]: 255.255.254.0
xscf#0-lan#0 default gateway? []: 192.168.1.1
         xscf#0-lan#0 ip address: 192.168.1.4
         xscf#0-lan#0 netmask: 255.255.254.0
         xscf#0-lan#0 default gateway: 192.168.1.1
Are these settings correct? [y|n]: y
XSCF> setnetwork xscf#0-lan#0 -m 255.255.254.0 192.168.1.4
. . .
```

使用例 3　SSH を有効にします。

```
XSCF> setupplatform -p network
Do you want to set up the XSCF network interfaces? [y|n]: n
Do you want to set up the DSCP network? [y|n]: n
Do you want to set up the domain name service? [y|n]: n
Do you want to set up the network time protocol? [y|n]: n
Do you want to set up ssh? [y|n]: y
Enable ssh service? [y|n]: y
XSCF> setssh -q -y -c enable
Do you want to set up https? [y|n]: n
. . .
```

使用例 4　本体装置の高度を設定します。

```
XSCF> setupplatform -p altitude
Do you want to set up the chassis altitude? [y|n]: y
Chassis altitude is already configured:
         Chassis altitude in meters: 200
Continue setting up the chassis altitude? [y|n]: y
Chassis altitude in meters: 400
         Chassis altitude in meters: 400
Is this setting correct? [y|n]: y
XSCF> setaltitude -s altitude=400
400m

The specified altitude becomes valid when the circuit breakers of the system
are switched on again.
Do you want to reboot the XSCF now? [y|n]: n
XSCF>
```

使用例 5　XSCF のタイムゾーンを設定します。

```
XSCF> setupplatform -p timezone
Do you want to set up the XSCF time zone? [y|n]: y
Chassis time zone is already configured:
         XSCF time zone: US/Pacific
Continue setting up the XSCF time zone? [y|n]: y
0       Africa/Abidjan
1       Africa/Accra
2       Africa/Addis_Ababa
3       Africa/Algiers
4       Africa/Asmera
5       Africa/Bamako
6       Africa/Bangui
7       Africa/Banjul
8       Africa/Bissau
9       Africa/Blantyre
10      Africa/Brazzaville
11      Africa/Bujumbura
12      Africa/Cairo
13      Africa/Casablanca
14      Africa/Ceuta
```

```
15      Africa/Conakry
16      Africa/Dakar
17      Africa/Dar_es_Salaam
18      Africa/Djibouti
19      Africa/Douala
20      Africa/El_Aaiun
21      Africa/Freetown
22      Africa/Gaborone
Enter number to choose time zone or return for next set of time zones: 21
    XSCF time zone: Africa/Freetown
Is this setting correct? [y|n]: y
XSCF> settizezone -c settz -s Africa/Freetown
Africa/Freetown
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **applynetwork**(8), **password**(8), **setaltitude**(8), **setdscp**(8), **setemailreport**(8), **sethostname**(8), **seththttps**(8), **setnameserver**(8), **setnetwork**(8), **setntp**(8), **setprivileges**(8), **setsmtp**(8), **setssh**(8), **setroute**(8), **settimezone**(8)

名前 showad - Active Directory の構成およびメッセージを表示します。

形式 **showad**

showad `cert` [`-v`] [`-i` *n*]

showad `log` [`-M`] [`-C`] [`-S` *start_record_number*] [`-E` *end_record_number*]

showad `log -f`

showad `group administrator` [`-i` *n*]

showad `group operator` [`-i` *n*]

showad `group custom` [`-i` *n*]

showad `userdomain` [`-i` *n*]

showad `dnslocatorquery` [`-i` *n*]

showad `defaultrole`

showad `server` [`-i` *n*]

showad `-h`

説明 `showad`(8) は、Active Directory の構成および診断メッセージを表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`useradm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-f` 診断メッセージをリアルタイムで表示します。このオプションが使用されると、コマンドは終了しません。それぞれの診断メッセージが登録されるごとに表示されます。リアルタイム表示を停止するには、`Ctrl-C` を押します。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *n* インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。`-i` なし、または `-i` に何も値を設定せずに実行した場合、`showad`(8) は項目 1 から 5 を逐次検索します。例外 : `-i` なしで使用すると、`showad cert` コマンドはプライマリサーバの認証情報を表示し、`showad server` コマンドはプライマリサーバの構成を表示します。

-v	詳細出力を指定します。cert オペランドとのみ併用され、認証全文を表示します。
-C	出力結果の末尾に、ログ内のレコード数を付加します。
-E	表示する最後のレコード番号を指定します。このとき、*end_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、-C オプションを使用します。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-S	表示する最初のレコード番号を指定します。このとき、*start_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、-C オプションを使用します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

cert	現在のサーバ認証を表示します。
log	診断メッセージを表示します。
group administrator	現在のグループ構成を表示します。
group operator	現在のグループ構成を表示します。
group custom	現在のグループ構成を表示します。
userdomain	現在の userdomain 設定を表示します。
dnslocatorquery	現在の DNS ロケータークエリー構成を表示します。
defaultrole	現在の defaultrole 設定を表示します。
server	現在の Active Directory サーバ設定を表示します。

使用例

使用例 1 現在の active directory の状態を表示します。

```
XSCF> showad
dnslocatormode: disabled
expsearchmode: disabled
state: enabled
strictcertmode: disabled
timeout: 4
logdetail: none
```

使用例 2 プライマリサーバの認証情報を表示します。

```
XSCF> showad cert
Primary Server:
certstatus = certificate present
issuer = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
```

```
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
subject = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
valid from = Apr 18 05:38:36 2009 GMT
valid until = Apr 16 05:38:36 2019 GMT
version = 3 (0x02)
```

使用例 3　指定した診断メッセージを表示します。

```
XSCF> showad log -S 5 -E 10
Thu Sep 2 01:43 2009 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:44 2009 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:47 2009 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:51 2009 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:52 2009 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:55 2009 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
```

使用例 4　管理者グループ 3 の構成を表示します。

```
XSCF> showad group administrator -i 3
Administrator Group 3
 name: CN=pSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=company,DC=com
```

使用例 5　代替サーバ 1 の設定を表示します。ポート番号 0 は、Active Directory のデフォルトのポートが使用されていることを示します。

```
XSCF> showad server -i 1
Alternate Server  1
address: (none)
port: 0
```

使用例 6　DNS ロケータークエリー 1 の構成を表示します。

```
XSCF> showad dnslocatorquery -i 1
service 1: \ _ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setad(8)

名前 showaltitude - 本体装置の高度およびエアーフィルターの搭載状況を表示します。

形式 **showaltitude**

showaltitude -h

説明 showaltitude(8) は、現在設定されている本体装置の高度およびエアーフィルターの搭載状況を表示するコマンドです。

エアーフィルターの搭載状況は、M4000/M5000 サーバだけで表示されます。

高度は 100 メートル（m）単位で表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

詳細説明

- エアーフィルターは搭載されている場合だけ表示されます。搭載されていない場合は、何も表示されません。
- setaltitude(8) コマンドを使用すると、本体装置の高度およびエアーフィルターの搭載状況を設定できます。

使用例

使用例 1　本体装置の高度を表示します。

```
XSCF> showaltitude
1000m
```

使用例 2　エアーフィルターが搭載された M4000/M5000 サーバで本体装置の高度およびエアーフィルターの搭載状況を表示します。

```
XSCF> showaltitude
1000m
Filter is installed.
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setaltitude**(8)

名前 showarchiving - ログアーカイブの設定状態を表示します。

形式

showarchiving

showarchiving [-e] [-v]

showarchiving -h

説明 showarchiving(8) は、XSCF のログアーカイブに設定されている状態を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-e	アーカイブエラーのうち最新の 10 件に関する情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

詳細説明

- -e オプションを指定しないで showarchiving(8) コマンドを実行すると、以下の情報が表示されます。

1. アーカイブ設定データの一覧

Archiving state	ログのアーカイブ機能が有効かどうか。
Archive host	ログがアーカイブされるホスト。初期値は Not configured です。ホスト名または IPv4 のアドレスで表示されます。
Archive directory	アーカイブデータが格納されるアーカイブホストのディレクトリ。初期値は Not configured です。
Username for ssh login	サービスプロセッサがアーカイブホストにログインするために使用するユーザー名。初期値は Not configured です。
Archive host public key	サービスプロセッサがアーカイブホストの ID を確認するために使用する公開キー。-v オプションを指定した場合に表示されます。
Archive host fingerprint	サービスプロセッサがアーカイブホストの ID を確認するために使用する、公開キーの MD5 フィンガープリント。

2. 最後にアーカイブホストへの接続を試みた時刻、およびその試行の結果（成功か失敗か）

Latest communication	最後にアーカイブホストとの通信を試みたときの終了時刻。
Connection status	最後にアーカイブホストへの接続を試みた結果。成功した場合は OK、失敗した場合は FAILED が表示されます。

3. 監査ログおよび監査以外のログに関するステータス情報の表示

Archive space limit	アーカイブに割り当てられている領域の合計。
Archive space used	アーカイブによって現在使用されている領域。
Total archiving failures	失敗したアーカイブ操作の数。
Unresolved failures	失敗したアーカイブ操作のうち、サービスプロセッサが引き続き試みる操作の数。

- -e オプションを指定して showarchiving(8) コマンドを実行すると、発生したアーカイブエラーのうち、最新の 10 件に関する詳細情報が表示されます。

使用例

使用例 1　ログアーカイブに関するステータスと設定に関するデータを表示します。

```
XSCF>  showarchiving
*** Archiving Configuration ***
Archiving state ---------- Disabled
Archive host ------------- Not configured
Archive directory -------- Not configured
User name for ssh login -- Not configured
Archive host fingerprint - Server authentication disabled

*** Connection to Archive Host ***
Latest communication ----- None
Connection status -------- None

                             AUDIT LOGS     OTHER LOGS
                             ----------     ----------
Archive space limit           Unlimited        2000 MB
Archive space used        Not monitored  Not monitored
Total archiving failures              0              0
Unresolved failures                   0              0
```

使用例 2　　アーカイブエラーに関する情報を表示します。

```
XSCF>  showarchiving -e
No archiving errors have occurred.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setarchiving(8)

名前 showaudit - 監査システムの現在の状態を表示します。

形式 **showaudit**

showaudit `all`

showaudit [`-a` *users*] [`-c` *classes*] [`-e` *events*] [`-g`] [`-m`] [`-p`] [`-s`] [`-t`]

showaudit `-h`

説明 `showaudit`(8) は、システム監査の現在の状態を表示します。オプションを指定しないで `showaudit` を実行すると、監査レコードの書き込みが有効であるか無効であるかが表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`auditadm` または `auditop` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a *users*

指定されたユーザーの監査レコード生成ポリシーを表示します。*users* は、有効なユーザー名のカンマ区切りリストです。

-c *classes*

指定された監査クラスの監査レコード生成ポリシーを表示します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前によって指定できます。ACS_ の接頭語は省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 2 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

all	すべてのクラス
ACS_SYSTEM(1)	システムに関連するイベント
ACS_WRITE(2)	状態を変更できるコマンド
ACS_READ(4)	現在の状態を表示するコマンド
ACS_LOGIN(8)	ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT(16)	監査に関連するイベント
ACS_DOMAIN(32)	ドメイン管理に関連するイベント
ACS_USER(64)	ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM(128)	プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES(256)	モードに関連するイベント。

-e *events*

指定された監査イベントの監査レコード生成ポリシーを表示します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前によって指定できます。AEV_ の接頭語は省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 4 と表現できます。

有効なイベントの一覧については、showaudit -e all を参照してください。

-g

ユーザーのグローバル監査レコード生成ポリシーを表示します。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m

ローカルの監査領域の使用量がしきい値に達した場合に送信される電子メールの宛先アドレスを表示します。

-p　監査トレールが全容量に達した場合に従うポリシーを表示します。

-s　以下の監査ステータスを表示します。

- ローカルの監査レコードによって消費されている領域
- ローカルの監査レコード用に残っている空き領域
- 監査トレールが全容量に達したために（前回のブート以降に）削除された監査レコードの数

-t　ローカルの領域の使用量に関して警告を発行するしきい値を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

all　以下の情報を表示します。

- 監査トレールの書き込みがenableとdisableのどちらに設定されているか。この情報は、オプションを何も指定しないでshowaudit(8) コマンドを実行した場合に表示されるものと同じです。
- -a、-c all、-e all、-g、-m、-p、-s、-tの各オプションを指定して showaudit を実行した場合に表示されるすべての情報。

使用例

使用例 1　監査ステータスを表示します。

```
XSCF> showaudit
Auditing: enabled
```

使用例 2　ログイン監査に関するすべてのクラス情報を表示します。

```
XSCF> showaudit -c LOGIN
Events:
AEV_LOGIN_BUI                   enabled
AEV_LOGIN_CONSOLE               enabled
AEV_LOGIN_SSH                   enabled
AEV_LOGIN_TELNET                enabled
AEV_LOGOUT                      enabled
AEV_AUTHENTICATE                enabled
```

使用例 3　すべてのイベント情報を表示します。

```
XSCF> showaudit -e all
Events:
AEV_AUDIT_START                 enabled
AEV_AUDIT_STOP                  enabled
AEV_ENTER_MODE                  enabled
AEV_EXIT_MODE                   enabled
AEV_LOGIN_BUI                   enabled
AEV_LOGIN_CONSOLE               enabled
```

```
AEV_LOGIN_SSH                   enabled
AEV_LOGIN_TELNET                enabled
AEV_LOGOUT                      enabled
AEV_AUTHENTICATE                enabled
AEV_addboard                    enabled
AEV_addfru                      enabled
[...]
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setaudit(8), **viewaudit**(8)

名前

showautologout - XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。

形式

showautologout

showautologout -h

説明

showautologout(8) は、現在設定されている XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示するコマンドです。

セッションタイムアウト時間は分単位で表示されます。setautologout(8) コマンドでセッションタイムアウト時間を設定していない場合は、デフォルトで 10 分と設定されています。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

使用例

使用例 1　XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。

```
XSCF> showautologout
30min
```

使用例 2　XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。（デフォルトの場合）

```
XSCF> showautologout
10min
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

setautologout(8)

名前 showboards - システムボード（XSB）の情報を表示します。

形式 **showboards** [-v] -a [-c sp]

showboards [-v] -d *domain_id* [-c sp]

showboards [-v] *xsb*

showboards -h

説明 showboards(8) は、XSB の情報を表示するコマンドです。

現在ドメインに組み込まれている、または割り当てられている XSB や、搭載されているすべての XSB の情報が表示されます。ドメインを指定した場合は、ドメイン構成情報（DCL）に定義されている情報だけ表示されます。

以下の情報が表示されます。

XSB　XSB 番号

以下の形式で表示されます。

x-y:

x	00 から 15 までの整数
y	0 から 3 までの整数

DID　ドメイン ID

以下のいずれかが表示されます。

00-23	XSB が割り当てられているドメイン ID
SP	XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態
Other	ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB

LSB　ドメインに定義されている論理システムボード（LSB）番号

00 から 15 までの整数で表示されます。

`Assignment` XSB のドメインへの割当て状態

以下のいずれかが表示されます。

`Unavailable`	XSB がシステムボードプール状態（ドメインに割り当てられていない状態）であり、未診断、診断中、診断異常のいずれかの状態。未実装状態の XSB も `Unavailable` となります。
`Available`	XSB がシステムボードプール状態であり、診断が正常に終了している状態
`Assigned`	XSB がドメインに予約または割り当てられている状態

`Pwr` XSB の電源投入状態

以下のどちらかが表示されます。

`n`	電源が切断されている状態
`y`	電源が投入されている状態

`Conn` XSB のドメイン構成への接続状態

以下のどちらかが表示されます。

`n`	該当するドメインへ接続されていない、またはシステムボードプール状態
`y`	該当するドメインへ接続されている状態

Conf	XSB のハードウェアリソースの、Oracle Solaris OS への組込み状態

以下のどちらかかが表示されます。

n	Oracle Solaris OS から切り離されている状態
y	Oracle Solaris OS に組み込まれている状態

Test	XSB の初期診断の状態

以下のいずれかが表示されます。

Unmount	未搭載または故障により認識できない状態
Unknown	診断されていない状態
Testing	初期診断中
Passed	初期診断が正常に終了した状態
Failed	初期診断で異常が発生した状態。XSB は使用できない、または縮退している状態となります

Fault	XSB の縮退の状態

以下のいずれかが表示されます。

Normal	正常な状態
Degraded	縮退部品がある状態。XSB は稼働できます。
Faulted	異常が発生し XSB が動作しない状態

-v オプションと指定すると、XSB の詳細ステータスとして、以下の情報が表示されます。

R	XSB のドメインへの Dynamic Reconfiguration（DR）予約状態
*	DR 処理が予約されている状態。ドメインが再起動されると、XSB が組み込まれたり、切り離されたりして、ドメイン構成が変更されます。
COD	XSB が COD ボードであるかどうか
n	COD ボードでない
y	COD ボードである

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメイン、XSB に対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	ドメインに組み込まれている、または割り当てられている XSB や搭載されたすべての XSB の状態を表示します。
-c sp	システムボードプールの XSB を表示します。システムボードプールとは、どのドメインにも属さない状態のことです。
-d *domain_id*	XSB の状態を表示するドメイン ID を指定します。指定したドメインの DCL に定義されている情報だけ表示されます。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	XSB の詳細な情報を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb	表示する XSB 番号を指定します。以下の形式で指定します。
x-y	
x	00 から 15 までの整数
y	0 から 3 までの整数

詳細説明

ドメインを指定した場合は、DCL に定義されている XSB 情報だけ表示されます。

使用例

使用例 1 搭載されているすべての XSB の情報を表示します。

```
XSCF> showboards -a
XSB  DID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- -------- ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 00(00)   Assigned    y    y    y    Passed  Normal
00-1 00(01)   Assigned    y    y    y    Passed  Normal
00-2 SP       Available   y    n    n    Passed  Normal
00-3 02(00)   Unavailable y    n    n    Unknown Normal
```

使用例 2 搭載されているすべての XSB の詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showboards -v -a
XSB  R DID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault    COD
---- - -------- ----------- ---- ---- ---- ------- -------- ---
00-0   00(00)   Assigned    y    y    y    Passed  Normal   n
00-1 * 00(01)   Assigned    y    y    y    Passed  Normal   n
00-2   SP       Available   y    n    n    Passed  Normal   n
00-3   02(00)   Unavailable y    n    n    Unknown Normal   n
```

使用例 3　XSB#00-0 の情報を表示します。

```
XSCF> showboards 00-0
XSB  DID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- -------- ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 15(00)   Assigned    y    y    y    Passed  Normal
```

使用例 4　XSB#00-0 の詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showboards -v 00-0
XSB  R DID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault    COD
---- - -------- ----------- ---- ---- ---- ------- -------- ---
00-0 * 15(00)   Assigned    y    n    n    Passed  Normal   y
```

使用例 5　システムボードプールの XSB を表示します。

```
XSCF> showboards -a -c sp
XSB  DID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- -------- ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 SP       Available   y    n    n    Passed  Normal
00-2 SP       Available   y    n    n    Passed  Normal
00-3 SP       Available   y    n    n    Passed  Normal
```

使用例 6　ドメイン ID 0 に定義されていて、システムボードプールの XSB を表示します。

```
XSCF> showboards -d 0 -c sp
XSB  DID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- -------- ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-2 SP       Available   y    n    n    Passed  Normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **moveboard**(8), **setdcl**(8), **setupfru**(8), **showcodusage**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8), **showfru**(8)

名前

showcod - Capacity on Demand（COD）情報を表示します。

形式

showcod [-v] [-d *domain_id*]

showcod -h

説明

showcod(8) は、COD 情報を表示するコマンドです。COD 情報には、ヘッドルームの数、インストールされた COD 許諾の数、およびドメインとシャーシホスト ID 用に予約された COD 許諾の数が含まれます。

showcod(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

何も指定しないで、showcod(8) コマンドを実行した場合は、現在の COD 情報が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	ドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

使用例

使用例 1 すべての COD 情報を表示します（ドメイン ID 1 に対して domainadm, domainmgr, domainop のいずれかの権限を持っている場合）。

```
XSCF>  showcod
PROC Permits reserved for domain 1 : 0
```

使用例 2 すべての COD 情報を表示します。（platadm 権限または platop 権限を持っている場合）。

```
XSCF>  showcod
Chassis HostID : 81000001
PROC Permits installed : 8
PROC Headroom Quantity : 0
PROC Permits reserved for domain 0 : 4
PROC Permits reserved for domain 1 : 0
```

```
PROC Permits reserved for domain 2 : 0
PROC Permits reserved for domain 3 : 0
PROC Permits reserved for domain 4 : 0
PROC Permits reserved for domain 5 : 0
PROC Permits reserved for domain 6 : 0
PROC Permits reserved for domain 7 : 0
PROC Permits reserved for domain 8 : 0
PROC Permits reserved for domain 9 : 0
PROC Permits reserved for domain 10 : 0
PROC Permits reserved for domain 11 : 0
PROC Permits reserved for domain 12 : 0
PROC Permits reserved for domain 13 : 0
PROC Permits reserved for domain 14 : 0
PROC Permits reserved for domain 15 : 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前 showcodactivation - Capacity on Demand（COD）データベースに格納されている現在の COD 情報を表示します。

形式 **showcodactivation** [-r] [-v]

showcodactivation -h

説明 showcodlicense(8) は、COD データベースに格納されている COD 情報を表示するコマンドです。

showcodactivation(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

何も指定しないで、showcodactivation(8) コマンドを実行した場合は、現在の CPU Right To Use（RTU）ライセンスキー（COD キー）が表示されます。

注 – COD キーの詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』を参照してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-r	COD 情報を、COD データベースに格納されている生データ形式で表示します。
-v	詳細な情報を表示します。COD 情報は表形式と生データ形式の両方が表示されます。

詳細説明 showcodactivation(8) コマンドを使用すると、以下の情報が表示されます。

Description	リソース（プロセッサ）の種類。
Ver	COD 許諾のバージョン番号。常に 01 に設定されています。
Expiration	COD 許諾の有効期限。
Count	リソースに与えられている COD 許諾の数。
Status	COD 許諾の状態。リソースが有効な場合は、GOOD、リソースの COD 許諾が切れている場合は、EXPIRED が表示されます。

使用例

使用例 1　詳細な COD 情報を表示します。

```
XSCF> showcodactivation -v
Description  Ver   Expiration  Count   Status
-----------  ---  -----------  -----  -------
PROC          01         NONE     16     GOOD
01:84000000:000000001:0301010100:16:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
```

使用例 2　生データ形式で COD 情報を表示します。

```
XSCF> showcodactivation -r
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前 showcodactivationhistory - Capacity on Demand（COD）ログを表示します。

形式

showcodactivationhistory [-v | -V] [-m *mail_address*]

showcodactivationhistory [-v | -V] [-u *username*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *target_url*

showcodactivationhistory -h

説明

showcodactivationhistory(8) は、COD ログ内の、COD 許諾の追加と削除に関するレコードを表示するコマンドです。

showcodactivationhistory(8) コマンドは、M3000 サーバでは利用できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m *mail_address*	COD ログを送信するメールアドレスを指定します。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。"-t *proxy_type*" を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *username*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。.

target_url　CODログの出力先となるURLを指定します。以下のような形式がサポートされています。

`http://`*server*[:*port*]`/`*path*`/`*file*
`https://`*server*[:*port*]`/`*path*`/`*file*
`ftp://`*server*[:*port*]`/`*path*`/`*file*
`file:///media/usb_msd/`*path*`/`*file*

使用例

使用例 1　CODログを出力します。

```
XSCF> showcodactivationhistory
11/30/2010 01:42:41PM PST: Report Generated M5000 SN: 843a996d
10/02/2010 02:08:49PM PST: Activation history initialized: PROC 0 cpus
10/15/2010 01:36:13PM PST: Capacity added: (legacy) PROC 3 cpus
11/07/2010 01:36:23PM PST: Capacity deleted: (legacy) PROC 3 cpus
11/28/2010 01:37:12PM PST: Capacity added: (unlocked) PROC 1 cpus
11/30/2010 01:37:19PM PST: Capacity added: (unlocked) PROC 4 cpus
11/30/2010 01:42:41PM PST: Summary: PROC 5 cpus
Signature: 9138HVZQ0zFJh8EoRy7i1A
```

使用例 2　email経由で指定されたユーザーにCODログを送ります。

```
XSCF> showcodactivationhistory -m sysadmin@comany.com
XSCF>
```

使用例 3　FTP経由で指定されたユーザーにCODログを送ります。

```
XSCF> showcodactivationhistory -u admin ftp://somehost/tmp/
history.txt
Password:
file transfer complete
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

`0`　正常に終了したことを表します。

`>0`　エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前

showcodlicense - COD ライセンスデータベースに格納されている現在の Capacity on Demand（COD）Right-To-Use （RTU）ライセンス情報を表示します。

形式

showcodlicense [-r] [-v]

showcodlicense -h

説明

showcodlicense(8) は、COD ライセンスデータベースに格納されている COD ライセンス情報を表示するコマンドです。

showcodlicense(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

何も指定しないで、showcodlicense(8) コマンドを実行した場合は、現在の COD ライセンスが表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-r	ライセンス情報を、COD ライセンスデータベースに格納されている生データ形式で表示します。
-v	詳細な情報を表示します。ライセンス情報は表形式と生データ形式の両方が表示されます。

詳細説明

showcodlicense(8) コマンドを使用すると、以下の COD 情報が表示されます。

Description	リソース（プロセッサ）の種類。
Ver	ライセンスのバージョン番号。常に 01 に設定されています。
Expiration	ライセンスの有効期限。
Count	リソースに与えられている RTU ライセンスの数。
Status	COD ライセンスの状態。リソースが有効な場合は、GOOD、リソースのライセンスが切れている場合は、EXPIRED が表示されます。

使用例

使用例 1　詳細な COD 許諾情報を表示します。

```
XSCF> showcodlicense -v
Description  Ver   Expiration  Count   Status
-----------  ---  -----------  -----  -------
PROC          01         NONE     16     GOOD
01:84000000:000000001:0301010100:16:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
```

使用例 2　　生データ形式で COD 許諾情報を表示します。

```
XSCF> showcodlicense -r
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前 showcodusage - Capacity on Demand（COD）リソースの使用状況を表示します。

形式 **showcodusage** [-v] [-M] [-p resource|domain|all]

showcodusage [-h]

説明 showcodusage(8) は、使用中の COD 許諾に関する現在の状況を表示するコマンドです。

showcodusage(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

デフォルトでは、使用中およびインストール済みの COD 許諾の概要が、各リソースの現在の状態とともに表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p domain	COD 許諾の使用状況をドメイン別に表示します。表示される統計情報には、ドメインで使用されている COD 許諾の数、ドメインに割り当てられているリソースの数、およびドメインに予約されている COD 許諾の数が含まれます。
-p resource	COD 許諾の使用状況をリソースタイプ別に表示します。
-p all	すべての COD 使用状況情報を表示します。
-v	詳細な情報を表示します。使用可能なすべての COD の使用状況に関する情報（システムとそのドメインの両方における COD 許諾の使用状況を含む）が表示されます。

詳細説明

- `showcodusage -p resource` コマンドを使用すると、システムに関する以下の COD 使用状況が表示されます。

`Resource`	使用可能な COD リソース（プロセッサ）のタイプ
`In Use`	システムで現在使用されている COD CPU の数
`Installed`	システムに装着されている COD CPU の数
`COD Permitted`	インストールされている COD 許諾の数
`Status`	以下のいずれかの COD 状態。
	`OK` 使用中の COD CPU に対して十分な数の COD 許諾があることを示します。また、残存する使用可能な COD リソースの数、および使用可能なヘッドルームの数も表示されます。
	`HEADROOM` 使用されているヘッドルームの数。
	`Violation` COD 許諾違反が存在します。使用可能な COD 許諾の数を超えている、使用中の COD CPU の数が表示されます。この状況が発生する可能性があるのは、CPU Right To Use (RTU) ライセンスキー（COD キー）を COD データベースから強制的に削除したときに、そのキーに関連づけられている COD CPU がまだ使用されていた場合です。

- `showcodusage -p domain` コマンドを使用すると、各ドメインに関する以下の COD 使用状況が表示されます。

`Domain/Resource`	各ドメインの COD リソース（プロセッサ）。`Unused` と表示されているプロセッサは、まだドメインに割り当てられていない COD CPU です。
`In Use`	ドメインで現在使用されている COD CPU の数。

Installed	ドメインに装着されている COD CPU リソースの数。
Reserved	ドメインに割り当てられている COD 許諾の数。
Status	COD CPU の使用状況。-v オプションを指定したときに、以下のいずれかの情報が表示されます。
COD Permitted	ドメイン COD CPU は、COD 許諾を持っており、使用されています。
Not COD Permitted	ドメイン COD CPU は、COD 許諾を取得できず、使用されていません。
Unused	COD CPU は使用されていません。

使用例

プラットフォームに関する権限を持つユーザーは、リソースと、ドメインに関する使用状況の概要を両方表示できます。ドメインに関する権限を持つユーザーは、権限を持っているドメインの使用状況の概要と、使用されていない COD 許諾のレポートだけ表示できます。

使用例 1 COD の使用状況をリソース別に表示します。

```
XSCF> showcodusage -p resource
Resource  In Use  Installed  COD Permitted  Status
--------  ------  ---------  -------------  ------
PROC           4          4             16  OK: 12 available
```

使用例 2 COD の使用状況をドメイン別に表示します。

```
XSCF> showcodusage -p domains
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved
---------------  ------  ---------  --------
0 - PROC              4          4         0
1 - PROC              4          4         0
2 - PROC              4          4         0
3 - PROC              4          4         0
4 - PROC              0          0         0
Unused - PROC         0          0        12
```

使用例 3 COD の使用状況をリソース別およびドメイン別に表示します。(Quad-XSB の CMU#00 と Uni-XSB の CMU#02 で構成された M8000 サーバの例)

```
XSCF> showcodusage -v
Resource  In Use  Installed  COD Permitted  Status
--------  ------  ---------  -------------  ------
PROC           0          8              0  OK: 0 available Headroom: 2
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved  Status
---------------  ------  ---------  --------  ------
0  - PROC             0          8         0
     00-0 - PROC      0          1
     CMU00-CPU0                                Unused
```

```
      00-1 - PROC      0          1
      CMU00-CPU1                             Unused
      00-2 - PROC      0          1
      CMU00-CPU2                             Unused
      00-3 - PROC      0          1
      CMU00-CPU3                             Unused
      02-0 - PROC      0          4
      CMU02-CPU0                             Unused
      CMU02-CPU1                             Unused
      CMU02-CPU2                             Unused
      CMU02-CPU3                             Unused
1  - PROC             0          0          0
2  - PROC             0          0          0
3  - PROC             0          0          0
4  - PROC             0          0          0
5  - PROC             0          0          0
6  - PROC             0          0          0
7  - PROC             0          0          0
8  - PROC             0          0          0
9  - PROC             0          0          0
10 - PROC             0          0          0
11 - PROC             0          0          0
12 - PROC             0          0          0
13 - PROC             0          0          0
14 - PROC             0          0          0
15 - PROC             0          0          0
Unused - PROC         0          0          2
```

使用例 4　M5000 サーバで、COD の使用状況をリソース別およびドメイン別に表示します。

```
XSCF> showcodusage -v
Resource  In Use  Installed  COD Permitted  Status
--------  ------  ---------  -------------  ------
PROC           0          4              0  OK: 0 available
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved  Status
---------------  ------  ---------  --------  ------
0  - PROC             0          0         0
1  - PROC             0          0         0
2  - PROC             0          0         0
3  - PROC             0          0         0
Unused - PROC         0          4         0
        00-0 - PROC   0          4
        CPUM00-CPU0                          Unused
        CPUM00-CPU1                          Unused
        CPUM01-CPU0                          Unused
        CPUM01-CPU1                          Unused
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド』

名前

showconsolepath - 現在接続されているドメインコンソールの情報を表示します。

形式

showconsolepath -a

showconsolepath -d *domain_id*

showconsolepath -h

説明

showconsolepath(8) は、現在接続されているドメインコンソールの情報を表示するコマンドです。

以下の内容が表示されます。

user	ドメインコンソールに接続している XSCF ユーザーアカウント
DID	ドメイン ID
ro/rw	ドメインコンソールの種類
	ro 読み取り専用コンソール rw 書き込み可能コンソール
escape	コンソールに設定されているエスケープ記号
date	ドメインコンソールに接続した日時

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	アクセスできるすべてのドメインに接続されているコンソールの情報を表示します。
-d *domain_id*	情報を表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

1 つのドメインに対して、書き込み可能コンソールは 1 つだけ、読み取り専用コンソールは複数接続できます。

使用例

使用例 1 アクセスできるすべてのドメインに接続されているコンソールの情報を表示します。

```
XSCF> showconsolepath -a
User            DID  ro/rw  escape   Date
nakagawa        00   rw     @        Fri Jul 29 21:23:34
hana            00   ro     #        Fri Jul 29 09:49:12
k-okano         00   ro     #        Fri Jul 29 18:21:50
yuuki           01   rw     |        Fri Jul 29 10:19:18
uchida          01   ro     *        Fri Jul 29 13:30:41
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

console(8), **sendbreak**(8)

名前 showdate - XSCF の時計の日付、時刻を表示します。

形式 **showdate** [-u]

showdate -h

説明 showdate(8) は、XSCF の時計の日付、時刻を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-u	時刻を協定世界時（UTC）で指定します。省略した場合は地方時となります。

詳細説明 setdate(8) コマンドを使用すると、XSCF の時計の日付、時刻を設定できます。

使用例 **使用例 1** 現在の時刻を地方時（JST）で表示します。

```
XSCF> showdate
Mon Jan 23 14:53:00 JST 2006
```

使用例 2 現在の時刻を UTC で表示します。

```
XSCF> showdate -u
Mon Jan 23 05:56:15 UTC 2006
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setdate**(8), **settimezone**(8), **showtimezone**(8)

名前 showdateoffset - システム時刻とドメイン時刻との差分を表示します。

形式 **showdateoffset** -d *domain_id*

showdateoffset -a

showdateoffset -h

説明 showdateoffset(8) は、XSCF の時計で管理されるシステム時刻と、各ドメインの時計で管理されるドメイン時刻との差分を、秒単位で表示するコマンドです。

XSCF ではシステム時刻とドメイン時刻との差分が保存されています。ドメインに用意されている date(1M) コマンドなどでドメインの時刻を変更すると、システム時刻と変更されたドメイン時刻との差分が XSCF に保存されます。保存された時刻の差分はドメインを再起動したり、XSCF をリセットしたりした場合でも保持されています。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	アクセスできるすべてのドメインの時刻とシステム時刻との差分を表示します。
-d *domain_id*	システム時刻との差分を表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定できます。
-h	使用方法を表示します。

使用例 **使用例 1** M3000 サーバで、ドメインを指定して、システム時刻とドメイン時刻との差分を表示します。

```
XSCF> showdateoffset -d 0
DID             Domain Date Offset
00              128 sec
```

使用例 2　M5000 サーバでシステム時刻とドメイン時刻との差分を表示します。

```
XSCF> showdateoffset -a
DID             Domain Date Offset
00              128 sec
01              0 sec
02              -1024 sec
03              -9999999 sec
```

使用例 3　M8000 サーバでシステム時刻とドメイン時刻との差分を表示します。

```
XSCF> showdateoffset -a
DID             Domain Date Offset
00              128 sec
01              0 sec
02              -1024 sec
03              1 sec
04              199 sec
05              -82 sec
06              0 sec
07              0 sec
08              9999 sec
09              -14 sec
10              -123 sec
11              -6 sec
12              54 sec
13              0 sec
14              300 sec
15              901 sec
16              0 sec
17              0 sec
18              -111 sec
19              0 sec
20              3 sec
21              21 sec
22              -621 sec
23              -9999999 sec
```

終了ステータス　以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目　**resetdateoffset**(8)

名前 showdcl - 現在設定されているドメイン構成情報（DCL）を表示します。

形式 **showdcl** [-v] -a

showdcl [-v] -d *domain_id* [-l *lsb* [-l *lsb*]]...

showdcl -h

説明 showdcl(8) は、setdcl(8) コマンドで設定された DCL を表示するコマンドです。

ドメイン構成情報とは、ドメインやドメインを構成する論理システムボード（LSB）に設定できるハードウェアリソース情報です。

LSB とは、ドメインの Oracle Solaris OS で認識されるボードの単位です。ドメインごとに最大 16 枚まで登録でき、00 から 15 までの整数で表されます。

システムボード（XSB）とは、物理システムボード（PSB）を分割してシステム上で使用できる単位に構成しなおしたボートのことです。XSB は PSB 番号と PSB を分割したときの分割番号を組み合わせて *x-y*（*x* は 00 から 15 までの整数、*y* は 0 から 3 までの整数）で表されます。

showdcl(8) コマンドでは、DCL 内の、以下の情報を表示できます。

DID　　ドメイン ID

LSB　　LSB 番号。00 から 15 までの整数で表示されます。

XSB　　LSB に対応する XSB 番号。以下の形式で表示されます。

x-y:
x　　00 から 15 までの整数
y　　0 から 3 までの整数

Status　　ドメインの稼働状態。以下のいずれかが表示されます。追加情報が表示される場合があります。

Powered Off
　電源が切断されている状態
Panic State
　パニックが発生し、再起動中の状態
Shutwdown Started
　電源が切断中の状態
Initialization Phase
　OpenBoot PROM が初期化中の状態
OpenBoot Executing Completed
　OpenBoot PROM が起動され、プロンプト（ok）が表示されている状態
Booting/OpenBoot PROM prompt
　Oracle Solaris OS が起動中の状態。またはドメインのシャットダウンや再起動によって、OpenBoot PROM が動作中かプロンプト（ok）で停止している状態
Running
　Oracle Solaris OS が稼働している状態

-v オプションを指定すると、以下の情報が追加されます。

Cfg-policy	ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲。以下のいずれかが表示されます。
	FRU　FRU 単位で縮退します（デフォルト）
	XSB　XSB 単位で縮退します
	System　ドメイン単位で縮退します
No-Mem	LSB に搭載されているメモリをドメインで使用させるかどうか。以下のどちらかが表示されます。
	True　メモリを使用させません
	False　メモリを使用させます（デフォルト）
No-IO	LSB に搭載されている入出力デバイスをドメインで使用させるかどうか。以下のどちらかが表示されます。
	True　入出力デバイスを使用させません
	False　入出力デバイスを使用させます（デフォルト）
Float	LSB を優先してフローティングボードとするかどうか。以下のどちらかが表示されます。
	True　フローティングボードになる優先度を高くします
	False　フローティングボードになる優先度を高くしません（デフォルト）

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべてのドメインの情報を表示します。
-d *domain_id*	表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で表示されます。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l *lsb*	表示する LSB 番号を指定します。-l オプションはスペースで区切って複数指定できます。*lsb* は 0 から 15 まで整数で指定します。*lsb* を省略した場合は、ドメイン内のすべての LSB が対象となります。
-v	ドメイン構成情報内の Cfg-policy、No-Mem、No-IO、Float の情報を追加して表示します。

詳細説明

- フローティングボードの優先度が低く設定されている XSB は、フローティングボードになりにくくなります。そのため、ドメインの Oracle Solaris OS に対して影響を与えにくくなります。
- setdcl(8) コマンドを使用すると、DCL を設定できます。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 に設定されている DCL を表示します。

```
XSCF> showdcl -d 0
DID   LSB   XSB   Status
00                Running
      00    00-0
      04    01-0
      08    02-0
      12    03-0
```

使用例 2 ドメイン ID 0 に設定されている詳細な DCL を表示します。

```
XSCF> showdcl -v -d 0
DID   LSB   XSB   Status   No-Mem   No-IO    Float    Cfg-policy
00                Running                             FRU
      00    00-0           False    False    False
      01    -
      02    -
      03    -
      04    01-0           False    True     False
      05    -
      06    -
      07    -
      08    02-0           True     True     True
      09    -
      10    -
      11    -
      12    03-0           True     True     False
      13    -
      14    -
      15    -
```

使用例 3　　すべてのドメインに設定されている詳細な DCL を表示します。

```
XSCF> showdcl -v -a
DID   LSB   XSB   Status   No-Mem   No-IO    Float    Cfg-policy
00                Running                             FRU
      00    00-0           False    False    False
      01    -
      02    -
      03    -
      04    01-0           False    True     False
      05    -
      06    -
      07    -
      08    02-0           True     True     True
      09    -
      10    -
      11    -
      12    03-0           True     True     False
      13    -
      14    -
      15    -
------------------------------------------------------------------
01                Running (Waiting for OS Shutdown)   FRU
      00    01-2           True     True     False
      01    04-0           False    False    False
      02    -
      03    -
      04    -
      05    -
      06    -
      07    05-0           True     False    False
      08    -
      09    -
      10    -
      11    -
      12    -
      13    -
      14    06-0           True     True     True
      15    -
------------------------------------------------------------------
   :
   :
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **moveboard**(8), **setdcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdevices**(8), **showfru**(8)

名前 showdevices - システムボード（XSB）のデバイスと、リソースの使用状況を表示します。

形式 **showdevices** [-v] [-p bydevice | byboard | query | force] *xsb*

showdevices [-v] [-p bydevice | byboard] -d *domain_id*

showdevices -h

説明 showdevices(8) は、XSB を構成するデバイスと、デバイス上の、リソースの使用状況を一覧表示するコマンドです。

リソースの使用状況は、システムのリソースを管理しているアプリケーションとサブシステムより提供されます。管理対象のリソースがオフラインで照会され、XSB に対して Dynamic Reconfiguration（DR）操作が行われた場合の影響が予測されて表示されます。デフォルトの設定では管理対象外のデバイスは表示されませんが、-v オプションを使用すると、これらのデバイスを表示できます。

以下の情報が表示されます。

共通 :

DID	ドメイン ID
XSB	XSB 番号

CPU:

id	プロセッサの ID
state	プロセッサの状態
speed	CPU の周波数（MHz）
ecache	CPU の外部キャッシュサイズ（MB）

メモリ :

board mem	XSB に搭載されているメモリサイズ（MB）
perm mem	XSB に搭載されている、再配置できないメモリサイズ（MB）
base address	XSB に搭載されているメモリの物理アドレス
domain mem	ドメインメモリサイズ（MB）

メモリを切り離し中の場合は、以下の項目が表示されます。

target XSB	移動先の XSB 番号
deleted mem	削除済みのメモリサイズ（MB）
remaining mem	削除する残りのメモリサイズ（MB）

入出力 デバイス :

device	入出力デバイスのインスタンス名
resource	管理されているリソース名
usage	リソースを使用しているインスタンスの説明
query	リソースについてのオフライン照会の結果

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p byboard	XSB ごとに結果を表示します。結果は、さらに、デバイスごとにまとめて表示されます。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたとみなされます。
-p bydevice	CPU、メモリ、I/O など、デバイスごとに結果が表示されます。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたとみなされます。

-p force	deleteboard -f コマンドを使用して XSB をドメインから強制的に切り離した場合に、Oracle Solaris OS から削除されるシステムリソースを予測します。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたとみなされます。
-p query	deleteboard(8) コマンドを使用して XSB をドメインから切り離した場合に、Oracle Solaris OS から削除されるシステムリソースを予測します。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたとみなされます。
-v	管理対象外の入出力デバイスを含め、すべての入出力デバイスの情報を表示します。ただし、管理対象外の入出力デバイスについては、物理的な構成だけ表示され、リソースや使用状況は表示されません。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb

表示する XSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。スペースで区切って複数指定できます。

x-y

x	00 から 15 までの整数
y	0 から 3 までの整数

詳細説明

- showdevices(8) コマンドを実行する場合は、Oracle Solaris OS サービス管理機能（SMF）の、以下のサービスが動作している必要があります。
  - ドメイン -SP 通信プロトコル（dscp）
  - ドメイン構成サーバ（dcs）
  - キー管理デーモン（sckmd）
- Oracle Solaris OS の起動直後、または DR 操作の直後に showdevices(8) コマンドを実行すると、すべてのデバイスの一覧が出力されます。しかし、普段実行するときに、使用されていないデバイスのドライバが Oracle Solaris OS によってアンロードされていると、すべてのデバイスの一覧が出力されません。すべてのデバイスの一覧が出力されているかを確認するには、showdevices(8) コマンドを実行する前に、ドメイン上で、-v オプションをつけて devfsadm コマンドを実行してください。devfsadm コマンドの詳細については、Oracle Solaris OS の devfsadm(1M) コマンドのマニュアルページを参照してください。

使用例

使用例 1　XSB#00-0 上のデバイスと、リソースの使用状況を表示します。

```
XSCF> showdevices 00-0

CPU:
----
DID XSB  id  state    speed  ecache
00  00-0 0   on-line   2530     5.5
```

```
00  00-0 1   on-line   2530     5.5
00  00-0 2   on-line   2530     5.5
00  00-0 3   on-line   2530     5.5
00  00-0 4   on-line   2530     5.5
00  00-0 5   on-line   2530     5.5
00  00-0 6   on-line   2530     5.5
00  00-0 7   on-line   2530     5.5

Memory:
-------
        board   perm   base             domain  target  deleted  remaining
DID XSB   mem MB  mem MB  address           mem MB  XSB     mem MB   mem MB
00  00-0   2048   1290  0x000003c000000000   4096  03-0       250      1500

IO Devices:
----------
DID XSB       device  resource               usage
00  00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3d0s0      mounted filesystem "/"
00  00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1      dump device (swap)
00  00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1      swap area
00  00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3d0s3      mounted filesystem "/var"
00  00-0     sd3     /var/run               mounted filesystem "/var/run"
```

使用例 2　ドメイン ID 0 上のデバイスと、リソースの詳細な使用状況を表示します。

```
XSCF> showdevices -v -d 0

CPU:
----
DID XSB  id  state    speed  ecache
00  00-0 0   on-line   2530     5.5
00  00-0 1   on-line   2530     5.5
00  00-0 2   on-line   2530     5.5
00  00-0 3   on-line   2530     5.5
00  00-0 4   on-line   2530     5.5
00  00-0 5   on-line   2530     5.5
00  00-0 6   on-line   2530     5.5
00  00-0 7   on-line   2530     5.5
00  01-0 50  on-line   2048       4
00  01-0 51  on-line   2048       4
00  01-0 52  on-line   2048       4
00  01-0 53  on-line   2048       4

Memory:
-------
        board   perm   base             domain  target  deleted  remaining
DID XSB   mem MB  mem MB  address           mem MB  XSB     mem MB   mem MB
00  00-0   2048   1290  0x000003c000000000   4096  00-1       250      1500
00  01-0    2048      0  0x000002c000000000    4096

IO Devices:
----------
DID XSB       device  resource               usage
```

```
  00   00-0      sd0
  00   00-0      sd1
  00   00-0      sd2
  00   00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3d0s0       mounted filesystem "/"
  00   00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1       dump device (swap)
  00   00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1       swap area
  00   00-0      sd3     /dev/dsk/c0t3d0s3       mounted filesystem "/var"
  00   00-0     sd3     /var/run               mounted filesystem "/var/run"
  00   00-0      sd4
  00   00-0      sd5
  00   00-0      sd6
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **moveboard**(8), **setdcl**(8), **setdscp**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdcl**(8), **showfru**(8)

名前 showdomainmode - 現在設定されているドメインの動作モードを表示します。

形式 **showdomainmode** -d *domain_id* [-v]

showdomainmode -h

説明 showdomainmode(8) は、指定したドメインに現在設定されているドメインの動作モードを表示するコマンドです。

以下の状態が表示されます。

HOST-ID	ホスト ID
Diagnostic Level	OpenBoot PROM の診断レベル。以下のいずれかが表示されます。 none　なし min　標準 max　最大
Secure Mode	host watchdog、Break 信号受信抑止機能の状態。以下のどちらかが表示されます。 on　有効 off　無効
Autoboot	オートブート機能の状態。以下のどちらかが表示されます。 on　有効 off　無効
CPU Mode	ドメインに搭載されている CPU 動作モードの設定方法。以下のどちらかが表示されます。 auto ドメイン起動時に自動的に判別 compatible 搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定
Ethernet Address	ドメインのイーサネット（MAC）アドレスを表示します。このアドレスは OpenBoot PROM および Oracle Solaris OS の local-mac-address?環境変数がfalseに設定されている場合に使用されます。-v オプションを指定した場合にだけ表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。-v オプションを指定した場合、ドメインのイーサネット（MAC）アドレスも表示されます。

詳細説明

- オペレーターパネルのモードスイッチが「Service」の場合は、showdomainmode(8) コマンドで表示された内容にかかわらず、ドメインの動作モードは以下のように設定されます。
  - OpenBoot PROM 診断レベル（Diagnostic Level）, CPU 動作モード（CPU Mode）: showdomainmode(8) コマンドの表示どおり
  - host watchdog 監視および Break 信号受信抑止（Secure Mode）, オートブート機能（Autoboot）: 無効
- OpenBoot PROM 環境変数 auto-boot? が false に設定されている場合は、オートブート機能は無効となります。
- setdomainmode(8) コマンドを使用すると、ドメインの動作モードを設定できます。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 に設定されているドメインの動作モードを表示します。

```
XSCF> showdomainmode -d 0
Host-ID              :0f010f10
Diagnostic Level     :min
Secure Mode          :on
Autoboot             :on
CPU Mode             :auto
```

使用例 2 ドメイン ID 0 に設定されているドメインの動作モードの詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showdomainmode -d 0 -v
Host-ID              :8099010c
Diagnostic Level     :min
Secure Mode          :off
Autoboot             :on
CPU Mode             :auto
Ethernet Address     :00:0b:5d:e2:01:0c
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdomainmode(8)

名前 showdomainstatus - 現在のドメインの状態を表示します。

形式 **showdomainstatus** -d *domain_id*

showdomainstatus -a

showdomainstatus -h

説明 showdomainstatus(8) は、現在のドメインの状態を表示するコマンドです。

ドメインごとに、以下のいずれかの状態が表示されます。追加情報が表示される場合があります。

Powered Off	電源が切断されている状態
Panic State	パニックが発生し、再起動中の状態
Shutdown Started	電源が切断中の状態
Initialization Phase	OpenBoot PROM が初期化中の状態
OpenBoot Execution Completed	OpenBoot PROM が起動され、プロンプト "ok" が表示されている状態
Booting/OpenBoot PROM prompt	Oracle Solaris OS が起動中の状態。またはドメインのシャットダウンや再起動によって、OpenBoot PROM が動作中かプロンプト "ok" で停止している状態
Running	Oracle Solaris OS が稼働している状態
-	ドメインが定義されていない状態

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	アクセスできるすべてのドメインの状態を表示します。
-d *domain_id*	状態を表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 すべてのドメインの状態を表示します。

```
XSCF> showdomainstatus -a
DID             Domain Status
00              Running
01              Running (Waiting for OS Shutdown)
02              Powered Off
03              Panic State
04              Shutdown Started
05              Booting/OpenBoot PROM prompt
06              Initialization Phase
07              OpenBoot Execution Completed
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **poweron**(8), **reset**(8), **showdcl**(8)

名前 showdscp - ドメイン - SP 通信プロトコル（DSCP）に割り当てられている IP アドレスを表示します。

形式 **showdscp**

showdscp [-v] [-p]

showdscp [-v] [-p] -d *domain_id*

showdscp [-v] [-p] -s

showdscp -h

説明 showdscp(8) は、DSCP 使用のために割り当てられている IP アドレス、つまり個々のドメイン、サービスプロセッサ、またはシステム全体の IP アドレスを表示するコマンドです。

システム内の DSCP リンクすべての IP アドレスを表示する場合、出力は表になります。この表は、ドメイン ID によってソートされます。

特定のドメインまたはサービスプロセッサの IP アドレスを表示する場合、表ではなく、指定したドメインまたはサービスプロセッサの IP アドレスのみが出力されます。

-p オプションを使用すると、解析可能な出力を生成できます。この出力は、のちに、スクリプトなどで使用することができます。個々の IP アドレスを解析可能な形式で表示すると、追加のラベルは除外され、IPv4 アドレスのみがドットつき 10 進表記で出力されます。表を解析可能なバージョンで出力すると、値のみが表示され（表見出しは表示されません）、各カラムは 1 つのタブ文字によって区切られます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*	IP アドレスを表示するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-p	解析可能な出力を生成します。
-s	サービスプロセッサの IP アドレスを表示します。
-v	詳細な情報を表示します。プログラムの操作の内部プロセスに関する詳細情報を画面に出力します。

使用例

注 – 以下の使用例に示す IP アドレスは、サンプルです。

使用例 1 DSCP のすべての IP アドレスを示す表を表示します。

```
XSCF>  showdscp

DSCP Configuration

Network: 10.1.1.0
Netmask: 255.255.255.0

 Location     Address
----------   ---------
XSCF         10.1.1.1
Domain #00   10.1.1.2
Domain #01   10.1.1.3
Domain #02   10.1.1.4
Domain #03   10.1.1.5
Domain #04   10.1.1.6
Domain #05   10.1.1.7
Domain #06   10.1.1.8
Domain #07   10.1.1.9
Domain #08   10.1.1.10
Domain #09   10.1.1.11
Domain #10   10.1.1.12
Domain #11   10.1.1.13
Domain #12   10.1.1.14
Domain #13   10.1.1.15
Domain #14   10.1.1.16
Domain #15   10.1.1.17
Domain #16   10.1.1.18
Domain #17   10.1.1.19
Domain #18   10.1.1.20
Domain #19   10.1.1.21
Domain #20   10.1.1.22
Domain #21   10.1.1.23
Domain #22   10.1.1.24
Domain #23   10.1.1.25
```

使用例 2 特定ドメインの IP アドレスを表示します。

```
XSCF>  showdscp -d 1
Domain #01 Address: 10.1.1.3
```

使用例 3　　特定ドメインの IP アドレスを解析可能な形式で表示します。

```
XSCF>  showdscp -p -d 1
Domain[1] 10.1.1.3
```

使用例 4　　すべての DSCP アドレス情報を解析可能な形式で表示します。

```
XSCF>  showdscp -p
Network 10.1.1.0
Netmask 255.255.255.0
XSCF    10.1.1.1
Domain[0]       10.1.1.2
Domain[1]       10.1.1.3
Domain[2]       10.1.1.4
Domain[3]       10.1.1.5
Domain[4]       10.1.1.6
Domain[5]       10.1.1.7
Domain[6]       10.1.1.8
Domain[7]       10.1.1.9
Domain[8]       10.1.1.10
Domain[9]       10.1.1.11
...
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdscp(8)

名前 showdualpowerfeed - 二系統受電モードの状態を表示します。

形式 **showdualpowerfeed**

showdualpowerfeed -h

説明 showdualpowerfeed(8) は、本体装置の二系統受電モードの状態を表示するコマンドです。

注 – 二系統受電の設定状態は M3000/M4000/M5000 サーバだけで表示できます。ただし、100V 電源が供給されている M4000/M5000 サーバでは、二系統受電モードを使用できません。M8000/M9000 サーバでは、オプションの二系統受電用の電源筐体を接続すると、自動的に二系統受電モードが設定されます。二系統受電の設置の詳細については、ご使用のサーバの『インストレーションガイド』を参照してください。

二系統受電モードは、setdualpowerfeed(8) コマンドで設定できます。setdualpowerfeed(8) コマンドによって、二系統受電モードが変更される予定の場合は、変更内容も表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

使用例 **使用例 1**　本体装置に現在設定されている二系統受電モードを表示します。

```
XSCF> showdualpowerfeed
Dual power feed is enabled.
```

使用例 2　setdualpowerfeed(8) コマンドによって二系統受電モードを変更後、現在の状態を表示します。

```
XSCF> showdualpowerfeed
enable -> disable
NOTE: Dual power feed will be disabled the next time the platform is powered
on.
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setdualpowerfeed**(8)

名前 showemailreport - 電子メールレポートの設定データを表示します。

形式 **showemailreport** [-v]

showemailreport -h

説明 showemailreport(8) は、電子メールレポートの設定データを表示するコマンドです。

オプションを指定しないで使用すると、現在の電子メールレポートの設定データが表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

詳細説明 電子メールレポート情報には、電子メールレポートが有効になっているかどうかが含まれます。有効になっている場合は、アドレスの一覧も含まれます。

使用例 **使用例 1** 電子メールレポートの設定を表示します。

```
XSCF>  showemailreport
EMail Reporting: enabled
Email Recipient Address: admin@company.com, adm2@company.com
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setemailreport**(8)

名前 showenvironment - 本体装置の排気量、吸気温度と湿度、温度センサー情報、電圧センサー情報、ファン回転情報、消費電力情報を表示します。

形式 **showenvironment** [-M] [*type*]

showenvironment -h

説明 showenvironment(8) は、以下の情報を表示するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

排気量情報	本体装置の排気量
環境情報	本体装置の吸気温度と湿度 湿度は M8000/M9000 サーバだけでサポートされます。
温度情報	本体装置の吸気温度と各コンポーネントの排気温度 以下のコンポーネントの排気温度が確認できます。

M3000 サーバ	マザーボードユニット（MBU_A）、CPU
M4000/M5000 サーバ	CPU モジュール（CPUM）, I/O ユニット（IOU）
M8000/M9000 サーバ	CPU ／メモリボードユニット（CMU）、CPU モジュール（CPUM）、クロスバーユニット（XBU_B）

電圧情報	電圧センサー値
ファン回転情報	ファンの回転状態と回転数
消費電力情報	本体装置の最大定格消費電力値 消費電力情報は M3000 サーバだけでサポートされます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

type　表示する情報のタイプを指定します。以下のいずれかのタイプが指定できます。省略した場合は、本体装置の吸気温度と湿度の情報を表示します。

temp	温度情報を表示します。
volt	電圧情報を表示します。
Fan	ファンの回転情報を表示します。
power	消費電力情報を表示します。
air	本体装置の排気量を表示します。

詳細説明

power および air オペランドで表示される情報には、PCI ボックスおよび周辺の I/O 装置の情報は含まれません。

使用例

使用例 1　M8000/M9000 サーバで、本体装置の吸気温度と湿度を表示します。

```
XSCF> showenvironment
Temperature:30.71C
Humidity:90.05%
```

使用例 2　M8000 サーバで、本体装置と各コンポーネントの温度情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment temp
Temperature:30.71C
CMU#0:30.71C
 CPUM#0-CHIP#0:30.71C
 CPUM#1-CHIP#0:30.71C
 CPUM#2-CHIP#0:30.71C
 CPUM#3-CHIP#0:30.71C
CMU#1:30.71C
 CPUM#0-CHIP#0:30.71C
 CPUM#1-CHIP#0:30.71C
 CPUM#2-CHIP#0:30.71C
 CPUM#3-CHIP#0:30.71C
CMU#2:30.71C
 CPUM#0-CHIP#0:30.71C
 CPUM#1-CHIP#0:30.71C
 CPUM#2-CHIP#0:30.71C
 CPUM#3-CHIP#0:30.71C
CMU#3:30.71C
 CPUM#0-CHIP#0:30.71C
 CPUM#1-CHIP#0:30.71C
 CPUM#2-CHIP#0:30.71C
 CPUM#3-CHIP#0:30.71C
```

使用例 3　M4000 サーバで、各コンポーネントの電圧情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment volt
MBU_A
 1.0V Power Supply Group:1.010V
```

```
 1.8V Power Supply Group:1.700V
 CPUM#0-CHIP#0
   1.0V Power Supply Group:1.000V
 CPUM#1-CHIP#0
   1.0V Power Supply Group:1.000V
MEMB#0
 1.2V Power Supply Group:1.200V
 1.8V Power Supply Group:1.700V
 2.5V Power Supply Group:2.500V
MEMB#1
 1.2V Power Supply Group:1.200V
 1.8V Power Supply Group:1.700V
 2.5V Power Supply Group:2.500V
MEMB#2
 1.2V Power Supply Group:1.200V
 1.8V Power Supply Group:1.700V
 2.5V Power Supply Group:2.500V
MEMB#3
 1.2V Power Supply Group:1.200V
 1.8V Power Supply Group:1.700V
 2.5V Power Supply Group:2.500V
IOU#0
 1.0V Power Supply Group:1.020V
 1.2V Power Supply Group:1.180V
 1.5V Power Supply Group:1.500V
 1.8V Power Supply Group:1.850V
 2.5V Power Supply Group:2.510V
 3.3V Power Supply Group:3.300V
 5.0V Power Supply Group:5.000V
  12V Power Supply Group:12.000V
 -12V Power Supply Group:-12.000V
FANBP
 3.3V Power Supply Group:3.300V
 5.0V Power Supply Group:5.010V
  12V Power Supply Group:12.020V
 -12V Power Supply Group:-12.030V
```

使用例 4　　M5000 サーバで、ファンの回転情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment Fan
FAN_A#0:Low speed
        FAN_A#0:  4101rpm
FAN_A#1:Low speed
        FAN_A#1:  4101rpm
FAN_A#2:Low speed
        FAN_A#2:  4177rpm
FAN_A#3:Low speed
        FAN_A#3:  4101rpm
PSU#0
    PSU#0:Low speed
        PSU#0:  3879rpm
        PSU#0:  3835rpm
PSU#1
```

```
     PSU#1:Low speed
         PSU#1:  3924rpm
         PSU#1:  3970rpm
PSU#2
     PSU#2:Low speed
         PSU#2:  4218rpm
         PSU#2:  4066rpm
PSU#3
     PSU#3:Low speed
         PSU#3:  3835rpm
         PSU#3:  3970rpm
```

使用例 5　M3000 サーバで、ファンの回転情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment Fan
FAN_A#0:Low speed (level-4)
        FAN_A#0:  4134rpm
FAN_A#1:Low speed (level-4)
        FAN_A#1:  4212rpm
PSU#0
    PSU#0:Low speed (level-4)
        PSU#0:  6436rpm
PSU#1
    PSU#1:Low speed (level-4)
        PSU#1:  6352rpm
```

使用例 6　M3000 サーバで、消費電力情報を表示します（AC 電源の場合）。

```
XSCF> showenvironment power
Permitted AC power consumption:470W
Actual AC power consumption:450W
```

使用例 7　M3000 サーバで、消費電力情報を表示します（DC 電源の場合）。

```
XSCF> showenvironment power
Permitted DC power consumption:470W
Actual DC power consumption:450W
```

使用例 8　M3000 サーバで、本体装置の排気量を表示します。

```
XSCF> showenvironment air
Air Flow:63CMH
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 showfru - デバイスのハードウェアに関する設定内容を表示します。

形式 **showfru** *device location*

showfru -a *device*

showfru -h

説明 showfru(8) は、setupfru(8) コマンドによってデバイスのハードウェアに設定された内容を表示するコマンドです。

指定したデバイスか、すべてのデバイスの内容を表示できます。デバイスとして物理システムボード（PSB）を指定できます。

以下の内容が表示されます。

Device	指定したデバイス名 sb（PSB）だけ表示されます。
Location	デバイスが搭載されている位置 *device* が sb の場合、00 から 15 の整数値で表示されます。
XSB Mode	PSB に設定されている XSB モード 以下のどちらかの値が表示されます。 Uni　Uni-XSB Quad　Quad-XSB
Memory Mirror Mode	PSB に設定されているメモリのミラーモード 以下のどちらかの値が表示されます。 yes　メモリミラーモード no　非メモリミラーモード

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	指定したすべてのデバイスの内容を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

device　表示するデバイスを指定します。以下のデバイスだけ指定できます。

sb	物理システムボード（PSB）

location　*device* の搭載されている位置を指定します。*device* が sb の場合、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明

setupfru(8) コマンドを使用すると、デバイスのハードウェアに関する設定ができます。

使用例

使用例 1　すべての PSB に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> showfru -a sb
Device    Location     XSB Mode    Memory Mirror Mode
sb        00           Quad        no
sb        01           Uni         yes
sb        02           Quad        no
sb        03           Uni         no
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **moveboard**(8), **setdcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showdcl**(8), **showdevices**(8)

名前 showhardconf - 本体装置に搭載されている Field Replaceable Unit（FRU）の情報を表示します。

形式 **showhardconf** [-u] [-M]

showhardconf -h

説明 showhardconf(8) は、FRU 単位の情報を表示するためのコマンドです。

表示される情報は、以下のとおりです。

- 現在の構成、状態
- 搭載されている個数
- ドメイン情報
- PCI ボックス（IOBOX）情報
- PCI カード情報

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-u	FRU 単位の搭載個数を表示します。さらに、CPU モジュールでは動作周波数が表示されます。メモリでは DIMM タイプおよびサイズが表示されます。省略した場合は、FRU 単位の現在の構成、状態情報とドメイン情報が表示されます。

詳細説明

- FRU の構成、状態情報とドメイン情報を表示した場合、故障または縮退が発生したユニットに対して、異常箇所であることを表すアスタリスク（*）と以下のいずれかの状態が表示されます。

状態	内容
Faulted	故障していて動作していない状態。
Degraded	ユニットは動作中。ユニット内の一部が故障または縮退していたり、何らかのエラーが検出されていたりするために、ユニットも故障状態を呈しているが、正常に動作中。
Deconfigured	構成異常、環境異常、または他のユニットの縮退によって、正常でありながら縮退している状態
Maintenance	保守作業中。deletefru(8)、replacefru、または addfru(8) 操作中。
Normal	正常に動作している状態

- メモリの Type フィールドの数値は DIMM のサイズを、アルファベット（A または B）は DIMM のランクを表します。

例	内容
Type: 1A	1 GB, rank 1
Type: 2A	2 GB, rank 2
Type: 2B	2 GB, rank 2

使用例

使用例 1 M5000 サーバの FRU 情報を表示します。

```
XSCF> showhardconf
SPARC Enterprise M5000;
    + Serial:BCF07500B6; Operator_Panel_Switch:Locked;
    + Power_Supply_System:Dual; SCF-ID:XSCF#0;
    + System_Power:On; System_Phase:Cabinet Power On;
    Domain#0 Domain_Status:Initialization Phase;
    Domain#1 Domain_Status:Initialization Phase;

    MBU_B Status:Normal; Ver:4401h; Serial:BC07490823  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-4360 01   /541-4360-01         ;
        + Memory_Size:64 GB;
        + Type:2;
        CPUM#0-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0601h; Serial:PP0723016Q  ;
            + FRU-Part-Number:CA06761-D205 A0   /371-4932-01          ;
            + Freq:2.660 GHz; Type:48;
            + Core:4; Strand:2;
                  :
        CPUM#3-CHIP#1 Status:Normal; Ver:0601h; Serial:PP074804E9  ;
            + FRU-Part-Number:CA06761-D205 A0   /371-4932-01          ;
```

```
            + Freq:2.660 GHz; Type:48;
            + Core:4; Strand:2;
        MEMB#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:BF09061G0E  ;
            + FRU-Part-Number:CF00541-0545 06   /541-0545-06          ;
            MEM#0A Status:Normal;
                + Code:c10000000000000005372T128000HR3.7A   356d-0d016912;
                + Type:1A; Size:1 GB;
                    :
            MEM#3B Status:Normal;
                + Code:c10000000000000004572T128000HR3.7A   252b-04123424;
                + Type:1A; Size:1 GB;
                    :
        MEMB#7 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:BF09061GBA  ;
            + FRU-Part-Number:CF00541-0545 06   /541-0545-06          ;
            MEM#0A Status:Normal;
                + Code:2cffffffffffffff0818HTF12872Y-53EB3 0300-d504600c;
                + Type:1A; Size:1 GB;
                    :
            MEM#3B Status:Normal;
                + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-2229c19c;
                + Type:1A; Size:1 GB;
        DDC_A#0 Status:Normal;
        DDC_A#1 Status:Normal;
        DDC_A#2 Status:Normal;
        DDC_A#3 Status:Normal;
        DDC_B#0 Status:Normal;
        DDC_B#1 Status:Normal;
    IOU#0 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:BF07486TEU  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-4361 01   /541-4361-01          ;
        + Type:1;
        DDC_A#0 Status:Normal;
        DDCR Status:Normal;
            DDC_B#0 Status:Normal;
    IOU#1 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:BF073226HP  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-4361 01   /541-4361-01          ;
        + Type:1;
        DDC_A#0 Status:Normal;
        DDCR Status:Normal;
            DDC_B#0 Status:Normal;
    XSCFU Status:Normal,Active; Ver:0101h; Serial:BF07435D98  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-0481 04   /541-0481-04          ;
    OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:BF0747690D  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-0850 06   /541-0850-06          ;
    PSU#0 Status:Normal; Serial:0017527-0738063762;
        + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0350 /300-1898-03-50;
        + Power_Status:Off; AC:200 V;
                :
    PSU#3 Status:Normal; Serial:0017527-0738063767;
        + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0350 /300-1898-03-50;
        + Power_Status:Input fail; AC: - ;
    FANBP_C Status:Normal; Ver:0501h; Serial:FF2#24      ;
        FRU-Part-Number:CF00541-3099 01   /541-3099-01          ;
        FAN_A#0 Status:Normal;
```

```
         FAN_A#1 Status:Normal;
         FAN_A#2 Status:Normal;
         FAN_A#3 Status:Normal;
```

使用例 2　M5000 サーバに搭載されている FRU の数を表示します。

```
XSCF> showhardconf -u
SPARC Enterprise M5000; Memory_Size:64 GB;
 +----------------------------------+------------+
 |              FRU                 |  Quantity  |
 +----------------------------------+------------+
 | MBU_B                            |        1   |
 |     Type:2;                      |   (    1)  |
 |     CPUM                         |        4   |
 |         Freq:2.660 GHz;          |   (    8)  |
 |     MEMB                         |        8   |
 |         MEM                      |       64   |
 |             Type:1A; Size:1 GB;  |   (   64)  |
 |     DDC_A                        |        4   |
 |     DDC_B                        |        2   |
 | IOU                              |        2   |
 |     Type:1;                      |   (    2)  |
 |     DDC_A                        |        2   |
 |     DDCR                         |        2   |
 |         DDC_B                    |        2   |
 | IOBOX                            |        1   |
 |     IOB                          |        2   |
 |     PSU                          |        2   |
 | XSCFU                            |        1   |
 | OPNL                             |        1   |
 | PSU                              |        4   |
 | FANBP_C                          |        1   |
 |     FAN_A                        |        4   |
 +----------------------------------+------------+
```

使用例 3　M9000 サーバの FRU 情報を表示します。

```
XSCF> showhardconf
SPARC Enterprise M9000;
    + Serial:PA30601004; Operator_Panel_Switch:Locked;
    + Power_Supply_System:Single-1Phase; Ex:Single-1Phase; SCF-ID:XSCF#0;
    + System_Power:On; System_Phase:Cabinet Power On;
    Domain#0 Domain_Status:Running;

    CMU#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP0616B579  ;
        + FRU-Part-Number:CA06629-D001 A4                          ;
        + Memory_Size:128 GB;
        + Type:A
        CPUM#0-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP091505ZY  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D021 A3                          ;
            + Freq:2.280 GHz; Type:16;
            + Core:2; Strand:2;
        CPUM#1-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP091505ZW  ;
```

```
            + FRU-Part-Number:CA06620-D021 A3                          ;
            + Freq:2.280 GHz; Type:16;
            + Core:2; Strand:2;
        CPUM#2-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP0915060H  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D021 A3                          ;
            + Freq:2.280 GHz; Type:16;
            + Core:2; Strand:2;
        CPUM#3-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP09150603  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D021 A3                          ;
            + Freq:2.280 GHz; Type:16;
            + Core:2; Strand:2;
        MEM#00A Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE41RE4ABHA-5C-E 3020-22211d88;
            + Type:4B; Size:4 GB;
        MEM#00B Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE41RE4ABHA-5C-E 3020-2a002a55;
            + Type:4B; Size:4 GB;
                :
        MEM#33A Status:Normal;
            + Code:ce0000000000000001M3 93T5168AZ0-CD5 3041-741a8ea1;
            + Type:4B; Size:4 GB;
        MEM#33B Status:Normal;
            + Code:ce0000000000000001M3 93T5168AZ0-CD5 3041-741a8ed3;
            + Type:4B; Size:4 GB;
                :
    CMU#2 Status:Normal; Ver:4201h; Serial:PP0618K472  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D003 A0   /371-4617-01          ;
        + Memory_Size:32 GB;
        + Type:B
        CPUM#0-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0901h; Serial:PP0608J517  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D051 A0   /371-4616-01          ;
            + Freq:2.880 GHz; Type:32;
            + Core:4; Strand:2;
        CPUM#1-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0901h; Serial:PP0620P552  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D051 A0   /371-4616-01          ;
            + Freq:2.880 GHz; Type:32;
            + Core:4; Strand:2;
        CPUM#2-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0901h; Serial:PP0631Q396  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D051 A0   /371-4616-01          ;
            + Freq:2.880 GHz; Type:32;
            + Core:4; Strand:2;
        CPUM#3-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0901h; Serial:PP0629H443  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D051 A0   /371-4616-01          ;
            + Freq:2.880 GHz; Type:32;
            + Core:4; Strand:2;
        MEM#00A Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-221d6855;
            + Type:1A; Size:1 GB;
        MEM#00B Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-221fcdb7;
            + Type:1A; Size:1 GB;
                :
        MEM#33A Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-221d678b;
```

```
            + Type:1A; Size:1 GB;
        MEM#33B Status:Normal;
            + Code:2cffffffffffffff0818HTF12872Y-53EB3 0300-69aedd7a;
            + Type:1A; Size:1 GB;
    CMU#3 Status:Normal; Ver:8301h; Serial:PP0638F192  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D004 A0   /371-4930-01          ;
        + Memory_Size:64 GB;
        + Type:C;
        CPUM#0-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0a01h; Serial:PP0631P606  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D061 A1   /371-4929-01          ;
            + Freq:3.000 GHz; Type:48;
            + Core:4; Strand:2;
        CPUM#1-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0a01h; Serial:PP0630M355  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D061 A1   /371-4929-01          ;
            + Freq:3.000 GHz; Type:48;
            + Core:4; Strand:2;
        CPUM#2-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0a01h; Serial:PP0628D036  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D061 A1   /371-4929-01          ;
            + Freq:3.000 GHz; Type:48;
            + Core:4; Strand:2;
        CPUM#3-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0a01h; Serial:PP0630M365  ;
            + FRU-Part-Number:CA06620-D061 A1   /371-4929-01          ;
            + Freq:3.000 GHz; Type:48;
            + Core:4; Strand:2;
        MEM#00A Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-221d6855;
            + Type:1A; Size:1 GB;
        MEM#00B Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-221fcdb7;
            + Type:1A; Size:1 GB;
                :
        MEM#33A Status:Normal;
            + Code:7f7ffe00000000004aEBE10RD4AGFA-5C-E 3020-221d678b;
            + Type:1A; Size:1 GB;
        MEM#33B Status:Normal;
            + Code:2cffffffffffffff0818HTF12872Y-53EB3 0300-69aedd7a;
            + Type:1A; Size:1 GB;
    IOU#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP072102UN  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D102 B1   /371-2217-02          ;
        + Type:A;
        PCI#0 Name_Property:pci; Card_Type:IOUA;
            + Serial:PP0611T826 ; Type:2;
            + FRU-Part-Number: CA21138-B84X 006AD/371-5000-04          ;
        PCI#1 Status:Normal; Name_Property:LSILogic,sas; Card_Type:Other;
            + Serial:0000004; Type:F20;
            + FRU-Part-Number:5111500-01;
    IOU#1 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP072102UM  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D102 B1   /371-2217-02          ;
        + Type:A;
        PCI#0 Name_Property:pci; Card_Type:IOUA;
            + Serial:PP0611T825  ; Type:2;
            + FRU-Part-Number: CA21138-B84X 006AD/371-5000-04          ;
    IOU#2 Status:Normal; Ver:4201h; Serial:PP0727053S  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D103 A0   /371-4931-01          ;
```

```
        + Type:B;
        PCI#4 Name_Property:pci; Card_Type:IOUA;
            + Serial:PP0611T823 ; Type:2;
            + FRU-Part-Number: CA21138-B84X 006AD/371-5000-04          ;
                :
    XSCFU_B#0 Status:Normal,Active; Ver:0201h; Serial:PP080600DW  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D342 C0   /371-2228-02           ;
                :
    XBU_B#0 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:PP0641X324  ;
        + FRU-Part-Number:CA06620-D301 A6                          ;
                :
    CLKU_B#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP0542M679  ;
        + FRU-Part-Number:CA06629-D042 A1                          ;
                :
    OPNL#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP06058246  ;
        + FRU-Part-Number:CA06629-D061 A1                          ;
    PSU#0 Status:Normal; Serial:;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0690;
        + Power_Status:On;
                :
    FANBP_A#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP0607D266  ;
        + FRU-Part-Number:CA21123-B54X 003AC                       ;
        FAN_A#0 Status:Normal; Serial:PA0605B287;
            + FRU-Part-Number:CA06501-D023 A2   /371-2222-00           ;
                :
        FAN_A#15 Status:Normal; Serial:PA0605B303;
            + FRU-Part-Number:CA06501-D023 A2   /371-2222-00           ;
                :
    FANBP_B#0 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:PP0607D270  ;
        + FRU-Part-Number:CA21123-B55X 003AC                       ;
        FAN_A#4 Status:Normal; Serial:PA0605B297;
            + FRU-Part-Number:CA06501-D023 A2   /371-2222-00           ;
                :
        FAN_A#9 Status:Normal; Serial:PA0605B300;
            + FRU-Part-Number:CA06501-D023 A2   /371-2222-00           ;
                :
    SWBP#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP0607E759  ;
        + FRU-Part-Number:CA20394-B16X 001AA                       ;
    MEDBP#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP06058497  ;
        + FRU-Part-Number:CA20394-B17X 002AB                       ;
```

使用例 4　M9000 サーバに搭載されている FRU の数を表示します。

```
XSCF> showhardconf -u
SPARC Enterprise M9000; Memory_Size:240 GB
 +-----------------------------------+------------+
 |              FRU                  |  Quantity  |
 +-----------------------------------+------------+
 | CMU                               |       4    |
 |     Type:A;                       |   (   2)   |
 |     Type:B;                       |   (   1)   |
 |     Type:C;                       |   (   1)   |
 |     CPUM                          |      16    |
```

```
|         Freq:2.280 GHz;           |   (   8)   |
|         Freq:2.880 GHz;           |   (   4)   |
|         Freq:3.000 GHz;           |   (   4)   |
|     MEM                           |     112    |
|         Type:1A; Size:1 GB;       |   (  48)   |
|         Type:2B; Size:2 GB;       |   (  32)   |
|         Type:4B; Size:4 GB;       |   (  32)   |
| IOU                               |      8     |
|     Type:A;                       |   (   6)   |
|     Type:B;                       |   (   2)   |
| XSCFU_B                           |      2     |
| XBU_B                             |      8     |
| CLKU_B                            |      2     |
| OPNL                              |      1     |
| PSU                               |     15     |
| FANBP_A                           |      1     |
| FANBP_B                           |      1     |
|     FAN_A                         |     16     |
| SWBP                              |      1     |
| MEDBP                             |      1     |
+-----------------------------------+------------+
```

使用例 5　　M3000 サーバの FRU 情報を表示します（AC 電源の場合）。

```
XSCF> showhardconf
SPARC Enterprise M3000;
    + Serial:BE80601016; Operator_Panel_Switch:Service;
    + Power_Supply_System:Single; SCF-ID:XSCF#0;
    + System_Power:Off; System_Phase:Cabinet Power Off;
    Domain#0 Domain_Status:Powered Off;

    MBU_A Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000269  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-0493 0040 /541-0493-00-40       ;
        + CPU Status:Normal;
            + Freq:2.520 GHz; Type:32;
            + Core:4; Strand:2;
        + Memory_Size:8 GB;
        MEM#0A Status:Normal;
            + Code:00000000000000c14572T128000HR3.7A   2b25-20541204;
            + Type:1A; Size:1 GB;
                :
        MEM#3B Status:Normal;
            + Code:00000000000000c14572T128000HR3.7A   2b25-21341204;
            + Type:1A; Size:1 GB;
        PCI#0 Name_Property:pci; Card_type:Other;
        PCI#1 Name_Property:pci; Card_type:Other;
        PCI#2 Name_Property:pci; Card_type:Other;
        PCI#3 Name_Property:pci; Card_type:Other;
    OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000076  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-0850 0040 /541-0850-00-40       ;
    PSU#0 Status:Normal; Serial:0000000-ASTECB20  ;
        + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
        + Power_Status:Off;
```

```
        + Type:AC;
    PSU#1 Status:Normal; Serial:0000000-ASTECB17  ;
        + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
        + Power_Status:Off;
        + Type:AC;
    FANBP_B Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000053  ;
        + FRU-Part-Number:CA06629-D051 001AA
        FAN_A#0 Status:Normal;
        FAN_A#1 Status:Normal;
```

使用例 6　M3000 サーバの FRU 情報を表示します（DC 電源の場合）。

```
XSCF> showhardconf
SPARC Enterprise M3000;
    + Serial:BE80601016; Operator_Panel_Switch:Service;
    + Power_Supply_System:Single; SCF-ID:XSCF#0;
    + System_Power:Off; System_Phase:Cabinet Power Off;
    Domain#0 Domain_Status:Powered Off;

    MBU_A Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000269  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-0493 0040 /541-0493-00-40       ;
        + CPU Status:Normal;
            + Freq:2.750 GHz; Type:32;
            + Core:4; Strand:2;
        + Memory_Size:8 GB;
        MEM#0A Status:Normal;
            + Code:00000000000000c14572T128000HR3.7A   2b25-20541204;
            + Type:1A; Size:1 GB;
                :
        MEM#3B Status:Normal;
            + Code:00000000000000c14572T128000HR3.7A   2b25-21341204;
            + Type:1A; Size:1 GB;
        PCI#0 Name_Property:pci; Card_type:Other;
        PCI#1 Name_Property:pci; Card_type:Other;
        PCI#2 Name_Property:pci; Card_type:Other;
        PCI#3 Name_Property:pci; Card_type:Other;
    OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000076  ;
        + FRU-Part-Number:CF00541-0850 0040 /541-0850-00-40       ;
    PSU#0 Status:Normal; Serial:EA09320015 ;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0730 01A  /300-2278-01;
        + Power_Status:Off;
        + Type:DC;
    PSU#1 Status:Normal; Serial:EA09320016 ;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0730 01A  /300-2278-01;
        + Power_Status:Off;
        + Type:DC;
    FANBP_B Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000053  ;
        + FRU-Part-Number:CA06629-D051 001AA
        FAN_A#0 Status:Normal;
        FAN_A#1 Status:Normal;
```

使用例 7　　M3000 サーバに搭載されている FRU の数を表示します。

```
XSCF> showhardconf -u
SPARC Enterprise M3000; Memory_Size:8 GB;
 +-----------------------------------+------------+
 |              FRU                  |  Quantity  |
 +-----------------------------------+------------+
 | MBU_A                             |        1   |
 |     CPU                           |   (    1)  |
 |         Freq:2.520 GHz;           |   (    1)  |
 |     MEM                           |        8   |
 |         Type:1A; Size:1 GB;       |   (    8)  |
 | OPNL                              |        1   |
 | PSU                               |        2   |
 | FANBP_B                           |        1   |
 |     FAN_A                         |        2   |
 +-----------------------------------+------------+
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

showhostname - XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。

形式

showhostname {-a | *xscfu*}

showhostname -h

説明

showhostname(8) は、XSCF ユニットに現在設定されているホスト名を表示するコマンドです。

ホスト名は Fully Qualified Domain Name（FQDN）形式で表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a　すべての XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。-a オプションと一緒に指定されている XSCF ユニット名は無効となります。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xscfu　表示する XSCF ユニット名を指定します。システム構成によって以下のどちらかを指定できます。-a オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

- xscf#0　XSCF ユニット 0
- xscf#1　XSCF ユニット 1 （M8000/M9000 サーバの場合）

詳細説明

- M8000/M9000 サーバの場合、スタンバイ側の XSCF ユニットに異常が発生しているときはメッセージが表示されます。
- sethostname(8) コマンドを使用すると、XSCF ユニットのホスト名を設定できます。

使用例

使用例 1　すべての XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。

```
XSCF> showhostname -a
xscf#0: scf0-hostname.example.com
xscf#1: scf1-hostname.example.com
```

使用例 2　XSCF ユニット 0 に設定されているホスト名を表示します。

```
XSCF> showhostname xscf#0
xscf#0: scf0-hostname.example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethostname(8)

名前

showhttps - XSCF ネットワークに設定されている HTTPS サービスの状態を表示します。

形式

showhttps

showhttps -h

説明

showhttps(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている HTTPS サービスの状態を表示するコマンドです。

HTTPS サービスが動作しているかどうかと、認証に必要な情報のインストール状態が確認できます。インストールされている場合は、インストールされた日付も表示されます。

以下の状態が表示されます。

HTTPS status	HTTPS サービスが動作しているかどうか
Server key	ウェブサーバの秘密鍵がインストールされているかどうか
CA key	認証局の秘密鍵がインストールされているかどうか
CA cert	認証局の証明書がインストールされているかどうか
CSR	ウェブサーバ証明書要求

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。

詳細説明

sethttps(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの HTTPS サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 HTTPS サービスの状態を表示します。

```
XSCF> showhttps
HTTPS status: enabled
Server key: installed in Apr 24 12:34:56 JST 2006
CA key: installed in Apr 24 12:00:34 JST 200
CA cert: installed in Apr 24 12:00:34 JST 200
CSR:
-----BEGIN CERTIFICATE REQUEST-----
MIIBwjCCASsCAQAwgYExCzAJBgNVBAYTAmpqMQ4wDAYDVQQIEwVzdGF0ZTERMA8G
```

```
A1UEBxMIbG9jYWxpdHkxFTATBgNVBAoTDG9yZ2FuaXphdGlvbjEPMA0GA1UECxMG
b3JnYW5pMQ8wDQYDVQQDEwZjb21tb24xFjAUBgkqhkiG9w0BCQEWB2VlLm1haWww
gZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQADgY0AMIGJAoGBAJ5D57X/k42LcipTWBWzv2GrxaVM
5GEyx3bdBW8/7WZhnd3uiZ9+ANlvRAuw/YYy7I/pAD+NQJesBcBjuyj9x+IiJl9F
MrI5fR8pOIywVOdbMPCar09rrU45bVeZhTyi+uQOdWLoX/Dhq0fm2BpYuh9WukT5
pTEg+2dABg8UdHmNAgMBAAGgADANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQAux1jH3dyB6Xho
PgBuVIakDzIKEPipK9qQfC57YI43uRBGRubu0AHEcLVue5yTu6G5SxHTCq07tV5g
38UHSg5Kqy9QuWHWMri/hxm0kQ4gBpApjNb6F/B+ngBE3j/thGbEuvJb+0wbycvu
5jrhB/ZV9k8X/MbDOxSx/U5nF+Zuyw==
-----END CERTIFICATE REQUEST-----
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethttps(8)

名前

showldap - サービスプロセッサの Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）設定を表示します。

形式

showldap

showldap [-c]

showldap -h

説明

showldap(8) は、サービスプロセッサの LDAP 設定を表示するコマンドです。

オプションを指定せずに showldap(8) コマンドを実行すると、LDAP サーバへの接続時に使用される証明書チェーンとパスワードを除くすべての LDAP 設定が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c　　LDAP サーバの証明書チェーンを表示します。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1　すべての LDAP 設定データを表示します。

```
XSCF> showldap
Bind Name: user
Base Distinguishing Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout: 60
Bind password: Set
LDAP Servers: ldap://company.com:389
CERTS: None
```

使用例 2　LDAP サーバの証明書チェーンを表示します。

```
XSCF> showldap -c
There are no certificates configured.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

setldap(8)

名前 showldapssl - LDAP/SSL の構成およびメッセージを表示します。

形式 **showldapssl**

showldapssl `cert` [`-v`] [`-i` *n*]

showldapssl `log` [`-M`] [`-C`] [`-S` *start_record_number*] [`-E` *end_record_number*]

showldapssl `log -f`

showldapssl `group administrator` [`-i` *n*]

showldapssl `group operator` [`-i` *n*]

showldapssl `group custom` [`-i` *n*]

showldapssl `userdomain` [`-i` *n*]

showldapssl `usermap`

showldapssl `defaultrole`

showldapssl `server` [`-i` *n*]

showldapssl `-h`

説明 `showldapssl`(8) は、LDAP/SSL の構成および診断メッセージを表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`useradm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges`(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-f` 診断メッセージをリアルタイムで表示します。このオプションが使用されると、コマンドは終了しません。それぞれの診断メッセージが登録されるごとに表示されます。リアルタイム表示を停止するには、`Ctrl-C` を押します。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *n* インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。`-i` なし、または`-i` に何も値を設定せずに実行した場合、`showldapssl`(8) は項目 1 から 5 を逐次検索します。例外 : `-i` なしで使用すると、`showldapssl cert` コマンドはプライマリサーバの認証情報を表示し、`showldapssl server` コマンドはプライマリサーバの構成を表示します。

-v	詳細出力を指定します。cert オペランドとのみ併用され、認証全文を表示します。
-C	出力結果の末尾に、ログ内のレコード数を付加します。
-E	表示する最後のレコード番号を指定します。このとき、*end_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、-C オプションを使用します。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-S	表示する最初のレコード番号を指定します。このとき、*start_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、-C オプションを使用します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

cert	現在のサーバ認証を表示します。
log	診断メッセージを表示します。
group administrator	現在のグループ構成を表示します。
group operator	現在のグループ構成を表示します。
group custom	現在のグループ構成を表示します。
userdomain	現在の userdomain 設定を表示します。
usermap	現在のユーザーマッピング設定を表示します。
defaultrole	現在の defaultrole 設定を表示します。
server	現在の LDAP/SSL サーバ設定を表示します。

使用例

使用例 1 現在の LDAP/SSL の状態を表示します。

```
XSCF> showldapssl
usermapmode: enabled
state: enabled
strictcertmode: enabled
timeout: 4
logdetail: none
```

使用例 2 プライマリサーバの認証情報を表示します。

```
XSCF> showldapssl cert
Primary Server:
certstatus = certificate present
issuer = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
```

```
subject = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
valid from = Apr 18 05:38:36 2009 GMT
valid until = Apr 16 05:38:36 2019 GMT
version = 3 (0x02)
```

使用例 3　指定した診断メッセージを表示します。

```
XSCF> showldapssl log -S 5 -E 10
Thu Sep 2 01:43 2009 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:44 2009 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:47 2009 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:51 2009 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:52 2009 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:55 2009 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
```

使用例 4　管理者グループ 3 の構成を表示します。

```
XSCF> showldapssl group administrator -i 3
Administrator Group 3
 name: CN=pSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=company,DC=com
```

使用例 5　代替サーバ 1 の設定を表示します。ポート番号 0 は、LDAP/SSL のデフォルトのポートが使用されていることを示します。

```
XSCF> showldapssl server -i 1
Alternate Server  1
address: (none)
port: 0
```

使用例 6　オプションのユーザーマッピング設定を表示します。

```
XSCF> showldapssl usermap
attributeInfo: (&(objectclass=person)(uid=<USERNAME>))
binddn: cn=Manager,dc=company,dc=com
bindpw: Set
searchbase: ou=people,dc=company,dc=com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setldapssl(8)

名前

showlocale - 設定されている XSCF のロケールを表示します。

形式

showlocale

showlocale -h

説明

showlocale(8) は、現在設定されている XSCF のロケールを表示するコマンドです。

以下のどちらかが表示されます。

C	英語
ja_JP.UTF-8	日本語

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。

詳細説明

setlocale(8) コマンドを使用すると、XSCF のロケールが設定できます。

使用例

使用例 1 現在設定されている XSCF のロケールを表示します（英語の場合）。

```
XSCF> showlocale
C
```

使用例 2 現在設定されている XSCF のロケールを表示します（日本語の場合）。

```
XSCF> showlocale
ja_JP.UTF-8
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setlocale(8)

名前 showlocator - オペレーターパネルの CHECK LED の状態を表示します。

形式 **showlocator**

showlocator -h

説明 showlocator(8) は、オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を表示するコマンドです。

以下のいずれかの状態が表示されます。

Off（消灯）	正常、入力電源切断中、停電のいずれかの状態であることを表します。
Blinking（点滅）	保守対象の装置であることを表します。
On（点灯）	本体装置に異常が検出されたことを表します。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。

詳細説明 setlocator(8) コマンドを使用すると、CHECK LED の点滅状態を設定できます。

使用例 **使用例 1** CHECK LED の状態を表示します。

```
XSCF> showlocator
Locator LED status:Blinking
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setlocator**(8)

名前

showloginlockout - ユーザーアカウントのロックアウト機能に設定されている時間を表示します。

形式

showloginlockout

showloginlockout -h

説明

showloginlockout(8) は、ログインを 3 回続けて失敗したあとに、ログインできないようにする時間を、分で表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

ユーザーは 3 回続けてログインを試みることができます。3 回目の試みが失敗すると、setloginlockout(8) コマンドで設定された時間、ログインできなくなります。showloginlockout(8) は、設定されているロックアウト時間を、分で表示します。

設定されたロックアウト時間を経過したあとは、再度ログインを試みることができるようになります。

使用例

使用例 1　　ロックアウトのタイムアウト時間を表示します。

```
XSCF> showloginlockout
90 minutes
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

setloginlockout(8)

名前 showlogs - 指定したログを表示します。

形式

showlogs [-t *time* [-T *time*] | -p *timestamp*] [-v | -V | -S] [-r] [-M] error

showlogs [-t *time* [-T *time*] | -p *timestamp*] [-v] [-r] [-M] event

showlogs [-t *time* [-T *time*]] [-r] [-M] {power | env}

showlogs [-r] [-M] monitor

showlogs -d *domain_id* [-t *time* [-T *time*]] [-r] [-M] {console | ipl | panic}

showlogs -h

説明 showlogs(8) は、指定したログを表示するコマンドです。

ログは、デフォルトでタイムスタンプの古いものから順に表示されます。採取される単位別に、以下のログを指定できます。

Field Replaceable Unit（FRU）単位	■ エラーログ（スキャンログを含む場合がある） ■ パワーログ ■ イベントログ ■ 温度・湿度履歴 ■ 監視メッセージログ
ドメイン単位	■ コンソールメッセージログ ■ パニックメッセージログ ■ IPL メッセージログ

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- エラーログ、イベントログ、温度・湿度履歴、監視メッセージログ
  platadm, platop, fieldeng
- パワーログ
  platadm, platop, domainadm, domainmgr, fieldeng
- スキャンログ
  fieldeng
- コンソールメッセージログ、パニックメッセージログ、IPL メッセージログ
  platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション　以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id*　表示するドメイン ID を指定します。ドメイン単位のログに対して指定できます。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-M　テキストを 1 画面ずつ表示します。

-p *timestamp*　ログを単独で表示する場合に、ログのタイムスタンプを指定します。エラーログとイベントログに対して指定できます。

timestamp は、以下のいずれかの形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
　年 - 月 - 日 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm:ss
　月 / 日 / 年 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
Monddhh:mm:ssyyyy
　月名 , 日 , 時 : 分 : 秒 , 年の形式で指定します。

-r　タイムスタンプの新しいログから表示します。デフォルトでは、タイムスタンプの古いログから表示されます。

-S　エラーログに付帯されているスキャンログを表示します。fieldeng 権限を持つユーザーだけ指定できます。-v オプション、-V オプションとは一緒に指定できません。

-t *time*　ログの表示範囲を指定する場合の、開始日時を指定します。以下のいずれかの形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm
　年 - 月 - 日 , 時 : 分の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm
　月 / 日 / 年 , 時 : 分の形式で指定します。
Monddhh:mmyyyy
　月名 , 日 , 時 : 分 , 年の形式で指定します。
yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
　年 - 月 - 日 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm:ss
　月 / 日 / 年 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
Monddhh:mm:ssyyyy
　月名 , 日 , 時 : 分 : 秒 , 年の形式で指定します。

-r オプションと一緒に指定しても、-t と -T オプションの指定が逆になることはありません。監視メッセージログには使用できません。

-T *time*	ログの表示範囲を指定する場合の、終了日時を指定します。以下のいずれかの形式で指定します。 *yyyy-mm-dd,hh:mm* 年 - 月 - 日 , 時 : 分の形式で指定します。 *mm/dd/yy,hh:mm* 月 / 日 / 年 , 時 : 分の形式順で指定します。 *Monddhh:mmyyyy* 月名 , 日 , 時 : 分 , 年の形式で指定します。 *yyyy-mm-dd,hh:mm:ss* 年 - 月 - 日 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。 *mm/dd/yy,hh:mm:ss* 月 / 日 / 年 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。 *Monddhh:mm:ssyyyy* 月名 , 日 , 時 : 分 : 秒 , 年の形式で指定します。 -r オプションと一緒に指定しても、-t と -T オプションの指定が逆になることはありません。監視メッセージログには使用できません。
-v	詳細な情報を表示します。通常の表示に加え、詳細な診断コード（Diagnostic Code）と、fmadm(8)、fmdump(8) コマンドで使用される UUID、MSG-ID が表示されます。-V オプション、-S オプションとは一緒に指定できません。エラーログとイベントログに対して指定できます。
-V	より詳細な情報を表示します。-v オプションで表示される情報に加え、マシン管理詳細ログ情報および OpenBoot PROM コンソールログ情報が採取されている場合は、それらが表示されます。-v オプション、-S オプションとは一緒に指定できません。エラーログに対して指定できます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

error	エラーログを表示します。（スキャンログを含む場合がある）
event	イベントログを表示します。
power	パワーログを表示します。
env	温度・湿度履歴を表示します。
monitor	監視メッセージログを表示します。
console	コンソールメッセージログを表示します。
ipl	IPL メッセージログを表示します。
panic	パニックメッセージログを表示します。

詳細説明

各ログは以下のフォーマットで表示されます。

- エラーログ
  デフォルト

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005      Code: xxxxxxxx-xxxxxxxx-
xxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3)(FEP type = A1)
```

-v オプションを指定した場合

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005     Code: xxxxxxxx-xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3)(FEP type = A1)
Diagnostic Code:
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID:FMD-8000-11
```

-V オプションを指定した場合

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005     Code: xxxxxxxx-xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3)(FEP type = A1)
Diagnostic Code:
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID:FMD-8000-11
Diagnostic Messages:
      :
      :
```

-S オプションを指定した場合

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005     Code: xxxxxxxx-xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3)(FEP type = A1)
Diagnostic Code:
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
   xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID:FMD-8000-11
Detail log: SCAN MINOR RC 2K
   0000: xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
```

```
    0010: xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
       :
       :
```

Date: ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

Code: エラーコード
16 バイトで表示されます。

Occurred: 異常が発生した日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

Status: エラーの状態
以下のいずれかが表示されます。

Warning	ユニットの部分的な縮退または警告
Alarm	ユニットの故障または異常
Information	通知
Notice	システム状態通知

FRU: 被疑ユニット
第 1、第 2 被疑ユニットが "," （カンマ）で区切られて表示されます。第 3 被疑ユニットがある場合は、"*" が表示されます。第 2 被疑ユニット以降が表示されるかどうかは、検出された箇所によって異なります。

Msg: エラー内容

Diagnostic Code: エラー詳細コード
16 進数で表示されます。

UUID: Universal Unique Identifier の略
世界中で固有な ID で、16 進数 32 桁で表示されます。

MSG-ID: 固有のメッセージ ID

Diagnostic Messages: 詳細メッセージ
ログに詳細なメッセージがある場合に表示されます。

Detail log: スキャンログコード
ログにスキャンログがある場合に表示されます。
アドレス : 16 進数で表示されます。

■ パワーログ

```
Date                          Event             Cause          DID  Switch
Mar 30 17:25:31 JST 2005     System Power Off  Pow.Fail/Recov.--   Service
Mar 30 17:35:31 JST 2005      System Power On   Pow.Fail/Recov.--   Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005      Domain Power On   Panel          00   Locked
```

```
Mar 30 17:50:31 JST 2005     Domain Power Off  Operator      10   Service
      :
      :
```

Date: ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

Event: 電源の状態
以下のいずれかの状態が表示されます。

Domain Power On	ドメインの電源が投入されている状態
Domain Power Off	ドメインの電源が切断されている状態
System Power On	本体装置の電源が投入されている状態
System Power Off	本体装置の電源が切断されている状態
SCF Reset	XSCF がリセットされている状態
Domain Reset	ドメインが再起動されている状態
XIR	ドメインの CPU がリセットされている状態

Cause: Event となった要因
以下のうちのいずれかが表示されます。

Self Reset, Power On, System Reset, Panel, Scheduled, RCI, Pow.Fail/Recov., Operator, SW Request, Alarm, Fatal, Panic

DID: ドメイン ID
システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

Switch: オペレーターパネルのモードスイッチの状態
以下のいずれかの状態が表示されます。

Locked	通常運用時のモード
Service	サービスモード

■ イベントログ
デフォルト

```
Date                          Message
Mar 30 17:45:31 JST 2005      System power on
Mar 30 17:55:31 JST 2005      System power off
      :
      :
```

-v オプションを指定した場合

```
Date                          Message
Mar 30 17:45:31 JST 2005      System power on
  Switch= Service
  Code=xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx
       xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx
```

Date: ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

Message: イベントメッセージ

Switch: オペレーターパネルのモードスイッチの状態
以下のいずれかの状態が表示されます。

Locked	通常運用時のモード
Service	サービスモード

Code: イベント詳細情報
16 進数で表示されます。

■ 温度・湿度履歴

```
Date                          Temperature  Humidity  Power
Mar 30 17:45:31 JST 2005      32.56(C)     60.20%    System Power On
Mar 30 17:55:31 JST 2005      32.56(C)     60.25%    System Power Off
      :
      :
```

Date: ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

Temperature: 吸気温度
10 進数で小数点第 2 位まで表示されます。単位は摂氏（℃）です。

Humidity: 湿度
パーセント（%）で表示されます。M8000/M9000 サーバにだけ表示されます。

Power: 本体装置の電源の状態
以下のどちらかの状態が表示されます。

System Power On	本体装置の電源が投入されている状態
System Power OFF	本体装置の電源が切断されている状態

■ 監視メッセージログ

```
Mar 30 17:45:31 JST 2005      monitor message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      monitor message
      :
```

日付と監視メッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

■ コンソールメッセージログ

```
DomainID: 00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      console message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      console message
      :
```

[1 行目]

DomainID: ドメイン ID
システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

[2 行目以降]

日付とコンソールメッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

■ パニックメッセージログ

```
<<panic>>
Date: Mar 30 18:45:31 JST 2005      DomainID: 00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      panic message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      panic message
      :
```

[2 行目]

Date: パニック時の日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

DomainID: ドメイン ID
システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

[3 行目以降]

日付とパニックメッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

■ IPL メッセージログ

```
<<ipl>>
Date: Mar 30 18:45:31 JST 2005      DomainID: 00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      ipl message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      ipl message
      :
```

[2 行目]

Date: IPL 時の日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

DomainID: ドメイン ID
システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

[3 行目以降]

日付と IPL メッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

使用例

使用例 1 エラーログを表示します。

```
XSCF> showlogs error
Date: Mar 30 12:45:31 JST 2005     Code: 00112233-44556677-8899aabbcceeff0
  Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
  FRU: IOU#0/PCI#3
  Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
Date: Mar 30 15:45:31 JST 2005     Code: 00112233-44556677-8899aabbcceeff0
  Status: Warning                Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
  FRU: PSU#1,PSU#2
  Msg: ACFAIL occurred (ACS=3)(FEP type = A1)
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005     Code: 00112233-44556677-8899aabbcceeff0
  Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
  FRU: PSU#1,PSU#2,*
  Msg: ACFAIL occurred (ACS=3)(FEP type = A1)
```

使用例 2 指定したタイムスタンプでのエラーログを、詳細（-v）に表示します。

```
XSCF> showlogs error -p Mar3012:45:312005 -v
Date: Mar 30 12:45:31 JST 2005     Code: 00112233-44556677-8899aabbcceeff0
  Status: Alarm
  Component: IOU#0/PCI#3
  Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
  Diagnostic Code:
    00112233 44556677 8899aabb
    00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
    00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID: FMD-8000-11
```

使用例 3　指定したタイムスタンプでのエラーログを、より詳細（-v）に表示します。

```
XSCF> showlogs error -p Mar3012:45:312005 -V
Date: Mar 30 12:45:31 JST 2005      Code: 00112233-44556677-8899aabbcceeff0
  Status: Alarm                  Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
  FRU: IOU#0/PCI#3
  Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
  Diagnostic Code:
    00112233 44556677 8899aabb
    00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
    00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
  UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID: FMD-8000-11
  Diagnostic Messages
  Jul 11 16:17:42 plato10 root: [ID 702911 user.error] WARNING: /
pci@83,4000/scsi@2/sd@0,0 (sd47):
  Jul 11 16:17:42 plato10 root: [ID 702911 user.error]    incomplete write-
giving up
```

使用例 4　パワーログを表示します。

```
XSCF> showlogs power
Date                          Event             Cause          DID  Switch
Mar 30 17:25:31 JST 2005     System Power Off  Pow.Fail/Recov.--   Service
Mar 30 17:35:31 JST 2005      System Power On   Pow.Fail/Recov.--   Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005      Domain Power Off  Operator       00   Locked
Mar 30 17:50:31 JST 2005      Domain Power On   Operator       00   Service
```

使用例 5　パワーログをタイムスタンプの新しいログから表示します。

```
XSCF> showlogs power -r
Date                          Event             Cause          DID  Switch
Mar 30 17:50:31 JST 2005     Domain Power On    Operator       00   Service
Mar 30 17:45:31 JST 2005     Domain Power Off   Operator       00   Locked
Mar 30 17:35:31 JST 2005     System Power On    Pow.Fail/Recov.--   Locked
Mar 30 17:25:31 JST 2005     System Power Off   Pow.Fail/Recov.--   Service
```

使用例 6　パワーログのうち、指定した範囲のログを表示します。

```
XSCF> showlogs power -t Mar3017:302005 -T Mar3017:492005
Date                          Event             Cause          DID  Switch
Mar 30 17:35:31 JST 2005      System Power On   Pow.Fail/Recov.--   Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005      Domain Power Off  Operator       00   Locked
```

使用例 7　パワーログのうち、指定した範囲のログを表示します。タイムスタンプの新しいログから表示します。

```
XSCF> showlogs power -t Mar3017:302005 -T Mar3017:492005 -r
Date                          Event             Cause          DID  Switch
Mar 30 17:45:31 JST 2005      Domain Power Off  Operator       00   Locked
Mar 30 17:35:31 JST 2005      System Power On   Pow.Fail/Recov.--   Locked
```

使用例 8　　表示の開始日時を指定してパワーログを表示します。

```
XSCF> showlogs power -t Mar3017:302005
Date                          Event             Cause          DID  Switch
Mar 30 17:35:31 JST 2005     System Power On   Pow.Fail/Recov.--   Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005     Domain Power Off  Panel           00   Locked
Mar 30 17:50:31 JST 2005     Domain Power On   Operator        00   Service
```

使用例 9　　指定したドメインのコンソールメッセージログを表示します。

```
XSCF> showlogs console -d 00
DomainID:00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      Executing last command: boot
Mar 30 17:55:31 JST 2005      Boot device: /pci@83,4000/FJSV,ulsa@2,1/
disk@0,0:a  File and args:
Mar 30 17:55:32 JST 2005      SunOS Release 5.10 Version Generic 64-bit
```

注 – 表示されているコードやメッセージは実際の表示と異なる場合があります。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 showlookup - 認証とユーザー権限のルックアップに関する設定を表示します。

形式 **showlookup**

showlookup -h

説明 showlookup(8) は、認証とユーザー権限に関する設定を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。

使用例 **使用例 1** 認証とユーザー権限に関する設定を表示します。

```
XSCF> showlookup
Privileges lookup:Local only
Authentication lookup: Local and LDAP
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setlookup**(8)

名前

showmonitorlog - 監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。

形式

showmonitorlog

showmonitorlog -h

説明

showmonitorlog(8) は、監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示するコマンドです。

showmonitorlog(8) コマンドを実行すると、監視メッセージログを表示するためにコマンドは終了せず、XSCF シェルが占有されます。監視メッセージログ内にメッセージが登録されると、その内容が表示されます。

リアルタイム表示を終了する場合は、"Ctrl" と "C" キーを押します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。

使用例

使用例 1 監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。

```
XSCF> showmonitorlog
Apr 13 12:32:16 XXXXX Alarm: /CMU#1,/CMU#0/DDC#0:ANALYZE:SC-IOU I/F fatal
error 0x00000000;
  :
  :
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

shownameserver - XSCF ネットワークに設定されている Domain Name System（DNS）サーバおよびサーチパスを表示します。

形式

shownameserver

shownameserver -h

説明

shownameserver(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている DNS サーバおよびサーチパスを表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

詳細説明

setnameserver(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの DNS サーバおよびサーチパスが設定できます。

使用例

使用例 1　XSCF ネットワークに現在設定されている DNS サーバを表示します。3 つの DNS サーバと 5 つのサーチパスが設定されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> shownameserver
nameserver 192.168.1.2
nameserver 10.18.108.10
nameserver 10.24.1.2
search     example1.com
search     example2.com
search     example3.com
search     example4.com
search     example5.com
```

使用例 2　XSCF ネットワークに現在設定されている DNS サーバを表示します。DNS サーバおよびサーチパスは設定されていない場合を例に挙げます。

```
XSCF> shownameserver
nameserver ---
search     ---
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setnameserver**(8)

名前

shownetwork - XSCF に設定されているネットワークインターフェースの情報を表示します。

形式

shownetwork [-M] {-a | -i | *interface*}

shownetwork -h

説明

shownetwork(8) は、XSCF に現在設定されているネットワークインターフェースの情報を表示するコマンドです。

指定したネットワークインターフェース、またはすべてのネットワークインターフェースに対する情報を表示できます。以下の情報が表示されます。

xscf#*x*-*y*	XSCF ネットワークインターフェース名
HWaddr	MAC アドレス（16 進表示）
inet addr	IP アドレス
Bcast	ブロードキャスト
Mask	ネットマスク
UP/DOWN	ネットワークインターフェースが有効がどうか

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されている情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface

表示するネットワークインターフェースを指定します。システム構成によって、以下のいずれかを指定できます。-a オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1

省略形 :

`lan#0`	XSCF-LAN#0
`lan#1`	XSCF-LAN#1

- M8000/M9000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

`xscf#0-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#0-lan#1`	XSCF-LAN#1
`xscf#0-if`	XSCF ユニット間のインターフェース（ISN; Inter SCF Network）

XSCF ユニット 1:

`xscf#1-lan#0`	XSCF-LAN#0
`xscf#1-lan#1`	XSCF-LAN#1
`xscf#1-if`	ISN

引継ぎ IP アドレス :

`lan#0`	XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレス
`lan#1`	XSCF-LAN#1 の引継ぎ IP アドレス

詳細説明

- 引継ぎ IP アドレスとは、M8000/M9000 サーバの場合に、XSCF が切り替えられていることを意識せずに使用できる IP アドレスのことです。アクティブな XSCF ユニットの各 LAN ポートを `lan#0`、`lan#1` に設定しておくことによって、`lan#0`、`lan#1` という名称でアクセスできるようになります。
- M3000/M4000/M5000 サーバの場合は、`lan#0` は `xscf#0-lan#0`、`lan#1` は `xscf#0-lan#1` で固定となります。
- M8000/M9000 サーバの場合、`setnetwork`(8) コマンドで引継ぎ IP アドレスを無効としているときは、`shownetwork`(8) コマンドで引継ぎ IP アドレス指定しても何も表示されません。
- `setnetwork`(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークインターフェースが設定できます。

使用例

使用例 1　XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork xscf#0-lan#1
xscf#0-lan#1
 Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
 inet addr:192.168.10.11  Bcast: 192.168.10.255  Mask:255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:20241827 (19.3 MiB)  TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
 Base address:0x1000
```

使用例 2　M3000/M4000/M5000 サーバの、XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork lan#1
xscf#0-lan#1
 Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
 inet addr:192.168.10.11  Bcast: 192.168.10.255  Mask:255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:20241827 (19.3 MiB)  TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
 Base address:0x1000
```

使用例 3　XSCF ユニット 0 の ISN に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork xscf#0-if
xscf#0-if
 Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
 inet addr:192.168.10.128 Bcast: 192.168.10.255  Mask:255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:(0.0 B)  TX bytes:17010 (16.6 KiB)
 Base address:0x1000
```

使用例 4　XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork xscf#0-lan#0
xscf#0-lan#0
 Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
 inet addr:192.168.11.10  Bcast:192.168.11.255  Mask 255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:14541827 (13.8 MiB)  TX bytes:1459769 (1.3 MiB)
 Base address:0x1000
```

使用例 5　XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレスに設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork lan#0
lan#0     Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
 inet addr:192.168.1.10   Bcast:192.168.1.255   Mask:255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 Base address:0xe000
```

使用例 6　XSCF ネットワークの状態を表示します。

```
XSCF> shownetwork -i
Active Internet connections (without servers)
Proto Recv-Q Send-Q Local Address           Foreign Address         State
tcp        0      0 xx.xx.xx.xx:telnet     xxxx:1617               ESTABLISHED
```

使用例 7　M8000/M9000 サーバの XSCF ユニット 0 と XSCF ユニット 1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork -a
xscf#0-lan#0
 Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
 inet addr: 192.168.11.10  Bcast: 192.168.11.255  Mask:255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:12241827 (11.3 MiB)  TX bytes:1189769 (0.9 MiB)
 Base address:0x1000

xscf#0-lan#1
 Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:57
 inet addr:192.168.10.11  Bcast: 192.168.10.255  Mask:255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:20241827 (19.3 MiB)  TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
 Base address:0x1000

xscf#0-if  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:00:00:00
 inet addr:192.168.10.128  Bcast:192.168.10.255  Mask: 255.255.255.0
 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
 RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
 TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
 collisions:0 txqueuelen:1000
 RX bytes:0 (0.0 B)  TX bytes:17010 (16.6 KiB)
 Base address:0x1000

xscf#1-lan#0
 HWaddr 00:00:00:12:34:59
 inet addr:192.168.10.12  Mask:255.255.255.0

xscf#1-lan#1
```

```
   HWaddr 00:00:00:12:34:60

  xscf#1-if
   HWaddr 00:00:00:12:34:61
  XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setnetwork(8)

名前

shownotice - XSCF Control Package（XCP）の著作権および著作権に関するライセンス情報を表示します。

形式

shownotice [-c {copyright|license}]

shownotice -h

説明

shownotice(8) は、XCP の著作権、および存在する場合はライセンス情報を表示するコマンドです。

オプションを指定しない場合は、著作権情報とライセンス情報が表示されます。-c オプションを指定すると、著作権またはライセンス情報のどちらかを表示できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {copyright|license}　表示する XCP 情報を指定します。以下のどちらかを指定できます。

copyright
　著作権情報だけを表示します。
license
　ライセンス情報だけを表示します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1　著作権情報だけを表示します。

```
XSCF> shownotice -c copyright
[ 著作権情報が表示されます。]
```

使用例 2　著作権情報とライセンス情報を表示します。

```
XSCF> shownotice
[ 著作権情報とライセンス情報が表示されます。]
```

名前 showntp - XSCF に設定されている NTP 情報を表示します。

形式 **showntp** {-l | -a | *address* | -s | -m}

showntp -h

説明 showntp(8) は、XSCF に現在設定されている NTP 情報を表示するコマンドです。

以下の情報を表示できます。

- XSCF ネットワークに登録されている NTP サーバ
- NTP サーバとの同期状態
- XSCF に設定されている stratum 値
- 優先サーバの指定の有無
- XSCF に設定されているローカルクロックのクロックアドレス

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a　XSCF ネットワークに現在設定されているすべての NTP サーバを表示します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-l　NTP サーバと同期しているかどうかを表示します。

-m　優先サーバが指定されているかどうか（perfer）と、ローカルクロックのクロックアドレス（localaddr）を表示します。

perfer では以下のどちらかが表示されます。

on	優先サーバが指定されています。
off	優先サーバが指定されていません。

localaddr ではローカルクロックのクロックアドレス 127.127.0.*x* の最下位バイトが、0 から 3 までの数値で表示されます。

-s　XSCF に設定されている stratum 値を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

表示する NTP サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。-a オプションが指定されている場合は無効となります。

IP アドレスを指定する場合は 4 組の整数値の間に "." （ピリオド）をつけて指定します。以下の形式で指定できます。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx

0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ホスト名を指定する場合は、RFC 1034 に準拠した形式で指定します。

詳細説明

- 優先サーバが指定されていない場合は、showntp(8) コマンドで表示された NTP サーバには prefer 情報はありません。
- setntp(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの NTP サーバが設定できます。
- setntp(8) コマンド実行後に showntp(8) コマンドを実行すると、setntp(8) コマンドで設定された内容が表示されます。現在動作している NTP の設定情報を確認する場合は、-l オプションをつけて実行してください。

使用例

使用例 1 登録済みの NTP サーバをすべて表示します（優先サーバが指定されている場合）。

```
XSCF> showntp -a
server ntp1.example.com prefer
server ntp2.example.com
```

使用例 2 NTP サーバへの同期を確認し、結果を表示します。

```
XSCF> showntp -l
 remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*192.168.0.27    192.168.1.56     2 u   27   64  377   12.929   -2.756   1.993
+192.168.0.57    192.168.1.86     2 u   32   64  377   13.030    2.184  94.421
 127.127.1.0     .LOCL.           5 l   44   64  377    0.000    0.000   0.008
```

使用例 3 XSCF に設定されている stratum 値を表示します。

```
XSCF> showntp -s
stratum : 5
```

使用例 4 優先サーバが指定されているかどうかと、ローカルクロックのクロック

アドレスを表示します。

```
XSCF> showntp -m
prefer : on
localaddr : 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setntp(8)

名前

showpacketfilters - XSCF ネットワークで設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。

形式

showpacketfilters {-a | -l} [-M]

showpacketfilters -h

説明

showpacketfilters(8) は、XSCF ネットワークで設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示するコマンドです。

ユーザー権限

すべてのユーザーが実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a　XSCF に設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-l　XSCF に設定されている IP パケットフィルタリングルールの運用状態を表示します。

-M　テキストを 1 画面ずつ表示します。

詳細説明

setpacketfilters(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークで使用する IP パケットフィルタリングルールを設定できます。

使用例

使用例 1　M8000/M9000 サーバで、XSCF ネットワークに設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。

```
XSCF> showpacketfilters -a
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i xscf#0-lan#0 -j DROP
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i xscf#1-lan#0 -j DROP
-s 10.10.10.10/255.255.255.255 -j DROP
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i xscf#0-lan#1 -j ACCEPT
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i xscf#1-lan#1 -j ACCEPT
-i xscf#0-lan#1 -j DROP
-i xscf#1-lan#1 -j DROP
```

使用例 2　M8000/M9000 サーバで、XSCF ネットワークの IP パケットフィルタリングルールの運用状態を表示します。

```
XSCF> showpacketfilters -l
 pkts bytes target     prot in             source
 0     0 DROP       all  xscf#0-lan#0  172.16.0.0/255.255.0.0
 0     0 DROP       all  *              10.10.10.10
 0     0 ACCEPT     all  xscf#0-lan#1  192.168.100.0/255.255.255.0
```

```
  0     0 DROP       all  xscf#0-lan#1  0.0.0.0/0.0.0.0

  pkts bytes target     prot in            source
  0     0 DROP       all  xscf#1-lan#0  172.16.0.0/255.255.0.0
  0     0 DROP       all  *             10.10.10.10
  0     0 ACCEPT     all  xscf#1-lan#1  192.168.100.0/255.255.255.0
  0     0 DROP       all  xscf#1-lan#1  0.0.0.0/0.0.0.0
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpacketfilters(8)

名前 showpasswordpolicy - 現在のパスワードポリシーの設定を表示します。

形式 **showpasswordpolicy**

showpasswordpolicy -h

説明 showpasswordpolicy(8) は、パスワードポリシーの設定を表示するコマンドです。

pam_cracklib モジュール、有効期限の日付、およびパスワード履歴に保存されるパスワードの数が含まれます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。

使用例 **使用例 1** パスワードポリシーの設定を表示します。

```
XSCF> showpasswordpolicy
Mindays:  0
Maxdays:  99999
Warn:     7
Inactive: -1
Expiry:   0
Retry:    3
Difok:    10
Minlen:   9
Dcredit:  1
Ucredit:  1
Lcredit:  1
Ocredit:  1
Remember: 3
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setpasswordpolicy**(8)

名前

showpowerupdelay - 現在設定されているシステムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を表示します。

形式

showpowerupdelay

showpowerupdelay -h

説明

showpowerupdelay(8) は、現在設定されているシステムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を設定するコマンドです。

以下の内容が表示されます。

warmup time	暖機運転時間
wait time	起動までの待ち時間

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。

詳細説明

setpowerupdelay(8) コマンドを使用すると、システムの暖機運転と起動までの待ち時間が設定できます。

使用例

使用例 1 システムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を表示します。

```
XSCF> showpowerupdelay
warmup time : 10 minute(s)
wait time   : 20 minute(s)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpowerupdelay(8)

名前 showresult - 直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。

形式 **showresult**

showresult -h

説明 showresult(8) は、直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。

showresult(8) は、直前に実行したコマンドが成功したか否かをリモート制御プログラムが確認するのに便利です。

ユーザー権限 すべてのユーザーが実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。

詳細説明 Ctrl-C などで、実行中のコマンドの処理を中断したあと showresult(8) コマンドを実行すると、0 または 0 以外の数値で、中断されたコマンドに依存した終了ステータスが出力されます。

使用例 **使用例 1** setupfru(8) コマンドの実行結果を表示します。

```
XSCF> setupfru -x 1 sb 0
XSCF> showresult
0
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

名前 showroute - XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。

形式 **showroute** [-M] [-n] {-a | *interface*}

showroute -h

説明 showroute(8) は、XSCF ネットワークインターフェースに現在設定されているルーティング情報を表示するコマンドです。

指定したネットワークインターフェース、またはすべてのネットワークインターフェースに対するルーティング情報を表示できます。以下の情報が表示されます。

Destination	宛先となる IP アドレス
Gateway	ゲートウェイ
Netmask	ネットマスク
Flags	ルーティングの状態を表すフラグ

U	経路が有効である
H	1 つのホストだけに到達可能
G	ゲートウェイを使用する
R	回復される動的経路
C	キャッシュのエントリーである
!	拒否された経路である

Interface	XSCF ネットワークインターフェース名

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-n	ホスト名の名前解決をしないで、IP アドレスを表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface

表示するネットワークインターフェースを指定します。システム構成によって、以下のいずれかを指定できます。-a オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

xscf#0-lan#0	XSCF-LAN#0
xscf#0-lan#1	XSCF-LAN#1

省略形 :

lan#0	XSCF-LAN#0
lan#1	XSCF-LAN#1

- M8000/M9000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

xscf#0-lan#0	XSCF-LAN#0
xscf#0-lan#1	XSCF-LAN#1

XSCF ユニット 1:

xscf#1-lan#0	XSCF-LAN#0
xscf#1-lan#1	XSCF-LAN#1

詳細説明

setroute(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークのルーティングが設定できます。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定されているルーティング情報を表示します。

```
XSCF> showroute xscf#0-lan#0
Destination     Gateway         Netmask         Flags Interface
192.168.10.0    *               255.255.255.0   U     xscf#0-lan#0
default         192.168.10.1    0.0.0.0         UG    xscf#0-lan#0
```

使用例 2 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定されているルーティング情報を、ホスト名の名前解決をしないで表示します。

```
XSCF> showroute -n xscf#0-lan#0
Destination     Gateway         Netmask         Flags Interface
192.168.10.0    0.0.0.0         255.255.255.0   U     xscf#0-lan#0
0.0.0.0         192.168.10.1    0.0.0.0         UG    xscf#0-lan#0
```

使用例 3 M8000/M9000 サーバの XSCF ユニット 0 と XSCF ユニット 1 のすべてのルー

ティング情報を表示します。

```
XSCF> showroute -a
Destination     Gateway         Netmask         Flags Interface
192.168.10.0    *               255.255.255.0   U     xscf#0-lan#0
default         192.168.10.1    0.0.0.0         UG    xscf#0-lan#0

Destination     Gateway         Netmask         Interface
192.168.10.0    *               255.255.255.0   xscf#1-lan#0
default         192.168.10.1    0.0.0.0         xscf#1-lan#0
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setroute(8)

名前

showshutdowndelay - 無停電電源装置（UPS）からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を表示します。

形式

showshutdowndelay

showshutdowndelay -h

説明

showshutdowndelay(8) は、UPS 接続されたシステムで停電が発生した場合の、システムシャットダウン開始までの待ち時間を表示するコマンドです。

setshutdowndelay(8) コマンドで設定した時間が表示されます。デフォルトでは 10 秒に設定されています。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

使用例

使用例 1　　シャットダウン開始までの待ち時間を表示します。

```
XSCF> showshutdowndelay
UPS shutdown wait time : 600 second(s)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

setshutdowndelay(8)

名前 showsmtp - Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）の設定情報を表示します。

形式

showsmtp

showsmtp [-v]

showsmtp -h

説明 showsmtp(8) は、SMTP の設定情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platop, platadm, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

詳細説明 SMTP 情報には、メールサーバおよび返信用アドレスが含まれます。

使用例

使用例 1 SMTP の設定情報を表示します。

```
XSCF>  showsmtp
Mail Server: 10.4.1.1
Port: 25
Authentication Mechanism: smtp-auth
 User Name: jsmith
 Password: ********
Reply Address: adm@customer.com
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setsmtp**(8)

名前 showsnmp - SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示します。

形式 **showsnmp**

showsnmp -h

説明 showsnmp(8) は、SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示するコマンドです。

表示される情報には、エージェントのステータス、ポート、システムの場所、連絡先と説明、トラップホスト、および SNMP のバージョンおよび有効な MIB モジュールが含まれます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platop, platadm, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。

使用例 **使用例 1** セットアップされていないシステムの、SNMP 情報を表示します。

```
XSCF>  showsnmp

Agent Status:       Disabled
Agent Port:         161
System Location:    Unknown
System Contact:     Unknown
System Description: Unknown

Trap Hosts: None
SNMP V1/V2c: None

Enabled MIB Modules: None
```

使用例 2 SNMPv3 トラップホストがセットアップされた、無効なシステムの SNMP 情報を表示します。

```
XSCF>  showsnmp

Agent Status:       Disabled
Agent Port:         161
System Location:    SanDiego
System Contact:     bob@jupiter.west
System Description: FF1

Trap Hosts:
```

```
Hostname     Port      Type   Community String  Username  Auth Protocol
--------     ----      ----   ----------------  --------  --------------
host1         162       v3     n/a               jsmith   SHA

SNMP V1/V2c: None

Enabled MIB Modules: None
```

使用例 3 SNMPv1 トラップホストや SNMPv2c トラップホストがセットアップされた、有効なシステムの SNMP 情報を表示します。

```
XSCF>  showsnmp

Agent Status:       Enabled
Agent Port:         161
System Location:    SanDiego
System Contact:     jsmith@jupiter.west
System Description: FF1

Trap Hosts:
Hostname     Port      Type   Community String  Username  Auth Protocol
--------     ----      ----   ----------------  --------  --------------
host1         162       v1     public            jsmith   SHA
host2         162       v2c    public            n/a      n/a
host3         162       v3     n/a               bob      SHA

SNMP V1/V2c:

Status:           Enabled
Community String: public

Enabled MIB Modules:
SP_MIB
FM_MIB
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsnmp(8)

名前 showsnmpusm - SNMP エージェントに関する現在の User-based Security Model（USM）情報を表示します。

形式 **showsnmpusm**

showsnmpusm -h

説明 showsnmpusm(8) は、SNMP エージェントに関する現在の USM 情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platop, platadm, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。

使用例 **使用例 1** セットアップされていないシステムの、SNMP 情報を表示します。

```
XSCF>  showsnmpusm
Username    Auth Protocol
--------    --------------
jsmith      SHA
sue         MD5
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setsnmpusm**(8)

名前

showsnmpvacm - SNMP エージェントに関する現在の View-based Control Access（VACM）情報を表示します。

形式

showsnmpvacm

showsnmpvacm -h

説明

showsnmpvacm(8) は、SNMP エージェントに関する現在の VACM 情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platop, platadm, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　　使用方法を表示します。

使用例

使用例 1　　システムの SNMP 情報を表示します。

```
XSCF>  showsnmpvacm
Groups:
Groupname   Username
---------   --------
admin       jsmith, bob

Views:
View      Subtree   Mask    Type
----      -------   ----    ----
all_view  .1        ff      include

Access:
View      Group
----      -----
all_view  admin
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsnmpvacm(8)

名前

showssh - XSCF ネットワークに設定されている Secure Shell（SSH）サービスの内容を表示します。

形式

showssh [-c hostkey] [-M]

showssh -c pubkey [-u *user_name*] [-M]

showssh -h

説明

showssh(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている SSH サービスの内容を表示するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

SSH status	SSH サービスが有効かどうか
SSH DSCP	ドメイン－ SP 通信プロトコル（DSCP）を経由して、ドメインから SSH サービスへのアクセスを許可しているかどうか
RSA key	RSA 形式のホスト公開鍵
DSA key	DSA 形式のホスト公開鍵
Fingerprint	フィンガープリント形式のホスト公開鍵

ユーザー公開鍵の表示を指定した場合は、システムで自動的につけられるユーザー公開鍵番号とユーザー公開鍵が表示されます。

XSCF では SSH2 だけサポートされます

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- 他のユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の表示 :
  useradm
- 上記以外の情報の表示 :
  useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c hostkey	ホスト公開鍵を表示します。-c オプションが省略された場合は "-c hostkey" が指定されたとみなされます。
-c pubkey	ユーザー公開鍵を表示します。-c オプションが省略された場合は "-c hostkey" が指定されたとみなされます。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-u *user_name*	ユーザー公開鍵を表示するユーザーアカウント名を指定します。"-c pubkey" と一緒に指定します。-u オプションを省略した場合は、現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵が表示されます。

詳細説明

- ユーザー公開鍵に対して自動的につけられるユーザー公開鍵番号は、setssh(8) コマンドでユーザー公開鍵を削除するときに指定できます。
- setssh(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの SSH サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 ホスト公開鍵の情報を表示します。

```
XSCF> showssh
SSH status: enabled
SSH DSCP: accept
RSA key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAt0IG3wfpQnGr51znS9XtzwHcBBb/
UU0LN08SilUXE6j+
avlxdY7AFqBf1wGxLF+Tx5pTa6HuZ8o8yUBbDZVJAAAAFQCfKPxarV+/5qzK4A43Qaigkqu/
6QAAAIBM
LQl22G8pwibESrh5JmOhSxpLzl3P26ksI8qPr+7BxmjLR0k=
Fingerprint:
1024 e4:35:6a:45:b4:f7:e8:ce:b0:b9:82:80:2e:73:33:c4 /etc/ssh/
ssh_host_rsa_key.pub

DSA key:
ssh-dss
AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAJSy4GxD7Tk4fxFvyW1D0NUDqZQPY3PuY2IG7QC4BQ1kewDnblB8
/
JEqI+8pnfbWzmOWU37KHL19OEYNAv6v+WZT6RElU5Pyb8F16uq96L8QDMswFlICMZgrn+ilJN
Str6r8
KDJfwOQMmK0eeDFj2mL40NOvaLQ83+rRwW6Ny/yF1Rgv6PUpUqRLw4VeRb+uOfmPRpe6/
kb4z++lOhtp
WI9bay6CK0nrFRok+z54ez7BrDFBQVuNZx9PyEFezJG9ziEYVUag/23LIAiLxxBmW9pqa/
WxC21Ja4RQ
VN3009kmVwAAAIAON1LR/
9Jdd7yyG18+Ue7eBBJHrCA0pkSzvfzzFFj5XUzQBdabh5p5Rwz+1vriawFI
ZI9j2uhM/3HQdrvYSVBEdMjaasF9hB6T/
uFwP8yqtJf6Y9GdjBAhWuH8F13pX4BtvK9IeldqCscnOuu0
e2rlUoI6GICMr64FL0YYBSwfbwLIz6PSA/yKQe23dwfkSfcwQZNq/
5pThGPi3tob5Qev2KCK2OyEDMCA
OvVlMhqHuPNpX+hE19nPdBFGzQ==
Fingerprint:
1024 9e:39:8e:cb:8a:99:ff:b4:45:12:04:2d:39:d3:28:15 /etc/ssh/
ssh_host_dsa_key.pub
```

使用例 2 現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵を表示しま

す。

```
XSCF> showssh -c pubkey
Public key:
 1  ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
 2  ssh-rsa
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDCBnzANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOBjQAwgYkCgYEA
nkPntf+TjYtyKlNYFbO/YavFpUzkYTLHdt0Fbz/
tZmGd3e6Jn34A2W9EC7D9hjLsj+kAP41Al6wFwGO7
KP3H4iImX0Uysjl9Hyk4jLBU51sw8JqvT2utTjltV5mFPKL6bDcAgY9=efgh@example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setssh(8)

名前 showstatus - 縮退された Field Replaceable Unit（FRU）を表示します。

形式 **showstatus** [-M]

showstatus -h

説明 showstatus(8) は、本体装置を構成する FRU の中で、縮退されたユニットの情報を表示するためのコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

詳細説明 本体装置を構成する FRU の中で、故障または縮退が発生したユニットとその 1 階層上のユニットの情報が表示されます。表示されたユニットには、"Status:" 以降に以下のいずれかの状態が表示されます。また、故障または縮退が発生したユニットには、異常箇所であることを表す "*" が表示されます。

状態	内容
Normal	正常に動作している状態
Faulted	故障していて動作していない状態
Degraded	ユニットは動作中。ユニット内の一部が故障または縮退していたり、何らかのエラーが検出されていたりするために、ユニットも故障状態を呈しているが、正常に動作中。
Deconfigured	構成異常、環境異常、または他のユニットの縮退によって、正常でありながら縮退している状態
Maintenance	保守作業中。deletefru(8)、replacefru(8)、または addfru(8) 操作中。

使用例 **使用例 1** 縮退されたユニットを表示します。ここでは CPU メモリユニット上の CPU

モジュールとメモリが、故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
  CMU#0;
*       CPUM#0-CHIP#0 Status:Faulted;
*       MEM#00A Status:Faulted;
```

使用例 2 縮退されたユニットを表示します。ここではメモリボード上のメモリが故障のため縮退している場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
  MBU_B;
   MEMB#0;
*           MEM#0A Status:Faulted;
```

使用例 3 縮退されたユニットを表示します。ここではマザーボードユニット上の CPU ／メモリボードユニットとメモリが、故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
 MBU_B Status:Normal;
*       MEMB#1 Status:Deconfigured;
*           MEM#3B Status:Deconfigured;
```

使用例 4 縮退されたユニットを表示します。ここではクロスバーユニットが縮退しているため、CPU ／メモリボードユニットが縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
 MBU_B Status:Normal;
*       CPUM#1-CHIP#1 Status:Deconfigured;
*   XBU_B#0 Status:Degraded;
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 showsunmc - セットアップ情報および Sun Management Center エージェントのステータスを表示します。

形式 **showsunmc** [isenabled]

showsunmc -h

説明 このコマンドは、セットアップ情報および Sun Management Center エージェントの現在のステータスを表示するために使用します。isenabled オプションを指定して使用すると、showsunmc(8) コマンド出力にエージェントのステータスが値で表示されます。エージェントが有効な場合は 1、エージェントが無効な場合は 0 です。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

isenabled　エージェントのステータスだけを表示します。1 という値は、エージェントが有効であることを示し、0 という値は、エージェントが無効であることを示します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例 **使用例 1**　セットアップされておらず、有効でないエージェントのステータスを示します。

```
XSCF> showsunmc
Agent Status:                   Disabled
Setup Status:                   Not set up
SunMC Server:                   unknown
Security Seed:                  maplesyr
SNMPv1 Community String:        public
Agent Port:                     1161
Host Trap Port:                 162
Host Event Port:                163
SNMP Agent Port:                161
Domain Agent Ports:             1161
```

使用例 2　セットアップされているが、有効でないエージェントのステータスを示します。

```
XSCF> showsunmc
Agent Status:                   Disabled
Setup Status:                   Set up
SunMC Server:                   balon
Security Seed:                  maplesyr
```

```
SNMPv1 Community String:         double_secret
Agent Port:                      1161
Host Trap Port:                  162
Host Event Port:                 163
SNMP Agent Port:                 161
Domain Agent Ports:              1161
```

使用例 3　有効なエージェントのステータスを示します。

```
XSCF> showsunmc isenabled
1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsunmc(8)

名前

showtelnet - XSCF ネットワークに設定されている Telnet サービスの状態を表示します。

形式

showtelnet

showtelnet -h

説明

showtelnet(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている Telnet サービスの状態を表示するコマンドです。

以下のどちらかの状態が表示されます。

enable	Telnet サービスが稼働していること表します。
disable	Telnet サービスが停止していることを表します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。

詳細説明

settelnet(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの Telnet サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 XSCF ネットワークに現在設定されている Telnet サービスの状態を表示します。

```
XSCF> showtelnet
Telnet status:enabled
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

settelnet(8)

名前

showtimezone - 現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示します。

形式

showtimezone -c tz

showtimezone -c dst [-m {standard | custom}]

showtimezone -h

説明

showtimezone(8) は、現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c tz
: タイムゾーンを表示します。

-c dst
: サマータイムの情報を表示します。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m {standard | custom}
: 表示するサマータイムの情報を指定します。以下のどちらかを指定できます。-m オプションを省略した場合は、"-m custom" が指定されたとみなされます。

  standard
  : 現在のタイムゾーンに標準で設定されている、サマータイムの情報を表示します。

  custom
  : settimezone(8) コマンドで設定したサマータイムの情報を表示します。サマータイムを設定していない場合は、何も表示されません。

詳細説明

- サマータイムの情報は、以下の形式で表示されます。
  - custom を指定した場合
    std offset dst[*offset2*] [*from-date*[*/time*] *to-date*[*/time*]]

std
: タイムゾーンの略称

offset タイムゾーンとグリニッジ標準時（GMT）とのオフセット時間

オフセットがプラスの場合はマイナス（-）、マイナスの場合はプラス（+）で表示されます。

dst サマータイム名

offset2 サマータイムと GMT とのオフセット時間

オフセットがプラスの場合はマイナス（-）、マイナスの場合はプラス（+）で表示されます。

from-date[/*time*] サマータイム開始情報

from-date は以下のいずれかの形式で表示されます。

M*m.w.d*

M*m*: サマータイムが開始される月。*m* は 1 から 12 までの数値で表示されます。
w: サマータイムが開始される週。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で表示されます。
d: サマータイムが開始される曜日。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で表示されます。

J*n*

J*n*: サマータイムが開始される日にち。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。

n

n: サマータイムが開始される日にち。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time にはサマータイムに切り替える時刻が、切り替える前の時刻で表示されます。

hh:mm:ss " 時間 : 分 : 秒の形式 " で表示されます。デフォルトは、02:00:00 です。

to-date[/*time*]　サマータイム終了情報

to-date は以下のいずれかの形式で表示されます。

M*m.w.d*

M*m*: サマータイムが終了する月。*m* は 1 から 12 までの数値で表示されます。
w: サマータイムが終了する週。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で表示されます。
d: サマータイムが終了する曜日。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で表示されます。

J*n*

J*n*: サマータイムが終了する日にち。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。

n

n: サマータイムが終了する日にち。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time にはサマータイムから切り替える時刻が、切り替える前の時刻で表示されます。

hh:mm:ss　" 時間 : 分 : 秒の形式 " で表示されます。デフォルトは、02:00:00 です。

- standard を指定した場合
  From:　*ddd MM dd hh:mm:ss yyyy dst*
  To:　*ddd MM dd hh:mm:ss yyyy dst*

ddd	曜日
MM	月
dd	日
hh	時
mm	分
ss	秒
yyyy	年
dst	サマータイムゾーン名

- settimezone(8) コマンドを使用すると、XSCF のタイムゾーンが設定できます。

使用例

使用例 1 タイムゾーンを 表示します。

```
XSCF> showtimezone -c tz
Asia/Tokyo
```

使用例 2 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 3 月最終日曜日 2:00 から 10 月最終日曜日 2:00 までと設定されている場合に、サマータイム情報を 表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m custom
JST-9JDT,M3.5.0,M10.5.0
```

使用例 3 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 4 月第 1 日曜日 0:00 から 9 月第 1 日曜日 0:00 までと設定されている場合に、サマータイム情報を 表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst
JST-9JDT-10,M4.1.0/00:00:00,M9.1.0/00:00:00
```

使用例 4 現在のタイムゾーンに標準で設定されているサマータイムの情報を表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m standard
From: Sun Mar  9 03:00:00 2008 PDT
To:   Sun Nov  2 01:59:59 2008 PDT
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdate(8), **settimezone**(8), **showdate**(8)

名前 showuser - XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。

形式 **showuser**

showuser [[-a] [-M] [-p] [-u] [*user*]]

showuser [[-a] [-l] [-M] [-p] [-u]]

showuser -h

説明 showuser(8) は、XSCF ユーザーアカウント情報を表示するコマンドです。

ユーザーアカウント名を指定して showuser(8) コマンドを実行すると、指定したユーザーのアカウント情報が表示されます。ユーザーアカウント名を指定しないで showuser(8) コマンドを実行すると、現在のユーザーのアカウント情報が表示されます。-l オプションを指定して showuser(8) コマンドを実行すると、すべてのユーザーのアカウント情報が表示されます。

-a、-p、-u のうち 1 つまたは複数のオプションを指定して showuser(8) コマンドを実行すると、以降のオプションの項で説明する情報が表示されます。これらのオプションを何も指定せずに showuser(8) コマンドを実行すると、すべてのアカウント情報が表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- 自分のアカウント情報の表示 :
  必要な権限はありません。
- 他のユーザーアカウント情報の表示 :
  useradm

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a　パスワードの有効性およびアカウントの状態に関する情報を表示します。XSCF ユーザーアカウントに対してのみ有効です。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-l　ユーザーのログイン名でソートされたすべての XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。*user* オペランドとは一緒に使用できません。

-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
-p	ユーザーに割り当てられているすべての権限を表示します。これは、ローカルユーザーとリモートユーザーに対して有効です。
-u	ユーザー ID（UID）を表示します。これは、ローカルユーザーとリモートユーザーに対して有効です。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	既存のユーザーアカウントの名前。-l オプションとは一緒に使用できません。

使用例

使用例 1 パスワードおよびアカウントの有効性に関する情報を表示します。

```
XSCF>  showuser -a
User Name:          jsmith
Status:             Enabled
Minimum:            0
Maximum:            99999
Warning:            7
Inactive:           -1
Last Change:        Aug 22, 2005
Password Expires:   Never
Password Inactive:  Never
Account Expires:    Never
```

使用例 2 ユーザー権限の情報を表示します。

```
XSCF>  showuser -p
User Name:          jsmith
Privileges:         domainadm@1,3-6,8,9
                    platadm
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **deleteuser**(8), **disableuser**(8), **enableuser**(8), **password**(8), **setprivileges**(8)

名前 snapshot - 環境、ログ、エラー、および Field Replaceable Unit Identifier（FRUID）に関するデータを収集し、転送します。

形式 **snapshot** -d *device* [-r] [-e [-P *password*]] [-L{F|I|R}] [-l] [-v] [[-q] -{y|n}] [-S *time* [-E *time*]]

snapshot -t *user@host:directory* [-e [-P *password*]] [-k *host-key*] [-l] [-L{F|I|R}] [-p *password*] [-v] [[-q] -{y|n}] [-S *time* [-E *time*]]

snapshot -T [-D *directory*] [-e [-P *password*]] [-k *host-key*] [-l] [-L{F|I|R}] [-v] [[-q] -{y|n}] [-S *time* [-E *time*]]

snapshot -h

説明 snapshot(8) はデータ収集メカニズムを提供し、サービスプロセッサ上の診断情報を迅速、確実、柔軟に取得するコマンドです。

snapshot(8) コマンドは、構成、環境、ログ、エラー、および FRUID 情報のデータを収集し、指定された宛先にデータを転送します。

snapshot(8) コマンドは、収集したデータをファイルへ出力します。ファイル名は、サービスプロセッサに割り当てられているホスト名と IP アドレス、および snapshot 実行時のサービスプロセッサ上の日付と UTC 時間（時、分、秒形式）に基づいて自動生成されます。たとえば jupiter:10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44 のようになります。snapshot(8) コマンドは、出力ファイル名は指定できません。ファイルとコマンド出力がサービスプロセッサから収集されると、snapshot は出力データを圧縮して、.zip 形式のアーカイブに書き込みます。

snapshot(8) コマンドは、-t オプション、-T オプション、-d オプションのいずれかが使用されているかに基づいて、収集したデータをリモートネットワークホストまたは外部メディア装置に保存します。-t オプションを使って収集したデータをリモートネットワークホストに保存するには、ホスト名（ または IP アドレス）、リモートネットワークホスト上の宛先ディレクトリ、およびリモートホスト上のユーザー名 を指定する必要があります。すでに setarchiving(8) を使用してアーカイブの対象を設定している場合、同じ情報を利用して、リモートネットワーク上にデータを保存するために -T オプションを使用できます。また、-T オプションと -D オプションを一緒に使って、保存するディレクトリだけを変更することもできます。リモートネットワークホスト上にデータを保存するとき、snapshot はリモートファイルへのデータのパイプ役としての機能を果たすために SSH ネットワーク接続を開きます。

-S オプション、および必要に応じて -E オプションを使用して、日付範囲を指定することでいくつかのより大きいログファイル上へのデータ収集を制限できます。

SSH や SSL などの暗号化ネットワークプロトコルが、ネットワーク接続を介したデータ転送に使用されます。.zip アーカイブ自体を暗号化するには、-e オプションを使用します。このプロセスで暗号化した .zip アーカイブを復号化するには、以下の openssl コマンドで、snapshot(8) コマンドに指定した暗号化パスワードを

使用します。以下は、ファイル jupiter_10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44.zip.e を復号化する例です。

```
% openssl aes-128-cbc -d -in jupiter_10.1.1.1_2006-07-08T22-33-
44.zip.e -out jupiter_10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44.zip
```

snapshot(8) コマンドによって生成されるすべての .zip アーカイブに、snapshot 自体が生成する 2 つのファイルが入っています。README という名前の最初のファイルには、.zip アーカイブのもとの名前、.zip アーカイブの作成に使用したサービスプロセッサ上の設定ファイルの名前、snapshot(8) コマンドのバージョン、およびアーカイブの生成にログ専用モード（-l オプション）が使用されたかどうかが記述されます。CONFIG という名前の 2 番目のファイルは、snapshot(8) コマンドがアーカイブの生成に使用した、実際の設定ファイルのコピーです。

snapshot(8) コマンドで収集されたデータは、システム上の問題を診断するために保守作業員に使用される場合があります。snapshot(8) コマンドでは、診断の目的によって異なるデータのセットを収集できます。これらのデータセットはそれぞれ Initial、Root Cause、Full と呼ばれ、-L オプションを使用して設定されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-D` *directory*

`-T` オプションと一緒に使います。`setarchiving`(8) で値を設定する代わりに、*directory* 値を指定します。*directory* フィールドは、"`-`" や "`~`" で始めてはいけません。詳細については、`-T` オプションを参照してください。

`-d` *device*

使用する外部メディア装置を指定します。`-d` には、以下のオプションが使用可能です。

`-r`

データ収集の前に、外部メディア装置にあるすべてのファイルを削除します。このオプションは、`-t` または `-T` オプションと一緒に使用すると、無効になります。

`-E` *time*

データが収集される終了時間を指定します。開始時間の `-S` *time* オプションと一緒に使用して、`snapshot`(8) で収集されるログメッセージの時間枠を定義します。`-E` *time* によって指定した時間より前に作成されたログエントリーだけが、`snapshot` によって収集されます。`-S` オプションも参照してください。

time

`strptime`(3) で記述される、以下の 2 つのフォーマットのどちらか 1 つの形式を使用します。

```
%Y-%m-%d,%H:%M:%S
%Y-%m-%d_%H-%M-%S
```

`-e`

zip 形式のアーカイブを暗号化します。`-P` と *password* を使用する場合に必要です。

`-h`

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-k` *host-key*

`-t` あるいは、`-T` オプションを指定します。サービスプロセッサがネットワークホストにログインするために使用する公開キーを設定します。このオプションは、`-d` オプションと一緒に使用すると、無効になります。

host-key に指定できる値は、以下のとおりです。

`none`	ネットワークホストの認証に公開キーを使用しない場合に、このリテラル値を指定します。
`download`	`snapshot(8)` コマンドが `SSH` を使用してネットワークホストの公開ホストキーのダウンロードと、`-t` 引数で指定されたホストからの公開ホストキーのダウンロードを行う場合に、このリテラル値を指定します。`snapshot(8)` コマンドはキーの `md5` フィンガープリントを表示し、確認を求めます。キーを受け入れると、そのキーはサーバ認証に使用されます。キーを拒否すると、`snapshot(8)` コマンドは何もせずに終了します。`-k` オプションが指定されていない場合、これが SSH ターゲットモードでのデフォルトの動作になります。
`public`	指定した公開キーは、サーバ認証に使用されます。*host-key* 引数は、ネットワークホストの完全な公開キー（ キータイプで始まる）でなければなりません（ つまり、ネットワークホスト上の `/etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub` の完全な内容でなければなりません）。

注 – 公開キーは、シェルが単一の語として処理できるように引用符で囲む必要があります。

`-L{F|I|R}`

収集するログセットを指定します。

`F`	Full ログセット
`I`	Initial ログセット
`R`	Root Cause ログセット

ログセットが指定されない場合、Initial ログセットがデフォルトで収集されます。

`-l`

ログファイルのみを収集するように指定します。コマンド出力は収集しません。

`-n`

プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。

`-P` *password*

`-e` オプションと一緒に指定します。出力ファイルの暗号化に使用する暗号化パスワードを設定します。

`-p` *password*
: SSH ログインに使用されるユーザーパスワードを設定します。このオプションは、`-t` オプションと一緒に指定します。`-d` または `-T` オプションと一緒に使用すると、無効になります。

`-q`
: プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-S` *time*
: データが収集される開始時間を指定します。終了時間の `-E` *time* オプションと一緒に使用して、`snapshot`(8) で収集されるログメッセージの時間枠を定義します。終了時間の指定がないと、ターゲット期間は、`snapshot` コマンドが実行された時点で終わります。`-E` オプションも参照してください。

  time
  : `strptime`(3) で記述される、以下の 2 つのフォーマットのどちらか 1 つの形式を使用します。

    ```
    %Y-%m-%d,%H:%M:%S
    %Y-%m-%d_%H-%M-%S
    ```

`-T`
: SSH ターゲットモードで `snapshot` を実行するとき指定します。このとき、`setarchiving`(8) であらかじめ設定した *user@host*:*directory* の値を使用します。`-D` オプションを一緒に指定すると、*directory* の値を選択できます。

  注 – `snapshot` コマンドではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。

-t *user@host:directory*	データ転送先のネットワークホストとリモートディレクトリを設定します。*host* フィールドには、ネットワークホストのホスト名または IP アドレスを指定します。*user* フィールドには、アーカイブホストへの ssh ログイン用のユーザー名を指定します。*directory* フィールドには、出力ファイルの保存先となるアーカイブホスト上のアーカイブディレクトリを指定します。*directory* フィールドは、"-" や "~" で始めてはいけません。 **注 –** snapshot コマンドではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。
-v	詳細な情報を表示します。すべてのアクションとコマンドを実行時に表示します。-q オプションと一緒に指定すると、-v オプションは無効になります。 **注 –** snapshot 設定ファイルで実行されるすべてのコマンドを動作させるためのユーザー権限は与えられていないかもしれません。この場合、これらのコマンド操作が許可されていないことを示すエラーメッセージが表示されます。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

動作モード

以下に、snapshot(8) コマンドの動作モードの概要について説明します。

最初のモードは「SSH ターゲットモード」です。-t あるい -T オプションを指定してデータコレクタを起動すると、このモードで実行されます。このモードでは、データコレクタはサービスプロセッサから指定された宛先の SSH 接続を（適切な認証後に）開き、zip 形式のデータアーカイブを SSH 接続を介して宛先ホストに送信します。snapshot コマンドではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。このモードでの転送暗号化は、SSH によって行われます。

2 番目のモードは、「USB デバイスモード」です。-d オプションを指定してデータコレクタを起動すると、このモードで実行されます。このモードでは、データコレクタの出力（zip 形式のアーカイブ）は、USB 装置上のファイルに保存されます。USB 装置は FAT32 ファイルシステムでフォーマットされている必要があります。このモードでは、SSH ターゲットモードの場合のように zip ファイルを暗号化するための -e オプションが使用できます。しかしながら、このモードではデータがサービスプロセッサに対してローカルなままであるため、転送暗号化（SSH のような）は行われません。

使用例

使用例 1　SSH を使用して公開キーをダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x -k download
Downloading Public Key from 'jupiter.west'...
Key fingerprint in md5: c9:e0:bc+b2:1a:80:29:24:13:d9:f1:13:f5:5c:2c:0f
Accept this public key (yes/no)? Y
Enter ssh password for user 'joe' on host 'jupiter.west'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 2　ホストキーをダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x
Downloading Public Key from 'jupiter.west'...
Public Key Fingerprint: c9:e0:bc+b2:1a:80:29:24:13:d9:f1:13:f5:5c:2c:0f
Accept this public key (yes/no)? y
Enter ssh password for user 'joe' on host 'jupiter.west'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 3　ユーザー指定の公開キーを使用してダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x -k "ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAwVFiSQNVBFhTTzq0AX5iQqCkkJjd6ezWkVGt
mMkJJzzMjYK0sBlhn6dGEIiHdBSzO8QLAXb8N4Kq8JDOBpLSN4yokUPTcZQNxJaY
A0W058Qgxbn"
Enter ssh password for user 'joe' on host 'jupiter.west'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 4　公開キーを使用しないで、ログファイルだけをダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t bob@mars.east:/home/bob/logs/x -k none -l
Enter ssh password for user 'bob' on host 'mars.east'
Log only mode. No commands will be collected.
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 5　公開キーを使用しないで、指定したパスワードでの暗号化を使用してダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t bob@mars.east:/home/bob/logs/x -k none -e -P
password
Output data will be encrypted.
Enter ssh password for user 'bob' on host 'mars.east'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 6 無効なディレクトリを指定してダウンロードしているときにエラーとなった例。

```
XSCF> snapshot -t sue@saturn.north:/home/sue/logs/bad_dir -k none
Enter ssh password for user 'sue' on host 'saturn.north'
Setting up ssh connection to remote host...
Failed to create remote file:
/home/sue/logs/bad_dir/archive.zip
Verify adequate disk permissions and disk space on target host
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 7 公開キーをダウンロードしているときに接続エラーとなった例。

```
XSCF> snapshot -t sue@saturne.west:/home/sue/logs/x -k download
Downloading Public Key from 'saturne.west'...
Error downloading key for host 'saturne.west'
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 8 公開キーをダウンロードします。すべてのプロンプトには "no" と応答します。

```
XSCF> snapshot -v -t jill@earth.east:/home/jill/logs/x -k download
-n
Downloading Public Key from 'earth.east'...
Public Key: ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAwVFiSQNVBFhTTzq0AX5iQqCkkJjd6ezWkVGtmMkJJzzM
jYK0sBlhn6dGEIiHdBSzO8QLAXb8N4Kq8JDOBpLSN4yokUPTcZQNxJaYA0W058Qgxbn
Key fingerprint in md5: c9:e0:bc+b2:1a:80:29:24:13:d9:f1:13:f5:5c:2c:0f
Accept this public key (yes/no)? no
Public Key declined
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 9 権限のないユーザーから公開キーのダウンロードを試みます。

```
XSCF> snapshot -t fakeuser@fakehost.com:/fakedir -p fake-password
Downloading Public Key from 'fakehost.com'...
Error downoading key for host 'fakehost.com'
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 10 外部メディア装置へダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -r
Testing writability of USB device....SUCCESS
```

```
About to remove all files from device 'usb0'. Continue? [y|n] : y
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2006-04-17T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

使用例 11　データ範囲に対する特定のログを得るため、ログ収集を制限します。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -S 2007-01-01,01:00:00  -E 2007-01-31_14-
00-00
Testing writability of USB device....SUCCESS
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2006-04-17T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setarchiving(8), **showarchiving**(8), **showlogs**(8)

名前 switchscf - XSCF ユニットのアクティブ、スタンバイ状態を切り替えます。

形式 **switchscf** [[-q] -{y|n}] -t {Active | Standby} [-f]

switchscf -h

説明 switchscf(8) は、現在ログインしている XSCF ユニットのアクティブ、スタンバイ状態を切り替えるコマンドです。

switchscf(8) コマンドは、M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。

現在ログイン中の XSCF ユニットの状態を切り替えると、対になっている XSCF ユニットの状態も切り替わります。

注 – 切り替え時には、アクティブ側の XSCF に接続されているネットワークのセッションは切断されます。

注意 – 通常、保守作業中の場合は XSCF を切り替えることはできません。switchscf(8) コマンドの実行結果が「Switching of XSCF state is disabled due to a maintenance operation. Try again later.」となって、XSCF が切り替えられない場合は、addfru(8)、deletefru(8)、replacefru(8)、flashupdate(8) の保守コマンドが実行中かどうか確認してください。実行中であればコマンドが終了するまでお待ちください。保守コマンドが実行中でないにもかかわらず XSCF が切り替えられない場合は、-f オプションを使用して切り替えてください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-f　XSCF が切り替えられない場合に、強制的に切り替えます。

注意 – -f オプションは強制的に XSCF を切り替えるため、通常の操作で切り替えられない場合に限り使用してください。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n　プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。

-q　プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-t Active	XSCF ユニットをアクティブ状態に切り替えます。
-t Standby	XSCF ユニットをスタンバイ状態に切り替えます。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

使用例

使用例 1 現在ログインしている XSCF ユニットをスタンバイ状態に切り替えます。

```
XSCF> switchscf -t Standby
The XSCF unit switch between the Active and Standby states. Continue? [y|n]:y
```

使用例 2 現在ログインしている XSCF ユニットをスタンバイ状態に切り替えます。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> switchscf -t Standby -y
The XSCF unit switch between the Active and Standby states. Continue? [y|n]:y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 testsb - 指定した物理システムボード（PSB）に初期診断を行います。

形式

testsb [[-q] -{y|n}] [-m diag=*mode*] *location*

testsb [[-q] -{y|n}] [-m diag=*mode*] -c {all | expansion}

testsb -v [-y|-n] [-m diag=*mode*] *location*

testsb -v [-y|-n] [-m diag=*mode*] -c {all | expansion}

testsb -h

説明 testsb(8) は、指定した PSB に初期診断を行うコマンドです。

testsb(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。

PSB の構成、および PSB に搭載された各デバイスの動作が診断されます。診断後は、診断結果が表示されます。

また、showboards(8) コマンドで表示される Test や Fault の項目で確認できます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。.

-c {all|expansion} 診断する対象の PSB を指定します。以下のどちらかを指定できます。

all 搭載されているすべての PSB を診断します。

以下の条件を満たしていない場合は、エラーとなります。

- 本体装置の電源が切断されている
- 対象となるすべての PSB が Uni-XSB

expansion 拡張筐体に搭載されているすべての PSB を診断します。

以下の条件を満たしていない場合は、エラーとなります。

- 対象となるすべてのPSBがドメイン上で稼働していない
- 対象となるすべての PSB が Uni-XSB

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m diag=*mode* 初期診断の診断レベルを指定します。以下のどちらかを指定できます。

min 標準（デフォルト）
max 最大

-n プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。

-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-v 初期診断の詳細な情報を表示します。

-y プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

location 診断する PSB 番号を 1 つだけ指定します。00 から 15 までの整数で指定できます。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- 診断する PSB はドメインに組み込まれていない状態、または組み込まれているドメインの電源が切断されている状態でなければなりません。すべてのドメインの電源が切断されているかを確認する場合は showlogs power コマンドを実行して、System Power Off という値のあることを確認してください。

- 指定した PSB に属しているシステムボード（XSB）が以下の状態の場合は、testsb(8) コマンドはエラーとなります。
  - XSB がドメインに組み込まれていて、かつ、そのドメインが稼働中
  - XSB がドメインに組み込まれていて、かつ、そのドメインが OpenBoot PROM（ok プロンプト）状態
  - XSB がドメインに組み込まれていて、かつ、そのドメインが電源投入中、電源切断中、再起動中のいずれかの状態
  - XSB を対象に、addboard(8)、deleteboard(8)、moveboard(8) コマンドを実行中
- 指定したPSBに属しているXSBがUnmountまたはFaulted状態となっている場合は、診断の対象から外され、診断結果に表示されないときがあります。このようなときは、showboards(8) コマンドで診断結果を確認してください。
- 暖機運転および起動までの待ち時間が設定されている場合は、これらを無視して testsb(8) コマンドを実行してよいかを確認するプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- testsb(8) コマンドによる診断結果は、以下のように表示されます。

XSB	PSB に属する番号 Uni-XSB タイプの場合は 1 つ、Quad-XSB タイプの場合は 4 つの XSB が表示されます。
Test	XSB の初期診断状態 以下のいずれかが表示されます。

Unmount	未搭載または故障により認識できない状態
Unknown	診断されていない状態
Testing	初期診断中
Passed	初期診断が正常に終了した状態
Failed	初期診断で異常が発生した状態。XSB は使用できない、または縮退している状態となります。

Fault	XSB の異常の状態 状態は 1 つ、または複数で表示されます。

Normal	正常な状態
Degraded	縮退部品がある状態。XSB は稼働できます。
Faulted	異常が発生し XSB が動作しない状態

使用例

使用例 1　PSB#00 の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb 0
Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
SB#00 power on sequence started.
 0end
Initial diagnosis started. [1800sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120end
```

```
Initial diagnosis has completed.
SB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
SB powered off.
XSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
00-1 Passed  Normal
00-2 Passed  Normal
00-3 Passed  Normal
```

使用例 2　PSB#01 の初期診断を詳細なメッセージを表示して行います。

```
XSCF> testsb -v 1
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
SB#01 powered on sequence started.
     :
     :
Initial diagnosis has completed.
{0} ok SB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
SB powered off.
XSB  Test    Fault
---- ------- --------
01-0 Passed  Normal
```

使用例 3　搭載されているすべての PSB の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb -c all
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
SB power on sequence started.
 0end
Initial diagnosis started. [1800sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
SB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
SB powered off.
XSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
01-0 Passed  Normal
02-0 Passed  Normal
03-0 Passed  Normal
```

使用例 4　設定されている暖機運転および空調待ち時間を無視して、PSB の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb -c all
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
Ignore warmup-time and air-conditioner-wait-time, Continue?[y|n] :y
SB power on sequence started.
```

```
 0end
Initial diagnosis started. [1800sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
SB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
SB powered off.
XSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
01-0 Passed  Normal
02-0 Passed  Normal
03-0 Passed  Normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addfru(8), **deletefru**(8), **replacefru**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showfru**(8)

名前 traceroute - 指定したホストまたはネットワーク装置までのネットワーク経路を表示します。

形式 **traceroute** [-n] [-r] [-v] [-m *maxttl*] [-p *port*] [-q *nqueries*] [-s *src_addr*] [-w *wait*] *host*

traceroute -h

説明 traceroute(8) は、指定したホストまたはネットワーク装置までのネットワーク経路を表示するコマンドです。

ネットワーク経路とは、指定したホストまたはネットワーク装置間を接続するルータ（ゲートウェイ）を表し、経路上にどのようなルータが位置しているかを表示します。

traceroute(8) コマンドは IP プロトコルの TTL フィールドを利用して、指定したホストまたはネットワーク装置までの、ネットワーク経路上にあるすべてのゲートウェイから ICMP TIME_EXCEEDED レスポンスを引き出そうと試みます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- "localhost" またはループバックアドレス（127.0.0.0/8）に対して実行する場合
  fieldeng
- インター SCF ネットワーク（ISN）に対して実行する場合
  fieldeng
- 上記以外の場合
  必要な権限はありません

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m *maxttl*	ホップ数の最大値を指定します。指定したホップ数分のゲートウェイを表示します。省略した場合は 30 に設定されます。
-n	DNS 逆引きを行わずに、IP アドレスだけを出力します。
-p *port*	使用する UDP パケットのポート番号を指定します。UDP パケットを使用する場合にだけ有効です。省略した場合は 33434 に設定されます。
-q *nqueries*	1 つのゲートウェイに対する試行回数を指定します。省略した場合は 3 回に設定されます。

-r	ルーティングテーブルを無視して、直接パケットを、指定したホストまたはネットワーク装置へ転送します。同一の物理ネットワーク上に目的のホストまたはネットワーク装置がない場合は、エラーとなります。
-s *src_addr*	経路をたどるソースアドレスを指定します。
-v	詳細な情報を表示します。パケットの送信サイズが表示されます。
-w *wait*	タイムアウト時間を秒単位で指定します。省略した場合は 3 秒に設定されます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

host	パケットを送信するホストまたはネットワーク装置を指定します。ホスト名または IP アドレスで指定できます。DSCP アドレスを指定した場合はエラーとなります。

使用例

使用例 1 server.example.com というホストまでのネットワーク経路を表示します。

```
XSCF> traceroute server.example.com
traceroute to server.example.com (XX.XX.XX.XX), 30 hops max, 40 byte
packets
 1  XX.XX.XX.1 (XX.XX.XX.1)  1.792 ms  1.673 ms  1.549 ms
 2  XX.XX.XX.2 (XX.XX.XX.2)  2.235 ms  2.249 ms  2.367 ms
 3  XX.XX.XX.3 (XX.XX.XX.3)  2.199 ms  2.228 ms  2.361 ms
 4  XX.XX.XX.4 (XX.XX.XX.4)  2.516 ms  2.229 ms  2.357 ms
 5  XX.XX.XX.5 (XX.XX.XX.5)  2.546 ms  2.347 ms  2.272 ms
 6  server.example.com (XX.XX.XX.XX)  2.172 ms  2.313 ms  2.36 ms
```

使用例 2 server.example.com というホストまでの詳細なネットワーク経路を表示します。(XSCF-LAN=192.168.100.10)

```
XSCF> traceroute -v server.example.com
traceroute to server.example.com (XX.XX.XX.XX), 30 hops max, 40 byte packets
 1  XX.XX.XX.1 36 bytes to 192.168.100.10  1.792 ms  1.673 ms  1.549 ms
 2  XX.XX.XX.2 36 bytes to 192.168.100.10  2.235 ms  2.249 ms  2.367 ms
 3  XX.XX.XX.3 36 bytes to 192.168.100.10  2.199 ms  2.228 ms  2.361 ms
 4  XX.XX.XX.4 36 bytes to 192.168.100.10  2.516 ms  2.229 ms  2.357 ms
 5  XX.XX.XX.5 36 bytes to 192.168.100.10  2.546 ms  2.347 ms  2.272 ms
 6  server.example.com 48 bytes to 192.168.100.10  2.172 ms  2.313 ms  2.36 ms
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

unlockmaintenance - XSCF のロック状態を強制的に解除します。

形式

unlockmaintenance [[-q] -{y|n}]

unlockmaintenance -h

説明

unlockmaintenance(8) は、XSCF のロック状態を強制的に解除するコマンドです。

通常、保守用コマンドである addfru(8)、deletefru(8)、replacefru(8) コマンドが実行されている間は XSCF はロック状態となり、実行が終わるとロックが解除されます。しかし、保守用コマンドのいずれかを実行中に LAN が切断されるなどの異常が発生すると、XSCF のロックが解除できなくなることがあります。このような場合は unlockmaintenance(8) コマンドを実行して、XSCF のロック状態を強制的に解除できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に "n"（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に "y"（yes）と応答します。

詳細説明

コマンドを実行すると、実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

使用例

使用例 1　保守のロック状態を解除します。

```
XSCF> unlockmaintenance
This command unlocks the maintenance lock which prevents the multiple
execution of maintenance commands.
*Never* use this command, except when the lock state remains by some reason.
Careless execution of this command causes serious situation because it
interrupts the running command and XSCF might not be able to recognize the
parts.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2　保守のロック状態を解除します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> unlockmaintenance -y
This command unlocks the maintenance lock which prevents the multiple
execution of maintenance commands.
*Never* use this command, except when the lock state remains by some
reason.
Careless execution of this command causes serious situation because it
interrupts the running command and XSCF might not be able to recognize the
parts.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3　保守のロック状態を解除します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> unlockmaintenance -q -y
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addfru(8), **deletefru**(8), **replacefru**(8)

名前 version - ファームウェアの版数を表示します。

形式 **version** -c xcp [-v] [-t]

version -c {cmu | xscf} [-v]

version -h

説明 version(8) はファームウェアの版数を表示するコマンドです。

以下の版数が表示できます。

xcp	システムに適用されている XSCF Control Package（XCP）の総合版数
cmu	OpenBoot PROM ファームウェアの版数
xscf	XSCF ファームウェアの版数

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-c xcp	XCP 総合版数を表示します。
-c cmu	OpenBoot PROM ファームウェアの版数を表示します。
-c xscf	XSCF ファームウェアの版数を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-t	XSCF 内に登録されている XCP 総合版数の情報を表示します。"-c xcp" と一緒に指定します。
-v	詳細な情報を表示します。"-c xscf" と一緒に指定した場合は通常と同じ情報が表示されます。

使用例 **使用例 1** XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp
XSCF#0 (Active)
XCP0 (Current): 1090
XCP1 (Reserve): 1090
XSCF#1 (Standby)
XCP0 (Current): 1090
XCP1 (Reserve): 1090
```

使用例 2　XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v
XSCF#0 (Active)
XCP0 (Current): 1082
OpenBoot PROM : 02.09.0000
XSCF          : 01.08.0005
XCP1 (Reserve): 1082
OpenBoot PROM : 02.09.0000
XSCF          : 01.08.0005
XSCF#1 (Standby)
XCP0 (Current): 1082
OpenBoot PROM : 02.09.000
XSCF          : 01.08.0005
XCP1 (Reserve): 1082
OpenBoot PROM : 02.09.0000
XSCF          : 01.08.0005
OpenBoot PROM BACKUP
#0: 02.08.0000
#1: 02.09.0000
```

使用例 3　XSCF に登録されている XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -t
XCP: 1090
```

使用例 4　XSCF に登録されている XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v -t
XCP: 1082
OpenBoot PROM : 02.09.0000
XSCF          : 01.08.0005
```

使用例 5　OpenBoot PROM ファームウェアの版数を表示します。

```
XSCF> version -c cmu
DomainID  0: 02.09.0000
DomainID  1: 02.09.0000
DomainID  2: 02.09.0000
DomainID  3: 02.09.0000
  :
DomainID 23: 02.09.0000
```

使用例 6　OpenBoot PROM ファームウェアの詳細な版数を表示します。

```
XSCF> version -c cmu -v
DomainID  0: 02.09.0000
DomainID  1: 02.09.0000
DomainID  2: 02.09.0000
DomainID  3: 02.09.0000
  :
DomainID 23: 02.09.0000
```

```
XSB#00-0:  02.09.0000(Current)     02.07.0000(Reserve)
XSB#00-1:  02.09.0000(Current)     02.07.0000(Reserve)
XSB#00-2:  02.09.0000(Current)     02.07.0000(Reserve)
XSB#00-3:  02.09.0000(Current)     02.07.0000(Reserve)
  :
XSB#15-3:  02.09.0000(Current)     02.07.0000(Reserve)
```

使用例 7　　XSCF ファームウェアの詳細な版数を表示します。

```
XSCF> version -c xscf -v
XSCF#0 (Active )
01.08.0005(Reserve) 01.08.0005(Current)
XSCF#1 (Standby)
01.08.0005(Current) 01.08.0005(Reserve)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 viewaudit - 監査レコードを表示します。

形式 **viewaudit**

viewaudit [-A *date-time*] [-B *date-time*] [-C] [-c *classes*] [-D *date-time*] [-E *end-record*] [-e *events*] [-i *audit-ids*] [-l] [-m *del*] [-n] [-p *privilege-results*] [-r *return-values*] [-S *start-record*] [-u *users*] [-x]

viewaudit -h

説明 viewaudit(8) は、監査レコードを表示するコマンドです。

オプションを指定しないで viewaudit(8) コマンドを実行すると、現在のローカル監査レコードがすべて表示されます。オプションを指定して viewaudit(8) コマンドを実行すると、選択したレコードのみが表示されます。デフォルトでは、レコードはテキスト形式で表示されます。1 行に 1 トークンずつ示され、フィールド区切り文字としてカンマが使用されます。出力形式は、-C、-E、-l、-m *del*、-n、-S、または -x の各オプションを使い分けることにより変更できます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、auditadm または auditop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-A *date-time* *date-time* 以後に発生したレコードを選択します。*date-time* はローカル時間に基づきます。-A オプションと -B オプションを一緒に使用すると、範囲を指定できます。*date-time* の有効な値は以下のとおりです。

- 絶対時間 *date-time* : *yyyymmdd*[*hh*[*mm*[*ss*]]]
  変数の意味は以下のとおりです。
  - *yyyy* = 年（1970 が最も早い有効値）
  - *mm* = 月（01 ～ 12）
  - *dd* = 日（01 ～ 31）
  - *hh* = 時（00 ～ 23）
  - *mm* = 分（00 ～ 59）
  - *ss* = 秒（00 ～ 59）

  hh、*mm*、および *ss* のデフォルトの値は 00 です。

-B *date-time*

date-time 以前に発生したレコードを選択します。*date-time* はローカル時間に基づきます。-A オプションと -B オプションを一緒に使用すると、範囲を指定できます。*date-time* の有効な値は、絶対時間またはオフセット時間です。

- 絶対時間 *date-time* : *yyyymmdd*[*hh*[*mm*[*ss*]]]
  変数の意味は以下のとおりです。
  - *yyyy* = 年（1970 が最も早い有効値）
  - *mm* = 月（01 ～ 12）
  - *dd* = 日（01 ～ 31）
  - *hh* = 時（00 ～ 23）
  - *mm* = 分（00 ～ 59）
  - *ss* = 秒（00 ～ 59）
- オフセット *date-time*: +*n d*|*h*|*m*|*s*
  変数の意味は以下のとおりです。
  - *n* = ユニット数
  - *d* = 日数
  - *h* = 時間数
  - *m* = 分数
  - *s* = 秒数

  オフセット時間は-B オプションでだけ指定でき、-A オプションと一緒に指定する必要があります。

  hh、*mm*、および *ss* のデフォルトの値は 00 です。

-C

出力の最後に、選択基準に一致したレコード数を追加します。

-c *classes*

指定されたクラスのレコードを選択します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前のどちらかで指定できます。接頭語「ACS_」は省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 2 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

all	すべてのクラス
ACS_SYSTEM(1)	システムに関連するイベント
ACS_write(2)	状態を変更できるコマンド
ACS_READ(4)	現在の状態を表示するコマンド
ACS_LOGIN(8)	ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT(16)	監査に関連するイベント
ACS_DOMAIN(32)	ドメイン管理に関連するイベント
ACS_USER(64)	ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM(128)	プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES(256)	モードに関連するイベント

-D *date-time*	特定の日（指定の日の 00:00:00 に開始して 23:59:59 に終了する 24 時間の期間）に発生したレコードを選択します。指定日はローカル時間に基づき、*yyyymmddhhmmss*（年、月、日、時、分、秒）の形式で指定します。指定した日付のタイムスタンプを持つすべてのレコードが選択されます。時間、分、秒を指定しても無効となります。-D オプションは、-A オプションや -B オプションとは一緒に指定できません。
-E *end-record*	表示する選択基準と一致する、最後のレコードを指定します。
-e *events*	指定されたイベントのレコードを選択します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前のどちらかで指定できます。接頭語「AEV_」は省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 4 と表現できます。 有効なイベントの一覧については、showaudit -e all を参照してください。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *audit-ids*	指定された監査セッション識別子のレコードを選択します。特定の監査レコードに反映されるアクティビティに関心がある場合は、そのセッションのすべての監査レコードを表示することができます。*audit-id* は固定ではなく、サービスプロセッサをリセットすると再割当てされます。*audit-ids* は、監査セッション識別子のカンマ区切りリストです。*audit-id* は、監査ファイルの「subject」ラベルの後ろにある数字です。 たとえば、以下のリストでは、*audit-id* は「1」です。 subject,1,bob,normal,telnet 45880 jupiter
-l	1 行に 1 レコードずつ出力します。
-m *del*	フィールド区切り文字として、デフォルトの区切り文字（カンマ）ではなく *del* を使用します。*del* がシェルで特別な意味を持つ場合は、引用符で囲む必要があります。区切り文字の最大文字数は 3 文字です。区切り文字は意味を持ちません。また、-x オプションと一緒には指定できません。
-n	UID と IP アドレスをユーザー名またはホスト名に変換しないよう指定します。
-p *privilege-results*	指定された *privilege-results* に従ってレコードを選択します。*privilege-results* は、カンマ区切りリストです。*privilege-results* は、granted、denied、または error です。

-r *return-values*	指定された戻り値に従ってレコードを選択します。*returnvals* は、値 success または failure のカンマ区切りリストです。success は、戻り値 0 に対応します。failure は非ゼロの戻り値に対応します。
-S *start-record*	表示する選択基準と一致する、最初のレコードを指定します。
-u *users*	指定されたユーザーに帰属するレコードを選択します。*users* は、ユーザーのカンマ区切りリストです。ユーザーはユーザー名または数値 UID によって指定できます。
-x	XML 形式で出力します。

使用例

使用例 1 2005 年 12 月 12 日の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -D 20051212

file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
```

使用例 2 すべてのユーザーの監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -u jsmith

file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2006-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

使用例 3 ユーザー権限の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -p granted

file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2006-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

使用例 4 アクセスが成功した監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -r success

file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2006-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

```
header,57,1,command - viewaudit,jupiter.company.com,2006-01-26
16:13:09.128 -05:00
subject,5,sue,normal,ssh 1282 saturn
command,viewaudit
platform access,granted
return,0
...
```

使用例 5　2 日間の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -A 20080108 -B +2d

file,1,2008-01-09 20:12:12.968 -08:00,20080110041212.0000000004.sca-m5k-0-0
file,1,2008-01-10 21:14:49.481 -08:00,terminated
file,1,2008-01-10 21:14:49.485 -08:00,20080111051449.0000000005.sca-m5k-0-0
```

使用例 6　日付の範囲に一致したレコード（4238 レコード）のうち、最初の 5 レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -l -A 20070515 -B 20080110 -C -S 1 -E 5

file,1,2008-01-09 20:12:12.968 -08:00,20080110041212.0000000004.sca-m5k-0-0
header,63,1,command - setaudit,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09
20:12:12.974 -08:00,s ubject,250,opl,normal,ssh 42759 san-e4900-
0.West.Sun.COM,command,setaudit,delete,platform access,granted,return,0
header,37,1,login - ssh,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09 20:12:14.455 -
08:00,subject, 252,scfroot,normal,ssh 42761 san-e4900-0.West.Sun.COM
header,37,1,logout,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09 20:12:14.800 -
08:00,subject,250,o pl,normal,ssh 42759 san-e4900-0.West.Sun.COM
header,37,1,login - ssh,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09 20:12:15.595 -
08:00,subject, 253,scfroot,normal,ssh 42762 san-e4900-0.West.Sun.COM
4238
```

終了ステータス　以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目　**setaudit**(8), **showaudit**(8)